

IS原作っていつスタートだっけ？

鮭のKan2me

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様も何も介さずIS世界に転生したオリ主、自分を主人公・一夏の良き友人ポジ枠だと信じて疑われないが、果たしてその行く末は…!?

「笑いあり熱さあり感動ありの作品になるんじゃない？比率8:i:iの。」

はいそこ黙って

一年生編完結

目次

白騎士事件〜IS学園入学前

00 : プロローグ ————— 1

プロフィール (00〜62) ————— 5

01 : さーて藍越学園の受験場所はつと ————— 19

02 : 原作キャラを見分ける基準?それは: ————— 22

03 : 寮生活って色々ドキドキするよね ————— 26

クラス代表決定戦編

04 : 自分の番になると頭マサラタウン ————— 28

05 : 周りの雰囲気の流れされるのは良くない ————— 33

06 : 練習無しのぶっつけ本番は無理ゲー ————— 37

07 : SFチックな戦闘は男のロマン ————— 40

08 : 銃弾の雨搔い潜って近づくのかつこよくね? ————— 44

09 : いつまでも慣れないことってあるよね! ————— 50

10 : 言質って大事だよ ————— 54

クラス対抗戦編

11 : 対人スキルの高さは一種のカリスマ ————— 59

12 : 不意打ちは良くない (戒め) ————— 64

13 : 夜、女子の部屋、何も起きないはずもなく ————— 67

14 : 転校生は大体強キャラ ————— 75

15 : 少年漫画の修行回は大体ワクワクする ————— 80

16 : 引き出しは多い方がいい ————— 85

17 : 才能に勝る努力ほど尊いものはないと思う ————— 93

18 : 奥の手は隠し通すもの ————— 97

別視点 : クラス対抗戦決勝 ————— 102

19 : 人脈ってすごい (白眼)

108

学年別トーナメント1年の部編

20 : 休日の計画はちゃんと立てるべし

112

21 : 暑さで頭がタイムボカン

116

22 : 新武器に対する期待は異常

125

23 : 知らないのか? フラグからは低確率で逃げれる ()

128

24 : 当たらなければどうということはない ()

131

25 : 他人の不幸は蜜の味

136

26 : ガン待ち対ガン待ちは焦りたいと思う今日この頃

140

別視点 : 学年別トーナメント1年の部決勝

145

27 : 罰ゲームは程々に . . . , いやマジで (真顔)

151

臨海学校編

28 : 決めるぜ、(諦める) 覚悟!

157

29 : その場凌ぎは後が怖い

167

30 : 目隠しすると大体心眼とか使う

175

31 : 予想が空回ると大体参事になる

182

32 : 夜は背中に . . .

188

33 : 急にベクトル変更しないで

191

34 : 予想の斜め上で使われると超高性能に見える

199

35 : 途中参加はめっちゃ気不味い

204

36 : 足下は要注意

209

37 : 適当にブラブラしてても気は楽になる

213

38 : 徹夜? テスト中に寝ても知らないぞ?

216

夏休み編

39 : 大人は経験豊富

220

- 40 : 焦っても良いこと無し | 224
41 : 聖地巡礼 (二重の意味で) | 229
42 : 資料集めする時はその後の対処も考える | 234
43 : 専用ってだけで特別感ある | 238
44 : 組み合わせは重要 | 242
45 : 強みを押し付けるのは戦いの基本 | 246
46 : 何事も適度に | 256
幕間 : 人知れず | 260

学園祭編

- 47 : もう全部アイツ一人でいいんじゃないかな? | 263
48 : なんかしらのゲームで異常に強いと逆に引かれる | 266
49 : ルールとマナーを守って楽しくデュエ (ry | 270
50 : 言葉選びは慎重に | 275

キャンボール・ファスト編

- 51 : 失敗は成功の元 | 281
52 : 白熱する試合×テンション高い実況 || ベストマッチ! | 284

修学旅行編

- 53 : 意識を複数に向けるのは難しい | 290
54 : 普段の行いはちゃんとしよう | 298
55 : 単独行動は程々に | 302
56 : シュウゲキ | 308
57 : 普段あるものがないと不便 | 318
58 : 分担作業は大事 | 322
幕間 : ある冬の話 | 326

転換期《加速と激化の前兆》

59 : 臨機応変って大事だけどムズイよね

329

60 : 有名人と会うと高確率でパニクる

332

61 : ドツキリは何重にも仕掛けるものじゃない

335

62 : アラシ

344

閑話 : 天災の動向

348

波乱の新生編

63 : 変わる環境

353

64 : 再会、そして視線

358

65 : 果たし状

362

66 : 灰と血

368

67 : けじめ

374

68 : 約束

381

69 : 不幸中の幸い

388

プロフィール(63) ※1/4更新

390

生徒会長争奪戦編

70 : 仕込み

394

71 : 打ち合わせ

399

72 : 開催

404

73 : その花、劇物につき

410

74 : 停止、なれど継続

419

75 : 交わる強者

424

白騎士事件〜IS学園入学前

00：プロローグ

どうもおはこんばんちわ、僕の名は影清かげきよ道ちか。

突然ですが皆さん「インフィニット・ストラトス」についてご存知だろうか？簡潔に言えば、宇宙までこれ一つで行けるほど超ハイテクパワードスーツなのだが、何故か女性しか動かせないという欠陥を抱えた困ったちゃん。そんなインフィニット・ストラトス、略してISが今リビングのテレビに映っている。と言っても、放送されてるのはISの特番でもなんでもなくそのISと思わしきものがミサイルを撃ち落としている光景なのだが。

・・・前振りが長くなったが、僕は転生者だ。別に神様とかに会った訳でもなく、ただ目覚めたら赤ん坊だった。前世で過ごした思い出や経験はしつかりと覚えているが、死亡した時の記憶はさっぱり思い出せない。これだけでも違和感ありありなのだが、もう一つ思い出せないものがある。前世の生き甲斐と言ってもいいゲームや漫画等の創作物のあらすじがあまり思い出せなかった。だから、ISの存在を知っても、ここって創作物の世界だったのか、という気持ちしかなかった。・・・嘘です、メチャテンション上がってます。どの物語かは分からないけどその世界の一員になって過ごせるのか！とオタク心が刺激されました。

「いやこれヤベエって、色んな意味でヤベエって！」

リビングにはISを見て昂っているオタク一人、両親は仕事で不在なため、ストッパーがご近所さんぐらいしかいない。この光景を見た

として声をかけるかどうかは知らん。てかニュース速報でそれどころじゃない。

「ISかぁ・・・、作品の説明ぐらいいしか思い出せないけど、女尊男卑の世界なんだよなあ・・・、いやでも身の振り方きちんとすれば大丈夫なはず！」

この男、楽観的である。

「確か高校からスタートしてたよね？敵対組織もいたよね？いやあテロとか起きたら怖えなあ！・・・バレないように見に行ってもいいかな？（ボソ）」

そろそろ現実に戻ってきて欲しい。今現在進行形でテロ勃発中だから。

「待てよ。今テレビに映ってるのって・・・。」

そうそう一旦冷静になつて「あれ原作キャラってことだよな!? テレビ越しだけど、姿見れてラッキー!!」

ダメだこいつ

「確かこれが切っ掛けでISが世に出回って・・・、原作始まるまでに2回の大会があつてそれからそれから・・・あれ?」

なんだ? やつと落ち着いたか?

「えーと、原作始まるのって何年後だ?」

・・・ここで読者の皆様に参考までにオリ主の現状を伝えよう。本

小説のオリ主は小学2年である。

そしてIS本編は現在テレビに映ってドンパチやってる白騎士事件の十年後、主人公・織斑一夏が高校1年の時にスタートするので逆算すると今現在一夏は6歳、オリ主は8歳だが・・・

「ま、この事件起きてこの年齢だから主人公と同じ年齢だろ！・・・ハッ！あわよくば良き友人ポジになったりして?!」

コイツ、超楽観的だなオイ。

「いやー神様ありがとうー！このポジでいければ、ISの可愛いヒロインとも仲良くできるはず!!付き合いはしないけどな！NTRあんま好きじゃないから！」

さて・・・このクソガキはほつといてこの先の話をしよう。ついでに雰囲気も変えよう。

—誰がいった言葉だったろうか

”この世に無駄なことなんてない”

これはどんなことでも必ず何かの意味があるという風にも解釈できる。

つまりこのクソガキ・影清 道が前世の記憶を保持した転生者として存在するということは、

この世界に何か大きな影響があるのではないか。果たしてそれは存在自体が災いを呼び起こすということなのかあるいは・・・

「よっしゃー!!待ってるよインフィニット・ストラトス!いい感じの潤滑油として主人公のハーレムを築き上げてやる!」

もうお前一回黙れ

プロフィール（00〜62）

影清道かげきよ とおる

年齢：15歳（01話時点）

身長・体重：173・4cm・64・0kg

出身：日本（関東）

クラス：1-1（クラス代表）

概要：容姿は黒髪黒目で赤マフラー常時着用、
某カードゲーム外伝の主人公の容姿をモデルにしました。

曲がりなりにも1回死んだ身なので、本人は普通に生きてるつもりでもどこか達観してるため相手をちゃんと観て、識ることが出来なくなっている。性格はふわつとしつつも誠実で、誰と関わるのにも失礼ないように出来るだけ言葉は選ぶ（隠し事苦手なので本心に沿ってはいる）、だらけるとメチャクチャマイペースになる。結構グルメなため、IS学園に来る前は休日にも外食することが多かった。飛行機やジェットコースターといった乗り物や動物類が苦手。寮の部屋は物置部屋（改装済み）。

ISの適正はCで、腕前は未熟。具体的には高速飛行・急上昇・急降下不可でエイムもブレブレ。瞬時加速？なにそれおいしいの？と言った始末だが、姿勢制御能力が高く、ダリルとの模擬戦で回転しながら直進するという中々えげつないことをしたり、立ち姿勢から急に仰向けやうつ伏せになってそのまま戦闘続行できたりする。なお、人体への攻撃に激しい抵抗があり、主にISの装甲のみを狙って攻撃するため、一手先に動いたとしても躲かれやすい。そのため、ダリルからの指導で二手先を読んで動くようになった（動きを読めるとは言っていない）。トーナメント前、虚の指導で蛇腹剣を扱えるようになり、修学旅行編で危機に陥った際には偶然とはいえ瞬間加速を成功させているなど成長はしている。なお、瞬間加速は使いこなせるようになったわけではなく、ちよっぴり成功率が上がったくらいである。

原作知識：作品名と大雑把な物語の流れ、大まかな勢力図（IS学

園と敵勢力の2種で完結してしまっている、しかもテロリストだとい
う以外全く情報記憶なし)、ISの用語は食い物関係以外全て忘却、分厚い
参考書が頼り。なおこれらの記録は……。

専用機：灰楼かいろろう

概要：オリIS。影清のデータを元に倉持技研で製作されたIS。
主なカラーリングは灰色で、装甲はかなりスラツとしている。ウイン
グスラスターは四枚で上下に別れており、上側は小ウイング二枚、下
側は大ウイング二枚でセットとなっている。

第三世代のISであり、特殊武装は装甲同化式超小型姿勢制御補助
スラスター『蜃気楼』。『蜃気楼』は、装甲の至るところに設置されて
おり、胸部に4つ・背面部に6つ・腰に5つ（後ろに2つ）両肩装甲
に計8つ・両腕装甲に計16（手首より上には無し）・両足装甲に計1
6（足首より下は両足裏の計4つ）の合計55機の小型スラスターが
使用されている。当然、55機のスラスターを同時使用することはほ
ぼ不可能だが、イメージインターフェイスに接続することによって、
操縦者が細かく意識せずとも無意識レベルで運用することが可能。
これによって、あらゆる飛行性能を底上げしたり、武器の反動等を大
きく軽減したり等、色々細かいところに応用が効く。ちなみに、小型
スラスターの色は赤く、使用時には勢い良くバーナーが出るわけでは
なく、赤い光を薄らと放つ。

元ネタが存在しないわけではないわけではありませんがほぼオリジナルで、カ
ラーリングはモン○ンのバル○アルクを参考にしています。なお、飛
行能力は正反対の模様○。

蛇腹剣「隴矢」おほつや

灰色ベースで刃は赤く、腹に走っている一本の赤い斜め線と、くの
字の一定間隔の切れ目が特徴。刃の無い側の鍔に四角く赤いスイツ
チがつけられており、これ一つで刀身が勢いよく分割して射出された
り、刃を戻すことができる。なお、射出時と内蔵ワイヤーが伸び切つ
た時、刃が戻る時に反動があるため、意識しないと体制を大きく崩す。
ちなみに元ネタは、F○7のクラ○ドが使用する○スタ○ソードで

す。相違点は、穴がないのと、刀身、鍰の横幅がちよつと狭まっていたことです。蛇腹剣のアイデアは、○F1のガーラ○ドや、デユ○マのス○ームXXの武器からです。配色で言ったらF○13○Rのある武器も参考にすると思います（基本何も考えないで想像、もとい創造してるので・・）。

「隴・二一の矢」

試験運用時、影清の意見を参考にして改良を加えられたもう一本の隴矢。隴矢よりも刀身が長くなったり、射出時の反動が抑えられたりしているが、その分重量が増してしまった。

対物バツクラ「夢月」むげつ

基本的な配色は灰色だが、盾表面の中心の円、その外周が赤く塗装されている。盾の持ち手の上側に蛇腹剣と同様のスイッチがあり、押すと盾が持ち手と分離して勢いよく射出される。その際、盾には長方形の穴があり、その中心にワイヤーがくっついている。持ち手側には長方形のワイヤー制御装置がくっついており、スイッチを再度押せば、ワイヤーが巻き取られ、制御装置と盾が合体する。なお、ワイヤーが伸び切った状態で、チェーンアレイのように扱うことも可能。元ネタは、強いて言うなら、盾の形状がダン○ール○記で、チェーンアレイモード（仮）はガ○ダムとキャ○ンアメ○○ですかね。あと、ワイヤー制御装置は進○の○人のある装置をイメージして頂ければ。

行動抑制用特殊弾装填対応型バズーカ「幽牢」ゆうろう

灰色ベースで、砲身の縁が赤い。実弾の代わりにネットやチャフ、煙幕弾等を発射する。射程は中距離ほどで攻撃性能はあまり無いが、無いよりマシである。元ネタがあるとすれば、パル○ナの○、○ンボール戦○、ガン○ムだと思います。爆筒○○やとか、各種ランチャーの形状とかが根付いているのかと。

設置型特殊弾発射装置

キャノンボールファストにて使用されたトラップ形式の武装。幽牢に装填可能な特殊弾ほぼ全種類を装填することができ、リモコンのスイッチを押すことで発射できる。形状はホールケーキのようで4

つの爪が付いており、発射時には砲身が伸びる。ちなみに装填可能な弾数は一つのみである。

技（的な何か）

隼突き

隼矢、隼・二の矢の切っ先を相手に押し付けて、射出機能を利用したゼロ距離攻撃を繰り出す技。シンプルだが、その破壊力はISの装甲を容易くズタズタにするほど。ただあまりの威力に撃った側の反動も凄まじく、反動を軽減する機構があってもダメージが入ってしまう。

山田 真耶

年齢：21歳？

身長・体重：155.0cm・ム、ムグムグググ（く、口抑えないで、息が・・・。）

出身：日本（関東でしょ、多分）

クラス：1-1（担任）

概要：「ご存知上から読んでも下から読んでも」やまだまや”通称やまや（多分他にももつとある）、主人公が初めて遭遇した原作キャラ、21歳ならギリ大学生では？ほ、ほら、やまや優秀だから、原作だとポンに見えるけど超優秀だから、ね？

IS学園には1年前から勤めており、昨年は2年の担任だった。ISの腕前は、元代表候補生でありながら国家代表レベルで、影清がIS学園入学前に、IS適正を調べる目的で一度だけ模擬戦をしたが、手を抜くのが上手く、影清がやまやのシールドエネルギーを3割ぐらい削れるようにそこそこ誘導した、やばいって（戦慄）。あとロリ巨

乳。

ダリル・ケイシー

年齢：15歳

身長・体重：168.0・おつと誰かk（ゴシヤ

出身：アメリカ（北なのか南なのかもはつきりしてない）

クラス：1-1

概要：原作開始2年前だからまあいるよね！周りの視線を気にせずオリ主に話しかけて来た猛者。男まさりな口調どおり気が強い。しかも、かなり頭がキレル。寮の部屋は1025室。アメリカの代表候補生で専用機持ちであり、影清を度々ISのトレーニングに誘っている。

原作では高3だったので、その時よりも若干未熟に描写していくつもりです。身長は、高身長であることしかわからなかったので、小さすぎず、これから成長することも考慮して設定しました。

専用機：ヘル・ハウンド

概要：原作ではver2.5とか2.8とかあり、火球の生成も可能でしたが、2年前なのでそこまで強化されておらず、言うなればver1.0。ある意味オリIS。肩付近の配備された銃と、初期武装の拳銃が主武装。他にも双刃剣「黒への導き」エスコート・ブラックという二本の剣があるが、素手格闘で戦うことも多いので使用頻度は多くない。

布のほとけ 虚うつほ

年齢：15歳

身長・体重：162.7cm・やつ、やめ、来なi（ゴキツ

出身：日本（関東・・・だよね？）

クラス：1-1

概要：IS原作で人気ありすぎてアキブレで専用機持ちとなった布のほとけ 本音ほんねの姉であり、更織 楯無の従者でもある。趣味は紅茶淹れ。模擬戦を挑まれた影清に手を差し伸べた。原作ではしつかりもので周りによく振り回されるが彼氏持ちのリア充という原作内でも珍しい勝ち組である。なお、本小説ではまだ彼氏五反田と接点がないのでフリーです。

ダリルとはルームメイト。身長は検索しても出なかつたので、本音さんの身長を参考にしました。ISの腕は悪くないものの、整備科志望なのであまりISは操縦しない。あと、割とスパルタ。

グリフィン・レッドラム

年齢：15歳

身長・体重：164.4cm・（返事が無い、顔面にボールが突き刺さっているようだ）

出身：ブラジル（どこ？・・・故郷どこなの？）

クラス：1-4（クラス代表）

概要：アーキタイプ・ブレイカーにて割と遅めの登場を果たした褐色肌の体育会系お姉さん。影清のクラス代表就任の噂を聞きつけ、自分もクラス代表なのをいいことに接触を試みた。どちらもグルメなので結構気が合うらしい。身長は毎度のごとく不明だったのでアキブレのシーン見返して目分量で他キャラと比較して設定しました。

孤児院出身で自分の面倒を見てくれた孤児院にいる子供達をまとめ、お世話をしていた。ISの適正検査（無料）でAと判断され、高

い運動能力も相まって、ブラジル政府から援助され、ISについて学び、実力を伸ばすだけの資金はあった。男性操縦者の登場により、政府から、影清にたいするコネ作り、又は影清のIS操縦映像の納品を依頼され、孤児院に多額の援助をすることと引き換えにその依頼を受け、IS学園に入学した。ちなみに時期的に結構ギリギリの入学だったりする。

ISの腕はブラジル政府が資金援助してるだけあって折り紙付きで、前述にもあるが、身体能力の高さ故に、ISの操縦は学園内でもトップに食い込む。あと、かなり大喰らい。

専用機：テンカラット・ダイヤモンド

概要：第三世代のISであり、特殊武装「ダイヤモンド・ダスト」（正確な記載が見つからなかったので、アキブレのアビをそのまま流用しました）を搭載している。エネルギーを流用して、超硬質の物質を生成することが可能だが、出力が弱く燃費も悪いため、同じ素材が使われた武装の修復ぐらいにしか使えなかった。しかし、臨海学校の時に調整されて出力や燃費の良さが向上し、ある程度の大きさまでなら自由で物体を生成できるようになった。

主に格闘戦を得意とし、近づいてラッシュしまくることはあまりせず、一定の距離から強襲、追撃を繰り返す、アウトフアイトを主戦法としている。

腰付近に浮かぶ、一対の巨大な四本指の手「ダイヤモンドナックル」は、直線にしか飛ばせず、射程も長くはないが、その分破壊力がある。

背に浮かぶ一対の射撃ユニット「ストーンレイン」。変形することで、実弾の発射が可能となるが、変形までに多少のラグがあり、僅かだが隙ができる。

技（オリジナル）

ヒュージダイヤ・ダンク

ダイヤ生成機能を使って生み出した巨塊をダイヤナックルで持ち上げ、相手に振り下ろす。生成する大きさが大ききなのでエネルギー消費は少くないが、かなりの威力を秘めている。

ベルベット・ヘル

年齢：15歳

身体・体重：169.9cm・プスプスプス（黒焦げの蜂の巣にさ
れている）

出身：ギリシャ（もうむり、さがせない）

クラス：1-3

概要：フォルテ（未登場）の好敵手、クラス対抗戦一週間前に転校してきた。IS学園に行くつもりは無かったが、同年代で専用機持ちなら接触しやすいと判断した政府の依頼を受け、断わればなんらかのペナルティがあると思いきや承諾し、それを聞いて怒れるフォルテに、1年後にお互い強くなつてまた会おうという約束を取り付けた。影清への接触は消極的だったが、クラス対抗戦の対グリフィンとの試合を見て、IS操縦者として興味を持つこととなった。

身長は不明だったが、アキブレ内のキャラでもかなり背が高いと感じたので他キャラ以上ダリルさん未満に設定しました。3組のクラス代表に代理を頼まれたとき断りきれなかったため、押しにはあまり強くない。

ISの腕は、IS学園内でも上位に入る程。咄嗟の判断でかなりアグレッシブな対応をしてくる。

専用機：ヘル・アンド・ヘヴン

概要：第三世代機。特殊武装は、分子運動制御「ヘル」並びに、分子運動制御「ヘヴン」である（これらも詳しい記載無かったので、アキブレのアビ名称から）。「ヘル」は、大気中の空気を冷却することで氷塊を作り出し、弾丸や壁にすることが可能だが、まだまだ試験段階なため、あまり正確なモノを形作ることとはできない。「ヘヴン」は、逆

に大気中の空気を燃焼させることで炎を作り出すことができ、そのまま標的に浴びせたり、武器に纏わせるといったことも可能。しかし、こちらにも試験段階であるため、燃焼速度が遅いという欠陥可能性がある。

脚部に一对のコンテナが三つ繋がって搭載されており、外側から、マイクロミサイル、ミサイル、榴弾が格納されている。状況に応じて使い分けるのは言わずもがな、リロード感覚をずらして弾幕の維持をしたり、至近距離に潜り込まれた時のゼロ距離発射も可能。

他にも、2丁のサブマシンガン（名称ちゃんと思つたと思うけど忘れた・・・）、金色の刃を持つハルバードが搭載されている。

篝火 かがりび ヒカルノ

年齢：22歳？

身長・体重：164.8cm・（手遅れだ、すでに実験台にされている）

出身：日本（シラネーヨー！）

所属：倉持技研（第二研究所副所長）

概要：原作で主人公のケツを揉んだ年から年中スク水とゴーグル着用のヤベーヤツ。原作では、第二研究所の所長ですが、原作2年前とすることで副所長に格下げしました。身長は、わからず終いだつたので、一夏君とのツーショットシーンで比較して設定しました。

織斑 おりむら 千冬 ちふゆ や篠ノ之 しののの 束 たばね とは同期であり、篠ノ之 束 に対して対抗心を抱いている。男性操縦者が発見された後、政府から専用機製作の依頼が届き、その開発リーダーを任された。

アーリイ（仮称）

年齢：■■■歳

身長・体重：168.2cm・不明

出身：■■■■■

概要：白猫・シャイニイを連れた謎の風来坊。右腕が欠如している他、着崩した着物や眼帯など、結構目立つ特徴が多い。影清には、アーリイと名乗ったが、本名なのは定かではない。

用務員さん

年齢：不明

身長・体重：どちらも不明

出身：日本（詳細な位置不明）

概要：IS学園で用務員をしている男性。お茶や茶菓子のストックはかなりあるらしい。

五反田ごたんだ 弾だん

年齢：13歳

身長・体重：170.0cm・出てこなかった、だと・・・

出身：日本

概要：原作では主人公・織斑 一夏の良き友人で、虚さんと見事カップルになった幸せ者。影清との関係は飲食店の息子と常連客と言っ

たところである。

五反田ごたんだ 蘭らん

年齢：12歳

身長・体重：150.0cm・たいじゅうなにそれおいしいの？

出身：日本

概要：五反田 弾の妹。影清との関係はほぼ皆無、篠ノ之神社で一回会ったぐらい。本作では明らかになくなってないがIS適正Aとかなり高く、原作ではIS学園に通うことをほのめかしていた。

ロランツイーネ・ローランディフィルネイ

年齢：14歳

身長・体重：161.6cm・えつ、聞くの・・・？

出身：オランダ

概要：学園祭編にて登場したアーキタイプ・ブレイカーのヒロインの一人。99人の恋人を持つ、なお全員女性。オランダの代表候補生で専用機持ちでもあるがまだ専用機は明らかになっていない。

謎の襲撃者

年齢：??

身長・体重：???・???

出身：????

概要：修学旅行にて一人になった影清を強襲した人物。使用していた機体はラファールであったが、ボイスチェンジャーやステルス機能などが取り付けられていた。荒々しい口調と戦法で影清とグリフィンを圧倒していた。・・・一体どこのオー○ムさんナンダロー。

織斑おりむら 千冬ちふゆ

年齢：22歳？

身長・体じゆ（ry：166cm

出身：日本

概要：言わずと知れた世界最強のIS乗り。その実力はISに乗らなくてもISと張り合えるほど、もはや人外。ISの世界大会「モンド・グロツソ」の優勝者で、ブリュンヒルデの称号を持つ。なお本人はその呼び方を嫌っている。影清が二年に上がる頃には教員としてIS学園に勤めることになる。

更織さらしき 楯無たてなし

年齢：15歳

身長：163cm

出身：日本（今更だけどネタ切れ）

概要：更織家当主、ロシア代表を務める完璧超人。虚さんの主人である。入学が決まってから影清に接触し、その実力を計った。

専用機：モスクワの深い霧

概要：ロシアにて製作されたIS。影清との模擬戦ではアサルトラ

イフルと蛇腹剣「ラストイー・ネイル」のみ使用したが、他にもまだ色々搭載されているとか。

しののの たばね
篠ノ之 束

年齢：ERROR

身長・体重：ERROR

出身：ERROR

概要：ISをたつた一人で制作し、この世に送り出した張本人。あまりにも優秀な頭脳を持ちながら、その自由奔放・傍若無人さはハンパではなく、天才というより天災といった方がしっくりくる。織斑千冬とは学校生活を共にした仲であり、友人と呼べるほど・・・かもしれない。

オリキャラ（没案）

ブルーナ・アガツツイ

年齢：18歳

身長・体重：155・5・不明

出身：イタリア（ベネツィア）

クラス：3-1（生徒会長）

概要：アンケート結果により表舞台に立つことができなくなったオリキャラ。容姿は腰辺りまで伸ばした黒髪に赤目で、性格は明るい方。

IS学園生の中で一番強い、即ち生徒会長であり、生徒会のメンバーは他におらず、自分一人だけで業務をこなしているが、流石に無

理なので他の生徒に手伝ってもらおうことが多い、というかほぼ全部。イタリアの代表候補生であり、専用機持ちでもある。銃火器を用いた広範囲殲滅が得意で、主にランチャーやハンマーなどの重量武装を使用する。

専用機：テンペスタII

01：さーて藍越学園の受験場所はつと

オツス、オラナレーター！今影清は受験会場にいつぞー！（悟〇声え？時間飛びすぎ？これでも譲歩した方です〇）

さて、原作ではここがターニングポイントの一つと言っても過言ではない魔境。・・・何故魔境かって？そりやおめえ、初めて来る場所ならガイドどおりにするだろ？それでも迷ったって考えてみるよ？絶対迷う呪いかなんかが掛かってるって〇

「いやー、っにしても広すぎだろここ。迷ったらどうするんだよ。」

おつと早速フラグg「あー、あつたあつた。座席はつと。」

なん・・・だと・・・、こ、こいつ、ここは迷ってIS見つけて触る流れだろ！原作主人公のように！おりむらいちか原作主人公のように！！

「あ、やべ、始まる前にトイレ。」

これだ!!!!

さあ迷え、迷ってIS見つけちゃいなよyou!

「あ？何だあれ？もしかしてISか？

―道間違えたかな？早くトイレ見つけないと。」

な　　　　　だ　　　　よ

お前ブローグ小学2年でISの存在知った時狂喜乱舞してたじゃん!!

もつと間近で見えて滑って転んで触りたいと思わなえの?!

ハッ、さてはオメー順応したな、順応しすぎたな？

今まで原作キャラと関わる機会が無くて半ば諦めてるな？

「別にIS関わらなくても、五反田食堂某料理亭とかなんかに入り浸れば、会うチャンスあるだろ。」

・・・やべー、その手があったか。これは影清IS学園ルート潰れましたわ。そもそも受験する時にIS触ってどうすんだよ。熱くなりすぎたわ、受験チラ見しながら寝よ。

その後ちゃんとトイレ見つけて普通に試験受けた。

〜試験後〜

「終わった終わった、家帰ってゲームしよ。」

お、終わったかさーてここからどうなることやr「あ、あれ？道、間違えたかな？確かこの先に運ぶはずだったけど」

お、おーい影清さん？そのまま行くと道の角で荷台にぶつかりますよ？いややばいってやばいってやb「う、うわあ!?!」

「おっと危な、．．あの、どこか怪我してませんか？」

これはファインプレイ!!景清ぶつかるところか倒れる相手をなんとかキヤーーツチ!!しかも相手の怪我の心配!これは(相手から見て)高得点だー!!

「あ、ありがとう。たすかつてー」

「え、き、君、男だよな？」

「え、そ、そうですけど？」

「じ、じゃあ何でISが反応してるんだ?！」

「え?」

き、

キターー!!! 影清IS学園ルート突入ーー!!!!!!
「やっぱ転生オリ主物はこれだよな! 異論は認める。」

そんなこんなで「世界初の男性IS操縦者」が見つかった。

・・・何故IS動かせる前提で話してたのだろうか?

02：原作キャラを見分ける基準？それは・

皆様様ご機嫌麗しゆう、私、ナレーターという者でございます。

影清がIS適正ありとわかるやいなや3分足らずで黒服連行、高級ホテルにぶち込まれ、保護という名の軟禁状態が続き、親との連絡は3日後となった。ちなみに影清が受験したのは1月なので原作と同じ時期です。・・・大丈夫？もつと猶予あった方が良くない？あ、この時期が一番早く受験できる時か。いや、失敬失敬（ゲス顔

さて^{不幸}幸運にもIS学園ルートを辿る影清の様子は？

「最初はどうかと思っただけどー

ー原作の物語直接介入かあ、くうくう。こうなりや努力して良き友人ポジから頼れる友人ポジにジョブチェンジだ！Fuuuuuuu!!~~?~~」

めつつちゃノリノリだわ、ドン引きだわこれ。ああほら誰か来てるよ防音効いてるとはいえ開けちゃったら丸聞こえだから早く切り替えて。

コンコンコン

「！は、はいー！」

「あ、影清君、入ってもいいかな？」

「ど、どうぞどうぞー！」

ノックしてくれて良かったな。これそのまま入って来たら奇人の

レッテル貼られてたぞ。

「失礼します。影清君初めまして、私は山田 真耶です。IS学園の教師を勤めています。」

「は、初めまして！」（え、何あれ、ロリ巨乳ってやつ？ハッ！まさか原作キャラか!?!）

コイツ現実にはありえない特徴ってだけで判断しやがった。まあ原作キャラだけでも。

「はい！えーつと私が今日来たのは影清君の進路についてなんだけど残念だけど藍越学園じゃなくてIS学園に入学してもらうことになりました。」

「は、はい。そうですか。」（まあ普通なら残念だったな！）

「そこでIS学園での校風だとか授業内容の説明、その授業で使うテキストを持ってきました。」

「ありがとうございます！」（てことは?）

「じゃあまずはテキストから、これがIS学園で使う教材で、よいしょつと。」（ドンッ

「!!」

「えーつと、こ、こちらがISについての参考書なんだけど、だ、大丈夫・・・かな?」

「い、いえ少しびっくりしてしまっで。」

ここでオリ主の前に立ちはだかるは”電話帳のように分厚い”I
Sの参考書、その大きさの前では誰もが捨てたくなるが安心しろ。こ
の部屋から出るゴミは全部チェック入るから間違えて捨てて勉強出
来なかった戦法は使えないZ☆

まあ・・・

(こっつ、これがISの参考書！なんて分厚いんだ・・・。

—こうゆうのがあるとますます物語感出て感動する！しかもI
Sつつーパスワードスーツについての本だろ？読破せずにはいられな
い!!)

意欲満々である。果たしてその威勢がいつまで続くか。

「た、大変だと思うけど頑張っていこう？わからないところがあったら
先生が教えてあげますから。」

「は、はい！ありがとうございます！」

「では、IS学園についての説明を始めますね！ではIS学園の成り
立ちからー」

～～1時間後～～

「—これでIS学園についての説明は以上となります。お疲れ様でし
た。」

「はい！ありがとうございます！先生の説明とってもわかりやす

かったです!!」

「!っはい!こちらこそ教えがありました。影清君の入学、心待ちにしていますね。では私はこれで。」

「お疲れ様でした!」

・・・やる気つてすごいね、アイツ学校説明で8割がた目えキラツキラして聞いてたぞ。さぞ勉強が好きなやつの気持ちを擬似的に体感してるだろうよ。

「あ、そうそう—

—他の男性IS操縦者についてなんですけど。」

「え、あ、はい!」(ま、まさかここで主人公の情報ゲット!?)

「影清君以外の男性操縦者は見つからなかったそうです。」

03：寮生活って色々ドキドキするよね

やまや訪問同日の夜

「―男性操縦者が見つからなかったってどういうことだ？ 同い年だけ検査したから？ いやでもあの日から8年経ってるし少なくとも学生やってる年ではあるはず。そもそもこの世に存在しないとは思いたくないな。誰か存在を秘匿している？ いやだとしても―。」

・・・なんか想定以上に考察してる。ここまでナレーターやってきた身としてはまあたポジティブな結論出して奇声上げると思ってたのだが。

「・・・もし主人公がいなければ、この先の問題どう解決すればいいんだよ・・・。世界最強の織斑 千冬は、確かIS学園の教師だったと思うから味方ではあるはずだけど、絶対自由に戦えないポジじゃん。」

確かに織斑 千冬はIS学園の切り札中の切り札だろう、IS学園は”どの国家”にも属さない以上自衛手段を持つ必要があるため、ISの機体とそれを動かす為のコアを所持はしているが、原作ではゴレムなるISの襲撃以来、IS学園で行われるイベントに乗じて敵対勢力が入り込んでくる。裏を返せば、平常時は中々攻め込まれないという考え方もできる。本来IS学園を敵に回すということは世界最強と戦うと同義なのだから。

だが原作において織斑 千冬が戦闘した描写は少ない、現場指揮してるからというのもあるが早々前線に出ていい人材ではないのだ。

「―恐い。恐ええよ。相手は本職のテロリストだぞ？ 学園の戦力もゼロじゃないと思うけど頭数少なくなっただけでも不利・・・!!」

そう、学園の戦略が限られるため、原作では生徒が主に戦ってきた。

だがその生徒も多いわけではなく、誰が欠けても負ける可能性は高いのだ。つまり・・・？

「僕が、強くなるしかないのか？・・・敵がいつ来るかわからない以上できるだけのことはしないと・・・。もし力不足でも活路さえ開ければなんとかー」

・・・さて我らがオリ主が悩みに悩んでいるところで一つおさらいしよう。頭の良い読者様ならお気づきだろうが、影清は原作主人公の2つ歳上である。・・・何が言いたって？

影清の不安は半分杞憂です。

「・・・あ、そうだ。父さんや母さんに頼んで服とか毛布とか送ってもらわないと、これから3年間寮生活になるからなあ、あー緊張する。」
なんつーか切り替え速いなオイ

「IS学園って確かほぼ女子校みたいなどころだけど、流石に相部屋はないよね？これで野宿とかだったらどーしよ。」

実はIS学園は共学なのだがその特性上女子しかいないため実質女子校と化しているのだ。

「女尊男卑の人も少なからずいるだろうし、そもそも女子に対して下手な行動したら一気に広まるからなあ、あれ、もしかしてぼっちが正解？」

影清の受難（笑）は続く・・・

クラス代表決定戦編

04：自分の番になると頭マサラタウン

ども、ナレーターです。あれから2ヶ月弱の時が過ぎた。影清の部屋は物置を工事して部屋にしてもらい、そこにベッドや私物を置いたそう。他の部屋よりちよつと狭いらしい。ま、一人部屋だから良いだろ（）

さて、ちゃんとした入学式こそ無いが今日が初登校、クラスは1ー1、他にも2ー4まであるらしいがそれは別の機会に。

「よし、誰も来てない。最後の方に来て注目浴びるのは避けたいからな。」

一丁前に自分が重要人物であることを理解している模様、それもそのはず、男性IS操縦者という貴重な人材にして、このIS学園における男性二人の内一人なのだから、そのもう一人が用務員さんです。

「HRまであと30分か・・・、

―寝よ。」

逆に注目されるぞ

結局腕組みして背もたれよつかかって寝た。

くく20分後くく

「ん。」（大分人増えたな・・・）

ざわざわ

「あ、目開けた。」「あれって瞑想ってやつかな?」「はっ、教室で寝るなんて何様のつもりなんだか。」「これだから男は。」

(なんか色んな評価くらってんな、・最後の人とはもう仲良くなれそうにないな。)

世はIS時代、ISは10年前からどんな兵器よりも重要視されており、そのISには女性しか乗れないため、女性を優遇する制度ができ、女性の立場が強くなってしまった。そのため先ほどのように男だからという理由でも虐げられてしまうのだ。

(真ん中よりの席だけど、見えるだけでも色んな国籍の人いるな。誰がどこ出身なのか全然わからん。)

IS学園は地理的には日本領土に位置するが、独立した国のようなものとなっており、その名の通りISを学ぶのに最適な環境なため、各国から入学希望者が集まるのだ。先ほど影清の睡眠姿勢を瞑想と言った人がいるのもそれだ。

(自分から話しかけるのはやめたほうがいいかな。どんな対応されるかわかる「なあ、オイ。」)

「!は、はい。」

「オマエが男性操縦者ってやつか?」

「そ、そうですけど・・・。」

「ほーん。」

(な、なんだこの人、アメリカ人っぽいけど・・・、やっぱりそこら辺になるとフレンドリーなのか?)

思考が若干ポジティブになってる辺り流石であるこの陰キャオタ。

「ま、ある意味安心したな。ISに触ったことすらないヒヨツ子みてえだからな。」

クスクスクス

(これはバカにされてるのか?少なくとも今笑ったやつらより良心的だと思っけど。)

「・・・ケツ、一応自己紹介しとくぜ。少なくとも1年間同じクラスだからな。ダリル・ケイシーだ。」

「あ、ああどうも。僕は影清 道。」

「カゲキヨか、ま、覚えといてやるよ。」

そう言い残しダリルは去った。正確には自分の席に戻った。

(悪人・・・では無いか、少なくとも僕に向けられた嘲笑に対して顔をほんの少し歪めてたし・・・元々歪めてた気がしなくも無いけど。)

初対面の人にそんな怒った顔しないでと言ったら、素面だった時大惨事になるからね(特に女性なら)、そこ追求しなかったのはナイス。そうこうしてる内にHRの時間になり、1-Aの担任であろう先生が入ってきた。

コツコツコツ

(あ、先生k・・・まじか。)

「1組の皆さん、この度は入学おめでとうございます。私はこのクラス
の担任の山田 真耶です。1年間よろしくお願いします！」

「さて、早速ですが皆さんには自己紹介してもらいます。出席番号順
にお願いしますね。」

(いやー、あの先生でよかったあ。別に教師あの人しか知らない訳
じゃないけどその中でも優しそうだったからなあ、ツイてる！あ、
もうそろそろ僕の番だ、えくと・・・)

「—では次は影清君ですね！お願いします！」

「は、はい！」ガタツ

勢い良く立ったな、ガチガチに緊張してるのバレてるぞ。

「か、影清 道です。あ、ISについてわからないこと、まだまだある
のでこれから頑張っていきたいです。」

「はい！影清君ありがとうございます！先生も力になれるよう頑張
りますよ！では次は—」

(あ、危ねー！やっぱごうゆうの何回やっても慣れなえー！咄嗟に思
いついたけど想定のお3分の1も喋れなかった・・・！これも課題の一つ

だな・・・。）

何を喋るつもりだったかはともかく、ほとんどの人には悪い印象は
だからなかった良しとしよう！逆に言えば良い印象もあまり持たれ
なかつたけどな！

05：周りの雰囲気流されるのは良くない

みくんなく、ナレーターの教室鑑賞、はっじまってるツよ!! (チ○ノボイス)

・・・ンツ。自己紹介が終わり、ちよつと飛んで3限目、ISの授業となる。一概にISの授業と言っても、座学と実習があるのだが、今回は座学である。

「なので、ISの基本的な運用には国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した運用をした場合刑法によりー」

(参考書は一応全部目は通したけど復習ってなるとちゃんと読まなきゃ理解できないからなく。だって、もう4分の1ぐらいしか覚えてないもん・・・。知ってる範囲で助かった・・・。)

割と勤勉だなこいつ。この後、山田先生にわからない範囲を聞かれたが、予習完璧だったため問題なかった。そりや2ヶ月ちよい猶予あれば余裕で予習できるって。え?分厚いからやる気失せる?全部やればいいじゃない(・・・HRまで時間飛ばします。キング・クリムゾン!! (今更

キーンコーン (以下略

「はい、HR始めますよー。さて、皆さんには自己紹介が終わった後にクラス代表を選出してもらおうと言いましたが、誰か立候補する人!」

シーン

そりやあ直ぐ手を挙げる人なんていないでしょ、確かにIS学園は倍率鬼高の超エリート校でそれに誇りを持って良くも悪くも我が強

くなっている人もいるだろう。だがそんな状況でも周りの様子を伺うことは当然といえば当然かも知れない。何しろクラス全員・・・とまではないかなだろうがほとんどが初対面の人間なのだから。エリートでもなんでもない影清くんも周りの様子をうg(まずいますまずい、クラス代表決めるなんて聞いてない！自己紹介終わった時自己嫌悪なんてしてなければ！)

ただの準備不足

(なんだこの空気！誰も立候補しない流れじゃないか！ああ山田先生困った顔してるよ！ちよつと怖いけど僕がりっk「じゃ誰もいねえんならオレがやるぜ。」

「！は、はい！ではケイシーさん立候補ですね！他に誰もいないならケイシーさんに決定しますけどよろしいでしょうか？」

(ナイス、ダリルさん！めっちゃ不安だったからやらないに越したことはない！なんか困ってたら少なからず手助けしよう！)

「―それで？男性操縦者様は立候補しねえのか？」

「!?」

ざわざわ ざわざわ

「ハッ！結局ただIS学園に入っただけの腑抜けかよ。こんなやつと1年間一緒だなんてヘドが出るぜ。」

「っ！」

「そ、そうよね。いくら男性操縦者だからって。」「別に学力足りてなくても入学できたんじゃない?」「何それ?裏口入学と同じじゃない。」

「・・・先生。僕、立候補してもいいですか?」

「え、は、はい。別に立候補しちゃダメとは言ってますし・・・。」

「へえ、やる気出てきたか?」

「・・・あそこまで言われたら引き下がれるわけじゃないじゃないか。」(こいつ、ぜってー許さん!!これでお前がクラス代表になっても絶対対に手伝わねえ!!!)

「・・・山田センセ、立候補者が二人になっちm、なりましたが、ISの模擬戦で決着つけても構いませんか?」

「!え、ええつと、別に構わないんだけど、それにはアリーナを借りる必要があつて・・・。」

「じゃあ借りれるまで待ちますよ。オメエもそれで良いか?」

「・・・別に構わない。先生、すみませんがアリーナっていつ頃借りれます?」

「ちよつ、ちよつと待つてくださいね。えつと、ええつと、あ!1週間後なら開いていると思います!」

「ありがとうございます。」

「じゃ、決まりだな。尻尾巻いて逃げんじやなえぞ。」

「逃げねえっての。」

さてさて、ダリルと代表を掛けた模擬戦を行うこととなった影清、彼は果たしてダリルを打ち破りクラス代表となることができているのか!?

ん？なんかおかしくね？

06：練習無しのぶっつけ本番は無理ゲー

HRが終了し、下校して自分の部屋に帰った影清。クラス代表の座を賭けて模擬戦をすることになったが果たしてどうするのか!?

「—やっばこの参考書分厚過ぎだろ!? 一々ページ開くのめんどろだなあ。しおりだけじゃなくて付箋も用意すべきだったかな?」

参考書から入ったか。まあ基礎知識なけりやどうしようもないからね!

「お、見つけた見つけた。えつとISの基本構造は—」

あ、そうそう、ISがどんな機能を持っているかここで簡潔に纏めよう。以前ISは現行兵器もより優れているという話はしたと思うが、それにはISの目玉といえる4つの機能が主な原因である。飛行ユニットと並行して使うことにより浮遊・加速を自在にできる

パツシブ・イナードナル・キャンセラー
P I C、通常の視界では目視不可な距離や後方の景色の観測を可能にするハイパーセンサー、ISの周囲に張り巡る不可視のシールドバリアー、そしてシールドバリアーが突破された時、操縦者に致命傷が及ぶことを防ぐ絶対防御。こうして見ると守りに特化した性能に見えるが、この防御性能を攻撃に活かすとどうなるか。

参考までに白騎士事件で確認されたIS・『白騎士』について話そう。白騎士は、世界中の国家が所持していた2000発のミサイルがハッキングによって日本に一斉に打ち込まれた際に現れた最初のIS。どこからともなく現れ、2000発ものミサイル全てを捌き切った白騎士のスペックとその操縦者の腕前は未恐ろしいが、真に恐るべきはミサイル迎撃時に爆風を食らっていることである。遠距離武装も使用していたので流石にすべて食らったわけではないだろうがそれでも2000発も対応していれば爆風による被弾も少なくなはない

ず。この結果から仮定するとISはミサイルの爆風以下の攻撃は効果が薄く、逆にISはミサイルの爆風以下の反動の武装なら問題無く使用可能と考えられる。そんな攻防兵器以上のパワードスーツがISである。

じゃあもう現行兵器いらないじゃん！IS量産だ！と世界が一斉にIS一色になると思うが、そこで問題が発生する。ISの運用にはコアという重要なパーツがあり、それを製造できるのはISを一から設計した篠ノ之しののの束たばねのみ、各国は当然その身柄を抑えたかったが篠ノ之束は467個目以降、ISコアは製造しておらず、そのまま消息不明となった。その為、全世界が保有するISコアは467個が絶対数となり各国の発展度合いに応じて分けられた。ちなみにIS学園は他の国より多めに保有している。

ちなみに今ナレーター私が言ったことは全部影清が学習している範囲を少し短めにしたものである。・・・簡潔に、と言ったが随分長くなったな・・・。

「—っふー、まあ今日はこんなものだろ。にしてもIS借りられなかったのは痛手だなあ。模擬戦当日しか譲ってもらえなかったて・・・。座学だけでどうにかするしかないのか？」

あれ？割とハードモード辿ってない？

くおまけく

「流石はISのエリート校！剣道場とか射撃場とかあるのか!!・・・銃はちゃんと撃てるようになりたいしなあ。射撃場行くか！」

Bannon!

「ね、ねえあの子すくくない？命中率9割超えてると思うんだけど？」
「ん？ああ、あの子アメリカの代表候補生よ。今度クラス代表賭けてあの男性操縦者と模擬戦するんだって。」「へ、へえ、ちよつと漫画チックだね……。」

「……………」

クルッ

「今日は……やめとこう。……アメリカ代表候補だったのかアイツ、益々勝ち目なくね？」

07：SFチックな戦闘は男のロマン

あれから1週間が経過し、ダリルとの模擬戦当日。影清はISの操縦ができないにも関わらず、操縦や戦闘に必要な技術や情報を調べ、イメトレや武器の運用に励んだ。・・・実はこれらを思い付いたのは影清ではなく。

「・・・いよいよか。色々、手助けしてくれてありがとう、布フさん。」

「いえいえ、お気になさらず、実際に努力したのは影清さんなのですから。」

時は模擬戦が決まった日の夕食後に遡る。食事を終え、部屋に戻る影清に声を掛けた人物がいた。その人物こそが布フ^{のほとけ} 虚うつほである。虚は、影清に模擬戦に向けての手伝いを持ちかけ、影清はこれに即答した。ISの知識はそこそこあれど、このIS学園に受かった人材であれば少なくともエリートなのは当然。この1週間、影清は虚の提案に沿って準備して来たのだ。

「いやでも、布フさんいなかったらここまで色んなことできなかったし、同い年の人にこんなにしてもらうの初めてだったからちよつと新鮮で楽しかったからさ。そういう経験させてくれた意味でも感謝してる。」

「そ、そうですか。ところで、模擬戦に使用できるISは？」

「えっと、まだ整備中らしい。模擬戦に使うからちよつとの不備も許されないってことで念入りにやってるみたい。」

そう、影清が今日借りて使用するISはまだ用意されていなかった。まだ模擬戦20分前だが、現在影清たちのいるピットにその姿は

無く、整備の終了を待つばかりである。

「なるほど、そういうことでしたか。では、私は観客席の方に戻りませぬ。」

「は、はい。．．．あ、布仏さん！絶対勝つ！．．．とまでは断言できないけど、下手な結果は残さないよう頑張るから！今までお世話になりました！」

「はい、こちらこそ有意義な時間を過ごせて良かったと思ってます。御武運を祈りますね。」

そう言つて虚はピットを後にし、観客席へと戻つた。

．．．10分後．．．

「か、影清君、影清君！お、遅くなりました！」

「あ、山田先生！ISは？」

「は、はい！さ、先程整備が終わつたところでっ！はあ、はあっ。」

「せ、先生。まずは息整えてからで。別にまだ時間はあるので。」

「は、はい。はあー、はあー．．．ふう、ごめんなさい影清君。先生ちよつと焦つちやつて。」

「いえいえ、流石に疲れてる人に無理させるほど鬼じゃないですし。それで、ISは今どこに？」

「ええつと。もうすぐ運ばれてくると思うんだけど．．．あつ！来まし

た!!」

整備班により、ようやくピットにISが運び込まれた。

「はい！これが影清君が操縦するIS・『打鉄』^{うちがね}です！」

IS学園の保有する量産機の1機・打鉄、他にもラファール・リヴァイヴという機体があるがそれはまたの機会に。

打鉄はISでは第二世代に分類され、両肩付近に浮く一対の盾が特徴であり、盾が破壊される前に再生して攻撃を防ぐという荒技が可能のため、非常に高い防御性能を誇る。防御特化の機体だが平均的な性能になっており、扱い易さも非常に高い。武装は「葵」^{あおい}という刀の様な形をした近接ブレードと「焰備」^{ほむらび}というアサルトライフルが常備されている。

また第二世代のISのため、第一世代のISではできない後付武装^{イコライザ}が装備できるが、今回の模擬戦では使用されていない。

「おお！試験の時に使用したのと同じ機体だ！」

実は影清はISが動かせると判明した1ヶ月後にISを使った試験を受けたため、一応操縦したり実物を見たりはしているのだ。IS適正を測るための試験だったので内容はさほど重視されていないがちよつと人様に見せれる内容では無かった。ちなみにIS適正はCだった。

「厳密に言うとは違う機体なのですが、機体のフレームは一緒です！試験でも動かしたことがあるので少しだけ慣れているかもしれませんね！」

そうそう、影清の試験の相手を務めたのは山田先生であり、どちらかのシールドエネルギーが7割を切ったら終了だったため、初心者相

手なら瞬殺できたが手加減して少しでも影清がISを動かせるように、攻めの手は緩めていた。当然、影清が勝てる筈もなく3割ほど削ったところで敗北した。

「それでは、模擬戦開始まであと5分もありませんが、打鉄に乗って動作確認をお願いします。」

「は、はい！」

山田先生の催促により打鉄を身に纏う影清。緊張しつつも真剣な表z y(あくめつつつちや緊張する!!だってISの本格的なバトルだろ?テンション上がるうううう!⊠?)

お前内心でそんな叫んどいてよく表情に出ないな、ある意味すげーよ。

・・・山田先生主導のもと、動作確認をして時間を潰し、模擬戦まであと残り僅かとなった。

「それでは影清君。模擬戦頑張ってくださいね！」

「はい！動作確認手伝ってくれてありがとうございます！いってきますー！」

そう言って影清はピットからアリーナへと出撃した。・・・スピードあんま出てないな？ホントにいけるのか？

08：銃弾の雨搔い潜って近づくのかっこよくね？

打鉄を纏いピットからアリーナへと移動した影清。アリーナにはすでにダリルの姿があった。

「ようやく来たか。てっきり怯えて逃げたかと思っただぜ。」

「・・・言っただけだ？ 『逃げない』 って。」

「ハッ、そうだったな。・・・ああ、そうそう、随分と飛ぶの遅えが大丈夫か？ 今ならハンデぐらい付けてやるぜ？」

「・・・いや、いい。ハンデのおかげで勝ったなんてあんまり誇らしくない。」

「・・・ほお、やる気だけはいっちよ前見てえだな。いいぜ、ハンデは無しだ。完膚なきまでに叩きのめしてやる。」

『それでは両者所定の位置に着いたのでカウントダウンを始めます。』

『10、9、8』

(まずは銃を出して相手を牽制。)

『7、6、5』

(動かないならそのまま発砲。動くなら距離を保ちつつ銃弾をばら撒きながらこちらも動く。)

『4、3、2』

(向こうが距離を詰めてきたら剣を出して迎撃準備、銃の間合いじゃなくなったらこちらから近づいて攻撃！)

『1』

カウントがゼロになった瞬間、影清は銃を取り出し相手に向けた。

その間にダリルは影清の視界から消えていた。

「!?ど、どっかに…!」

ガガガガガガガガガガ!

「ぐっ!?うっ、うおおっ!!」

ダリルは影清が銃を取り出そうとして右腕を動かした瞬間、距離を詰めつつ、すぐに影清の右側に回り込めるよう準備し、銃をダリルに向けたことよって右側の視界が塞がった瞬間に回り込んだのだ。そして、動揺した影清に4つの銃口を向け、弾丸を浴びせているのだ。これに対し影清は—。

(あ、危ねえ、た、盾で防げられたからいいものの、反応が遅れてたら致命傷だった。…3割も持っていかれたけど必要経費と割り切ろう。でもなんだあれ、ISに銃がくつついてる?)

…さて戦いに水を差すようで悪いが、ダリルのISについて解説しよう。彼女が操縦しているISはIS学園の量産機ではなく、アメリカから支給された専用機である。専用機とは、誰でも動かせるよ

うに作られた量産機とは違い、一個人がより操縦しやすいよう設計されたISである。

数少ないISコアを一人で独占すると同義の行為だが、それを専用機として受諾しているダリルは代表候補生の中でも抜きん出た実力を持っていることがわかる。そんなダリルの実力を最大限に活かしているのが二つの頭銃口を持つIS・『ヘル・ハウンド』である。

「ホラホラどうした？逃げてるだけか？このまま蜂の巣にしてもいいんだぜ？」

ガガガガガガガガガガガガ！

「！くっ、くそっ！」

(このままじゃジリ貧だーど、どうする？どうする!?)

移動しながら盾で防いで、銃弾を防ぐ影清だが、打鉄の盾は上半身を覆えるほどの大きさなので、大半は防いでも下半身や胴には銃弾が当たっている。すでにシールドエネルギーは半分を切っており、このまま受け続けたらすぐに尽きてしまう。

(・・・この方法ならいけるかも知れない。だけど外したらもうチャンスは無い。・・・勝ちの目は薄い、でもやらなきゃ、通さなきゃこのままやられる!!)

影清はダリルからの銃撃を受けながら左手に剣を出し、ダリルの方
向へ剣の腹を向け突撃した。

「ハッ、血迷ったか。ならこのまま墮としてやるよー！」

ガガガガガガガガガガ！

「ぐっ、ぐううううっ！・・・おりゃあ!!」

ブンツ

「なっ!？」

影清はダリルからの銃撃を盾と剣で正面から防ぎ、ダリルに向かって銃を投げつけた。その結果――。

「くっ、くそー！射線が!!」

投げつけられた銃はダリルの射線を妨害し、銃弾の大半が影清の銃によって防がれた。

(こっで、一発!!)

グルン

影清は銃を投げた反動で身体を一回転させながら剣を右腰に構えて接近し、遂に剣の間合いに入った。

「しまっ!」

(喰らえ!!)

――っ!?!うっ!)

ガギイーン!!

影清の振り上げた剣は見事ダリルの左肩周辺の銃口を傷つけ、機能を停止させた、が。

「っ！オラアツ!!」

ブオン ゴツ！

「ガツ!!」

剣を振り上げた体制の影清に、ダリルは斬撃を避けようとした勢いで右回転し、回し蹴りを影清の脇腹に食らわせた。その勢いで影清はさほど遠くなかったコンクリート製のアリーナの壁に激突した。

ドゴオオン！

「ーガツ、かはっ!!ゲツホゲホツ!!ぐっ、ぐぐぐーっ!」

(あ、頭が揺れるっ!!ま、まずい身体が、思うように、動かなー)

「ー終わ^{チエックメイト}りだ。」

ガアン

アリーナの壁に叩きつけられ、身動きの取れない影清にダリルはトドメの一発を放った。

『打鉄、シールドエネルギーゼロ。勝者、ダリル・ケイシー。』

09：いつまでも慣れないことってあるよね！

ダリルのトドメにより、打鉄のシールドエネルギーがゼロとなったことで、打鉄は機能を停止し、影清はまだアリーナに激突した反動が残っているのか、アリーナの壁に背中を預けて座り込んだまま、顔を伏せて唸っていた。アリーナの壁で座り込んでいる影清に、ダリルはヘル・ハウンドを纏ったまま、目の前まで近づいた。

「・・・オイ、

なんであの時軌道を変えやがった？」

「っ・・・うう、・・・え？」

「とぼけんじゃねえ、オレに斬りかかる直前に体制崩しただろ？あれは事故じゃねえ、わざとだ。あのまま振り抜いていりゃあオレの身体を捉えてたはずだ！なんだ？まさかテメエがハンデ付けてやったとでもいいやがるか!？」

「ここ、怖く、なったんだ。」

「はあ？」

「あ、あの瞬間、人を斬るって思ったたら、す、すごく怖くなって……。」

影清がそう思うのも無理はない。一度死んで転生したとはいえ、彼は前世も含め人を簡単に殺せる凶器を誰にも向けたことがない。狙って攻撃使えできるならまだしも、勢いがつき過ぎて狙いがずれてしまったため、勢いを殺してでも狙いを修正しようとしたのだ。そのため、影清の渾身の一振りはダリルの身体を捉えることなく、ヘル・ハウンドの頭銃口を抉る結果となった。

「ーんだよそれ。それだったら、オレはオマエにありつただけの弾幕浴びせてただろうが!?!そもそも、ISに乗ってるんだからよっぽどの事がなけりや怪我なんてしねえっての。」

「・・・知ってるよ、そういう問題じゃないんだよ。ひ、人を斬りそうになったのが怖いんだ。そ、それに慣れたら絶対ダメだ。IS越しとはいえ人を斬るなんて、ぼ、僕には、無理だ……!」

・・・確かにISにはシールドバリアーや絶対防御などの機能があるが、物理的ではなく倫理的に考えて人体を傷つけることができるのだろうか?ダリルはともかく、影清は今まで平凡な人生を送ってきた一般人であり、武器の飛び交う戦闘など体験している訳がない。自分の意思で目の前の人間を攻撃するのだ、それも日本では法律によって使用できない武器で。そんなことがすぐにできる人間は物騒な命のやり取りを経験した人間かサイコパスぐらいなものだ。

「・・・そうか。なら、いい。・・・悪かったな。」

「えっ?」

「いや、なんつつーか、オマエがそこまで^{チキン}ビビりだとは思わなかったからな、酷なことさせちまったと思ってる。．．．それに模擬戦を提案したのはオレだしな。」

「ぼ、僕はその提案を受けたじゃないか。だ、だから謝らなくても．．．。」

「オレの気が済まねえんだよ、黙ってろ。」

．．．ま、でも正直予想外だったぜ。」

「?何が?」

「幾らテメエが初心者だったとはいえ、かすり傷の一発二発は覚悟してたんだが、まさかヘル・ハウンドの首を^{銃口}を^壊と^{され}れるとは思わなかったからな。初心者にここまでやられちゃ、実質オレの負けみてえなものだ。もしオマエに文句^{クレーム}たれるやつがいたら援護ぐらいしてやるよ。」

「あ、ありがとう?」

「．．．っと、長く喋り過ぎたな。そろそろ戻るぞ。」

「わ、わかった。」

「．．．そうだ。肩ぐらい貸してやろうか?」

「い、いいって、一人で戻る。」

「そうかそうか。ならお姫様抱っこして運ぶぜ?」

「な、なんでそうなるんだよ!?別にいいって!!」

「いやオマエ一人じゃピットまで飛べなえから言ってるんじゃねえか。ソイツ、もうあんまり動かさせなえだろ。」

そう、アリーナ内からピットに向かうには、それなりの高度があるためISで飛んでいくしかないのだが、影清が操縦していた打鉄はシールドエネルギー残留が底をついているため、殆どのシステムが使用不可となっている。

「!、ほ、ほんとだ……。じ、じゃあお願いできる?」

「へっ、任せとけ。ちやーんと運んでるやるからな。」

「あ、ああ、ありg・・・ちよつ、ちよつと待て!お姫様抱っこじゃない!肩を!肩を貸してくれええええええ!!」

結局お姫様抱っこで運ばれた、これは黒歴史案件かな?

10：言質って大事だよね

ダリルによつて（お姫様抱っこで）ピットまで運ばれた影清は、打鉄を整備班の方々に引き渡し、そのまま保険室に向かわされた、……特別異常は無かつたためすぐに解放され、帰宅の許可が降りたので寮の自室に戻つた。そして翌日、朝のHRにて――。

「あーあと、クラス代表の件ですが

影清君がやることになりました！」

ざわざわざわ

「!?」（えっ!?なんで僕がやることになってんの?!）

山田先生の発言により教室内がざわめきに包まれた。

ガタツ

「せ、先生！昨日の模擬戦はダリルさんの勝ちだったじゃないですか！なんで惨めに負けた男が代表になつてゐるんですか!?!」

（こつちも知りたいよ！つっ―か辛辣だな！女尊男卑思想の人とはいえ！）

「それはですn」そりゃあ誰も勝つた奴が代表やるつて言つてないからな。」

『!?』

(た、確かに！)

山田先生の話の話を遮って放たれたダリルの発言により生徒の殆どが驚愕した。

「た、確かに言つてなかつたけど、それがなんであの男が代表になることに繋がるのよ!? 男に代表を任せるだなんて信じられないわ!」

「・・・あのなあ、

オレは『誰もいねえならクラス代表やる』って言ったんだぞ?」

「!?」

「他に立候補した奴がいるんならオレがクラス代表やる義務もねえしな。—つうかよ、そんなに男にやらせたくねえならお前も立候補すりゃあよかつたじゃねえか。」

「!そ、それはあなたがやるって言つてたから・・・!」

「ハッ、よく言うぜ。テメエがクラス代表やりたくなかつただけだろうが。」

「そ、それは・・・。」

「とにかくだ！立候補すらしてねえ奴が文句垂れんのはオレが許さねえ!!」

「っ！わ、わかったわよ……。」

そうやって影清のクラス代表赴任に反対した生徒は席に着いた。

(だ、ダリルさん……、

—これ勢いで誤魔化してるけど、僕にクラス代表擦りつけたことになりませんかねえ!?)

読者の皆様にも思い出してもらいたいのが、ダリルは自分が立候補した後、影清を煽って立候補させ、畳み掛けるように、煽りつつも勝負内容を自分で提示し、完全に『自分以外が立候補したら降りる』発言をカモフラージュしていたのだ!!!……カモフラージュにしては規模が大きい気がするが。

「えっと、それではクラス代表は影清君ということで……か、影清君！クラス代表頑張ってくださいね！」

「えっ？あつ、はっ、はい……。」

(ま、まずい、断り切れない……、気付くのが遅すぎた……！)

こうしてダリルの策に嵌った影清はクラス代表となり、ダリルの放った『クラス代表をやる気が無い』という名のブーメランは投げた本人に戻ることなく彼方に消えていった。いやーブーメラン下手く

そうですね（）

くおまけく

保険室から寮に戻るまでの間

「あつ、影清さん！」

「ん？あつ、布仏さん、ちよつと下校するの遅くない？」

「じ、実は調べものがあつて、気付いたらこんな時間に・・・、影清さんも寮にお戻りになるのですか？」

「ああ、保険室で検査受けたらもう帰っていいって言われたから。」

「そうですか・・・あ、そうだ、

—ダリルさんにお姫様抱っこされた感想はありますか？」

「やめてください思い出させないでくださいできれば二度と口にしないでくださいお願いします。」

「ふつ、ふふふつ。冗談ですよ。模擬戦お疲れ様でした。」

「！あ、ありがとうございます。」

「では、私はこれで。」

「はい、じゃあまた。」

(お姫様抱っこあれ不特定多数に見られたんだよな。一生ネタにされそう
だ・・・。)

クラス対抗戦編

11：対人スキルの高さは一種のカリスマ

最近自己紹介しなくてもわかるだろうと思って初手の挨拶自重したナレーターです。クラス代表になったことを知らされた日の昼休み、影清は食堂でいつものように目立たない場所で昼飯をとっていました。

(くっそダリルのヤロー！完っ全に嵌められた！ちよつと見直しかけた僕がバカだった!!いつか合法的に痛い目見せてやる!)

鯖味噌定食を掻き込み、ダリルへの復讐(笑)を誓う影清。そんな彼の元に近づく人影が―。

「あつー！いたいた！キミ、1組のクラス代表だよね？相席してもいいかな？」

「ングッ?!ングング、ゴクツ、は、はい、別に構いませんけど？」

「やった！じゃ、おじやましまーす♪(ゴトン)あつ、私グリフィン・レッドラム！4組のクラス代表やってますー！」

そういつてグリフィンは大盛りのカツ丼をテーブルに置いて影清の対面に座る。

(多っ!!?IS学園でこんな量食ってる人初めて見た!!)

まあ年頃の女子にはスタイルとか体重気にして小食な人もいるからね。大盛りカツ丼とかいうカロリー・糖質ともに高いもの食う人はそうそういない(偏見)。

「いったただきまーす！あむっ、モグモグモグ・・・うん、うまい！」

（は、早っ!?あんなに口に含んでもう飲み込んだのか!!?）

ちなみに影清は普通の人より食べ物を含んで飲み込むまでが遅い。

「いやー、ここって色んな国の料理あるから目移りするけど今のところ全部美味しいんだよね！」

「あっ、僕もそう思います！食堂のおばさんたちの腕本っ当にすごいと思います！」

実は影清は、修学旅行で訪れる場所に料理亭や飲食店等、指摘されなければ食べ物関係しか提案しないほどグルメであり、休日はIS学園に来るまでは、よく外食していた。

「だよねだよね！あ、そうそう、確かキミの名前ってトオル？だったっけ？」

「そ、そういえば、まだ名前言ってなかったですね、影清 道です。合ってますよ。」

「じゃあ、トオルで！私のことは、グリフィンでいいよ！」

「は、はい。わかりました、グリフィンさん。」

「・・・うーん、別に呼び捨てでもいいよ？同学年なんだし。あと敬語じゃなくても。」

「いえ、こっちの方が話し易いので、あ、あと呼び捨ては流石に・・・」

まだ初対面なので……。」

「そう？じゃあ別にいつか……ところでトオル、アメリカの代表候補生の子と模擬戦したんだよね？どうだったどうだった？」

「え、ええつと、手も足も出ませんでしたよ。終始ずっと撃たれてたし、攻撃も肩の銃を破壊した一発だけしか通らなくて……。」

「えつ、攻撃届いたの!?すごいじゃん！ISに触れてまだそんなに経ってないんですよ!?しかもあの子専用機持ちだって聞いたけど……、これは私もうかうかしてられないなあ……。」

「い、いや、狙いずれちゃったのであんなのまぐれですし、次やったr(ストップ)。」

「!は、はい……。」

「いい？代表候補生、それも専用機持ちなら、初心者のみぐれだとしても一撃貫うなんてそうそうない。当たっても精々かすり傷程度。キミのその一撃は決してまぐれだけじゃない。そこは自信持つていいよ。」

「あ、ちなみにソースは私ね。」

「は、はいっ!……つて、えつ？てことはつまり、グリフィンさんつて……。」

「そ、私も代表候補生！それも専用機持ちのね!……ホントは今度のクラス対抗戦まで話すつもりはなかったんだけど、トオル、いい人み

「たいだし、敵情視察っていう邪な名目で近いづいたの申し訳ないからさ。……流石にどんな専用機かは教えないよ?」

「い、いや、そこまで聞くつもりないっていうか、代表候補生だつてことも話さなくてよかったですよ。」

「いいのいいの。これは私に対するペナルティみたいなものだから。……クラス対抗戦、お互い頑張ろ!」

「こ、こちらこそ!お互い良い結果残しましょう!」

「え〜?優勝は1クラスだけだよ?」

「…まだグリフィンさんが優勝するって決まったわけじゃないじゃないか。油断してたら、僕にすら足元掬われるよ。」

「はは、言つたなく、このこの〜。」

そう言いながら、グリフィンはテーブルに身体を乗り上げ、影清の頭を強く撫で回した。

「ちよつ、や、やめろつて!誰かに見られたら…。」

「大丈夫大丈夫♪この席あんま目立たないから。まだまだ撫で回してやr(お〜いカゲキョー、オマエこんなところで飯食つてたのk…。」

「……………」

と、騒ぎ声を聞きつけ、ダリルが現れた。そりやあ目立つ席じゃないとはいえあれだけ騒いでりや近くには聞こえるつて。

ダリルに声をかけられ、グリフィンは影清の頭を撫でている体制、

逆に影清はグリフィンに頭を撫でられている体制のままダリルの方を向き、ダリルはそんな光景を見て、3人仲良く(?)固まっていた。気まずい空気の中、最初に動いたのは――。

「……じゃ、邪魔して悪かったな。早く食い終えねえと授業遅れるぞ。それじゃっ。」クルツ

「……まっ、

――待ってええええええ！誤解だあああああああ！」

いち早く動き、この場を離れようとしたダリルを、影清はグリフィンの手をどかし、声を張り上げ追いかけた。……一応誤解は解けたが、食堂で走ったことを食堂のおばちゃんに怒られた。まさに踏んだり蹴ったりである。こいつ今日厄日だな。

12：不意打ちは良くない（戒め）

食堂での一件後、影清は残っていた鯖味噌定食を平らげ、グリフィンと別れた。そして時は放課後、寮に向かう道中まで進む。

（や、やばい・・・疲れた・・・、今日一日濃すぎだろ・・・。）

疲れにより暗い表情で帰路につく影清、そんな影清の背後から誰かが足音を立てて近づいて来た。

タツタツタツタツ

（ん？誰か走って（カーゲーキヨ、つと）

バツ！ ガシツ！

「うおおああ?!?!?っ！な、なんだ、ケイシーさんか・・・。わ、わざわざそんなことする必要あったの？」

（・・・てか胸当たってるんですけどおお?!?は、早く離れて・・・。）

背後から小走りの勢いそのまま影清に突進し、肩に腕を回すダリル。なおFカップの巨乳が当たっているが故意か無意識かは彼女のみぞ知る。そんなダリルの擬似リアクトを食らった影清は不意の一撃に大変驚くとともに体制を崩した、別に転びはしなかったが。あと腕に当たっている胸の感触によりめっちゃめっちゃパニックになっている。まあ影清くん前世からのDTだからね！仕方ない！

「あるに決まってるんだろ、オマエのリアクション面白いからな！・・・てか、なんだよケイシーさんって、ダリルでいいっての。」

「わ、わかったよ、ダリルさん。で、何か用でも?」

「ああほら、クラス代表の件だよ。立場上ISの模擬戦も多くなるからな。ま、今のオマエじゃ正直他のクラス代表に選ばれてるやつにやあ勝てっこないだろうからな。そこでだ、この代表候補生であるオレがオマエを鍛えようと思ってな!自分でいうのもなんだが、オレ、こう見えても優秀だからな!」

(こ、コイツっ!!人をクラス代表に仕立て上げておいて!)

ダリルがISの指導を提案したが、おおもとを辿れば、彼女は影清をクラス代表に就任できるよう誘導した元凶である。影清にとつて、ダリルは今やクラスの中でも関わり深い間柄だが、自分を嵌めたこともあってあんまり信頼していない。しかし、彼女のISの腕は身をもって思い知っているため、この提案は非常に有益だった。影清が選んだのはー。

「・・・わかったよ、じゃあ今度アリーナ借りれたらお願いできる?」

「おう!じゃ、決まりだな!座学関係でも別にいいぜ?」

「じ、じゃあそれも機会があったら・・・。」

「そうか・・・」

—なら今夜オレの部屋来るか?同居人には許可取っておくからよ。」

「わ、わかつt・・・って、なんつった今!?!」

影清に座学を教えるため、自分の部屋に誘ったダリル。一応誠実な影清はその言葉に過剰(?)な反応を示した。

「え? いやだからオレの部屋n(い、いやちよつと待って。いくらなんでも女子の部屋に入るなんてそんな、だ、ダメだって!」

「?なにがダメなんだよ?..あつ、わかった、恥ずかしがってるのか? このヤロー、じゃあこの機に慣れておけよ。そんなだと将来女口説けなくなるぜ? じゃ、8時ぐらいに来いよ、遅れたらわかつてんな? じゃまたな!」

「そ、そういう問題じゃ、つて、待つ..行っちゃった...」

...影清が女子の部屋に入るのに抵抗があるのはなにも恥ずかしさだけではない。忘れがちだが、世は女尊男卑、女性がちよつとの証拠と罪状を述べればそれだけで有罪判決がでることもざらにある。おかげで痴漢冤罪による逮捕者も女尊男卑となる前より大幅に増えた。...要するに、影清は保身に走るためダリルの誘いを断ろうとしたのだ。コイツ将来結婚できんのか?

(...8時、か。そのときになんとか説得しよう、同居人を引きに出せば押し切れるハズ...!)

そう誓い、影清も寮へ戻っていった。...あれ? 誰かダリルさんの部屋番号聞いた?

13：夜、女子の部屋、何も起きないハズもなく

寮に戻り、夕食を食べ終え、勉強道具をまとめて、ダリルの部屋へと向かった。

(さくして10分前か、ちよつと早いと思うけどダリルさんの部屋に向
k

・・・あ、あれ？ダリルさんの部屋ってどこだ?!

そう、前回^{1,2話}にてダリルは自分から誘って半ば強引に別れたくせに部屋番号を教えていなかったのだ！うっかり天然属性でもつきました？()

(こ、この場合、遅れたらどうなるんだ？一応許してはくれるかな？・・・い、いや、希望的観測はよそう！あの暴虐無人野郎^ルのことだ！絶対逆ギレする！・・・ど、どうすれば!?)

一人で勝手に想像を膨らませる影清、廊下の端で立ちっぱなしになつてみると、向こうから誰か近づいて来た。

「あれ？トオルじゃん。どしたの、勉強道具なんか持ってる？」

「！ぐ、グリフィンさん！実はー。」

影清はグリフィンに事情を話した。

「あー、なるほどねえ。そりゃ女子の部屋に勝手に入って確かめる

わけにもいかないしね。・・・しょうがない、私が探すの手伝ってあげる！」

「あ、ありがとう、グリフィンさん！恩にきるよ!!」

「ふふん、まっかせなさい♪あ、貸し一つね。」

「・・・勝負ごと以外ならなんでもするよ。」

「よし。じゃ、しゅっぱーっ！」

そう言つてグリフィンは影清を引き連れ、ダリルの部屋について聞き回った。ちなみにここまでで既に10分近く経過した、遅刻確定である。

～5分後～

「いや、さっきの人が部屋番号知つててよかった！」

「ほ、ホントだよ・・・あの人以上ほとんどあやふやだったからね・・・。」

ダリルの部屋番号を特定したグリフィンと影清は現在ダリルの部屋に向かっている途中である。

「・・・そういや、なんであんな場所にいたんだ？僕の部屋、元々置物部屋だったから、他の部屋より離れてると思うんだけど・・・。」

「ん？あー、それはねえ、・・・秘密で♪」

「あ、ああ、それなら別にいいや。」

「ウソウソ、言うつて。．．4組の子達にISの操縦のコツを教えたんだ。まあ私はそんな理論立てて説明できないから感覚の話になっちゃったけど。」

「そっか、．．僕もそんな感じかな？普段は理論立ててるいざつて時は全部感覚で動いてる気がするから。」

「うくん、それはただ経験が少ないからじゃないかな？代表候補生でも最終的には理論か感覚で分かれるし。」

「そ、そうなのか、結局は回数こなすしかないのかなあ？」

「ま、そうなるね。でもただ回数こなすだけじゃなく、どう操縦してるかも意識してれば自然と自分がどちらなのかもわかってくると思うよ。」

「なるほどね、先は長い、．．あ！そろそろじゃない？」

「あ、ホントだ！えくと．．あつた！1025室！ここがダリルさんの部屋らしいよ！」

「やっと着いたよ。ダリルさん怒ってるだろうな．．。」

「あ、あはは、私からも事情話すからさ。さ、入ろ？」

「た、助かるよ、じゃ、（コンコンコン）失礼します。ダリルさん待たせてごめん．．。」

「．．．か、影清さん？なんでここに？」

部屋の中に居たのはダリルではなく虚だった。

「……………し、失礼しましたああああ!!」

ガチャン!

少し固まった後勢いよくドアを閉めた影清。隣にいるグリフィンからは冷たい視線を向けられていた。

「トオル?ノックしたからって返事もなく入るのはどうかと思うよ?」

「い、いやでもダリルさんいると思って…………。」

「言い訳しない!相手がダリルさんでも同じことだよ!」

「は、はい!すいませんでしたああ!」

「私じゃなくてこの部屋の子に謝りなさい!早く!」

「は、はい!」

コンコン

『は、はい……………どうぞ。』

「し、失礼します。の、布仏さん、返事もなしに入ってきてすみませんでした!」

「い、いえ、別に大丈夫ですよ、そんな謝らなくても…………あの、影清さん、もしかしてダリルさんと何か約束してましたか?」

「は、はい。ISの座学を教えてもらうことになったので、・・・8時に来る予定だったんですけど・・・。」

「おじやまします。そこからは私が。ダリルさん、自分の部屋番号言ってなかったらしくって、私も部屋探すの手伝って1025室にいるって聞いたんだけど、もしかして部屋間違ってた?」

「い、いえ!ダリルさんの部屋もここで間違いありませんよ。で、ですからそんな申し訳なさそうな顔をされても・・・。」

「そう、じゃあよかった!部屋間違ったと思ってヒヤヒヤしたから。・・・そうそう、自己紹介まだだったよね!私、グリフィン・レッツドラム!グリフィンでいいよ!」

「は、はい、グリフィンさん、私は布仏 虚です。」

「ウツホだね!よろしく!あと、別に呼び捨てでもいいよ。」

「よ、よろしくお願いします。あと、呼び捨ては慣れないので。」

「うん?なんかデジャヴ?まあ、いつか!」

「・・・ところで影清さん?ISの座学なら私がまた教えてあげましょうか?」

「は、はい!よろしくお願いします!」

「あつ、じゃあ私も混ぜるね!」

虚の提案により、グリフィンも混ぜえ、ISの座学を教えてください

ことになった影清。3人での勉強会が始まり、そのまま雑談になったとかならなかったか。・・・誰か忘れてない？

〜20分後〜

「へえー、そんなことがあったんだ。」

「そうそう、布仏さんいなかったらあんなに動けてなかったもへえー、楽しそうな話してんじゃねえか。オレも混ぜろよ。」

「あ」

「え?」

「」

ドアの方を向く3人、そこには笑みを浮かべたダリルが立っていた。もちろん目は笑っていない。

「いやー、大変だったぜ?時間になっても来ねえんどこっちから探すハメになったからな。それでどこにも居ねえからテメエの部屋まで探しちゃったよ。まさか、その間に部屋に着いてたなんてな。で、どうだった?遅刻して人様の部屋で駄弁ってた感想は?ん?」

「い、いや、ごめん!部屋にいなかったのって僕を探してたからなのか!ぜ、全然気付かなかった!い、いやでもそっちの不手際もあるし、痛み分けてことd・ちよつ、ち、近づいてこないで!何も言わずに近寄ってくるのはこw・ギャアアアア!!」

「・・・伝えるの忘れてました。」

「……しょうがないって、返事なしで部屋に入った罰と思えばいいよ……。」

部屋の隅に避難した虚とグリフィンは、影清がダリルにヘッドロックされている光景を見届けた。ちなみに騒ぎすぎて寮長に4人揃って怒られた。やっぱコイツ、今日厄日だわ。

くおまけく

1025室

「あ、ウツホ。8時頃から客くるんだけど別にいいか？」

「?はい、構いませんけど?」

「そっか、ありがとな!」

「遅え、何やってんだアイツ?ウツホー、ちよつくら出掛けるわ。」

「はい、いつてらっしゃいませ。」チヨロロロロ（紅茶を入れる音）

「コクツ、コクツ……はあ。……この茶葉だともう少し砂糖を多くした方がいいんですかね?ノートに書いておきましょう。」

コンコンコン

「失礼します。ダリルさん遅れてごめん……。」

14：転校生は大体強キャラ

あの日厄日から1週間が経過し、クラス対抗戦も残り1週間を切っていた。教室内では、クラス対抗戦ともう一つの話題で盛り上がっており、他の生徒よりも早く登校して席に座っている影清は、クラス対抗戦の渦中の人物ため、時折話を振られていた。

「え？転校生？それ本当なの？」

「そうだよ！ギリシャから来て昨日日本に入国したんだって！しかも代表候補生らしいよ！専用機も持ってるかも！」

「へ、へえ、にしてもこの時期に来るのか・・・ちよつと間が悪いんぞよ」「おはよー、何話してんだ？」

眠たそうな声でダリルが話に入ってきた。

「あ、ダリルさんおはよう！」

「・・・おはよう、ギリシャから転校生だって、しかも代表候補生。」

「・・・ほぅ、こんな時期に転校なんざ間が悪いんじゃねえか？」

「あ、影清君もそう言おうとしてなかった？」

「」

「やっぱり2人って相性良いんじゃない」「いやいや、ないって（ねえって）・・・。」

バチッ！

見事にハモった影清とダリルは互いに睨みつけ、一瞬火花が散ったようだった。

「い、いや仲良いじゃん・・・、この間一緒に部屋いて怒られたって噂もあるし・・・も、もしかしてそういう関k」「それはないよ（そりやねえよ）、こんなやつ・・・あ?」

バチバチバチ

またハモった影清とダリルは互いに睨み合い、まるで電流が衝突しているかのような光景だった。取っ組み合い手前だったが、HRの間となり教室に入ってきた山田先生によって仲裁された。ちなみに虚はオロオロしていた。そして昼休み、食事を終えた影清は教室に戻ったが、なにやら教室内がざわついてるようだ。

(?なんだ?何かあったのか?)

「!おうカゲキヨ、オマエ、3組に転校生来たの知ってるよな?」

「いや、組までは知らなかったけど、それがどうかした?」

「あ、影清君、実はその転校生、

— 今度のクラス対抗戦で代表の代わりに出場するんだって。」

「!?!」

「しかも専用機持ちなのも間違いないらしいぜ。こりゃあ厳しそうだな。」

(あゝ、コイツ他人事みたいに言いやがって！ホント一回痛い目みやがれ！)

「・・・て、てことはさ、

「ダリルさん……も代理……で出れるんじゃない？」

『！』

この発言により、いつそうざわつきが大きくなった。

「た、確かに！3組ばかりズルいってことで口実作ればいけるかも！」

「ダリルさんなら優勝なんて軽くできちゃうって！デザート1週間分は夢じゃなかった！」

「ふんっ、男が醜態晒さずに済んで本っ当によかったわ。同じクラスの私まで低く見られそうだし、ダリルさんなら安心よ。」

クラス代表代理という名目でダリルに出演してもらおうとする生徒達。しかし、遠回しにバカにされて黙っている影清でh(よっしやあー!!ザマア見るダリル!!!)テメエが嫌がってたクラス代表!その代理だぜヒヤッハー!)

プ ラ イ ド ね え の ?

(ふっふっふ、ついにこの時が来た!敵はお前以外のクラス全員だ!このまま擦りつけてy・・・。)

『クラス対抗戦、お互い頑張ろ!』

(!!)

「・・・で、どうすんだクラス代表?別に変わりたいなら変わればいいんじゃないの?」

「・・・いや、変わらない。確かに僕じや優勝は難しいかもしれない。でももし変わったらそれはグリフィンさんへの侮辱になる。だから変わらない。」

「へっ、そうか。・・・ああそうそう、オメエら、別に影清が降りてもオレはでねえからな。別にデザート1週間無料なんてどうでもいいしな。」

「・・・ダリルさんと影清君がそういうならわかった。ただし!優勝出来なかったら全員のデザート1週間分二人で奢ってね!」

「うっ、せ、せめて2日分で勘弁して・・・。」

「えっ、お、オレもかよ!?!まあ、やらねえって言った分責任はとるか。・・・つっーわけでカゲキヨ、オマエ絶対優勝しろよ?」

「優勝を狙わないとは言ってないよ。あそこのミルクレープm・・・負けるつもりなんて毛頭ないからね。」

おい、ちよつと良い話になってんだから欲望グルメ抑えろ。・・・言うの忘れてたがクラス対抗戦で優勝したクラスは1週間食堂のデザート1個無料で食べれるらしい。

「お、おう、そうか。：確か、今日アリーナとれてたよな？今日もみっちりしごいてやるぜ？」

「・・・お手柔らかに。」

こうして、影清のクラス対抗戦への決意はより硬くなった。ちなみにデザートの奢りは2日で妥協してもらえた。

15：少年漫画の修行回は大体ワクワクする

時は進み放課後、影清とダリルはアリーナにてISを纏い、特訓していた。ちなみに影清の借りたISは打鉄である。愛着湧いてんな。

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…。」

「んだよ、もう息切れか？」

「い、いや、説明終わった瞬間に襲いかかれるのは、ぜえ、ぜえ、し、心臓に悪い…。」

「いやいや、ちゃんと『始めるぞ』って言ったろ？」

「い、言った瞬間に襲いかかって来たじゃないか：あ、あんなの不意打ちと変わらない…はあ、はあ。」

「お、息整ってきたじゃねえか。…まだ時間あるし、一旦休憩にすつか。」

「も、もっと早く取らせて欲しかった…。」

「へへっ、悪い悪い。…にしてもオマエ、

全く速く飛べねえな、別にジェットコースター嫌いな訳じゃねえだろ？」

「…いや、ジェットコースターあんま好きじゃない…というか飛行機とかも怖くて乗れない…。」

「……ま、マジで言ってるのか、オマエ？」

実は影清は高速や高所恐怖症なわけではなく、ジェットコースターや飛行機など、あまりにも高度を飛んだり速度を出す乗り物が苦手なのである。それも前世から。

「い、いや、ISは自分で操縦できる分、あんまり苦手ではないんだけど、やっぱりどこかで怖がってるのかなあ……？」

「……怖がるっていやあオマエ、人体に攻撃できないんだよな？ずつと装甲ばっか狙ってるつもりか？」

「う、うん。ISだからちよつとは慣れた方がいいんだろうけど、やっぱり僕には無理だった。苦戦は承知の上でやっていくよ。」

「……そうか、なら良いこと教えてやるよ。」

「？何？」

「装甲しか狙わないってことは、相手に躲されやすくなるってことだ。ほら、端っこよりも真ん中の方が避けにくいだろ？」

「……まあ、そうなるよね。」

「ああ、だからオマエが一手先を読んだところでまともな攻撃は通らない。つまりだ、オマエは常に相手の二手先を読まなきやいけないわけだ。そうでもしないと相手より先にテメエが手痛い一撃喰らうぞ。」

「……二手先、か。うくん自信無いなあ……。」

「言つとくが、有る無しの問題じゃねえぞ。どうやって、の話だからな。」

「まあ、そうするしかないよね。頑張ってみるよ。」

「ようし！じゃ、早速始めようぜ！・・・？どうした、急にそんな距離とって？・・・ああ、別にさつきみたいなマネしねえよ、さつきとそのへっぴり腰直せ、もう時間押してるんだからな。」

そう、ISを使うためにアリーナも予約している人数も少ないため、何時間も特訓することは出来ず、30分はとれたが残り10分となっていた。

「よ、よし！じゃあ、今度はこっちから行かせてもらおうよ？」

「ああ、かかってくるな。さつきみてえに銃火器は1丁だけにしてやるよ。」

そういつて影清とダリルは特訓を再開した。ダリルは模擬戦の時とは違い、右手に出した拳銃1丁のみ使用しているが、その分狙いは的確だった。だが、弾幕は薄いためなんとか接近して肉薄する影清、だが剣の間合いに入ればするも、その度に間合い外に逃げられてしまう。ちなみに影清は銃禁止である、というかエイムに自信無くて撃てない。

そんな攻防を繰り返していると、ダリルの動きが一瞬止まり、その隙について影清は右ウイング目掛けて斬りかかった。

ブンッ！

(とった！)

スカッ

(な、消え・・・！)

「甘え。」

ドガッ

「ぐあっ！」

ダリルは動きを一瞬止めることにより、影清の攻撃を誘発させ、回避からのカウンターを狙ったのだ。しかも、影清が斬ろうとした場所は背中の中の右ウイング、剣を振ればダリルの動きが見えず、死角になってしまったため、悪手であった。

こうして身体を左に逸らし、背後をとったダリルはその勢いで影清の背中をキックした。少し手加減はした、少し。

(ぐっ、まだまだあ!!)

グルン！

「!？」

背中を蹴られた影清は、ダリルが近距離戦を仕掛けたため、剣の間合いから逃れられないというチャンスをもノにすべく、蹴られた反動で身体を半回転し、そのまま片手で剣を左肩に添え、一文字斬りを放った。

(届け！)

ブオン！ チイン

「！チツ、掠ったか！・・・オマエ良くそんな動きできるな。」

影清の放った斬撃は、クリーンヒットこそしなかったが、身体を逸らして避けようとしたダリルの腕装甲の指に掠っていた。

「い、いやあ、たまたまだって、たまたま。思えばダリルさんが誘ったから決まったようなものだし。」

「・・・待てよ、まさかコイツ？・・・！やべ！もうそろそろ時間じゃねえか？とつとと撤収するぞ！」

「は、はい！ダリルさん、今日も特訓ありがとうございました！」

次の人の利用時間が迫っていたため、急いでピットに戻る影清とダリル。さて、一体ダリルは何に気づいたのか？

16：引き出しは多い方がいい

ダリルとの特訓から数日後、クラス対抗戦当日。ピットにて、影清はすでに打鉄を纏い、ダリルや虚と最終確認をしていた。ちなみに山田先生は別件で不在だが、一応激励は送った。

「ーでは影清さん、お相手はグリフィンさんですが、何か対抗策はありますか？」

「・・・いや、運動神経バツグンってことしか知らない。専用機もあんま見たことないし・・・。」

「アイツはアウトファイターだと思うぜ。ちよつとの情報と勘だけだな。ま、相手がどうであれ、オマエはテメエの武器を最大限活かさなきゃそもそも勝てねえからな。頑張れよ。」

そう言い残し、ダリルは観客席に向かった。

「ああ、ありがとうダリルさん。布仏さんも動作確認手伝ってくれてありがとう、助かったよ。」

「どういたしまして、では私も観客席に向かいますね。御武運を。」

「ありがとう、じゃ、頑張ってくる。」

虚も観客せへ向かい、それから5分ほど経ってから、影清はアリーナ内へ向かった。

(・・・グリフィンさんはまだなのか?)

アリーナ内にはまだグリフィンの姿は無く、影清がそう思った次の

瞬間、逆側のピットからグリフィンが出てきた。

「お、トオルもう居たんだ！いやー、ゴメンゴメン。クラスの皆から激励もらってたからちよつと遅れちゃって。」

「いや別に試合開始までまだ数分あるし、全然間に合ってるからいいって。」

「そっか、じゃ、おしゃべりはここまで。この試合勝たせてもらうよ。」

「こっちのセリフだよ、そう簡単に負けはしないよ。」

そのやりとりを最後に両者無言となり、そのまま試合開始時刻となった。

『両者所定の位置に付いているようなのでカウントを開始します。』

『10、9、8、7』

（やっぱ初めて見る機体だ。ダリルさんのISみたいにそれらしい武装は無さそうだけど油断は禁物だな。）

『6、5、4、3』

（まずは銃を展開して盾で様子見、あとは臨機応変に対応・・・ダリルさんざっくりしすぎだろ・・・。）

『2、1』

カウントゼロになり、影清は銃を取り出したはしたが、構えはせずに飛行に専念した。一方グリフィンは開始と同時に接近したものの、

一定の距離で速度を落とし様子を伺っている。両者睨み合いとなったが先に行動を仕掛けたのはグリフィンだった。

(きゅ・っ！速っ！ダリルさんの比じゃん……)

「ハアッ！」

フォン！ ギイイン

「っ!」(た、盾が!)

影清の出方を見つつ、少しずつ接近しながら旋回していたが、影清とつている姿勢では対応の難しい距離で一気に近距離まで潜り込み、右側に浮遊している打鉄の盾の一つを蹴り飛ばした。PICが働いているため、そこまで遠くには飛ばされなかったが、追撃を入れるには十分な隙ができた。

「とりやあっ!」

(ま、マズッ！剣出せん)

ガンツ！

「ぐわっ!」

剣を出して防ごうとした影清だったが出す前にグリフィンの蹴りが身体を捉えた。影清はその反動を利用して吹っ飛ばれるのと同じ方向に飛んで衝撃を逃すと同時に距離をとった。ダリルとの特訓にボコられたの成果である。

「っう！ハ、ハア……。っ!」(くそ！近距離戦仕掛けてくるタイプ

「ただど速い！捌ききれぬ自信がない、どうする!?!?ってマズっ!?!?」

「せやっ!」

ヒュツ スカツ

グリフィンが吹っ飛ばした影清との距離を素早く詰め、蹴りを放つがいち早く気づいた影清はそれを避け、その間に改めて剣を取り出した。そして蹴りを避けられたグリフィンは攻勢を維持すべく腰付近に浮遊している武装で追撃を放つ。

「逃すかあ!」

ブオン ボガアン!

「!?!?ぶべらあっ!」(それナツクルかよお!?!?)

……はい、試合中に失礼します。ナレーターがIS解説のコーナーです。グリフィンのIS「テンカラット・ダイヤモンド」は先程のような4本指の浮遊ナツクル「ダイヤモンド」と背中に浮遊している射撃ユニット「ストーンレイン」が搭載されたIS。今回、射撃ユニットは遠距離武装が無いというブラフを仕掛けるためにまだ使用はされてないが、浮遊ナツクルは真っ直ぐにしか飛ばせないがその破壊力は高く、モロに喰らった影清は吹っ飛ばされ、シールドエネルギーが40%を切ってしまっていた。

「っ!っつう!」(……まずい、もうシールドエネルギーが!……くそっ、中距離でも攻撃できるのは予想外だった……。射撃武装は幸い無いようだし、次に近づいて来たら……!)

ウイン ガチャ バババババ!

「っ!?ぬおわあ!」(つて射撃武装あるのかよ!厳しいぞこれ!?)

「っ、全弾外れたかあ・・・ならー!」

射撃武装による攻撃をなんとか回避した影清だが、その隙をついてグリフィンが距離を一気に縮めた。

(!き、来たっ!ここでやるしか・・・!)

「おりゃあっ!」

ブオン! スーツ スカツ

「へっ?!」

影清はグリフィンの放った浮遊ナツクルを仰向けになることで躲した。そして避け方に動揺したグリフィンにー。

(今だ!)

「せえやっ!」

ブウン! ズギイヤアン!

仰向けになった勢いで縦回転し、咄嗟に逆手持ちした剣でグリフィンの右足装甲を斬り上げた。

「!くっ!このおっ!」

フオツ! スツ スカツ

「っ、はあっ！」

グンツ！ ギンツ！

「っ！ああもう、動きが気持ち悪い！」

剣を振り抜いた姿勢の影清に左脚による蹴りでの反撃しようとしたグリフィンだったが、影清は今度はうつ伏せの体勢になるように避けて、その体勢のまま降下しながら剣を持ち直し、左肩に構えて両手で振り下ろすも、グリフィンは反撃を嫌って咄嗟に離脱しようとしたため左腕装甲の手の甲に切り傷をつける結果となった。

(やっばダリルさんの言った通りだ！これなら通用する！)

ダリルは影清と特訓を重ねる内に、影清の姿勢制御能力がズバ抜けていることに気が付いた。そして、前回の次の特訓時に影清にそれを(物理的に)教えたのだ！しかし……。

「ならこれで！」

(よし！まだ接近戦にこだわるなら！)

ブオン！ スツ

右の浮遊ナツクルによる攻撃に対し身体を左に逸らすことで対応した影清、

—しかし、グリフィンはそれを瞬時に読んで、突き出した腕を軸に縦回転し、影清にオーバーヘッドキックをお見舞いした。

グルン　ズガアアン！

「っガッアツ!!？」

回避に専念し、カウンターを狙った影清に痛恨の一撃が入った。そしてその一撃により勝敗は決した。

『打鉄、シールドエネルギーゼロ。勝者、グリフィン・レッドラム。』

くおまけく

15話
16話
前回と今回の間での特訓風景

「・・・カゲキヨ、ちよつと逆さまに浮いてくんねえか？」

「いや、どんな注文だよ!?! まあ、やるけどさ・・・。」

「よつと、・・・これでいい? これ気持ち悪いから早くやm」 「じゃそのまんまで始めるぞー。」

「ちよつ、ちよつと待とうおおわっ! な、何の意味があるんだよコレえ!?!」

「はあつ、はあつ、な、何だったんだ・・・。」

「・・・やっぱりな、カゲキヨ、オマエ、オレの攻撃避けるとき逆さのまま避けてただろ。」

「え？そ、それが何だつてんだよ、はあつ、はあつ。」

「要するにだな・・・、オマエはどんな姿勢でも普通に相手の動きに対応できるってわけだ。もつと簡単に言えばどんな飛び方しても姿勢を崩しにくいってことだ。」

「！そ、それって結構すごい武器になるんじゃないや・・・！ちよつとは上達してたつてことかな？」

「いや、オレと模擬戦やったときには回転しながら直進できてたから努力とかじゃなく才能つてところが大きいんじゃないやねえか？」

「・・・あれ、まぐれかと思っただけ違ったのか・・・。」

「ま、慣れるに越したコトはねえな、つっーわけで次は仰向けになれ。」

「わ、わかった、よいしょ・・・で、なにをすr・・・あ、あのダリルさん？何で上から銃口四つも向けt」

ガガガガガガガガガガガガ！

「ぎやあああああああ！！！」

17：才能に勝る努力ほど尊いものはないと思う

グリフィンのオーバーヘッドキックを喰らい、打鉄のシールドエネルギーがゼロとなって敗北を喫した影清。その余りの威力にアリーナの地面に墜落するも、大事には至らなかった。

「うっ、ぐっ、げほおっ！．．．はあ、はあ、はあ、．．．．．ちくしよお。」（．．．くそっ、わかってたつもりだったのに．．．相手は代表候補生、その道のエキスパートだ！そんな人達と同じ手がずつと通るわけがない．．．！）

息を整えながら、悔しそうに自己分析をする影清。そんな彼に、グリフィンは地面に降りて話しかけた。

「ふう．．．、いやーびつくりしたよ！何あの軌道!?!驚きすぎて全然対応出来なかったよ！」

「．．．いや、あんなの初見殺しみみたいなモンだよ。実際対応されて手痛い一撃喰らっちゃったしね。」

「まあ、そこはほら、代表候補生ですから。でも、あんなの誰でも予想つかないって！だってあんな『スツ』って身体が引つ張られるように動くんだもん！ちよつと不気味だったけどね！」

グサツ

「そ、そっか、それは、ありがとう．．．。」

グリフィンの容赦無い(?) 評価は影清の心に突き刺さり、影清は元氣のない声で言葉を返した。

「・・・さて、じゃあピットに戻りますか。トオル飛べないでしょ？ピットまで運んであげるよー！」

「ああ、助かるよ。じゃあ遠慮なく、肩を、貸させてもらうことにするよ。」

「？なんでそんな強調してんの？まあ、肩ぐらい貸すけどさあ。」

コイツ、ダリルのせいでお姫様抱っこトラウマになつてんじやねえか。・・・グリフィンのおかげで無事ピットまで戻れた影清は、前回同様保険室に向かわされた。怪我はなかったが、最後に蹴りを喰らった左肩が痛んでいたのも、アイシングを巻かれた。保険室から出るとそこにはダリルと虚がいた。

「お疲れ様でした、影清さん。」

「！虚さん、それにダリルさんまで。」

「よ、カゲキヨ、良い線いってたが惜しかったな。」

「・・・いや、やっぱ地力が違い過ぎたよ。代表候補生の名は伊達じやないなあ・・・。」

「カゲキヨ・・・、」

—オマエよくわかってんじやねえか！そりやIS触つて1ヶ月弱の素人に負けてられるわけねえだろ！—

ダリルの言い分はもつともである。将来国の顔となる人物、ISの国家代表になりうる人材であれば、それ相応の努力と才能により高い

実力を持っていないければならない。そのための専用機といつても過言では無いかも知れない。……寧ろ、専用機あったとはいえ剣一本で勝利手前まで行った主人公がやばいだけである。

「っ……まあ、悔しいけどそれじゃあ勝ち目は薄かったかもね。でも……、そうだとしても負けるのは嫌だった。」

「へっ、まあ、そんなぐらいの心意気がちようどいいと思うぜ？次もその調子で頑張れよ。」

「……ああ、ありがとう。ところで明日の対戦相手って……。」

「明日の相手は2組のクラス代表の方ですね。代表候補生でもなく、もちろん専用機持ちというわけでもないそうですよ。優勝は逃してしまいましたが、3位決定戦は絶対に勝ちましょうね、影清さん。」

「あ、ありがとう、虚さん。ちよつと期待が重い気がしないでもないけど、やるからには頑張るよ。」

「ふふ、そうですか。あ、何かご褒美があつた方がいいですかね？えーつと……、お二人と一緒に私もデザート代奢りしましょうか？」

「いや、そこまではいい……。」

「……オイ、カゲキヨ、オマエまた被せてくんじゃねえよ。」

「……こつちのセリフだけど？そつちがしゃしゃり出てるだけなんじゃないの？」

「ふ、二人とも！こ、ここ保険室前ですから！やるなら場所を変えてくださいーい！」

虚さん、その言い方だと違う場所なら喧嘩していいと捉えられるのですが……。その後、なんやかんやあって仲裁出来たらしい。

くおまけく

山田先生の激励

「影清君！いいよいよクラス対抗戦ですね！」

「はい！いい結果残せるように頑張っていきたいです！」

「・影清君、なにも結果だけが全てじゃありませんよ。皆と協力して、一丸となって挑むことにも意味があります。別に結果なんてどうでもいいと言うつもりはありませんが、結果以外にも大事なことだってあるんですよ。」

「！は、はい！わかりました！」

「では、私は別件で応援に行けません、モニターで観戦はしますからね！クラス対抗戦、頑張ってください！」

「ありがとうございます！では僕もこれで。いってきます！」

18：奥の手は隠し通すもの

時はグリフィンとの試合を行った翌日まで進み、3位決定戦を終えた影清は、虚、ダリルと共にクラス対抗戦決勝が行われるアリーナの観客席に座っていた。

「いよいよ決勝か、グリフィンさんの相手って確か……。」

「ギリシャ代表候補生のベルベット・ヘルさんですね。先日の試合映像を見る限り、脚部から射出される2種のミサイルを駆使して勝利を納めていましたが……。」

「武装がそれだけなわけねえだろうからな。あのヤロウ、この試合に勝つために敢えてそれしか使わなかったんだだろうな。」

「……一番気になるのは昨日の試合では近接戦を徹底的に拒否してたことかな。グリフィンさんが接近戦を仕掛けてくる以上、弾幕だけで捌き切るのは難しいだろうから、何かしらの近接武装はあるはず。多分それに対応出来なかったらグリフィンは相当苦戦すると思う。」

グリフィンの対戦相手であるベルベットについて考察する影清達。その談義はアリーナ内にグリフィンとベルベットの両名が入ってきたことにより打ち切られた。なお、観客席からは、アリーナ内での会話等はあまり聴こえておらず、グリフィンが気さくに話しかけ、ベルベットがそれを軽くあしらった程度しか情報を得られなかった。

「それでは両者所定の位置に着いているようなのでカウントを開始します。」

それから少し経ってから試合開始までのカウントダウンが始まり、影清達はアリーナ内の様子に注目し、グリフィンとベルベットは互い

に睨み合っており、カウントはすでに3秒を切っていた。

『3、2、1』

カウントがゼロになった瞬間、両者互いに射撃武装を展開したが、弾幕の数ではベルベットに分があるため、グリフィンの方が負担は大きかった。不利を脱却するため、グリフィンは射撃ユニットによる銃撃を中止し、浮遊ナツクルでミサイルを撃ち落としつつ、ベルベットへの接近を試みた。対してベルベットは、グリフィンが接近戦を仕掛けると予想し、両脚部のミサイルポッドのリロードにデイレイをつけ、絶え間無くミサイルを浴びせることにより、グリフィンを牽制するも、その分弾幕が薄くなったため、グリフィンはそのチャンスを逃さず一気に距離を詰め、籠手調べの浮遊ナツクルによる攻撃を試みた。しかし――。

「オイオイ、ちよつと出るのが早過ぎるんじゃないかねえか？」

「あれは、ハルバードですね。なるほど重さがネックですが中距離にも対応でき、相手を弾き飛ばすのであれば確かに厄介ですね。」

「じゅ、重武装のオンパレードじゃないか!?というかグリフィンさんの武装が！」

ベルベットはグリフィンの浮遊ナツクルをハルバードによる横薙ぎで身体を後ろに引きながら対処し、ミサイルのダメージも蓄積していたグリフィンの浮遊ナツクルの指は全て破損していた。そして距離が離れたため、ベルベットはミサイルの射出を再開し、グリフィンはもう片方の浮遊ナツクルを用いながら、ミサイルを避け続けた。

「ま、まずいんじゃないか?!このままだとジリ貧じゃ……て、あれ？あの浮遊ナツクル、再生してないか!？」

「ふむ、恐らくグリフィンさんのISの特殊武装かも知れませんね。」

「え？てことは……。」

「まあ第三世代のISの切り札みてえなモンだな。でも、よく見ろ、再生してんのは指の部分だけだぜ。」

「！た、確かに。ただ再生できるなら他の装甲の修復も可能はず……、いや、いや、もしかしたら特定の材質だけ生成してるのか？」

ベルベットの弾幕に、グリフィンが浮遊ナツクルで対応したのは数回のチャンスを作り出すためではなく、一部分だけなら修復可能なためだった。

グリフィンのISは第三世代に区分されており、その特徴はイメージ・インターフェースによつて特殊な武装の運用を可能にできる点にある。グリフィンのISの特殊武装『ダイヤモンド・ダスト』は超硬質の物体を生成することができ、浮遊ナツクルの指も同じ材質でできているので、破損しても補強することが可能であり、応用性は非常に高いが、現在第三世代のISは総じて実験機であるため、まだまだ欠陥があり、グリフィンのISの場合は、燃費が悪いため武装の修復にしか使えないといったところである。

さて、試合状況は、グリフィンがミサイルの対処に慣れ、浮遊ナツクルの負担が軽減されたことにより、シールドエネルギーの減りも落ち着いてきた。逆にベルベットは、弾幕を薄くしたとはいえミサイルを撃ち続けていたため、ミサイルの残弾が残り少なくなっていた。

そして、ベルベットの弾幕が非常に薄くなったときに形勢が逆転した。グリフィンは、ミサイルを余裕を持って避けつつ、ベルベットに接近戦を持ち込んだ。ベルベットもただでやられるわけにはいかず、

ハルバードを出して応戦するが、グリフィンの格闘センスに翻弄され、シールドエネルギーを大きく削られていた。なんとかハルバードの柄を当て、少し距離を離れたが、グリフィンはその距離をすぐに詰めようと再度接近しようとし――。

『テンカラット・ダイヤモンド、シールドエネルギーゼロ。勝者、ベルベット・ヘル』

「な!? そんな、あとちよつとだったのに……。」

「なるほどな、早々に近接武装を使ったのはこれが狙いか。」

ベルベットはグリフィンとの距離を離し、また接近戦に持ち込まれそうになった瞬間、脚部中央から榴弾を放った。至近距離で放たれたそれは、直進していたグリフィンには避けようがなく、残量10%強のシールドエネルギーを根こそぎ持っていった。

脚部中央、そしてその両側のコンテナに搭載された射撃武装により相手を殲滅するIS、それがベルベットの専用機『ヘル・アンド・ヘヴン』である。

こうして、クラス対抗戦は3組の優勝で幕を閉じた。

くおまけく

3位決定戦

「きよ、今日はよろしくお願い致します。」

「ええ、こちらこそ。お互いベストを尽くしましょう。」

「よっ、ほっ、！っど。」

「く、くそっ、捉えづらい！なんでそんなにヌルヌル動けるのよ！」

「もらった！って、え?!ちよっ、ちよつと・・・キヤア!？」

『ラファール・リヴァイヴ、シールドエネルギーゼロ。勝者、影清道。』

「ふう、よかった、勝てた。。。あの、ありがとうございます！色々参考になりました。」

「え、ええ、・・・というかアナタよくアレ対応出来たわね、完全に上とってたのに、急に仰向けになってカウンターしてくるからビックリしたわ。」

「まあ、唯一の長所みたいなものですからね。あ、ピットまで肩貸しましょうか?。」

「ありがとう。じゃ、お言葉に甘えて。」

別視点：クラス対抗戦決勝

ピットからアリーナ内に入ったグリフィン、それと同時にベルベットもアリーナ内に入って来た。

「初めましてベルベットさん！私、グリフィン・レッドラム！今日はよろしくね！」

「・・・ええ、よろしく。」

「んー？ちよつとノリ悪くない？」

「貴女が軽すぎるのよ。試合前なのだから真剣になさい。」

「んーそっか、じゃ、切り替えようか。」

その言葉を最後に二人は言葉を交わさなかった。そして、試合開始時間となる。

『それでは両者所定の位置に着いているようなのでカウントを開始します。』

『10、9、8』

カウントが始まり、グリフィンは昨日のベルベットの試合を思い返し、予想外の事態も考慮してどのように攻めるか考えていた。

『3、2、1』

カウントがゼロとなり、グリフィンは射撃ユニットによる牽制を行なったが、ベルベットはその牽制にミサイルによる弾幕を被せ、グリ

フィンにミサイルを浴びせた。

バババババ（ヒユウ、ヒュー

「！くっ！」

バツ ドガドガアン！

ベルベットのミサイルがグリフィンを襲うが、射撃ユニットによる牽制を中止したグリフィンはそのミサイルを全て避け、浮遊ナツクルで避けきれないミサイルを迎撃しつつ、ベルベットへの接近を試みた。しかし、そう簡単に接近戦に持ち込まれるベルベットではなく、4つのコンテナのミサイルのロード間隔をそれぞれズラし、絶え間無くミサイルを射出することにより、安易に近づけなくさせたがー。

「よっ、ふっ、はっ！・・・ニャー！」

ギョーン！

「！」

「もらったあー！」

グオツ！

弾幕が薄くなったことにより、ミサイルを撃たれ続けているとはいえ、飛行に専念してることもあり、一発一発の対応は初手の弾幕より対処が簡単であった。そして、グリフィンはベルベットとの距離を詰めることに成功し、浮遊ナツクルによる攻撃を放ったがー。

「ハアツ！」

ブンツ！　ズガアアン！！

「んなっ!?!」

ベルベツトはハルバードを取り出し、向かってくる浮遊ナツクルを横薙ぎで弾き飛ばす。その攻撃でグリフィンの浮遊ナツクルは、指やその周辺の装甲が傷つき、指はほぼ全損していた。ナツクルを弾き飛ばした反動で後退したベルベツトは、グリフィンとの距離が開いたことにより再びミサイルを射出し始めた。

「く、うっ！．．．くそっ、なんとか修復しないと．．！って、ん？」

浮遊ナツクルの破損した指を特殊武装による生成で補おうとするグリフィンだが先程よりもさらに弾幕が薄くなっていることに気づいた。それもそのはず、ISは様々な武装を粒子化し、拡張領域に収納可能な機能もあるがそれにも制限がある。ベルベツトは試合開始からミサイルを撃ち続けていたため、ミサイルの数が減り続け、先程のペースで撃ち続けられなくなっていく程のミサイルしか残っていなかった。そのためー。

ギユン！

「っ！くっ！」

スチャ

「遅いー！」

ヒユン　ガンツ！

「ぐっ！くっ！」

ブンツ！ スカツ

「ふっ、はあぁっ！」

ヒュヒュツ ガンガァン！

グリフィンに近づかれたベルベツトは、ハルバードを出して応戦しようとするが、その前にグリフィンの蹴りが炸裂する。蹴りを喰らったベルベツトは、何とか反撃して距離を離そうとハルバードを振るうが、グリフィンはそれを難なく避け、ワンツーパーンチを叩き込む。グリフィンの攻勢が崩れたのは、ベルベツトがハルバードの柄をグリフィンの身体に打ち込むまで続いた。

「うっ、ぐっ、・・・ハアツ！」

ヒュツ ドン！

「ぐっ!?っ、まだまだぁ！」

ハルバードの柄で弾き飛ばされ、僅かに距離が離されたが、グリフィンは反撃の機会を与えまいとすぐに距離を詰めようとしたが――。

ガチャン！

「なっ!？」

「これで終わりよ。」

ボボボボボボン！

「よっ、避けれん・・・。」

ズガアアアン!!

ベルベツトは脚部中央のコンテナに搭載された榴弾を放ち、ベルベツトに突撃していたグリフィンはそれに対応出来ず、榴弾をモロに喰らってしまった。

『テンカラット・ダイヤモンド、シールドエネルギーゼロ。勝者、ベルベツト・ヘル。』

シールドエネルギーが無くなったことにより、グリフィンはアリーナの地面に墮ち、ベルベツトはグリフィンのもとへ降下した。

「いっつっ・・・いやー、負けちゃったかあ。アレは流石に読めなかった。」

「・・・ええ、あそこで距離を離れたのは幸運だったわ。あの状況になったら負けることを覚悟していたもの。」

「そっか、あく悔しく。・・・ふう、優勝おめでとう、ベルベツトさん！」

「ありがとう、グリフィン・レッドラム。貴女とはまた戦ってみたいわ。」

「こちらこそ！次は勝つからね！」

「ふふ、そう簡単にはいかせないわよ。」

こうしてクラス対抗戦決勝は3組クラス代表代理、ベルベットの勝利にて幕を下ろした。ちなみにグリフィンはベルベットの肩を借りてピットに戻った。

19：人脈ってすごい（白眼）

クラス対抗戦決勝同日、食堂の一角では1組の面々が陣取っており、『クラス対抗戦3位おめでとうパーティー』を行なっていた。

「それでは影清君！3位おめでとー!!」

パチパチパチパチパチ

「み、皆さん、ありがとうございます。優勝こそ出来ませんでした。皆さんと一緒に頑張って頑張れて良かったです。」

あまり描写されていないが、影清をサポートしていたのはダリルや虚だけでなく、1組の生徒らも情報収集や効率の良いトレーニングを考案したりしていた。そうそう、このパーティーは女子がお菓子やら飲み物やら集めて開催しているため、まだデザート2日分の奢りは残っているのだが……。

「それにしても、ウツホも奢るってなったとき、まさか1日分だけになるとは思わなかったな。」

「……皆さんには悪いことをしてしまいました。影清さんが3位を取れたら私も奢ると言ったので。」

「いやそれはオレもカゲキヨも遠慮したんだが……。まあ、奢ることに変わりはねえんだ、誰も文句言わねえよ。」

影清とダリルは拒否していたが、虚は3位決定戦のご褒美として自分も奢ることを約束していたのだが、クラスの面々もこれを拒否し、何とか二人に奢らせようとしたが、虚は二人が奢るなら自分も奢ると言って引かなかった。二人の奢りを1日分に変更することで引い

てもらった。

こうなつた主な要因は、虚が1組の生徒らに好かれているからというのもある。ちなみに他の僅かな要因は影清が3位を勝ち取ったことである、僅かな要因は。

「影清君の戦い方凄かったね！もうあんなにIS動かせるようになったんだ！」

「い、いえ、ダリルさんのおかげですよ。僕自身もあんな軌道で飛ぶことが出来たなんて予想だにしませんでしたし。」

「そうそう！操り人形みたいな動きだったよね！」「いやいや、磁石に引つ張られてるような動きじゃない？」「・・・衛生軌道？」「そ、それはちよつと違うんじゃないかなあ・・・。」

会話の主な内容は、影清の戦闘スタイルの話だったが、その殆どが避けやカウンターする時の姿勢についての話題だった。他にも、近接戦強くない？といったものもあったが、男の子だから力強いといった結論に至つたのですぐ終わった。なお、このパーティーは1時間半ほど続いております。

このパーティーは1年全クラスの生徒が計画を練り、互いにトーナメントでぶつからなかった2クラスの2組で、交代で食堂を利用するといったものとなっている。まあ、1年全員一気に食堂に集まったら流石に迷惑だからね！ちなみに1組は前半組で3組と一緒だった。

（つ、疲れた・・・、祝つてくれるのは嬉しいけどあんまり質問攻めしな
i 「少しいいかしら？」

「へ？・・・って、えと、ヘルさん？」

食堂から寮に向かう道中、影清に対しベルベットが話しかけて来

た。

「そうよ、そういう貴方はカゲキヨ トオルで間違いないかしら？」

「は、はい、そうです。・・・何か用ですか？」

「・・・敢えて言うなら、国からの依頼ね。世界にたった一人しかいない男性操縦者へのコネ作り、だとかそんなところよ。」

「そ、そうですか・・・、そう聞くと、あまり良い気分はしませんか？」

まあ、そりやただビジネスに必要なだからとシンプルに言われて良い顔をする人間はまずいないだろう。そういうのは大体言葉を濁して言うものなのだから。

「別に下手に嘘ついててもバレるだけでしょ？なら正直に言った方がいいと思つたまですよ。それに依頼じゃなくても一度は会うつもりだったわ、あんな戦い方をするIS操縦者なんて初めて見たもの。」

「・・・もしかして、あの変な軌道で動くやつ？」

「ええ、昨日の試合映像でも見たけど、さっきのパーティーでも大分話題になってたわ。まるで蜘蛛の様な動きをしていた、らしいわよ。」

「ほ、褒められてるのか、これ？」

「単なる感想だと思わ、気にしなくても良いのではないかしら？・・・それと貴方、本当に1ヶ月しかISを操縦したことないの？」

「？そ、そうですけど、それが何か？」

「・・・私たち代表候補生は早くても中学生になる前からI Sの勉強を始めるわ、それも並大抵の努力じゃない。たった1ヶ月しかI Sに触れてない貴方が、そんな代表候補生達に喰らいつけるのは、はつきり言っておりえないことよ。」

「い、いえ、ダリルさんや虚さんの指導の賜物ですよ。僕一人じゃ、あそこまで戦えなかったと思います。・・・それに出来るようになったことなんて、ほんの僅かですから、まだまだ課題は山積みです。」

「・・・まあいいわ、呼び止めて悪かったわね。」

「あ、じゃあさよならです、ヘルさん。」

「ええ、さようなら、機会があればまた会いましょう。」

会話を終えたベルベツトは寮へ向かっていった。なお、今寮に向かうとベルベツトとまた顔を合わせるようになるため、少し時間を潰してから寮に向かうことにした影清であった。

学年別トーナメント1年の部編

20：休日の計画はちゃんと立てるべし

クラス対抗戦から一週間後の休日、影清は朝からアリーナにてISを動かしていた、もちろん指導者付きで。

ガガガガガガガガガ！

「ほらほら、さつきよりも被弾率高ーぞ、もうちょっと気張れ。」

「いやっ、盾とっ、剣無っ、しはきつつ、いつてー！」

「・・・なんで私まで付き合わされているのかしら？」

「ん〜、友達の友達的な関係で？」

「ますます私が付き合う必要ないじゃない・・・まあ、見学させてもらうのだけ。」

現在アリーナ内ではダリルが武装無しの影清に対し容姿無い弾幕を浴びせている光景があり、グリフィンはその特訓を見学しに来了た。たまたま出会ったベルベットを連れて。

「それにしても彼、ホントにあり得ない避け方するわね。あんな姿勢で対応するなんて、普通は考え付かないわ。」

「そうだよね！前は盾とかに頼れてたから無理に動く必要無かったと思うんだけど、避けるに徹するってなると結構応用効くのすごいよね！」

現在弾幕を喰らい続けている影清はなんとか当たるまいと、上下左右360°姿勢を変えつつ避けていた。もはや一種のホラーといっても差し支えないと思う。

ガガガガガガ！ガキツ！

「・・・弾切れか、よーし、一旦休憩だ。」

「つ、疲れた・・・あの時の方がまだマシだった。」

「オイオイ、これでも抑えてやってるんだぜ。なんせ4分の1しかリロードしてなかったからな！いずれは全弾避けてもらうつもりだぜ？」

「か、勘弁してくれ・・・。」

弾切れにより一旦休憩を挟んだダリルと影清。グリフィンとベルベットはそんな二人に近寄り、話しかけた。

「おつかれ、色々とすごい光景だったよ！」

「はあはあ・・・、ぐ、グリフィンさん。と、ヘルさん？なんでここに？」

「グリフィンに連れて来られたのよ。まあ、つまらないものではなかったから見学させてもらったわ。」

「へえ、アンタがギリシャ代表候補のベルベットか。一応自己紹介しとくぜ、ダリル・ケイシーだ。」

「そう、・・・ベルベット・ヘルよ。」

「おう！・・・オマエとはいつか戦り合ってみてえな。」

「・・・悪いけど、その誘いは学年別トーナメントまでお預けさせてもらうわ。こちらの手の内はあまり見せたくないもの。」

「・・・ほう、アレ以上にまだ隠し玉があるってか？ま、心当たりは無くもないけどな。」

「まあまあ、二人とも今は休憩中でしょ？そんなにピリピリしないの。・・・ところでトオル、ベルベットとウツホは苗字呼びなんだ。どうして？」

「い、いや、普通そんな付き合えない相手に名前呼びは失礼になると思ったからさ、ダリルさんとグリフィンさんは名前呼びでいいって言ったからそうしたんだけど・・・。」

「ふくん、そんなこと気にするんだ？やっぱ、男と女の違いだったりする？」

「いえ、貴女がフレンドリー過ぎるだけよ。それとカゲキョ トオル、私は別にそういうのは気にしていないから、好きなように呼んでくれて構わないわ。」

「そ、そう？じゃあヘルス「じゃあ名前呼びOKってことでそっちで呼ぼうか、トオル？」

「え？あ、いや、その・・・な、何でもないです。じゃあベルベットさんで・・・。」

「え、ええ、なら私もトオルと呼ぶわ・・・。」

グリフィンの庄により、ベルベットを名前呼びすることにした^な影清。ベルベットも何かを察して影清を名前呼びすることとした。

「そろそろいいか？もう休憩は充分だろ？さっさとやろうぜ。」

「！ああ、ごめんダリルさん。じゃあ二人とも、また後で。」

「・・・そうだな、二人とも折角来たんだから参加してけよ。」

「え」

「そう？じゃあお言葉に甘えて。ベルベットはどうする？」

「・・・私も参加するわ。戦うことになる相手のことぐらい、ある程度知っておかなきゃね。」

「よしーじゃあ、カゲキヨ、ベルベット。オマエら近接武装のみでやり合ってみろよ。ジャツジはオレがやる。」

「・・・これ、ひたすら僕がやり続ける流れでは？」

「・・・流石にそれはないんじゃないかしら？確証は持てないけど。」

こうしてダリルの提案により、影清の特訓に代表候補生二人が加わった。そして、この多様な^{地獄の時間}特訓はお昼頃まで続いた。ちなみに影清だけがぶつ通しでやり続けることはなかった。まあ、影清が参加していない特訓なんてあまり無かったけどな、今燃え尽きてるぞアイツ。

21：暑さで頭がタイムボカン

クラス対抗戦決勝から時が経ち、現在昼休み、影清は1組の自分の席にて寛いでいた。

「・・・あつく。」

「今日は気温も湿度も高めですから。熱中症には気を付けてくださいね?。」

「大丈夫大丈夫、ありがとー虚さん。」

「そんな抜けた声で言われても説得力ねえぞ。シャキツとしろ、シャキツと。」

「んなこと言われても暑いのは慣れないって。冬になってほしい。」

「それなっいたらなっただで寒いって言うやつじゃねえか。」

あまりの暑さで机にノックダウンしている影清に、虚とダリルが寄ってきて声を掛けたが、影清はそれに対して明らかに覇気の無い返事を返した。

「もうトーナメント近づいて来てるんだぞ? そんなんで準優勝狙えんのか?。」

「・・・そこ、優勝じゃないの?。」

「当たり前だろ? 優勝はオレが頂くからな。ま、オマエは代表候補クラスの相手に運良く当たらなきゃ決勝までは全然行ける可能性があるからな。」

「…よし、その鼻へし折って薪に焚べてやる。首洗って待つてろ。」

「く、首なのか鼻なのかハッキリしろよ…。」

「ダリルさん、もうそつとしておいた方が良くはないかと。道さんもゆつくり休みたいでしょうし。」

こうして、だらけた影清に振り回されて昼休みが過ぎていった。ちなみに影清と虚が互いに名前呼びしてるのはグリフィンの所為である、ダリルは抵抗しきれた。

少し時が進んでHR、山田先生による連絡事項の通達が行われていた。

「—では、ISスーツの発注申し込みは来週末、学年別トーナメントのエントリー用紙提出は再来週末までですから、忘れないように気をつけてください！あ、影清君はHR終わったら先生と一緒に職員室まで来てください。それではHRはこれで終わりです、皆さんお疲れ様でした。」

「？は、はい。」

HRが終わり、山田先生と共に職員室に向かった影清。いざ着くと、山田先生は影清に待機を言い渡し、職員室の自分の机に向かった。

（数分後）

「ご、ごめんなさい影清君！折角来てくれたのに待たせちゃって！」

「い、いえいえ、別に気にしてませんよ！そ、それで用件は？」

「……ちよつと、ここでは言いづらいので、応接室まで付いてきてもらつてもいいですか？」

「はい。……あの、応接室つてことは、つまり……」

「はい、来客されてる方がいらつしやいますので、今からその方に行きます。ちよつと複雑な形になつちやつてごめんなさい。」

「い、いえ、……もしかしてそれほど重要なんですか？」

「はい……。あまり待たせるのもいけないので、そろそろ向かいますよ。うか。」

途中から声のボリュームを落として会話していた影清と山田先生は、応接室にて待っている人物の元へ向かった。

「あ、着きましたよ、影清君。ちよつと待つててくださいね。」

コンコンコン

「遅くなって申し訳ありません、影清君の担任の山田です。」

『おお、やつとか！待ち侘びたよ！ささ、入つて入つて！』

応接室に着いた山田先生は、影清を待たせ、応接室のドアを叩いた。すると、割とテンションの高い女性の声が返事をして、入室を催促した。

「影清君、入室しても問題無いようなので、ついて来てください。」

「は、はいー！」

「失礼します。」

「し、失礼します。」

「おお！キミが噂の男性操縦者か！ふむふむ、ふむふむ・・・うん！今はまだまだだけど、素質はある！これは楽しみにしてもいいかな？」

「え、あつ、あの・・・ありがとうございます？」

「おっとそうだ自己紹介がまだだった！私は篝火 ヒカルノ！キミの専用機開発チームのリーダーを務めている！」

影清が入室した瞬間、ソファアールから立ち上がり、影清の周りをグルグル周りながら身体をジロジロと見ていたヘント・・・人物は篝火 ヒカルノと名乗り、専用機についての詳しい話をするため、3人ともソファアールに座った。

「さて影清君。キミに専用機が用意されることは知っていたね？」

「はい、主に実験データを集めやすくするために聞いていましたけど・・・。」

「その通り！だが、より効率の良いデータ収集を行うには本人に合った専用機を用意するのが最適解！よって、キミのISの操縦記録は全て参考にさせてもらっているのだが・・・。」

「？」

「な、何かトラブルでも起こったのですか？」

「ああそうだ、事故も事故、大事故だ!! あんな変態的な軌道が可能だなんて目から鱗だったよ! おかげで一から設計し直すハメになってしまった! だが安心して欲しい! その分ロマン・使い易いISに仕上げることを約束しよう!!」

(なんかメツチャ不安になってきた。)

それからも専用機についての現状報告は続き、夏休み頃には試験運用出来るように仕上げるらしい。そして、ちよつとした雑談に移った。

「いやそれにしてもキミが教師とはねえ、・・・学生時代はあんなに
「そ、その時期の話はしないで下さい!! 幾ら先輩の同期でも許しませんよー!」

「ハハハ、冗談だよ冗談。キミがそれを掘り返されるのを嫌がるのは千冬から聞いてるよ。」

「もう、勘弁してくださいよ。あの頃は色々と夢中だったんですから。」

(・・・ん?)

「あ、あの、質問よろしいでしょうか?」

「ん? どうしたのかな影清君? スリーサイズまでなら答えよう。」

「い、いえ、遠慮します・・・じゃなくて、千冬さんってあの千冬さんですか?」

「・・・ああ、そういうことか。その通り、私はあのブリュンヒルデと面

識があるのさ。」

「ま、マジっすか?!」

「大マジだとも、ちなみに山田君も面識あるぞ。」

「えっ、そ、そうなんですか?!」

「は、はい、先輩とは代表候補生時代からの付き合いで……。」

そう、この二人は世界最強のIS操縦者・織斑 千冬と関わりがあり、ヒカルノは同期、山田先生は後輩といった関係だ。

「ま、まさかあの千冬さんの関係者だったとは……それも山田先生まで……。」

「ん?なんだ、千冬ファンだったりするのかキミ?」

「い、いえ、ファンってわけではありませんが、有名人中の有名人なので、ちよつと興奮しちゃって……。」

ちなみに影清が興奮してるのは織斑 千冬が有名だからという理由だけでなく、原作キャラだという確証を持っていたからだ。読者のために説明すると、影清は原作知識の殆どを失っており、それっぽい立ち位置にいる人物という曖昧な判断基準で原作キャラかどうかを判別しているのだ。なお、曖昧なのは本人も自覚しているため、片手で数えられる程しか原作キャラ認定した人物は少ない。

それから織斑 千冬関連の話題を2、3個ほど話してお開きとなった。

「それじゃあ私は専用機の開発に戻るよ、あまり遅らせたくないから

ね。それじゃさよならだ。」

「はい、お疲れ様でした、ヒカルノさん。」

「あ、ありがとうございます！」

「…影清君もお疲れ様でした。今日は他に用事はないので下校しても構いませんよ。」

「はい！山田先生、色々ありがとうございます！ではこれで！」

そう言って影清は寮に向かった。なお、自室に着いたとき、カバンを教室に忘れていたことに気づき、急いで取りに戻った。

くおまけく

名前呼び

「お、いたいた！ウツホー、こんにちはー！」

「グリフィンさん。こんにちは、どうかなされましたか？」

「いやーどうしても聞きたいことあつてさー。」

「？なんででしょう？」

「ウツホってさー、

「トオルのこと名前呼びしないの?」

「・・・えっ、な、名前呼び、ですか?」

「そうそう、ウツホもトオルもお互い苗字呼びだからさ。いつになったらお互い名前呼ぶのかなーって。」

「べ、別に私は名前呼びでも構いませんよ?でも、影清さんは名前で呼ぶことを許してくれるでしょうか?」

「大丈夫!名前呼びしていいって!」

—そうだよね?トオル。

「えっ、か、影清さん!」

「あ、あはは、どうも虚さん・・・だ、ダリルさん、そろそろ離して:。」

「ダメだ、ウツホを名前呼びするまでこのままだ。」

「・・・あんまりだ・・・。」

「か、影清さん、もしかして、私を名前呼びするのはイヤでしたか?」

「いや、別にのほど痛いだだだだだ!し、締めないで、わ、わかった、言う、言うから、う、虚さん!別にイヤじゃないですっ!」

「!は、はい!それなら良かったです!では、私もこれからは道さんと呼ばせて頂きますね。」

「わ、わかつたつ、っハアツ、ハアツ、：や、やつと解放された。。。。」

「さーて、じゃあオレは行かせてもr「待った。」ガシツ

「なんだグリフィン、用件は終わったろ？」

「ダリルもトオル苗字呼びしてるよね？」

「。。。いや、オレは呼ばなえ。一人前になつたつて認めたら考えてお
くかな。それじゃっ。」

バツ！

「あ、コラ！待ちなさい！」

「。。。なんだつたんだコレ。。。。」

22：新武器に対する期待は異常

ヒカルノ訪問から数日後、影清は自室にてトーナメントのエントリー、そして使用する武装についての申請用紙と睨み合っていた。え？ISスーツの発注はどうした？そもそもISスーツってレディースしか無いので、メンズ用は早期に作られ受領済みです。

「うーん、追加武装かあ。そそられる響きだけど、いざ選ぶってなるとなあ。…遠距離武装は牽制ぐらいにしか使えないし、かと言って近距離武装選ぶにしても、ベルベットさんが使ってたハルバードは一撃は重そうだけど僕のスタイルじゃあんまり振り回せないし、槍は悪くないけど距離調整むずそうだな。…、パイルバンカー？いやちよつとでかすぎじゃないか？これ持って避けれる程の技量無いし…、盾は今のところ最有力候補として、あと何を持ってくか…。」

トーナメントで使用する打鉄の後付武装の内容を考える影清。

打鉄の初期武装について簡単に言えば、刀剣ブレード・アサルトライフルの2種と打鉄固有の浮遊シールドの王道(?)装備であり、操縦者によって追加武装を選び易いタイプとなっている、量産機は伊達じゃない。

しかし、影清の戦闘スタイルは良くも悪くもトリッキーなカウンター型なので、逆にその王道武装しか使いこなせないという欠点がある。まあ、一番は本人の技量不足なのだが。

「うむむむ、盾持ってくつてなると両手はあんまし塞がらせたくないし、でも火力が…ん？なんだこれ…蛇腹剣?…これだ！これならリーチも稼げるし、いざつてときの二刀流もできる！正に理想の武器じゃないか！あとは…うーん使わないもの装備するわけにもいかないし、じゃあもうこの二つでいいか！」

追加武装を決めた影清は、トーナメントのエントリーと追加武装申

請用紙を職員室に持って行き、山田先生に提出した。
だが、一つだけ問題がある。

「あ、やべ、蛇腹剣どこで練習すれば良いんだ？」

肝心の追加武装を試す機会が少ないのだ。影清はクラス代表なので優先的にISを借りれはするが、もし蛇腹剣を練習してるところを目撃されれば、少なからずとも対策はされるだろう、それも代表候補クラスの人物に。ちなみにダリル等代表候補生は、トーナメント前ということで影清の特訓には付き合っていない。そりゃ、ライバルにあんま塩送りたくないでしょうよ。

「・・・虚さん、相談に乗ってくれるかな？」

代表候補生達に頼れない影清は、それらの人物と同じくらい付き合いの長い虚に助けを求めた。理由の一つとして、虚はトーナメントに参加しないというものもあり、影清の頼みを虚は心良く引き受けた。

「一で、虚さん。コレは・・・？」

「ロープです。本当はムチが良かったのですが、あいにく待ち合わせしていないので・・・。」

「い、いや、それはわかるんだけど、このロープであそこの缶3つを同時に倒せと・・・？」

「はい、そうです！ロープの長さも考えて配置しましたから、できるままで続けてもらいますよっ？」

こうして、影清の地獄の特訓が始まった。ちなみに缶の配置は影清から見て右、左、中央の順で距離が離れており、左の缶が右よりも

中央から離れている形となっている、あとこれ全部倒したら逆の配置でもう一回やらされたらしい。

23：知らないのか？フラグからは低確率で逃げれる
○

学年別トーナメント当日、トーナメント発表までまだ時間があるため、影清は虚や代表候補生の面々と会話していた。

「んで？オレらと特訓できなくて寂しかったんじゃねえか、カゲキヨ？」

「いや別に。」

「そ、即答なんだ・・・。」

「まあ、虚さんが手伝ってくれたからね。ところでグリフィンさん達も個別で練習してたの？」

「まあね、ここ最近会えてなかったから寂しかったよ。ね、ベルベツト！」

「どうしてそこで私に振るのかしら？・・・私は別にどうとも思っていないわ。これから戦うとわかっている相手にわざわざ会いに行く必要ないでしょう？」

「え？じゃあ今なんでここにいるの？」

「・・・偶然よ。通り道に居たから声を掛けただけ。・・・失礼させてもらうわ。」

「あ、行っちゃった、・・・じゃ、私も準備するかな。トナメ頑張ろうね！」

「おう、容赦はしてやんねえぞ。・・・さて、オレも行くか。ウツホ・・・は出なえんだったな、カゲキヨ、初戦で呆気なく散ってくれるなよ。」

「大丈夫だって、ダリルさん達と当たるまでは負けないよ。そっちこそ油断して足元掬われないでよ。」

「ハッ、誰にモノ言ってるんだ？負けるわけねえだろ。それじゃあな。」

「じゃあ虚さん、僕もそろそろ行くよ。特訓付き合ってくれてありがとう。」

「はい、ダリルさんも影清さんも頑張ってくださいね！二人共応援していますからー！」

こうして、トーナメントに出場する影清と代表候補生等はそれぞれ控え室に向かって行き、虚は観客席に向かった。

少し時間が経ち、控え室にて、すでにISスーツに着替えた影清は、トーナメントの発表を待っていた。ちなみに影清のISスーツだが、原作で一夏が使用していたものと同タイプで、カラーリングは赤い縁の黒ベースとなっている。

「・・・ふうー。」

(・・・いつまで経っても慣れないな、この空気。やっぱこういう大会みたいな形式だといやでも緊張する・・・。何か別のこと考えた方がいいかな？・・・ダメだ、トナメ意外のことが思いつかない・・・！なら、さっきの会話を・・・。)

『カゲキヨ、初戦で呆気なく散ってくれるなよ。』『オマエは代表候補クラスの相手に運良く当たらなきゃ決勝までは全然行ける可能性あ

るからな。』

（「ちよつと待て、なんでよりによってそれなんだよ！完つ全にフラグじゃないかコレ!?ああ頼む、杞憂で合つてくれ！そんな展開はイヤだあ！）」

「―って、もうトーナメント発表されてる!?え、えーつと、僕の名前は・・・。」

学年別トーナメント1年の部

一回戦第7試合

ベルベット・ヘル VS 影清 道

「

24：当たらなければどうということはない)

トーナメントは着々と進み、一回戦第6試合まで行われ、影清とベルベットの番が回ってきていた。

両者ともすでにアリーナ内に来ており、試合開始を待っている。

(気不味い・・・挨拶意外何も言えなかった・・・。なんか益々緊張する・・・。)

アリーナ内にてベルベットと再会した影清は、試合前の挨拶を交わしたが、ベルベットはそれに対し簡素に返したため、話が止まってしまったのである。

『それではカウントを開始します。』

(!：：確かベルベットさんのISはミサイルが主軸のはず、何か小回りの効く遠距離武装は見たことないけど、グリフィンさんの時の例がある！油断は出来ない。)

『17、6、5』

(初手で遠距離武装を使ってきたら、盾を出して防御を固めて蛇腹剣でチャンスを伺う。あとはあの弾幕にどこまで対応できるかだ。)

『12、1、0』

ガコン バシユバシユウ!

(き、来たミサイ・・・って来ない!?)

ボンボオン! モクモク

「な!?!し、視界が……。」

影清は盾と蛇腹剣を装備し、少しずつ近づこうとしたが、ベルベツトは、影清との特訓で影清が銃を使いこなせないと推測し、逆に近接が強いと知っているため、脚部内コンテナのマイクロミサイルを両者の間にばら撒くことにより、爆風と砂による目眩しを行ったのだ。これにより、影清は迂闊に接近出来なくなり、ベルベツトは砂の煙幕が晴れるまで影清と一定の距離を保てることができた。

バババババババ!

「うおっ!?!くっ、うっ!」

(なっ、銃弾!?!てことはやっぱ隠してたか!いや、借りた武器ってことも考えられるか。とにかく、姿が見えるまで対処しないと……)

ベルベツトによる銃撃をレンタルした盾と浮遊シールドで防ぎながら避ける影清。防戦一方だったが次第に煙幕が晴れ、ベルベツトの姿が見えるようになってきた。

(み、見えた! 防御しつつ突っ込む!!)

ボボボボボボ!

「!ま、マズッ!」

グンツ! バアン ガガガアン!!

「うっ、うぐぐっ!あ、危なかった……。」

接近戦を仕掛けようと接近してきた影清に、ベルベットはアサルトライフルによる銃撃を中止し、前もって準備していた脚部中央コンテナの榴弾を発射した。しかし、影清は相手の動きに対応できるよう防御しながら接近しようとしていたため、その弾幕を即座に脚を後ろに浮かせることで宙でうつ伏せの姿勢となり、少々破片が被弾したものの致命傷は避けられた。だがこの隙を逃すベルベットではなく、即座に攻撃を再会させた。

ババババババババ！

「うつ、ぬうつ！・・・そりゃあー！」

ブンツ！

「！」

ベルベットのアサルトライフルによる銃撃を、即座に計3つの盾で対応できた影清は、そのまま防ぎながら接近し、盾を投擲した。アサルトライフルの弾幕に阻まれ、ベルベットに届きはしなかったが、元々当てるつもりはなく、弾幕を妨害するために投げたのだ。その目論見は成功し、銃弾が阻まれている間に影清はベルベットに接近し、間合いに入れた。

「くっ、ふっ！」

ブオン！

「たあっ！」

ブンツ　ギイイン！！

接近戦に持ち込まれたベルベツトは、ハルバードで迎撃しようとしたが、影清は左手で逆手持ちした刀剣で、その横薙ぎを防いだ。もちろんバカ正直に真正面で受けたわけではなく、影清から見て左からくるハルバードに対し、身体を右に傾け、少しでも勢いを逃すように受け流そうとしたのだ。

「っ、ぐっ、ハアッ！」

ビュツ ギャイン！

「！くっ！」

受け止めた勢いで吹き飛ばされないよう耐えた影清は、左肩に構えた右手の蛇腹剣を振り下ろし、ベルベツトの右腕装甲を斬りつけた。

「まだ！」

ブン ギンツ！ ヒュツ ギイン！

「うっ、くうっ！」

攻勢に回った影清は、ベルベツトに反撃の隙を与えまいと、ハルバードを防いだ勢いを利用し、右に傾いた身体を逆さに持つて行きながら逆手持ちした刀剣で左腕装甲に追撃し、そのまま体勢を立て直そうとさらに身体を右回転させ、その勢いで蛇腹剣をハルバードを握っている右手に振るった。間合いに入られたベルベツトにはこの攻撃を防ぐことができず、左腕装甲を傷つけられた後、右手に持っていたハルバードを弾き落とされてしまった。

「もらったあー！」

「っ！舐めないで！」

ヒュッ ガン！

「！っ・・・なっ!？」

二刀流による連撃で一気に押し切ろうとした影清だが、ベルベットは脚を影清に当てることでそれを止めた。それほど勢いは強くなく、強引に押し切れることもできたが、自分に当てられている脚の外側のコンテナが開かれていたことにより、影清は動揺してしまっただ。そして、ミサイルがゼロ距離で発射される。

チユドオオオオン!!!

『打鉄、シールドエネルギーゼロ。勝者、ベルベット・ヘル。』

25：他人の不幸は蜜の味

ベルベットのミサイルゼロ距離発射によりシールドエネルギーを削り切られた影清は、なんとか体勢を立て直して地面に着地した。なお、ベルベットもミサイルの爆風を受けていたため、体勢を崩していたが直ぐに立ち直り、そのまま浮遊して影清の元へ降り立った。

「私の勝ちね、トオル。」

「あ、ああ、まさかあんな行動取るとは思わなかったよ、そんなことするような人には思えなかったからさ。」

「…いざって時になったら手段なんて選んでられないわ。それで最悪の事態が避けられるなら安いものよ。」

「…まあ、一理あるけど、僕はその考え嫌いだな。どうせなら犠牲なんて出したくないからさ。」

「…本当に甘いよね。やっぱり貴方はISをまだ良く知らない人間だったわ。」

「いやそれはそうでしょ。だってまだ勉強し始めて2、3ヶ月しか経ってないからさ。」

「そういう話じゃないのだけれど…まあ、今はそれで良いかしら。：そろそろ移動するわよ、後が支える。」

「分かった、…あ、飛べないや。えっと、確か予備のエネルギーが…ベルベットさんごめん、ちよっとわかんなくなっただから手伝ってもらってもいい？」

「・・・はあ、仕方ないわね。」

ベルベットに予備エネルギーの充填を手伝ってもらった影清は、ベルベットに礼を言ってからピットに戻っていった。そして、ピットから出るとそこにはダリルの姿があった。

「よ、よお、カゲキヨ。まさか、しよ、初戦がベルベットだなんてな、ついてねえなオマエ、プツククツ。」

(コイツいつかぶちのめす。)

「・・・そういうダリルさんはもちろん勝ったんだよね?」

「当たり前だバカ野郎、寧ろそんじよそこらのヤツに勝ちはやらねえよ。」

「そっか、じゃあもう行かせてもらう、保険室行かないと。」

「おう、邪魔して悪かったな。：あ、そうだ、初戦敗退したから罰ゲームな、覚悟しとけよ!」

「は、はあ!?!ちよつと待つ・・・行っちゃったよ・・・。」

去り際にダリルから罰ゲームを言い渡された影清は保険室に向かい、異常無しと診断され解放された。

トーナメントの予定では、今日の試合は影清とベルベットの試合とほぼ同時進行していた第8試合のみなので、影清は保険室を後にして寮の部屋に向かった。

「あ、おーい、トオルー!」

「?グリフィンさん!グリフィンさんも今帰るところ?」

「ま、そんなところかな。今日は色々参考になったからね。」

グリフィンは遠くから手を振りながら、寮に向かう影清に近づき、一緒に歩き始め、今日の試合について語り合った。

「それにしてもトオルの戦い方凄いよね!こっちの行動に合わせて動くから尚更捉えにくいんだよね、あの時のベルベットよくゼロ距離射撃の判断できたよね!」

「アレは本当にビビった。だってミサイルだよ?下手したら自分もタダじゃ済まないのに。」

「まあ、そういう判断力もベルベットが代表候補生たる理由の一つかもね。でもそこまで追い詰めたトオルも充分凄いよ!もし専用機持ちになったら一回ぐらい代表候補生に勝てるんじゃない?」

「・・・いや、難しいかな?地力で負けているのに変わりないし、まず僕が専用機使いこなせるかも怪しいからね、・・・変な機体になってなけりゃいいけど。」

「ん?その言い方だと、もしかしてトオル、専用機貰えるの?!やっぱ、男性操縦者だから?」

「えっ、あ、うん、データ収集目的でね。でも、専用機持ちになるからにはそれに恥じない実力も付けて行きたいとは思ってるよ。いつまでも弱いままは嫌だしね。」

「・・・別に今でも頑張ってるからいいんじゃないかな?まあ、人それぞれなのはそうなんだけどさ、無理は禁物だよ?」

「・・・ああ、ありがとうグリフィンさん。こりやあベルベットさんのこと言えないや。まだまだ未熟だな。」

「え、何？ベルベットと何話したの？聞かせて聞かせて！」

「わ、わかったから、ちょっと離れて、流石に近すぎるから。」

こうして寮に着くまでグリフィンと会話し続けた影清。ちなみにダリルの罰ゲームの話題でグリフィンが怪しい笑みを浮かべていたのを影清は見逃していた。

26：ガン待ち対ガン待ちは焦つたいと思う今日この頃

学内別トーナメント開催から数日後、1年の部が最初に行われたこともあり、トーナメントは着々と進行し、決勝を迎えていた。

「やつほートオル、それにウツホー隣いいよね？」

「！グリフィンさんか。」

「あ、グリフィンさん。私は構いませんけど、道さんは大丈夫ですか？」

「いや、全然いいけど、ここ結構後ろの方だよ？」

「？ああ、別にそんなの気にしてないよ。決勝があの人ならこの面子が一番盛り上がりそうだしね！」

影清と虚の許可を得て影清の隣に座ったグリフィン。彼女は準々決勝にてダリルに敗北してしまったため、こうして観客席にいるのだ。

決勝まで駒を進めたのは、グリフィンを破ったダリルと影清を撃ち負かしたベルベットの二名、まだ試合開始まで時間があるので、影清等は今から行われる決勝戦について話し合っていた。

「・・・ねえ、これ結構不毛な戦いにならない？タイプが違うとはいえどっちも遠距離武装主軸だし。」

「いえ、そうとも限りませんよ。同じ遠距離武装主軸の戦い方でも、ベルベットさんの方が武装の火力は高いのですが、弾数の総量でいえば

ダリルさんに分があるはず。それに銃撃戦なら、互いに相手の残弾を気にする必要があるので、それで隙が生まれたのなら、ダリルさんは接近戦に持ち込むでしょう。そうなればベルベットさんの勝機は薄くなるかと。」

「いざってときのゼロ距離ミサイルもトオルに使って見せちゃってるからね。でも、手札を多く見せて勝てる相手じゃないのは二人共分かっているはずだから、もし何か隠してるならそれが勝敗に関わってくるんじゃない？」

そうこう話している内にダリルとベルベットがアリーナ内に姿を表した。もちろんアリーナ内の会話は影清等には聞こえないので割愛させて頂こう。

『それではカウントダウンを開始します。』

『10、9』

試合開始までのカウントが始まり、影清等は会話を切り上げ、アリーナ内に注目した。

『1、0』

「あ、なんだ普通に撃ち合うのか。」

「まあ、妥当じゃない？突っ込んだ方が痛い目見るし。」

試合開始直後、ダリルは両手両肩の拳銃、ベルベットは2丁のサブマシンガンで銃撃戦を繰り広げた。互いに交わしてはいるものの、若干だがベルベットの方が被弾している。

単純な話だが、1秒辺りの銃弾の量でいえばベルベットに分がある

のだが、銃口の数ではダリルの方が上だ。よって、ベルベットよりもダリルの方が狙いをつけれる場所が自然と多くなるため、命中率が高くなるのだ。

しかし、そうはいつでもサブマシンガンを対処しながら自分の手がない銃も操作して狙い撃たなければならぬのだから、いかにダリルが優れた技術を持っているかがよくわかる。

「！あ、あのミサイルは！目眩しか？」

「いやーそれは無いと思うよ？ダリルならお構い無しに撃ちまくって炙り出すと思うし・・・って、左右に？なんでそんなこと？」

このまま続ければ不利を打開できないと判断したベルベットはマイクロミサイルをダリルの左右にばら撒くように放った。ダリルは警戒こそしたが、自分に当たらないと見切り、ミサイルを迎撃しなかった。そして、ベルベットはダリルに向かってハルバードを構えて突進した。

「はっ？な、なんで突っ込んだんだ!?ダリルさん近接弱いわけじゃないのに！」

「こ、これは予想外だったな・・・、てことは何かあるのかな？」

ダリルはベルベットを迎撃しようと弾幕を浴びせつつ、勢いが弱まったところで距離を詰めて自分の間合いに持ち込もうとするも、ベルベットはダリルの弾幕に対して一瞬だけ減速し、前方に氷の壁を張ることで対処した。

「な、なんだアレ!?氷・・・だよな？」

「おそらく、第三世代に搭載されている特殊武装ですね。見た限りだ

と空気に干渉するタイプだと思われませんが。」

ベルベットのIS『ヘル・アンド・ヘヴン』は第三世代のISであり、当然特殊武装が搭載されている。その武装の二つの機能の内一つが、空気を冷やして氷を作り出す分子運動制御「ヘル」である。

これによつて氷の壁を生成したベルベットは、ダリルの弾幕をものともせず強行突破し、ハルバードを上段に構え、氷の壁ごとダリルに叩きつけようとした。ダリルも素直に受けるつもりは無かったが、先程ばら撒かれたマイクロミサイルによつて逃げ道を限定されてしまったため、完全に避けきることはできず、手痛い一撃をもらってしまった。

「あ、あのダリルさんに一撃喰らわせた!?! やっぱベルベットさんすげえや!!」

「流石に私もあんな一撃喰らわせるのは骨が折れるなあ、私がやったときは手数で勝負してたから尚更。・・・ベルベット、このまま押し切れるかな?」

体勢を崩したダリルにミサイルと榴弾の弾幕を浴びせるベルベット。幾つか被弾したものの、その際の爆風を上手く利用し、片手で拳銃を撃ち、牽制しつつ距離をとった。ここで仕切り直しとなったが、最初と比べると、ベルベットとダリルのシールドエネルギーの差は大きく離れていた。

ダリルはこれから先被弾せず、ベルベットに攻撃を加えなければならぬが、むやみに攻めたら簡単に返り討ちにされてしまい、対するベルベットは、最初にサブマシンガンしか使用していなかったのもあり、射撃武装の総残弾は半分近くある。

ダリルにとどめを刺すべく、ベルベットは再度弾幕を展開した。そこでダリルは、肩の銃で幾つか迎撃しながら両手の拳銃を前方の弾幕に投げつけ―。

「な、投げ・・・なっ!？」

(は、速っ!?)

「瞬間加速ですか。確かに近づくには最適解ですが・・・。」

瞬間加速とは、ISのスラスターから放出されたエネルギーを再び取り込んで利用することにより、2倍の出力での高速飛行を可能とする加速技術である。デメリットこそあれど、それに見合った奇襲性があり、現にダリルは弾幕を掻い潜ってベルベットの眼前まで移動していた。しかし、ベルベットはすでにハルバードを構えており、このまま一撃を入れて勝敗は決すると思われたが、ダリルの両手にも得物があった。

「あれは・・・剣!?!しかも二本!あんなの隠してたのか!」

「あ、これ、決着ついたかな?」

ベルベットがハルバードを振る前に、二刀流による連撃を叩き込むダリル。当然このまま受け続けてやるほどベルベットは甘くなく、ほぼゼロ距離での弾幕一斉展開を実行したが、ダリルはこれを紙一重で交わし、射撃の間について再度連撃を叩き込んだ。

『ヘル・アンド・ヘヴン、シールドエネルギーゼロ。勝者、ダリル・ケイシー。』

別視点：学年別トーナメント1年の部決勝

決勝戦へと駒を進めたダリルとベルベツトは、試合開始数分前にアリーナに姿を表し、言葉を交えた。

「よお、オマエとはまだ戦ってなかったよな？ここで格付けというじゃねえか。」

「・・・そういうのには興味ないのだけど、下に見られるのは癪ね。遠慮なく叩きのめしてあげる。」

「おお、中々熱い返しじゃねえか。ガツカリはさせないでくれよ？」

『それではカウントダウンを開始します。』

試合開始までのカウントが始まり、会話をやめ、相手の初手を探るダリルとベルベツト。カウントが終われば、両者ほぼ同時に銃を取り出し、銃撃戦が行われた。

『0』

ジャキ

ガガガガガガガガガ!

ババババババババババババババ!

凄まじい発砲音が鳴り響き、銃弾は互いの装甲に当たりシールドエネルギーを着実に削っていった。連射数でいえばベルベツトの2丁のサブマシンガンの方が上だが、ダリルは命中率でそれを補い、少しずつだがベルベツトのシールドエネルギーの方が減りが速くなっていった。

「くっ!・・・。」

ガゴン バババシュツ!

「!・・・?なんだ、当たらねえぞ?」

状況を打破するため、ベルベツトはサブマシンガンの弾幕にマイクロミサイルを追加したが、ダリルはそれらが自分を狙ったものではないと早々に見切りをつけた。そして、マイクロミサイルを放ったベルベツトはハルバードを取り出し、ダリルに向かって突撃した。

ギユン!

「なっ!?ヤロー、舐めるな!!」

ガガガガガガガ!

「・・・っ!」

パキキキ ギギギギユガガ!

「っ!?!」

突っ込んでくるベルベツトに対し、ダリルは弾幕を持って迎撃しようとしたが、ベルベツトは一瞬減速し、特殊武装の分子運動制御「ヘル」を使用し、周囲の空気を凍らせ、氷の壁を作り出し、甲高い音を立てて弾幕を防いだ。そのままダリルのもとに直進したベルベツトは、氷の壁越しにハルバードを振り上げ、その氷の壁ごとダリルに叩き込もうとした。

「チツ、当たるk、っ!?しまった!」

ブオン ドガシヤアアアン!

ハルバードの振り下ろしが氷の壁を砕きつつ、ダリルに直撃した。ダリルの左右には先程発射されたマイクロミサイルがまだ残留しており、銃弾で無効化して無理矢理突破するには猶予が無く、上下しか移動できない状況であったため、下への回避でハルバードと氷の壁による攻撃の威力を少しだけ殺したが、それでも大打撃なのは変わらず、体勢を崩して落ちていった。

ガシユガシユン

ボボボボボ!

バシユバシユウ!

「ぐっ!...!ま、マズツ!!」

ボガン、ボゴオンボゴオン!

「ぐっ、うおわあっ!!」

ベルベットは墜落していくダリルに対し、追撃にミサイルと榴弾の弾幕を放ち、ダリルは避けきれないと判断して、被弾時の爆風を利用して距離をとることで被害を最小限に抑えたが、モロに喰らったことには変わりなく、シールドエネルギーが残り2割を切っていた。

「これで決める。」

バシユウバシユウ!

ボボボボボ!

ババババシユウ！

トドメと言わんばかりにミサイル、榴弾、マイクロミサイルの弾幕を展開するベルベット、その弾幕に対し、ダリルは両手に持った銃を投げつけ、前方の弾幕を阻害した。

「い、よつとー！」

ブブン！ ボガアンボガアン！！

「な!?・・・っ！同じ手は——！」

「ハアツ!!」

ギユオツ!!

「!!」

予想外の行動に動揺したベルベットに、ダリルは瞬間加速を行い、一気に距離を詰めた。しかし、弾幕を防がれた時点で、ベルベットは警戒を高めており、近距離に潜り込まれたとはいえ、すでにハルバードを振れるよう構えており、トドメを刺そうとしたが――。

「ふっー！」

ビユオツ ギギイン！

「!?ぐっー！」

「オラオラオラア！」

ビビユン ギイン、ギギャン、ギャアン！

ダリルは瞬間加速する直前に二本の剣を装備していたため、間合いが多少離れていても、ベルベットのハルバードよりも先に剣が届き、それにより怯んだベルベットに連撃を叩き込んだ。もちろんベルベットも黙っておらず、至近距離での射撃武装発射を実行した。

「ぐ、ううつ！まだ!!」

バシユウ！

ボボボ！

ババシユ！

「バレてるぜ！」

ヒユツ

「!くうつ・・・!」

「これでしまいだあ!!」

ビビユオツ ギギャギギャギャアン！

『ヘル・アンド・ヘヴン、シールドエネルギーゼロ。勝者、ダリル・ケイシー。』

影清との試合でゼロ距離射撃を行ったことを見たダリルは、当然攻めつつも警戒し、射撃してきた隙をついてトドメの五連斬を喰らわせ、ベルベットのシールドエネルギーを削り切った。

ベルベットはそのままアリーナの地面にゆっくり落下し、着地した。ダリルもそれを追うように降下していった。

「・・・負けたわ、まさか強引に弾幕を突破してくるなんて・・・。」
「オマエも人のこと言えねえだろうが。いきなり氷が出てきたもんでビックリしたぜ。」

「ホントはあそこで押し切りたかったのだけれどね。今回は貴女の弾幕の対処が上だったわ。次はこうはいかせない。」

「へッ、ならまたその弾幕を打ち破ってやるよ。・・・さて、そろそろ戻るか。アイツらに優勝報告と罰ゲームを言い渡さなきゃならねえからな。」

「罰ゲーム？一体なんの？」

「初戦敗退した罰だよ。相手が相手だったとはいえ、負けは負けだからな、クツクツクツ。」

「・・・災難ね。」

「あ、そうそう、グリフィンも罰ゲーム参加するから、オマエも来ても構わねえぜ。じゃあな！」

「あつ、ちよつと待ちなさつ・・・はあ、一応擁護はしてあげようかしら。」

ダリルがピットに戻った後、予備エネルギーを充填し、ピットに戻ったベルベット。影清への罰ゲームには、仕方ないとはいえ自分が関係していることにより、ちよつとした罪悪感から擁護することを決意した。

27：罰ゲームは程々に・・・、いやマジで（真顔）

「おーい、そこの3人！ちよつと待てよ！」

「この声は・・・？」

「・・・ダリルさんか。」

「あ、ベルベットもいる！おーい！」

学年別トーナメント1年の部決勝戦終了後、観客席から寮へ向かう影清等に、ダリルとベルベットが合流した。

「よお、オマエら！宣言通りに優勝してやったぜ！そんなわけでカゲキヨの罰ゲームだが・・・。」

「ちよつ、ちよつと待て!?!優勝をさらつと流すほど重要なのかソレ!?!」

「そりやそうだろ、オレが優勝するよりオマエが初戦敗退する方が難しいからな！それに、それだけオマエの実力を買ってたのに負けたオマエが悪い。甘んじて受け入れろ、・・・ククツ。」

（こ、コイツホントマジで・・・誰か代わりにしばいてくれ・・・。）

ダリルにより罰ゲームをやらされることになった影清は、これまでの様々な罪状による怒りとダリルが期待していたのを裏切ったという申し訳なさで板挟みにされ、やるせない気持ちになり、上手く反論できなかつた。

そんな影清に、ベルベットが助け船を出した。

「・・・ダリル、トオルの初戦は私だったわけだけど、まさか

代表候補生と当たることも考えて初戦敗退をハードルにしたのかしら？だとしたら流石に無茶振りだと思うわ。罰を与えるなら少しでも緩くするべきじゃない？」

(べ、ベルベットさん・・・！)

「へえ・・・、ま、確かにそんなときはそんなこと考えてなかったからな。だが、緩くするかどうかはその時の気分によるぜ？」

「？」

「どういうことかしら？」

「まあちよつと耳貸せよ。」

ダリルはベルベットに近づき、耳元で罰ゲームの内容について語った。それを聞いたベルベットは目を一瞬見開き、顔を赤く染めてダリルから離れた。

「なつ、あつ、貴女正気!?そ、そんな、ハレンチな・・・。」

「えっ?なつ、何?なんて言ったの?なんでそんな赤くなってるの?」

「ま、簡単に言うのだ。カゲキヨ、オマエ今度の休日に買い物に付き合え、荷物持ちとして扱き使ってやるからよ。」

「?に、荷物持ち?それなら、まあ別にいいけど・・・え、今のどつかおかしいところあった?」

「いや、別になんともないだろ?」

荷物持ちとしてオレ達の水着を見繕ってくれて話で。」

「そ、そうだよ、別になんともない……ってなわけねえだろお!!?なんつったよ今!?!水着?水着を見繕えって!?!お前僕男だぞ、マジで言ってるの!?!」

「いやマジだぞ?別に罰ゲームなんだからこんぐらいのことはしろよ。あと、ウツホとグリフィンとベルベットの分もやってもらおうからな。」

「……マジで言ってるのか。というかそれ3人共許可したの……?」

「あー、そうだな。……ベルベット、お前も水着買いに行こうぜ。今なら荷物持ち兼水着審査員いるからよ。」

「ちよつ、ちよつと!本当にやらせるつもり!?!は、恥じらいとかないの?!」

「いやあるけど、別に恥を気にする相手でもねえしなあ。な、グリフィン?」

「ま、まあ、ちよつと恥ずかしいけど……別にトオル相手だしいいかなって。」

「……はあ、わかったわよ、私も行くわ。」

「ベルベットさん!?!」

「別に私は見せるつもりなんてないわ。寧ろ、貴方が下手をして警察沙汰にならないよう付いていだけよ。」

「よっし、決まりだな！じゃあ9時に門の前集合、外出申請忘れんなよ！」

そういつて、ダリルは先に寮に戻っていった。残られた影清等は、休日の買い物について話し合った。

「・・・あの、ホントに水着姿見なきゃダメ？べ、別に水着だけでもいいんじゃない・・・。」

「ダメ、ちゃんと着ないと似合っているかわからないでしょ。そこは腹を括りなさい、罰ゲームなんだから。」

「うっ、ば、罰ゲームかあ・・・確かに色んな意味で苦行なんだよなあ・・・。」

「・・・その、悪かったわねトオル。あそこでちゃんと抗議してればこんなことには・・・。」

「いや、ベルベットさんは悪くないって、寧ろあの野郎ダリルがあんなこと言
い出さなければ・・・。」

「まあまあ、一応ほら、買い物だから。別にデートとかそんなわけじゃないし、大丈夫でしょ。」

「・・・いや待つて、よく考えたらそれもハードル高い。ただでさえ誰かと一緒に買い物しないのに女子と、それも4人と一緒に買い物って結構緊張するんだけど？」

「・・・ゴメン、もうフォローできないかな・・・まあ、ガンバレ。」

こうして会話してる内に寮に着き、影清等は別れを言って自分の部屋へ戻っていった。・・・まあ無心になればいけるだろ、気張れ。

くおまけく

準々決勝後の二人

「あーダリル！ちよつと聞きたいことあるんだけどさ。」

「ん、なんだ？隠し玉についてか？」

「いや、そういうのじゃなくてトオルへの罰ゲームのこと！何やるつもりなの？教えて教えて？」

「な、なんだカゲキヨから聞いたのか？まあいいぜ、教えてやるよ。ちよつと耳貸せ。」

「ふむふむ・・・えっ!?そつ、それホント？」

「おう、マジだ。・・・なんならオマエもやってもらおうか？」

「えつ、えー、どうしよ・・・まあ別に見させたくないわけじゃないし、罰ゲームだっていうんならね。・・・うん、私も見繕ってもらおうー！」

「よしわかった！・・・そうだな、どうせならウツホも誘っておくか。」

じゃ、オレはこの辺で失礼させてもらうぜ。じゃあな！」

「うん、じゃあまた！ウツホによろしく言っておいてね！」

臨海学校編

28：決めるぜ、（諦める）覚悟！

学年別トーナメント1年の部終了から次の休日、ダリルの提案により水着を買いに行くことになった代表候補生の面々と虚と影清は。集合時間までにはまだ余裕があるが、すでに校門に人影が集まっていた。

「おーい、お待ちせー！・・・ってアレ？もしかして私最後？」

「あ、おはようグリフィンさん。別に最後っていつでもまだ5分前だし、ちよつと出発できるのが早くなつたぐらいだよ。だよね、虚さん？」

「はい、その通りです。おはようございますグリフィンさん。私達もついさつき来たところで、長く待っていたわけではありませんから安心してください。」

「そっか、それならよかつた！いやあ、集合時間間違えちやつたと思つて不安になつたよ！」

「まあ、別に合つてたし、そんなに気にしなくても。あと、あそこにベルベットさんとダリルさんいるから一旦向こう行こう。」

影清の提案により、少し離れたところで話しているダリルとベルベットに合流した3人は、挨拶と軽い会話を終えて今日の予定を確認した。

「ーじや、ざつくり確認すると、水着買った後は飯食って自由行動して解散つてことで。わかつたか？」

(・・・女子同士で水着見繕えばいいって今更気づいたけど、ダリルのことだし、それ言ったら別の罰ゲーム持ち出してきそうで怖いな。)

「トオル、目が死んでいるのだけれど、ホントに大丈夫なの？」

「ベルベットさん・・・いや、別に何でもないよ。諦めも時には肝心だからね。」

「そ、そう・・・まあ、頑張りなさい・・・。」

水着選びは女子同士でも行えることに気づいた影清だが、そこを指摘するともっと酷い展開になることが読めたため、腹を括った。

場所は移り変わってショッピングモールへ、影清等はすでに水着売り場へと来ていた。

「・・・あ、この上着いいな。あとはこれと・・・。」

ガシッ

「よおカゲキヨ、ちよつと付き合え。」

「・・・もう決まったの？」

「おう！ま、2着ぐらいに絞ってやったからありがたく思え。じゃ行くぞ。」

「あ、ダリル！ちよつと待った！私も決まったから一緒にいい？」

「おう、別に構わねえぜ。順番はどうする？同時でも構わなえぜ？」

「いやあ、ダリルが先に誘ったんだし、ダリルが決めていいよ。」

「そうか、なら先に行かせてもらうぜ。じゃカゲキヨ、行くぞ。」

「わ、わかったから腕掴むのはやめてって、歩きづらいし別に逃げないって！」

ダリルは影清の肩に手を回した後、そのまま腕を掴んで試着室に行こうとしたが、そこにグリフィンも混ざり、交代で水着を見せることとなった。

「よくよく考えたら、僕一人で女子の着替えてるところに居たら変質者扱いされたんだろうなあ……。」

「あ、確かに。というかトオル、結構冷静に見えるけど緊張しないの？」

「ああ、なんかもう一周回って落ち着いてるかも。諦めの極地ってやつ？」

ジャラ

「待たせたなカゲキヨ！このオレの水着姿だ、ありがたーく拝ませてやるぜ。」

「あ、はい……っ!？」

バツ

「オイオイどうした？そんな早く目え逸らすことはねえだろ。」

「い、いや、やっぱムリ、直視できない……。」

ダリルが選んだ水着は紫を基調とした三角ビキニとショートパンツで、それを見た影清は顔を赤らめて目を逸らした。ちなみに目線はビキニから覗く巨乳に行っていた。

「……はあ、まあいい。別に見なかったわけじゃねえだろ、感想はどうだ？」

「え、あ、いや、その……いい、良いんじゃないかな？似合ってるし……。」

「……あ、なるほど、さてはオマエ、こっちの方が良かったか？」

ピラッ

「え、な、何……って、まっ、待った待った！わざわざ見せなくていいって！」

ダリルは自分がもう一つ選んでいたビキニの下を手にはぶら下げ、それを見た影清はまた顔を赤くしてテンパった。

「じゃ選べ、今履いてる方か履いてない方かだ。」

「は、履いてる方で！履いてる方をお願いします!!」

「……よし決めた、両方買うか。」

「へっ？……あ、あの、選ばせた意味あった？」

「別になくはないぜ、オマエの反応を楽しむためとはいえな。じゃあグリフィン、待たせたな、すぐ着替えるから試着する準備しとけ。」

「あ、わかった。じゃタオル、期待しててね？」

「・・・わかった。」

（これあと2回もあるのかあ・・・最後まで耐え切れる自信がない・・・）

ダリルが水着から着替えた後、水着を試着する準備を終えたグリフィンは、変わるように試着室に入り、水着に着替えた。

「お待たせ！さ、タオル、どうかなコレ？似合ってる？」

「え、えつと・・・あ、めちやくちや似合ってる！良いと思うよ！」

グリフィンの着ている水着は、白がベースのタンクトップ・ビキニと呼ばれるもので、胸とかそこら辺隠れていたため、影清はちゃんと直視することができた。

（わ、割と隠れてて良かった・・・！アレは、ダリルさんが見せすぎただけか、これなら虚さんまで待つかももしれない！まあ、恥ずかしいことに変わりはないんだけど。）

「えへへ、ありがと♪どちらかといえば動き易さで選んだんだけど、別に変じやなさそうだね。じゃあこれにしようか！あ、まだ見たい？もう着替えようと思ったんだけど。」

「い、いや大丈夫です！別にグリフィンさんの好きにしてもらっても・・・。」

「・・・そっか、じゃ、着替えるね。・・・さっきも言ったけど、覗いたらダメだよ?」

「大丈夫、絶っつつ対に覗かないから、安心して着替えていいよ。」

グリフィンが着替え終わるのを隣にいるダリルと一緒に待つ影清。少し経ってグリフィンが試着室から出てくると同時に、虚とベルベツトが影清等と合流した。

「あ、道さん、それにダリルさんも。・・・もしかして、もう水着をお決めにされたのですか?」

「虚さん!それにベルベツトさんも。まあ、決めたというより決めさせられたというか・・・あと、グリフィンさんの水着も見たよ、だから後は虚さんだけだけど・・・。」

「ん、何言ってるんだ?ベルベツトもやるに決まってるだろ。」

「え?・・・あの、ベルベツトさん、水着自分で選ぶのでは?」

「最初はそのつもりだったのだけれどね・・・詳しくは言わないけど、私も貴方の意見を聞くことにしたわ。」

「・・・そっか、わかった。」

(終わったかも。)

こうして、ベルベツトも水着を見せることになり、影清は試着室の前でベルベツトが水着に着替えるのを他3人と一緒に待つこととなった。

「あ、あの、道さん。もし無理なようでしたら、私の水着は見なくても良いのですが……。」

「大丈夫だつてウツホ、別に死ぬわけじゃねえんだからよ。流石に無理は押し付けねえよ。」

「……まあ、最後まで頑張ってみるよ。逆に考えれば2人の水着を見てもまだ耐え切れてるんだ、あと2回どうってこと……。」

シヤアア

「……着替えたわよ。評価するなら早く終わらせて欲しいのだけど。」

「あ、はい！……あつ、えっと、その……す、凄く……似合ってます……。」

サツ

ベルベットの水着は、紺色ベースのハイネックビキニというタイプのもので、下には黒のロングパレオを身につけているため、露出度でいえばダリル以下グリフィン以上といったところだが、影清的にはギリアウトだったらしく、ダリルの時ほど勢いは無いが、目を逸らした。

「……顔を逸らしながら言う必要はあったのかしら？まあ、悪くはないというのはわかったわ。」

「……ウツホ、待たせたわね、順番譲ってくれてありがとう。」

「い、いえ、お気になさらず。……では、道さん、一応控えめのものを選んだつもりなので、安心して見てください。」

「あ、ありがとう虚さん。でも、そうじゃないんだ。そもそも女子の水

着姿を見るのがダメなんだって。まあ今更なだけでござ。」

ベルベットが着替え終わり、試着室へと入っていった虚。影清は、虚の水着姿を見る直前まで、できるだけ無心になって煩惱を抑えようと試みていた。そして、試着室のカーテンが開かれ―。

「道さん、ど、どうですかコレ？似合って、いますかね？」

(あ、尊―。)

タラ

虚が選んだのはワンピースタイプの薄茶色の水着で、前3人とは違った魅力と恥じらいがあったため、影清の煩惱は抑えきれず、ついに鼻血が出てしまった。

「と、道さん!?鼻血出てますよ!?!早く止めないと!」

「い、いや大丈夫虚さん、こんなこともあろうかと四つ程鼻栓用意してたから、んっ……ふう、いやあ途中までは覚悟してたけど、最後の最後に鼻血出すとは思わなかった。全然似合ってるよ虚さん、じゃなきやこんな反応しないし。」

「あ、ありがとうございます、じゃあ、これ買いますね。お疲れ様でした道さん。」

「あ、うん……できれば、二度とやりたくないな……。」

「オイオイ、折角水着見せてやったのに?ま、次やるかやらないかはオマエ次第だな、少なくともオレはそうする。」

「・・・ああ、そういうこと、慣れるしかないのか。」

無事に(?)水着選びを終えた影清は、ダリルの言い回しを察し、半分ヤケになった。そして、グリフィンからこんな一言が放たれる。

「ところで、トオルは水着決めたの?」

「二!」

「え?ああ、一応ダリルさんに連れてかれる前に決めてたけど・・・待って、何この空気?まさかとは思うけど、そういうこと?」

「そういうことだカゲキヨ、さつさと入って着替えろ、じゃなければオレが脱がす。」

「わ、わかった、わかったから!・・・大丈夫だよねコレ?」

自分の選んだ水着を確認しながら試着室へと入っていった影清。さつさと終わらせるため、直ぐに着替えてその姿を見せた。

「ど、どうかな?悪くは無と思うんだけど・・・。」

「おお、結構似合ってるじゃん!私は嫌いじゃないよ!」

「別にそこまで変じゃないしな、いいんじゃないの?」

「私も良いと思いますよ。色合いもかなり合ってますし。」

「・・・一つ良いかしら?」

「な、何?ベルベットさん。」

「貴方、マフラーは付けたままなの？」

現在の影清の格好は、黒に黄色いラインが入ったジャケットとサーフパンツに、いつも着用している赤マフラーを付けたものだった。

「いや、コレないと落ち着かないっていうか・・・まあ、一応水に強いタイプだし別にいいかなって。」

「・・・そう、ならこれ以上は聞かないでおくわ、誰にでもそういうのはあるでしょうし。」

「あ、ああ、ありがとう・・・。」

(いや、あんまり深い意味は無いんだけどね・・・。)

そんなこんなで水着を選び終えた影清等は、会計を終え、次に行く場所について話しながら水着売り場を後にした。ちなみに買った水着は袋に入れて影清が持っている、罰ゲームだからね。

29：その場凌ぎは後が怖い

「……ダリルさん、そこどいてくれ、頼む。」

「私からもお願い。ここまで来て引き下がるなんて……！」

「ダメに決まってんだろ、それに付き合うオレらの身が持たねえ。」

「……私もダリルと同意見よ。今日ばかりは貴方達に無茶をさせるわけにはいかないわ。」

「ベルベットまで……でもごめん、これだけはどうしても譲れないんだ。」

「……あの、道さん、グリフィンさん。今日はお辞めになって、また日を改めては……？」

「虚さん……次が、いつ来るかもわからないの？もしここで逃したら、僕はきつと後悔する。」

「トオルの言う通りだよ、今挑まなきゃ次はない。なら私達のやることは一つ!!」

「ああ！ごめん皆、そういうわけだから行かせてくれ！」

「ゆず風味釜玉うどん超特盛完食チャレンジに!!!」

……ほんの少し前まで遡ろう、何を食べようかと会話が弾んでいたところに、あるポスターが影清とグリフィンの目に入った。それこそが、「ゆず風味釜玉うどん超特盛完食チャレンジ」の告知ポスターで

ある。ベタではあるが、制限時間内に食べ終えたら無料というものであり、何かしらのクリア特典もあると記されている。

まあ、要するに・・・あの二人はそれに挑戦しようとしたところをダリル、ベルベット、虚に止められている状況だ。

「いやいやダメだつつつてんだろ。大体よ、あんなに食ってどうするつもりだよオマエら、何に對しての腹ごしらえだよ。」

「愚問だよ、ダリルさん。そこに挑める壁があるからだ!!」

「体重とか、気にしないのね・・・。」

「うっ!・・・だ、大丈夫、運動すればプラマイゼロに・・・。」

「道さん・・・」

仮に完食したとして、その後荷物をお運びになることはできますか?」

「うぐうおお!?!」

「トオル!?!」

「ご、ごめん、グリフィンさん・・・。僕は、もう・・・ダメだ・・・。」

「諦めないでよ!折角の、折角のチャンスなんでしょ!なら・・・!」

「さ・・・先を見据えるのも・・・大事・・・だから、僕には・・・挑める資格すら・・・無かった。」

「よし茶番はそこまでだ、さつさと飯食いに行くぞ。」

ベルベットのジャブと虚の一発KOにより、大食いチャレンジを諦めた影清とグリフィン。結局、昼飯は釜玉うどんにし、あの二人は意地悪く大盛頼んだ。

「・・・挑みたかった。」

「まだ言ってるのかテメエ。そんなにやりてえならまた別の探しゃいいじゃねえか。」

「・・・そりや、そうだけどさあ。外出許可取るの結構複雑なんだよ、僕、無国籍だから。」

実は影清、無国籍なため、何処に行くにしても外国に行くのと変わらなくなってしまうのである。

何故影清が日本国籍ではないのかというと、ご存知だと思うが彼は「世界に一人しか居ない男性IS操縦者」であり、日本国籍という名目で日本だけが影清のデータを一部独占するのではないかと、各国から睨まれたため、何処の国の者でも無くすことによつてすべての国が平等にデータを取得できるという状況にしたのだ。

・・・というのは表向きで、殆どの国が腹の中で、フリーにさえすれば自分の国に楽に引き込める、と思つていたりする。ま、それに対する責めでもの抵抗ということで、日本側から専用ISが支給されるわけだが。

「あー、そりやそうか。IS学園の周りでさえ海外旅行扱いになつちまうんだつたな、確か。だからといって好きにさせる理由にはならないけどな。」

「うん、もうわかつてるから・・・それで、次どうすんの？」

「そうだな・・・、！よし、二組に別れて行動するってのはどうだ！」

「え？・・・いや、別にいいんだけども、どう分けんの？」

「へッ、ちよーつと待ってろ。ええと確か・・・お、あつた！」

二組の行動班を作るため、バッグの中を漁り、ダリルが取り出したのはー。

「え、何それ？」

「くじ。」

「くじ、か。・・・なんで？」

「そりゃオマエ、こうした方が恨みっこなしだろ。」

「いや、そういうことじゃなくて、なんで用意してたのか・・・。まあいいや、おーい！」

少し離れていた3人を呼び止め、くじ引きで別々に行動するペアを作ることを説明した影清。印が付いているか否かで2、3人に分けることとなるのだが、果たして結果は？

「ーんじゃ1時間後ここのベンチ集合ってことで、じゃあな！」

「わかったー、・・・あ、よろしくお願いします・・・。」

「ええ・・・。」

(ど、どうしたらいいんだ・・・。)

くじの結果、ダリルとグリフィンと虚が三連続で印付きのくじを引いたことにより、残ったくじが印無ししかなくなってしまったことで、影清とベルベットのペアができた。しかし、この5人の中で最も交流が少ない人物とのペアなので、今さっきの会話以来、お互い無言だった。

影清はこの状況を打開すべく、ある行動に踏み切った。

「べ、ベルベットさん！何か、趣味ありますか？」

合コンか

「趣味・・・、読書、とかかしら？」

「あ、そうなんですか！だったら、本屋行きませんか？僕も、幾つか買いたい本あるので。」

「ええ、構わないわ。」

影清の提案により、本屋に向かった二人。お互い別々に分かれ、本の散策が始めてから十数分経った。

(つと、これと後・・・え、新刊ある!?!ちよつと入荷早いのかココ?じやあこれもー。)

「トオル。」

「!あ、ベルベットさんか。もう本選び終わったの?」

「まあ、そんなところね。・・・一つ、貴方に聞きたいことを思い出し

たの。」

「え？な、何を？」

「貴方、何のためにI Sを学んでいるの？」

「え、そ、そりゃあー。」

「言っておくけど、男性操縦者だからだとか政府からの依頼だとかというのとは抜きで教えてちょうだい。もし本当にそれだけなら、あれだけ意欲があるのは不自然なもの。」

「――。」

(・・・ど、どうしよう。いずれ来る敵組織に対抗するため、つて言っても信じて・・・いやちよつとはありえるけど、だったら何故知っているのかってことになるし・・・。)

影清が今の今までI Sの特訓に励んでいた理由は、原作主人公がいないという致命的な戦力の欠けを少しでも埋めるため、といったものだが、それ以外のことはちよつとした男のロマンぐらいしかないのだ。しかし、影清の性格上では、的外れ過ぎる嘘を言えない、というか考えつかないため、ベルベットの問いに対する回答が出せない状況となっていた。そこで、影清は敵組織に対抗する⇨対抗して味方を守る⇨誰かを助ける、というものを用いて半分嘘を言うことにした。

「・・・誰かを助けられるから？」

「・・・は？」

「いや、I Sつてき、なんかこう、装着している側はある程度の安全が

有って、しかも空も飛べるからさ。デカさを除けば、災害救助だとかにも使えるんじゃないかなって。まあでも、ISがそんなふうに扱われるのも大分先の話になると思うけどね。」

「―貴方、それ本気で言ってる?。」

「あ、ゴメン。半分ほど、かな。まだ本気、って言えるほどの回答なんて無いからさ。今は、これで勘弁して欲しいかな。」

「・・・そう、なら一つ約束してくれるかしら?。」

「え?。」

「いつか貴方がISに乗る理由を見つけたなら、その時に改めて今の質問に答えなさい。いいわね?。」

「―うん、わかった。なら、早いところ見つけないとね。あんまり待たせたくないし。」

「別に見つからなかったならそれでもいいわ。こういうのは人それぞれだもの。・・・そろそろ、会計に行きましょう。」

ベルベットとの約束を交わした影清は、ベルベットと共に本を購入し、本屋を後にした。そして、そこからしばらくしてダリル達との合流時間となり、集合場所のベンチへ向かった。

「・・・あの、ダリルさん?この荷物は・・・。」

「ん?ああ、ちょっと色々買ってたからな。ま、持ち帰りの心配はしてねえから安心しろ、荷物持ち。」

(うん、やっぱコイツ外道だわ。)

そんなこんなで今回はお開きとなり、帰路に着く影清等。影清の両手には、紙袋計6個がぶら下がっていた。

くおまけく

グリフィン待ちの頃の二人

「ベルベット、オマエホントに水着見せないのか？」

「しつこいわね、何度も言ったでしょう？私は見せるつもりなんてない。」

「へー、そうかい。どこまでがアウトかもわからないのか？」

「・・・どういふことかしら？」

「オマエがコレはセーフと知っているものでも、男からしたら完全にアウトだってこともありえなくはないだろう？そういうのも今回でしっかり見定めるべきだと思うんだが・・・。まあ見せたくねえなら仕方ねえか。」

「・・・はあ、わかったわ。自分のものさしだけでは図れないこともあるわ。大人しく見せればいいのでしょう。」

「おう、そういうこった。クク、アイツの慌てる様が目に浮かぶぜ。」

「・・・厄介なのに目をつけられたわね、お互い。」

30：目隠しすると大体心眼とか使う

「あ……海か……。」

目を覚ました影清は、バスの窓から見える海を見て小さく呟いた。今日から二泊三日の臨海学校が行われ、現在、影清含む1組は、クラスごとに割り振られたバスに乗って移動している最中である。窓からは海が見え、周りのざわつきも一段と大きくなっている。

「あ、道さん、おはようございます。サービスエリアからずっと寝ていましたね。」

「……おはよ、虚さん。……あ、まだブーツとしてる。」

「お、やっと起きたか。つたく、弄れるやつがいなくなって退屈だったぜ。」

「ああそう……水……。」

「……コイツ脱力してるとホントマイペースだな。」

それからもうしばらくして、バスが旅館に着き、各自荷物を下ろして女将さんに挨拶した。

「はい皆さん、こちらの方が今日泊めてくださる花月荘の女将さん、清洲きよす 景子けいこさんです！三日間よろしくお願いします。」

『よろしくお願いしますー！』

「はい、皆さん、遠路遙々ようこそいらっしゃいました。ご紹介に預かった清洲 景子です。皆さんが快適に泊まれるように、力を尽くし

ますので、どうかごゆっくりしていつてください。」

挨拶を終え、生徒等は自分に割り振られた部屋に荷物を置きに行ったが、影清の部屋だけ記載が無かったのだ。

(・・・あ、あれ？どっかで見落としたかな・・・?)

「あ、影清君！ちよつと来てくれますか？影清君の部屋についてなんですけど・・・。」

「は、はい！」

山田先生は、影清を呼び止めてそのままついて来させ、教員に割り振られた部屋の近くで止まった。

「影清君の部屋は、教員部屋の隣にしました。年頃の女子と同じ部屋に居るのはダメですから、私達の目が届きやすいところが良いと思っただんですけど、問題ありませんか？」

「い、いえ、全然問題無いです！」

「何かあったら、先生か女将さんに報告してくださいね。では道君、臨海学校楽しんでくださいいね！」

「はい！ありがとうございます！」

山田先生と別れ、荷物を自室に置いて水着に着替えた影清は、海へと向かって行った。海はもうすでにIS学園生でいっぱいとなっており、影清はできるだけ視界に入れないようにした。

(ダメだ、やっぱり女子の水着姿には慣れない・・・！)

「トオル？そんなところで何をしているのかしら？」

「……ベルベットさんか。いや、今来たばかりなんだけど……。」

水着姿を直視できず、あまり人気のないところで立ち往生してた影清にベルベットが話しかけた。今のベルベットの格好は、先日購入したハイネックビキニとパレオに、麦わら帽子を被ったものとなっている。

「そう、なにやらオロオロしてたから、マズイことでもあったのかと思っただわ。」

「別にそんなことは……って、ベルベットさん、麦わら帽子はともかくメガネは付けたままなの？」

「……これは待機形態よ、専用機の。」

「え、あつ、そうなの!?いや、てつきりただのメガネかと……。」

ベルベットが普段着用しているメガネは仮の姿で、その正体はベルベットの専用IS『ヘル・アンド・ヘヴン』である。なぜメガネになっているのかを説明する前に、まず、ISのある機能について解説させてもらおう。

ISのコアには「自己進化」というAIのような学習機能があり、経験の蓄積によって性能や装甲の形状を変える「フォームソフト形態変化」というものを行う。これにより、ISはより操縦者にあつた機体へと変化していくのだが、量産型のISはこの機能をロックされている。勝手に姿形が変われば、他の人の操縦に影響が出る可能性があるからだ。

そのため、「形態変化」の恩恵を受けれるのは原則専用機だけということになる。……細かいことは少し省いて結論をいうと、この「形

「状態変化」により「ファーストソフト二次移行」が行われた結果、操縦者の持ち運びやすい形態に変わるのだ。ベルベットの場合はそれがメガネだったわけだ。

ちなみに「セカンドソフト二次移行」とかいう、パワーアップ形態もある。

「別に視力が悪いわけじゃないわ。ただ、ネットとかで調べ物をするときは良くメガネを着用してたから、その影響かもしれないわね。」

「そ、そうなんだ……。」

（なんか、理由が庶民的というか……そんなものなのか？）

実際四六時中持ち運ぶことになるため、日用品とかアクセサリーとかの方が良いことに変わりはない。

「ところでトオル、貴方これからどうするの？」

「え？ああ、そりゃ勿論泳ぎに行くよ。その後は砂浜でゆっくりしようとは思ってるけど。」

「そう、じゃあ、私はもう行かせてもらうわ。クラスの子との用事もあるから。」

「わかった、じゃあねベルベットさん。」

「ええ、また。」

ベルベットに別れを告げた影清は、海辺へと向かい、海水浴を楽しんでいたが、しばらくすると――

「トールー！ー！」

バシヤアーン!

「ぶえうわあ!?っ!ペツペツ!・・・な、何すんだ!?!」

「いやーゴメンゴメン。つい、ね?」

「つい、じゃないって・・・、次は勘弁してよ。」

海に足が浸かったタイミングでタンキニ姿のグリフィンが接近し、バケツいっぱい海水を影清の頭からぶちまけた。海水が目や口に入った影清は、誰がやったかのか見えない状況だったが、声でグリフィンだと判断した。

「わかったわかった。それよりトオル、今からスイカ割りするんだけど、トオルもやる?」

「・・・やる。」

「よしわかった!おーい、一人追加でー!」

グリフィンからスイカ割りの誘いを受けた影清は、少し不機嫌そうに返事し、海から上がった。順番はジャンケンで決め、見事ビリとなった影清がトツプバターとなった。

「それ、グルグルグル♪」

「ちよっ、回しすぎだっつて、目が、目が回る!」

「大丈夫大丈夫。こんぐらいやらないとスイカの位置わかつちやうからね。じゃ、頑張っつてね。」

「・・・うーし、やるか。」

「よーい、スタート！」

(・・・とりあえず前進むか。)

「あ、右！右に回って！」「いやちよつとだけ斜め向いてー！」「大股3歩！・・・ああ、行き過ぎ行き過ぎ！」

(動くたびに指示飛んでくるから何がなんやら。意外と難しいなコレ。)

4組の面々からの指示に困惑しながらも従う影清。的外れではないため、スイカとの距離は縮まってはいた。

「ストップ、ちよつと右側に！・・・そうそこ！そこにある！」

(・・・ほんとか？まあ振るけど。)

「ふう・・・セエヤ！」

ビュン　ヂツ！

「ん？当たった？」

影清が振り下ろした棒はスイカには命中したものの、少し右にずれ過ぎていたため、皮を削るだけにとどまった。

「ああ、惜しい！かすただけか・・・！」「まあ、最初はそんなものだって。」「・・・ねえ、スイカ、挟れてない？」

「お疲れ、トオル！」

「ありがとうグリフィンさん。つと、次って誰だったっけ？」

「ああ、次はー。」

その後、何人が失敗したが、グリフィンが見事スイカを割り、ある程度分けておいしくいただいた。

「じゃあトオル、またね！」

「ああ、じゃあまた。」

（思ったより時間潰せたな。ちよつと休むか。）

グリフィンと4組の面々と別れた影清は、海辺から少し離れたところで自前のシートを広げ、そこに寝っ転がった。そして、その様子を見つめる人影があったのだが、眠りに落ちてしまった影清には、知るよしもなかった。

31：予想が空回ると大体参事になる

海で遊び疲れた影清は、砂浜にて休息している内に眠りにつき、それから数十分経過した頃に目を覚ました。

「ん……ああ、寝てたか……、？」

(……動けない……いやでも気怠くな……)

身体を起こそうとした影清だが、何故か起き上がることが出来ず、その異常事態に意識がある程度ハッキリし、自分の置かれている状況を把握した。

「………ダリルさん、いる？」

「あ、バレた。」

影清の足元の方からダリルの声が聞こえ、影清はどうか首を動かして、ダリルの姿を捉えようとした。まあ、ダリルの方から近づいて来ているので徒労に終わったが。ちなみにダリルの格好はビキニとショートパンツで、肩にスィムタオルを掛けていた。

「バレたというか、こうゆうことするのグリフィンさん以外だとダリルさんしかいないし……しかもなんかコレ硬いしね!」

「そりゃ海水で固めたからな！形崩さないように苦労したんだぜ？」

「だよね!?全っ然動けないもん!?グリフィンさんだったら絶対ここまでしない！多分!」

影清が眠りについたので目撃したダリルは、完全に寝入っているの

を確認し、影清の身体を砂で埋めたのだ、ご丁寧に海水で固めて。

「そうそう、たこ焼き買ってきたんだ。腹減ってるよな、カゲキヨ？食わせてやるよ。」

(うわあ、いい笑顔。)

影清の足元から頭の方に移動したダリルは、たこ焼きを片手にいやらしい笑みを浮かべて、影清を見下ろした。そして、つまようじをたこ焼きに突き刺し、影清の顔前に差し出した。

「ホレ、あーん、ってヤツだ。とつとと口開けろ。」

「・・・あーん。」

「よっ。」

「ムオグツ!!」

ダリルは影清に口を開けさせ、たこ焼きを躊躇なく放り込んだ。アツアツのたこ焼きを口に入れた影清は少々悶えたがー。

「ハ、ハグツ！ツヒユ、フー！フー・・・ングング。」

「は？ちよつと待て、なんかこう・・・リアクション薄くねえか？最悪吐き出すぐらいのことはすると思ったんだが・・・。」

「ふあへんふあほへえ。ほーひゅうふおひうおふあいふあふうらいひっへえるっふえの。(訳：舐めんなオメエ。こうゆうときの対策ぐらい知ってるっての。)」

「いや食ってから喋れよ、待ってっから。」

影清のリアクションが、はるかに想像以下だったため困惑したダリル。

普通、たこ焼きを口にそのまま放り込めば、あまりの熱さにそのまま口の中に入れることはできず、最悪吐き出してしまいが、影清はたこ焼きを口に入れたあと、即座に歯でたこ焼きの皮を破り、熱を逃すことによつて被害を最小限に抑えた。一応、この工程は普通に口に入れ続けるよりも熱はあるのだが、影清は長く続く熱さよりも一瞬の熱さをとつた。

この後、山田先生がこの光景を発見したことにより、影清は救出され、ダリルは叱られた。ちなみにたこ焼きは全部平らげた。

「―つてのが、今日特に濃い出来事だったかな。」

「そ、そうなんですか……。それは、災難でしたね。」

「なんかもう、慣れたかな。……いや慣れちゃダメなんだよな、ハハッ。」

旅館に戻る時刻が迫るなか、メガネを外したワンピース水着姿の虚とたまたま出会った影清は、今日の出来事を教え合っていたが、思い出していく内に色々哀しくなってきた影清は、乾いた笑いをこぼした。

「あの、本当にイヤでしたら、はつきりとおっしゃった方が良いのでは？二人共、流石にそこまでではないと思いますよっ。」

「……いや、いいよ。別に悪意100%でやってるわけでもないだろうし、そこまでイヤってわけでもないからね。」

・・・こうはいつてるものの、影清が嫌とハッキリ言わない理由は他にもある。女尊男卑の風潮がソレだ。

馬鹿げた話だが、女性に対して反抗したりすると、それで警察を呼ばれ、ある事ない事でつち上げられてしまい、逮捕されてしまうのだ。しかも、その反抗した時の物言いや姿を僅かな証拠として使ってくるため、尚更タチが悪い。

もちろん、ダリルやグリフィンが、そのようなことをする人間ではないのはわかると思うが、影清は基本保身に走るため、相手が女性であれば突つかかるような真似はしないのだ。

「道さん・・・、

も、もしかして、マゾヒストにー。」

「違うからね？」

旅館に戻り、水着のまま身体を軽く洗った影清は、旅館側から用意された着物に着替え、適当に時間を潰して夕食に向かった。

「モグモグ・・・ゴクツゴクツ、はあっ。」

「え、もう半分ぐらいいったのか？ホンツトよく食うなオマエ。」

「い、いやあ、どれも美味しいからさ・・・。」

「そうですね、どれも味付けがしっかりされています。私も、見習いたいですね。」

旅館から出された優勝を食べる影清等、ちなみに影清の座っている場所は一番端の方で、その正面と隣にダリルと虚が座っている。

「あれ、その言い方だと、虚さん、料理するんだ。」

「は、はい。一応、嗜み程度には、．．．といっても、主に茶とそれに合う菓子ぐらいですが。」

「そうなんだ。．．．あ、てことは、あの時．．．ノックせずに部屋に入った日に出してくれたのって．．．」

「はい、私の自作です。．．．あの時は、ちょうど紅茶の淹れ方の研究をしていたので、すぐに用意できましたからね。」

「．．．ああ、あの時か。オレがあちこち行ってる間にそんなもの飲んでたのかこのヤロー。」

「いや．．．悪かったって。まさか僕の部屋まで探しに行ったとは．．．」

「いやー、まだ許せてないからなー。．．．というわけで、ホイっと。」

「ちよつ、ダリルさん!?それは．．．!」

「さつきからこの刺身だけ醤油に浸かったままだったからな。オマエのことだ、こうゆうのも美味かったりするんだろ?コレでチャラにしてやるよ。」

パクッ

影清が刺身に手をつけてから、一枚だけ醤油皿に浸してマグ口漬けにしていたのを奪いとったダリルは、そのまま口に入れたがー。

「むぐ、んっ?!~~~~ツ!!?」

「だ、ダリルさん!」

「ああ、楽しみにしてたのに・・・、

マグロのワサビ漬け。」

グルメな影清が、ただのマグロ漬けで済ませるハズもなく、マグロを醤油に浸しつつ、ワサビを練り込んでいたのだ。そのため、パツと見でワサビを確認することが難しく、ワサビに気づかなかつたダリルは、一枚丸ごと口に入れて、見事に悶絶した。

：一応、影清の「ダリルを痛い目に合わせる」という願いは叶ったのだが、本人はそれよりも、楽しみにしていたマグロ漬けを盗られたことにショックを受けていた。プラスかマイナスかでいったら、多分マイナスの方が大きい。

この後、ダリルは水で一気に流し込んで咳き込んだ。一応お互い様(?)であるため、暴力沙汰には発展しなかった。それから暫くして、夕食を平らげた影清等は各々自室に戻っていった。

32：夜は背中に・・・

「・・・あつつう。」

(部屋着いたら、エアコンつけてさっさと寝るかな・・・)

夕食後、一旦自室に立ち寄ってから、旅館備え付けの温泉に入った影清だが、割とのぼせ易い体質のため、10分も経たずに上がって温泉を後にし、自室へと向かった。

ガチャ

「えーと、リモコンは、っと。」

パシッ ピッ

「温度は・・・このままでいいか。」

(・・・にしても、いい時代になったなあ。)

影清は、部屋に着くなりリモコンでエアコンを作動させた。このエアコンは、旅館の殆どの部屋に設置されており、仮に全部稼働させたら電気代がとんでもないことになるが、その心配はない。別に、旅館側が金持ちなわけではなく、エアコンの性能が良すぎるのだ。

10年前、白騎士事件の後に、人類はISの技術を得て、それら様々な技術に応用し始めたことにより、エアコン等の家電もその恩恵を受けたのだ。具体的に言うとサイズとかエネルギー変換の負荷軽減とかである。

「あー涼しい、夏はコレないとやってられないって。」

ガチャ

「!?」

「オーツス、邪魔するぜカゲキヨ。」

「だ、ダリルさん!?何か用……ってか、なんで場所わかったの!？」

「そりゃ尾行したからな。オマエの部屋だけ見つからないもんで、風呂場から出たところを、な。」

影清が涼んでいるところに、ノックも無しにダリルが部屋に入ってきた。影清の部屋の位置は、山田先生が影清に直接教える形となったため、何処にも記載されていないのだが、ダリルは影清を尾行することによって、影清の部屋を特定した。

「び、尾行って……全然気づかなかった……。」

「気づくように尾行するわけねえだろ。ま、安心しろ。別に言いふらしたりなんかしねえよ。」

「……仮に言いふらしても、先生隣にいるからね？」

「ハハツ、確かにな。あ、ジュース貰うぜ。」

「どーぞどーぞ、じゃあ僕もと。」

会話をしながら部屋の冷蔵庫を漁ってジュースを取り出すダリル。影清もそれに釣られてジュースを取り出した。

「それで、何か用でも?ただ部屋に来ただけじゃないでしょ。」

「いや？特にないぜ。別に入らなくてもよかつたんだが、オマエの驚く様を拜もうと思つてな。．．．ところでオマエ、ここ一人部屋なのか？」

「逆に誰と一緒になれと？僕以外全員女子だよ？」

「それもそうか。．．．なら、オレがこの部屋に来てやろうか？」

「先生呼ぶよ？」

「ハッ、冗談に決まつてんだろ。．んじゃ、そろそろ行くわ。ジュースありがとな。」

「ああ、おやすみダリルさん。」

「おう、おやすみだ。」

ダリルが部屋から出るのを見届けた影清は、布団を用意して、そのまま電気を消して眠りについた。．．．そーいやコイツ今日で3回も寝たことになるな。

333：急にベクトル変更しないで

臨海学校二日目、IS学園の生徒等は、ISスーツを着用して砂浜に整列していた。

「はい、皆さん集まっていますようですね！それでは、ISのパッケージについての実習を始めます！各自グループに分かれてください！」

山田先生の号令により、あらかじめ決められていたグループを作る生徒達。なお、専用機持ちは別件があるため、グループとは別に集まっている。

ここで、今日の実習内容である「パッケージ」について説明させて頂こう。パッケージとは、ISの換装装備、又は追加装備を指しており、状況に応じたカスタムを可能とするものである。

例として、量産機・打鉄には、初期武装として刀剣とアサルトライフルの二種が搭載されている。だが、これだけでは打鉄の「拡張領域」と呼ばれる、武装を量子化して収納するための容量には、まだ余裕がある。

そこで、影清がトーナメントでやったように、蛇腹剣や盾等を追加して、多様性を持たせるのが一般的のだが、今回の授業で扱うパッケージというものは、使用用途が明確なものを指す。前者と後者で何が違うのかというと、前者は武装を増やすことであらゆる局面に対応しようとしていたが、後者は特定の局面で活躍できるように装備やその作りを厳選されたものである。

・・・もう少しわかりやすい例を出そう。遠くの標的を狙い撃つことを目標としたとき、前者なら狙撃銃一丁を追加するだけだが、後者は確実に狙い撃てるように銃身の固定、ブレの減少、標的をロックオンするためのシステム等、狙撃成功率を上げるためのユニット一式を詰め込むのだ。

簡潔に纏めると、ある物事に特化した装備セットである。ちなみにここ、IS学園の期末テストに出ます。

「あ、影清くん！こっちこっちー！」

「はーい！今行きます！」

自分が集まるグループの生徒に呼ばれた影清は、駆け足でその生徒等の元へ向かった。すでにグループの殆どが集まっており、先に少しでも実習準備を進めようとした矢先、山田先生がこちらに近づいて来た。

「あ、Bグループの皆さん！その、影清君は今日予定が変わって、別行動することになってしまいました！」

「え？！」

「申し訳ありませんが、一人欠けた状態で実習を続けて欲しいのですが・・・あ、先生で良ければ手伝いますよ？」

「いえいえ、大丈夫ですよ、やまや先生！影清君にも何か事情があるみたいですし、仕方ありませんよ。」

「そうそう、やまやセンサーがこっち手伝っちゃったら、影清君の用事とかにも支障出るかも知れませんが、わからないところあったら他のグループか先生にでも聞きますって！」

「み、皆さん、ありがとうございます！あと、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと・・・。」

「じゃあ、やまピーセンサーとかどうですか！」

「いやいや、マヤヤ先生とかは？」

「も、もう！ダメですよ！ちゃんと名前で呼んでください！」

「あ、あの、山田先生。そろそろ急いだ方が良いのでは……。」

「あ！そ、そうでした！では皆さん、実習頑張ってくださいね！」

「あー、その、ごめんなさい皆さん！迷惑かけちゃって……。」

「大丈夫大丈夫！今度スイーツ奢ってくれるだけでいいから！」

「……わ、わかった、じゃあそれで埋め合わせるってことで。」

共に実習をするはずだったグループのメンバーに別れを告げ、山田先生について行く影清。生徒等から離れたところで、山田先生が話を切り出した。

「ごめんなさい影清君！折角の実習なのに……実は、倉持技研から試験武装が届いていて……。」

「!!し、試験武装、ですか？」

「はい、影清君の専用機に搭載される予定の武装なのですが、少し特殊な武装なので、本人の意見も取り入れたいということ……。」

山田先生が、影清の実習を中断させてまで呼び出したのは、倉持技研から運ばれた試験武装のテストをするためであった。しかし、何故生徒等から離れる必要があったのかというと、理由は二つ。

一つは、安全性のため。今回送られてきた武装は、試験段階であり、たった一つの手違いで暴発してしまう危険性もないとは言えないため、周りに被害を出さないためのせめてもの処置である。

もう一つは、専用機についてだ。影清が専用機を受諾することは、広く知れ渡っているが、それに良い顔をする者は多くない。そもそも、専用機というものは、代表候補生でも一握りの実力者に授与されることが多く、ISに触って数ヶ月ぐらいの素人、つまり、影清が専用機を得ることに不満を抱く者が出てくるのは当然といえる。これは、影清がISの操縦において天才ともいえる実力を持っていたとしても変わらないだろう。そのため、IS学園の生徒等には、試験武装とはいえ、専用機に関する事柄を堂々と目にさせることは、色々と不都合なので、あまり目立たない場所に移動することが必要とされるのだ。

山田先生と影清が向かった先に待ち受けていたのは、IS・打鉄と、その隣にある真四角のコンテナ、そして、その前に佇むヒカルノであった。

「おお！久しぶりだね山田君！そして、影清君！」

「あ、どうも。」

「お久しぶりです、ヒカルノさん。待たせてしまって申し訳ありません。」

「いやいや、半分アポ無しで来たようなものだ。気にしなくていいとも。それはともかく、早く試験武装のテストをしようじゃないか！より良くするために色々意見を聞かせて欲しいしね！」

「は、はい！では、乗りますね。」

ヒカルノに急かされ、影清は打鉄に乘る準備を始め、その間に、ヒカルノはコンテナのロックを解除して、すぐにでもテストを始められるようにしていた。

「さて、影清君。準備はいいかな？」

「は、はい、いつでも。」

「よし、なら早速始めよう！まずはコレを使ってみてくれ！」

ヒカルノは、コンテナの端末を操作することで、コンテナを変形させ、武装が剥き出しとなっている状態にした。そこには、剣、盾、それにバズーカがセットされており、剣が、開かれたコンテナのパネルのレールに沿って、影清の方へ移動していった。

「こ、これは？」

「ふっふっふっ、それは蛇腹剣『おぼろや朧矢』！トーナメントの時に蛇腹剣を使用していたようだけど、ただ剣としてしか使っていなかったからね。ここで改めてデータを取らせてもらうというわけだ。分割は、イメージインターフェースに接続することでいつでも可能なんだが、時間が惜しいのもう一つの方法でやってみようか！」

影清が手にした蛇腹剣「朧矢」。形状は片刃の直剣で、どちらかといえば刀に近いかもしれない。その刃は赤く光っており、灰色の刀身にも一本の赤い斜め線が走っていた。剣には一定の感覚でくの字の切れ目が幾つか入っている。さらに特徴的なのは、刃の無い方向の鏝に、押しボタン式の四角いスイッチがあることだ。

「あの・・・もしかしてこの赤いスイッチですか？」

「そうそう、察しがいいね！じゃ、早速押してみよう！」

「ほ……。」

グッ

バシユツツ!!

「うおおっ?!」

ヒカルノに言われるまま、影清は剣を持つている右手の親指でス
イツチを押しした。その瞬間、刀身が勢いよく伸び、影清の身体はその
反動で後ろに下がった・・・かと思えば、内蔵されたワイヤーが伸び
切ったことにより、今度は前に引っ張られた。

グンツ!

「おおわあ?!」

ドシャーン!

「か、影清君!」

「おー、盛大に転んだな。大丈夫か、影清君?」

「な、なんとか・・・、よいしょつと。」

剣に引っ張られて前に倒れた影清は、剣をちゃんと握っていること
を確認して立ち上がった。

「い、いやー、ビックリした・・・。あの、ヒカルノさん。こうなるな
ら先に言っただけじゃなかったです・・・。」

「あはは、ゴメンゴメン。ちよつと気が逸っちゃってね。じゃあ今度
は戻って見ようか。もう一度スイツチを押ししてごらん。」

(・・・不安だ。)

先ほどの例があるため、渋々とスイッチを押しした影清。案の定、ワイヤーが勢いよく巻き取られていき、刃が戻ると、大きな反動が影清を襲った。しかし、身構えていたこともあり、今度は体制を崩すことはなかった。

ガチン！

「っ！っど。」

「ふむ、意識してれば体制は崩しにくいかな？・・・それはそうとして、どうだ影清君！わざわざ振らなくても遠くの敵を攻撃できるように射出式にしてみたんだが、感想はどうだ！」

「い、いや、かなりじゃじゃ馬だと思いますよ？ここまで反動があると、姿勢制御も難しいですし・・・まあ、奇襲性は高いと思うので、全然悪くないと思います。」

(それにメチャクチャカッコいい！もしかしてこの人、男の浪漫をわかっているのか?)

影清は、ヒカルノに蛇腹剣の射出機能についての感想を述べたのだが、多分心の声で言ったことが半分占めてると思われる。影清の感想を聞いたヒカルノは、メモを取りながら返答する。

「なるほどなるほど！反動か！性能については中々バランスが取れていると自負していたのだが、そうかそうか。なら、刀身とワイヤーを伸ばすか、スタビライザーを使うか・・・いや、これは持ち帰ろう・・・って、ああ、そういうことか！」

「な、何か良い方法が？」

「いや、それは今纏まっ
ていないんだが、そも
そも打鉄で使用するこ
とを想定していなかつ
たよ！いやー、失敬失
敬。ま、反動の軽減に
ついてはまだまだ試
行錯誤させてもら
うよ。それじゃあ次
行ってみよう！」

そういつて次の武装を取り出そうとしたヒカルノ。しかし、武器を取り替える前に、まだ蛇腹剣を分割させた状態で扱っていなかったため、再度同じ工程で刃を分割して剣を適当に振ることでデータを取った。なお、反動で倒れるようなことはもうなかった。

34：予想の斜め上で使われると超高性能に見える

「さてさて、今度こそ次の武装に移ろうじゃないか！」

蛇腹剣のデータを取り終え、コンテナのパネルに剣を納めた影清。すると、剣がパネルのレールを移動して、入れ替わるように盾が差し出された。盾の形状は丸く、一般的にバックラーと呼ばれるタイプのもので、中心の円は灰色、その外周は赤で塗装されている。そして、持ち手の上側には、先程の蛇腹剣と同じく、赤い四角のスイッチが。

「その盾の名は『夢月』^{むげつ}！ほら、君、よく武装を投げ飛ばしているだろう？そこで、リカバリーが効くようにワイヤーを仕込んでみた！持ち手にスイッチがあるだろう？」

「ま、またスイッチですか……。ま、まさか、さっきの蛇腹剣みたいに……。」

「そういうこと！ま、イメージ・インターフェイスでも分離可能だけだね。でも、今回はまた思いつきり飛ばして欲しい。」

「……わかりました。」

影清は、盾のスイッチに左親指を添え、左腕を地面と水平に、盾が横になるように構え、真っ直ぐ飛ぶように狙いをつけー。

グッ

Bannon!

「うおっ!?!」

スイッチを押すと共に、盾がワイヤーに繋がれながらも勢いよく射出された。ワイヤーが伸び切って引つ張られそうになったが、蛇腹剣の試験運用で慣れていたため、体制を崩すことはなかった。

ちなみに、盾を射出した後の持ち手側には、長方形の物体が持ち手にくっついて残されており、その長方形の物体から一本のワイヤーが、盾裏の中央に向かって伸ばされていた。

「ふむ、反動に慣れてきたようだね。これなら専用機で扱う分には問題ないだろう。あ、そうそう、感想はどうかかな？」

「・・・微妙、ですかね。反動がある以上、盾と一緒に攻めるのも難しそうですし・・・でも、ワイヤーを掴んで、盾をこう、ぶん回して扱うのも悪くないと思いました。」

「なるほどなるほど、盾をチェーンアレイのようにするのか！それはいい、攻防一体の武装とは中々いい発想をするじゃないか！なら早速やってみたまえ！データとしてはかなり有用になりそうだ！」

こうして、盾である必要があるのかと言わんばかりの試験運用が始まった。一応、対物理を想定して作られていたが、これが対光線、つまりビームを防ぐ物質で作られていたならば、すぐに使いものにならなくなっていただろう。

ちなみに、ワイヤーが伸びた状態でスイッチを押すと、蛇腹剣同様に勢いよくワイヤーが巻かれて、長方形の物体と合体する。

「ふむ、ここまでにしておこうか。耐久性についてのデータも充分に取れたからね。・・・そういえば、また反動について不満そうにしていたが、そこは一応改良しておこうか。君の専用機の特性上、ある程度の反動は軽減可能だが、できれば無い方がいいだろうか？」

「ま、まあ、そうですね。」

(反動の軽減？結構パワーのある機体なのか？)

「よし、では次で最後だ！さき、盾を戻したまえ。」

「あ、は、はい！」

自分の乗ることになる専用機の考察をしていた影清だが、ヒカルノの指示によつて、考察を中断し、盾をパネルに納めた。先程、蛇腹剣を戻した時と同じように、盾とバズーカが入れ違いとなつて、影清の元にバズーカが運ばれた。灰色ベースで、砲身の縁が赤い意外は、一見普通の大筒に見える。

「それは行動抑制用特殊弾装填対応型バズーカ

『幽牢』^{ゆうろう}。今までの武器とはインパクトに欠けるが、多様性に置いては引けを取らない。まあ、試しに一発撃ってみるといい。」

「は、はい。」(名称長つ……。)

バズーカを両手で持ち、肩に構えた影清は、ヒカルノに言われるまま試し撃ちを行う。

ボン！ バサッ

「!?こ、これって……。」

バズーカから放たれたのは実弾ではなく、網だった。

「どうだね影清君！これなら人体に攻撃できない君でも遠慮なくぶつ放せるだろう！他にも、煙幕弾、チャフ等も放出可能だ！」

「こ、これ良いですね！狙ったところに当てれるまで、当分銃火器は使えないと思ってましたが、これならバンバン撃てます！下手に距離詰める必要が無くなった・・・！」

この後も、何種類かの特殊弾を試し撃ちし、良い機会なので、狙いの付け方を山田先生に教えてもらった。元日本代表候補生は伊達じゃない。

「さて、これで試験武装のテストは終了だな！次に会うのは専用機の試験運用を行うときかな。期待してくれよ〜？」

「は、はい！ありがとうございます！」

「お二人共、お疲れ様でした。それにしても、トリッキーな武装ばかりでしたね。」

「それはそうだろう、彼の変則的な戦い方を参考にしているからね！かといって、別に普通の武器でも十分な性能は発揮できる。だが、それじゃダメだ。どうせなら十二分に活かせる武装と専用機を用意しないとね！」

「あ、ありがとうございます・・・その、開発、大変じゃなかったですか？」

「そりや大変さ。でも、それ以上にやり甲斐があったね！あんなにアイデアを捻らされたのは久々さ！ウチの連中もノリノリだったよ！」

「そ、そう、ですか・・・。」

「では、そろそろお暇させて頂こう。このデータがあれば専用機の開発も捗ることだろうしね！」

そういつて、ヒカルノはコンテナを元の形状に戻し、打鉄とコンテナを、待機していた従業員と共に、近くに止めてあつたトラックまで運んで、そのまま去って行った。

「改めてお疲れ様でした、影清君。今は、お昼休憩の時間なので、午後からの実習には参加できませんよ。大変だと思いますが、最後まで頑張りましたよね！」

「はい！山田先生も、付き添いありがとうございました！あと、射撃の方も！ホントにわかりやすかったです！」

「そ、そういつてもらえると嬉しいです…、一応、得意分野でしたので……。」

「そうなんですか…、じゃ、僕、そろそろ昼摂つてきます！グループの方には、ある程度ぼかして伝えた方が良いでしょう？」

「その方が良いかもしれませんね。教師としては全て伝えたいのですが…、口裏は、合わせておきましょうか。」

武装のテストが終わり、午後の実習前の昼飯に向かおうとした影清だが、その前に山田先生と口裏を合わせることにした。

35：途中参加はめっちゃ気不味い

倉持技研から届いた武装のテストを終えた影清は、山田先生と共に実習が行われていた場所へ戻った後、昼食を摂るために出店を探しに出かけた。ちなみに山田先生は他の引率の先生方に報告しに行った。

(おお、いい匂い！益々腹が減るなあ！…って、あそこにいるのは。)

「あら、トオル。実習の方は、上手くいつてるのかしら？」

何を食べようかと模索する影清は、一際目立つISスーツを着たベルベットを見つけ、そんな影清と目が合ったベルベットは、影清に近づいて話しかけた。

「ベルベットさんか。あ、実は、実習には参加してないんだ…。」

「…どういふことかしら？」

「えっと、その、別件があつてさ。男性操縦者のデータ取りとか、そんなところで…。」

「…色々問い詰めたところだけど、勘弁して上げるわ。…お腹、空いてるでしょう？奥から二番目の出店で、大食い企画をやっているそうよ。さつきグリフィンが挑戦してたわ。」

「マジか!?ベルベットさん、ありがとう！いつてきます！」

「ええ…トオルといいグリフィンといい、あれだけの量が一体どこにいつてるといふの？」

ベルベットの話を聞くなり、例の出店に向かった影清。メニュー

は、10人前程の大きさのお好み焼きに、焼きそばをこれでもかと盛って。薄い卵焼きを被せたものだった。一応完食したが、グリフィンよりもタイムは下だったらしい。

昼休みが終わり、実習が再開され、影清は元いたグループへと合流した。事情はちゃんと話した（大分ぼかしたけど）。

「ーと、いうわけで。あの、ホントにごめんなさい。」

「もう、大丈夫だって！別に困ったこと無かったしね！」

「そうそう、強いていうなら、運ぶのが大変だったぐらい？」

「人数減っちゃったのは確かだし、そりや効率落ちるよ。：というわけで影清君。急用で疲れてるところ悪いけど、バンバン働かさせるからね！」

「わ、わかりました！」

こうして、グループのメンバーと一緒にパッケージの実習を始めた影清。主に、パッケージの装備や、取り付けるための工具を運んだ。かなり早いペースでパッケージのセットが完了し、最後に的を立てて、ISを起動するところまで進んだ。

「ふう、やっと終わった。・・・あ、そういえば、順番って・・・。」

「あー、それなんだけど・・・影清君、最後でいいかな？」

「あ、全然構いませんよ。寧ろ、途中で入れてもらえるだけありがたいので。」

「わかった、ありがとう影清君。じゃあ、午前の順番のままってこと

で。皆、別にいいよね？」

『異議なーしー!』

こうして、最後に回された影清は、グループの面々がパッケージを扱うところを見学し、とうとう出番が回ってきた。

「いよつと。じゃ、次は影清君の番だね!ガンバ!」

「あ、ありがとうございます。・・・よつ!」

打鉄を纏った影清は、追加パッケージの超長距離射撃装備「撃鉄」げきてつの銃身を的に向けた。

追加パッケージ「撃鉄」は、狙撃を想定されており、射程距離がありながら、命中率は世界トップを誇るといふ、かなり高性能なパッケージであり、これを使えるということも、打鉄の量産機としての評価が高い理由の一つでもある。

(…なるほど、狙撃には自信ないと思っただけど、これだけのサポートがあれば僕でも・・・!)

ポオン!

カンッ!

影清の狙撃は見事成功し、的が甲高い音を立てた。

『おおー!』

「試合だとあまり銃使わない影清君でも当てられるんだ!『撃鉄』すごいね!」 「ちよつ、その言い方だとイヤミに聞こえるって!まあ実際

銃あんまり使ってないけどさ。」「あ、私、影清君がダリルさんと一緒に射撃場いるの見たことあるよ！で、でも、ダリルさん、滅茶苦茶ダメ出ししてたけど……。」

(・・・狙撃、成功したのに。なんか、悲しくなってきたな・・・)

その後も、パッケージを換装して、実習を進めていった影清等。最後のパッケージを試した後、引率の先生に報告して実習を終え、影清含むグループの生徒等は、まだ終わってない生徒の手伝いに回った。

「えーつと、次は……って、グリフィンさん？どうしてここに？」

「あ、トオル！実習の手伝いなら、ここはもう間に合ってるよ？」

「いや、それならそれでいいんだけど……、そういえばグリフィンさんとダリルさん、それにベルベットさんは朝、別の場所に集合してたけど、何やってたの？」

「あ、それは……まあ、あんまり詳しくは言えないけど、武装のリニューアル、つてとこかな。ダリルやベルベットもそんな感じだと思うよ。」

「あ、もしかして、国からとか？ならもう、これ以上は聞かないよ。代表候補生にも事情はあると思うし。」

「ありがと、トオル。ま、試合になったら遅かれ早かれ、お披露目することになるんだけどさ。こういうのは秘密にしたほうがワクワクするでしょ？」

「……相手からしたら、かなり怖いんだよな、そのワクワク。まあ、臨機応変に対応させてもらうよ。それじゃ、別のところ行ってくる。邪魔してゴメン。」

「大丈夫だって、皆筋良いから、私殆ど見てるだけだったしね。それじゃまた。」

グリフィンと別れ、他に手伝うところが無いか探す影清だったが、もう殆どのグループが実習を終えていたため、何もすることが無くなっていった。こうして、臨海学校二日目は幕を下ろした。

36：足下は要注意

実習が終わり、寮へ戻った影清。すでに日は暮れていて、そろそろ温泉に入る時間だが―。

ピツ ガコン

「いやー、昨日ダリルさんに飲み物上げちゃったから、今日の分無しになるとこだったけど、近くに自販機あってよかった。」

影清は、旅館から出て、すぐ近くに設置されてある自販機で飲み物を購入していた。辺りは暗く、外灯だけが周りを照らしている。

ニャー

「ヒツ!?ね、ネコオ!」

自販機からジュースを取り出した直後、ネコの鳴き声が聞こえたため、驚いて辺りを見回すと、影清の左足元に白い毛並みのネコがいた。ちなみに、影清はネコに限らず動物全般が苦手である。

(・・・待てよ、なんでネコがこんなところに?少なくとも、この周辺では見かけなかったぞ?それに、野良にしては毛並みが―。)

「おーい、シャイニイ。そんなに遠くまで行かないで欲しいのサ。ホラ、こっちにおいで。」

「っ!」

(だ、誰だ?着物を着て・・・るけど崩れてる!?どっかの店の従業員なのか?・・・ん?何か違和感が・・・。)

道の向こうから、ネコの飼い主と思われる人物がこちらに歩いてきて、影清の足元にいたネコ、シャイニイを呼び、シャイニイは、その飼い主に向かっていき、片腕で抱き上げられた。

その行動に影清は違和感を覚えたが、飼い主がネコを抱え上げ、身を起こした時にその正体がわかった。

(っ!?!?・・・う、腕が・・・無い!?)

「おや、誰かいるのか?」

影清の存在に気づいたネコの飼い主は、影清の元へ歩み出した。その飼い主の特徴的な外見は、一度見たら忘れられないだろう。赤髪のツインテール、左手に持つキセル、着崩した着物に加えて、右の腕と目が欠けていたのだから。

「こんばんは、こうして会ったのも何かの縁サ。少し話をしていかないか?」

「は、はい、別に構いません、けど。」

影清とネコの飼い主は、道路の脇に寄り、地べたに座った。

(よ、よく見たら眼帯もしてる・・・!触れない方がいいか・・・。)

「なんだ、この腕と目が気になるのか?別に大したものじゃないサ。ちよつとした事故の後遺症つてところサ。」

(な、なんで思ってることを・・・というか、尚更触れにくくなったんですけどお!?!?な、何か別の話題を・・・。)

考えてることを見透かされたことと、あまりにも重い事情をサラツと言われたことでパニツクになった影清は、なんとか他の話題を出すことで空気を変えようとした。

「あ、あの、なんでこんなところに？」

「ん？・・・ああ、そういうこと。・・・ワタシはただの風来坊サ。ただ色んな場所をふらついでるだけで、別にどこへ行こうが深い意味はないのサ。」

「そ、そうですか。」

「・・・逆に質問するけど、キミこそなんでこんな場所に？」

「ほ、僕は、飲み物を買いに・・・自販機、そこにしかないの・・・。」

「・・・ふむ、そうかそうか。・・・そうだ、キミ、ネコは嫌いか？」

「い、いえ、嫌いでは、ないんですが・・・ネコに限らず、動物全般が苦手なんです・・・。」

「そうか、シャイニイはキミのこと気に入ってるみたいなんだけどな。さつきからワタシ以外にキミを見つめてるしサ。」

「・・・ごめんなさい、近づくだけでも、ちょっと・・・。」

「フフ、冗談サ。シャイニイがどう思ってるかは、シャイニイのみぞ知るものサ。・・・さて、もうそろそろ行くけど、最後に名前だけ聞いておこうか。」

「あ、は、はい！影清・・・道です・・・。」

「トオル、か。できるだけ覚えておくサ。ワタシのことは、そうだな……、アーリイ、とでも呼ぶといいサ。それじゃ、サヨナラだ。」

そういつて、ネコの飼い主、アーリイは、シャイニイと共に去っていき、影清もアーリイを見送ってから旅館に戻った。

「アーリイさん、か。どっかで見たことある気もするけど、気のせいかな。」

37：適当にブラブラしてても気は楽になる

臨海学校最終日、昼頃には学園へ帰る支度を済ませる予定なので、それまでは、ほぼ自由に行動できる。朝食を終えて、水着に着替えて海へと向かった影清は、砂浜を散歩していた。

「あ、道さん。もしかして、今来たところでしょうか？」

影清が砂浜で散歩しているのを見つけ、ワンピース水着の虚が話しかけてきた。

「虚さんか。まあ、今日で帰るし、どうせなら散歩でもしようかなって。」

「そうなんですか。良ければ、ご一緒しましょうか？あまりすることも無かったので。」

「あ、じゃあお願いします。僕も当て無く散歩してただけなので。」

こうして、虚と共に散歩を続けることになった影清。暫くはただ歩いているだけだったが、座って休憩する時となったときに、虚が会話を振ってきた。

「そういうえば道さん。IS学園に入学して暫く経ちますが、どうですか？これまで色んなことがありましたか・・・。」

「・・・あー、そうか、もう三ヶ月ぐらいか。・・・最初は、男が自分しかないから、上手くやっていけるか不安でしようがなかったよ。なんなら、ダリルとクラス代表賭けて戦うことにもなったし。・・・そう考えると、あの時、虚さんが声を掛けてくれて本当に助かったよ。改めて、ありがとうございます。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。私も、道さんにISを教えるとなった時は、どう説明したらわかりやすいのか、で悩んでいましたからね。でも、道さんの呑み込みが早くかったので、私の負担もかなり楽になりましたよ。それに、代表候補生相手に喰らいつけていけるようになったのも、道さんの努力の賜物ですよ。」

「あ、ありがとうございます。でも、やっぱり虚さんがいなかったらここまで上達してなかったと思う。それに、同じクラスで話せる人ができたっていうのも嬉しかったかな。」

「そうですね、それなら良かったです。・・・そろそろ、旅館に戻りませんか？身体を洗ったり、水着から着替えたりするのも考えると、早めの方がよろしいかと。」

「わかった。虚さん、散歩、付き合ってくれてありがとうございます。」

「いえ、私も楽しめたので、こちらこそありがとうございます。では、行きましようか。」

散歩を終え、旅館へ戻った虚と影清。旅館に戻り、IS学園の制服に着替えた影清は、自分の荷物を整えてから旅館から出された昼食を摂り、旅館前へと向かった。そこには、すでにIS学園の生徒等の殆どが集合しており、臨海学校についての話で賑わっていた。

暫くして、全員集まったのを確認した教師等は、クラスごとに点呼をとり、女将の景子さんにお礼と別れの言葉を送った。

「3日間お世話になりました。また、来年もよろしく願いますね。」

「はい、こちらこそ。・・・生徒の皆さん。この3日間、お疲れ様でし

た。慣れないことも沢山あったと思いますが、充実した臨海学校を送れたなら幸いです。また、機会があれば泊まりに来てくださいね。花月荘をご利用頂き、誠にありがとうございました。」

『ありがとうございます！』

女将さんに礼を返したIS学園の生徒等は、自分のクラスのバスに乗り、花月荘を後にした。それから数時間後、IS学園に到着し、各クラスの担任から連絡事項を言い渡された後、寮に戻っていった。

(ヤア)

—テスト勉強しないと！このままだと赤点必死だ！—

38：徹夜？テスト中に寝ても知らないぞ？

臨海学校が終わってから数週間後に期末テストが行われた。IS学園のテストは、中間すつ飛ばして期末に全振りしてるので、そこで成績が決まる。現在影清は、専用機持ちの面々や虚と共に、テスト結果について話し合っていた。

「にしても、ウツホ、オマエ学年1位とかやるじゃねえか！1位はオレがとるつもりだったんだけどな！」

「あ、ありがとうございます。順位は、あまり気にしてはいないのでが……。」

「そうそう！どれだけできたかが重要だと思うよ！ね、ベルベツト！」

「……どれだけできたか、を基準にするなら、順位は良い比較対象だと思うわ。結局のところ、結果が全てよ。」

「ところで――」

――カゲキヨ、オマエそんなに離れてどうした？まさか、テスト上手くいかなかったのか？」

「……いや、赤点は取らなかつたけど……、そちのレベルが高すぎて話に入れない……。」

猛勉強の末、なんとか赤点は回避できた影清だったが、順位は下から、というかほぼ最下位であった。そのため、学年内でも十本の指に入る程の成績を残した虚達にどう接したら良いかわからなくなって

いた、という具合だ。

「あー、なるほど。大丈夫だってトオル！ISって結構覚えること多いから、別に今良い結果残せなくてもー。」

「いや、一番良かったのが、そのISなんだけど……。」

「……トオル、他の科目はどうなの？」

「……国語とIS以外、殆ど赤点ギリギリです……。」

「……あー、その、なんだ。次頑張りや良いじゃねえか！なんならオレが教えてやってもいいぜ？」

「ごめんダリルさん、なんかもう色々悲しくなってきたから、もうテストの話題は出さないで……。」

今までよく関わってきた面子との学力の差に哀しさを覚えた影清。まあ、代表候補生に求められるのは、必ずしも強さだけじゃないからね、仕方がないね。この空気を変えるべく、虚は他の話題を持ち出した。

「……そ、そうだ！皆さん、夏休みはどうお過ごしになるつもりですか？私は、実家に顔を出しに。」

「あ、あー、そうだね！私も、ブラジルに帰って子供達に元気な顔見せないかね！ダリルは？」

「お、オレか!?オレは、まあ、親戚に顔出しには行くけどよ……。べルベツトはどうだ？」

「……別に何も。強いて言うならISの訓練ね。」

「そ、そうか、ならカゲキヨ！オマエはどうだ！」

「テストの話はしないで。」

「ちげーよ、夏休みだよ！折角ウツホが気を紛らわそうとしてやったつてのに、まだ根に持つてるんじゃないか！」

「・・・なんだ、夏休みか。そうだな・・・こうゆう時に父さんや母さんと会えたら良いんだけど、それも行かないからな・・・。まあ、IS学園とその周辺で過ごすかな。」

影清の両親は、現在、重要人物保護プログラムによって保護されており、簡単に会うことができない状態なのだ。重要人物保護プログラムとは、その名の通り要人保護をするためのものであるが、迂闊に手を出せない者の周辺人物を保護することもある。その最もたる例が、篠ノ之 束とその一家である。

束博士は、ISを一人で開発するほどの頭脳と細胞レベルでオーパスペックな体を駆使して各国の手から逃れているのだが、家族を人質にされたらどうだろう？いや、両親なら切り捨てかねないが、妹の生殺与奪を握られたら、下手に行動することはできないだろう。そういういたものを防ぐために、束博士の両親や妹を保護するといった形で要人保護を行うのだ。

影清は無国籍なため、影清から肯定の言葉が出ないまま引き込まうとすれば各国からバッシングされるため、両親を人質されて嫌々引き込まれないように、影清の両親は篠ノ之一家と同じ形で要人保護されたのだ。ちなみに、手紙でやりとりはしている。

「そ、そっか。・・・うーん、ブラジルにでも招待したいけど、迂闊に來れないよね、多分。それができたら、他の国も次は自分が、とか言い出しそうだし。」

「大丈夫だってグリフィンさん。気遣いは嬉しいけど、別にそこまで悲観してるわけじゃないし。ISを沢山特訓する良い機会だしね。」

「そう、・・・なら、私もIS学園にすることが多いだろうし、模擬戦ぐらいなら付き合っただけあげるわ。」

「勿論オレ達でも良いぜ。暇な時に限るけどな。」

「そうそう、私達は男性操縦者の試合データを得られる、トオルは私達代表候補生との模擬戦で強くなる。win-winの関係ってやつだね！ま、私が手伝いたいからってのが一番だけどね！」

「・・・あ、ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えて、模擬戦は誘わせてもらうよ。」

こうして、夏休みへの計画を立てた影清達。影清は、もうテストのことなど気にしていなかった、部屋に戻るまでは。

—そして、夏休みに仕上がるという影清の専用機。それが影清にどのような影響を与えるのかは、まだ誰も知る由は無い。

夏休み編

39：大人は経験豊富

夏休み。殆どの生徒が実家に帰省している中、影清はIS学園にて、夏休みを過ごしていた。

「んっ、んっ・・・っはぁー。いやー、お茶ありがとうございます。こんなに暑いと、喉渇きやすくて。」

「いえいえ、この老人の頼みを聞いてくれた礼ですよ。ささ、もう一杯いかがですかな？」

影清は、現在用務員室でお茶を頂いていた。

数分前、気分転換に外を歩いていると、偶々通りすがった用務員さんが、荷物運びを手伝ってくれないかと影清に頼み、影清はそれを快く引き受けた。そして、その礼として、お茶をご馳走になっているのである。ちなみに茶菓子もある。

「あ、ありがとうございます！・・・それにしても、あの荷物何だったんです？」

「ああ、アレですか。私は、何かの機材、という事だけ聞いていますが、世の中知らない方が良くもありますからねえ。詮索は程々にしてるのですよ。」

「そ、そうですか。」

「ところで影清君、学校生活は楽しめていますか？ここの男性といたら、影清君と私ぐらいなものですからね。何か、女性に対して言いづらい悩み事でもあれば、この老人で良いなら相談に乗りますよ

「？」

「い、いえ、特にそういうのは……あ、強いていうなら、視線、ですかね……。」

「おや、視線ですか。もう三ヶ月程経ちますが、まだ奇異の目で見られているのですかな？」

「あ、いえ、僕に向けられた視線じゃなくて、その……ちゃんと、顔以外見ないように意識しないといけないので……。」

「ああ、なるほどそういうことでしたか。女性はそういう視線に敏感ですからね。私ほど年をとれば、そういうことも少なくなりませんが、若い内だと中々大変でしょう。相手の目をちゃんと見ることは大事なので、社会勉強だと思つて頑張つてみてください。」

「は、はい。」

それから少しして、用務員室を後にした影清。あと、去り際に用務員さんが茶菓子を包んで影清に持たせた。

自室に戻つた影清は、中断していた作業に取り掛かった。

「……気分転換で散歩してみるもんだな。おかげでネタ見つかったし。えーと、これで臨海学校と

……テストかあ。あ、赤点取つてないだけマシな筈……！」

カキカキ

影清が中断してた作業とは、両親に宛てた手紙の執筆である。何をどう書こうか悩んだ結果、一端切り上げてリラックスするために外出していたのだ。

「・・・そうだ、前の手紙、どんななんだっけ？」

両親から送られてきた手紙に対し自分の手紙で返事するため、両親の手紙の内容を確認する影清。なお、重要人物保護プログラムによって夫婦といえど離れ離れにされているため、手紙はそれぞれに送られる。そんなわけで、影清の元には父と母、二人分の手紙が送られている。

父の手紙は、簡素ではあるが、息災であるかはちゃんと確認を取り、影清の手紙の内容についてもちゃんと触れている。一方、母の方は、父の手紙の内容に加え、彼女はできたのかだとか、もうキスはしたのか等、影清の恋愛事情について興味津々であった。

「ははっ、そういうやそんな感じだった。・・・まーた彼女か、そんなできるわけないって。まあ、独身になるつもりもないけどさ。・・・うん、こんなところかな。」

手紙を書き終え、それらを封筒に入れた影清は、職員室に向かった。ちなみに、父と母それぞれに送るため、ほぼ同じの内容の手紙を二つ用意している。

「じゃあ、お願いしますね、山田先生。」

「はい！今回もちゃんとご両親に届けますので、安心してくださいね！」

影清から手紙を受け取った山田先生は、そのまま他所に向かった。別に山田先生が直接送るわけではなく、重要人物保護プログラム関係の人が手紙を経由している。山田先生があんな風に言ったのは、両親と会えなくなった影清に対する、一種の励ましなのかもしれない。

山田先生を見送った影清は、そのまま自室へと戻り、今日を勉強と

トレーニングで終わった。

40：焦っても良いこと無し

午前中、第一アリーナでは、夏休みを利用してISの練習に励む生徒が、満員ではないにせよ、少なくともなかった。影清も、そんな生徒等と同様にISを動かしていた。ちなみにベルベットもいる。

「—えっと、じゃあ遠距離にいる相手に攻撃を当てるには、直接狙うんじゃないかって進行方向に置く、って感じでいいのかな？」

「まあ、そういうことになるわね。私の場合、弾幕を展開することで行動を抑制するからそういう結論に至ったのだけど、こういうのは狙撃の本職に当たった方がいいんじゃないかしら？」

「ああ、ありがとう、ベルベットさん。」

影清は、以前試した専用機の武装について少しでも予習しようとして、遠距離にいる相手の攻撃の当て方をベルベットに教えてもらっていた。

「そういえば、ベルベットさん。なんで、ギリシャに帰らなかったんです？あ、言いづらかったら、別に……。」

「……そこまで言う義理は無いわ。」

「あ……すみません……。」

「いえ、謝ることは無いわ。この期間に祖国に帰らないのは確かに妙なもの。気にしなくていいわ。」

「はい……。」

「……一つだけなら、教えてあげるわ。」

「え?」

「同じ代表候補生との約束。それを果たすためよ。」

「約束、ですか?」

「ええ。……これ以上はもう言わないわ。」

「い、いえ!寧ろそこまで言ってくれただけでも……。じゃあ、もうこの話題は出しませんね。……すいませんでした。」

「はあ、謝る必要は無いと言わなかったかしら?さ、ただ私の話を聞きにきたわけじゃないでしょ?早く準備なさい。」

「は、はい!」

ベルベットに言われ、借りてきた蛇腹感と盾を構える影清。今回ベルベットを誘った理由は、何も遠距離攻撃の当て方を教わるだけでなく、蛇腹剣や盾の訓練もするためであった。そのため、ベルベットはハルバードのみの使用で軽く模擬戦するということとなった。

「行くわよ。」

ブオツ!

「のわっ!つと。」

そういつてベルベットは影清に接近し、ハルバードを左斜め下から振り上げた。それに対し、影清は五時の方向に後退することでそれを

避けた。しかし、ベルベットは勢いそのままにハルバードを左上に持っていていき、後退した影清に向かって振り下ろした。

グオツ！

「！くっ！」

ガアンツ！！

「ぐううわっ！」

避け切れなかったため、盾による防御で少しでもダメージを減らさうとした影清。しかし、ハルバードの重い一撃の前では、盾ごと吹っ飛ばされることとなり、影清は体勢を崩してしまったがー。

「っ！なんっ、のっ！」

ジャラア！

「ふっ！」

ガアン！

崩れた体勢のまま、即座に蛇腹剣を振り、ベルベットの右脚アーマーを狙って斬りつけようとしたが、ベルベットはそれを回避せず、ハルバードの面で横薙ぐことでそれを防いだ。

「くうっ！」

「……………まじまじだ。」

「……えっ?」

「一つ課題点を見つけたわ、それも重要なものを。わかったら早く体勢を整えなさい。」

「は、はい。」

ベルベットにより模擬戦が切り上げられ、体勢を直した影清は、武器を量子化させて拡張領域にしまい、ベルベットに接近していった。

「で、ベルベットさん。課題点って……。」

「…貴方が人体を攻撃できないことは知っているわ。でも、体勢を崩された状態で攻撃しても軽く捌かれるだけよ。それがアーマーへの攻撃なら尚更ね。」

「あ…確かに……。」

「あの場面は、相手に攻撃を当てるのではなく、自分を守るために牽制をした方が良いんじゃないかしら? 私は接近戦得意ではないから、あまり人のこと言えないのだけど……。」

「いや、めっちゃくちや参考になるよ、ありがとうベルベットさん。」

「……それなら良いのだけど。……そろそろ、お昼時ね。今日は、これぐらいにしたらどうかしら? 貴方、私に来る前もずっとIS動かしていたでしょう?」

「……わかった、そうするよ。練習、付き合ってくれてありがとう。ホントに助かったよ。」

「ええ、・・・私も暇じゃないから、今度からは事前に連絡してちょうだい。・・・お疲れ様。」

こうして、アリーナを後にした影清は、ISや装備の返却をした後、食堂に直行した。・・・あ、そうそう、ダリルとグリフィンは、まだIS学園に帰って来ていない。

41：聖地巡礼（二重の意味で）

すでに陽が暮れかけている頃、影清はIS学園を発ち、ある場所へと向かっていた。ちなみに、服装は灰色の半袖パーカーに七分の黒ズボンである。

（・・・まさか、ここら辺にそういう場所があるなんて思いもしなかった。結構珍しい名前だと思うし、多分あつてるはず・・・！）

目的地に近づくにつれ、周囲には多くの人が見られるようになった。その人混みの中には、着物を着ている人も一定数存在した。そんな人混みの中を進み、影清はようやく目的地に到着した。

（やっと着いた・・・ここが！）

―篠ノ之神社か！―

篠ノ之神社とは、ISを開発したかの天才・篠ノ之 束の生まれ育った場所であり、彼女の家が代々継いできた篠ノ之流剣術、その道場もこの敷地内にある。

今回、影清が此処に来たのは、今日この篠ノ之神社で行われる夏祭り・・・が目当てではなく、ただ原作と関わりのある場所ということである。ただそれだけなのである。

今一度説明すると、影清は大半の原作知識を失っており、原作キャラの見極めは、主にそれっぽい業績を残したというだけで判断している（一部例外あり）。このような方法を用いているのは、この世界が創作物だと知っているからこそ、この世界のことを忘れてしまったからこそであり、たとえば原作に出ていなかったとしても、原作キャラとの

関わりのあるモノというだけで興味の対象となり得る。それこそが、彼の転生者らしい一面でもある。

影清は篠ノ之神社の敷地内に入ると、屋台を物色し始めた。

(さて、何しようか♪たこ焼きとかイカ焼きとか、あと今川焼きでも良いし・・・いやでもアレも良いしコレも良いしー)

トン

「?あつ、すみません。ちよつと余所見しちゃ・・・つて、アレ?もしかして、弾君?」

「え?あつ!影清さんじゃないすか!お久しぶりつす!」

屋台を散策していた影清は、原作と関わりのある場所に來れたという謎テンションも相まって周囲の注意が疎かになり、通行人と軽くぶつかってしまったが、幸い顔見知りであったため、大事には至らなかった。

「久しぶり、弾君!というか、良く覚えてたね。」

「いや、アレ平らげる客つてそうそういないっていうか、そもそも挑戦する人が少な過ぎるっていうか・・・」

「あー、まあアレ、裏メニューだしね。」

お気づきの方もいるだろうが、今影清と話している青年の名は、五反田^{ごたんだ}弾^{だん}。原作では、一夏の中学時代の親友であり、誰とは言わないが、未来のボーイフレンドだったりする。何故影清と面識があるかというところ、それは影清が中学3年の時にまで遡る。

影清の原作知識には、何故か食い物関係の知識だけ、完全ではない

にせよ残っており、それを頼りに色々調べて五反田亭を見つけ出した。そして、その調べた情報の中には、まさかの裏メニユーの情報もあり、それがかなりの量があるということも知った影清は、初来店にも関わらずそれを注文し、見事に平らげた。そのため、初見で裏メニユーの量ヤバイヤツ頼んでそれを平らげたヤベー奴の存在は、当店の手伝いをしていた弾にとって忘れようが無かったのである。

そんなわけで、最低でも一ヶ月に1回は来店してくると、年があまり離れてないのもあって、友好を深める機会もある程度あった。

「いやホントに初見でアレ頼んだのビックリしましたからね……。」

「ははは、まあ、そりやそうなるよね……。ところで、弾君も一人で……?」

「あ、いえ、妹と来て……。って、いねえ!?アイツ何処に――。」

「ちよつと、お兄!^{にい}何やってんの!ちゃんと付いてきてよね!」

影清と会話していた弾を呼び止めたのは、弾と同じ髪色を持つ少女であった。

「ら、蘭!オマエ何処行って――。」

「こつちのセリフ!何も言わずに立ち止まらな……。って、その人は?」

「え?ああ、この人はまあ、なんというか、ウチの常連さん、かな?」

「あ、ど、どうも……。」

「あ、此方こそどうも。ウチの愚兄が迷惑かけてすいません。」

「いえ、弾君は何も悪くないですよ。寧ろ、僕が呼び止めてしまったので……。此方こそ、迷惑かけてすいませんでした。」

「あ、ちよつと！何も影清さんが謝らなくても……。。」

「そうですよ！この愚兄がもつとシヤンとしてれば良い話ですから！えっと、影清さん、でしたか？またウチに食べに来てくださいね！この愚兄共々歓迎しますから！それじゃ、私達もう行きますね！ほら行くよお兄！」

「ちよつ、引つ張るなつて！あつ、影清さん、さよならつす！」

「あ、うん……。大将によろしく言つといて。」

弾は、彼の妹・五反田ごたんだ 蘭らんと共に影清に別れを告げ、その場を去つて行つた。五反田兄妹と別れた影清は、屋台の食べ物を探しては食い探しては食い、といったことを繰り返して篠ノ之神社を後にした。あ、射的とか金魚すくいとかも勿論やったよ？ただ、片手で数えられる程しかないだけで……。

くおまけく

その後の兄妹

「とこころでお兄、さつきの人だけどさ。常連さんつて言つたよね？私、あの人見たことないんだけど。」

「あー、そうだな、確かに来るの一月に一回ぐらいだし、なんなら最近来てないけど……。あの人、来店したら必ず裏メニュー頼むから

インパクト強すぎるんだよな・・・。」

「え?・・・もしかして、アレ?。」

「おう、アレ。」

「・・・そりゃイヤでも記憶できるよね。要領悪いお兄でも。」

「最後余計だろ!？」

42：資料集めする時はその後の対処も考える

コンコンコン

「トオルー、居るー?」

「あ、はい。どうぞー。」

朝、IS学園の寮の自室に籠っていた影清に、グリフィンが訪ねてきた。

ガチャ

「お邪魔します。・・・って、何してんの?」

「ISの装備調べ。こういうの色んな国から送られてくるから、今度倉持の人に意見仰ごうかなと思って。」

影清の机周りには、何冊ものカタログが積み重なっており、それら全てがISの装備に関するものである。これらは様々な企業から送られてきているが、別に影清が取り寄せたわけではなく、各国が影清宛に一方的に送りつけた。

各国がこのような行動に出たのにもちゃんと理由があり、もし影清がどこかの企業の武装を試したいと言えば、武装テストと言いつつ男性操縦者のデータを企業とその企業が属する国が独占でき、男性操縦者が進んで協力したという口実も得ることができるので、他国から難癖つけられる可能性を限りなく低くした上で男性操縦者のデータについて優位性を得ることができなのだ。

もちろん影清は、そうなるであろうことは一応察知できたので、様々な武装に心惹かれつつも、武装テストには消極的な姿勢をとっている。なお、まだ諦めきれないでダメ元で倉持技研の人間と相談

して、なんとか気に入った武装を試せないかと足掻いている。まあ、結果的に諦めるハメになるのだが。

「おお、結構色んなのがある……！あ、やっぱりブラジルのものもあるんだ！」

「あー、それは、また後で見るとも。今ちよつとコレ見てるからさ。」

「なにになに？どこのやつ？」

「デュノア社。フランスの企業なんだけど……。」

「へー、ラファールの開発元じゃん！そんな大企業からも来てるんだ。」

「まあ、大企業だけあつて種類も多くてさ、特に銃火器と盾。でも一番気になってるのはコレかな。」

「どれどれ……って、え？もしかして、パイルバンカー？」

「そうそう、盾と一体化してるし、威力だけじゃなく奇襲性能も抜群じゃない？中々良いと思ってるんだけどさ。」

「えーつと……、ちよつと考えた方が良くないかな？流石に扱い難しそうだし……。」

「いやでも結構ロマンあるし……。あ、いや、やっぱやめとく。流石に使いこなすの難しそうだし。」

「うん、そうした方が良いよ。確かにトオルちよつとずつ上手くなってるけど、扱いの難しい武器使うのはちよつと早いと思うからさ。」

「そうだよ。今使える武器でも、まだそんなに扱いきれてないし、こういうのは、また機会があった時にするよ。」

(ロマンに走って結局負けましたじゃシャレにならないしね。それに相手がテロリストなら尚更。)

さて、また影清の原作知識の確認をさせて頂こう。影清はISの用語だけでなく、物語の流れも忘れてしまっているが、かなり内容が濃かったのか、IS学園のなんらかの行事で敵が襲撃してきたことだけは臆気ではあるが覚えているため、そういった相手がいつ来るのかという警戒と不安を常日頃とまではいれないが抱いているのだ。そのため、自分の欲を押し殺してでも、迎撃に用いるであろうISに関することは真剣に取り組んでいるのだ。ちなみに期末テストで一番点取れたのもそれが理由である。

グリフィンの意見もあり、パイルバンカーを完全に諦めることにした影清は、再度カタログを漁っていく。

「そういえば、何か探してる武装とかあるの?」

「今のところは、剣と盾で、次点で近接武器全般で・・・あとは銃火器かな。まあ、一応全部目は通すよ。」

「ふくん・・・。あ、ところでさ、貸し一つ、覚えてる?」

「え?・・・ああ、ダリルさんの部屋の時のか!もちろん!で、それがなにか?」

「いや、貸しどうしよっかなろと思ってたんだけどさ。ほら、トオル、専用機貰うじゃん?」

「そうだけど、というか、もうそろそろだけど……。」

「だったらさ、初模擬戦、私とやらない？ベルベットはともかく、ダリルも模擬戦しようと思うしね。そこで貸しの出番！」

「いや、それで良いなら、別に……。」

「よし！じゃあ予約取ったってことで！それじゃ、用件も言ったしそろそろ帰るね。楽しみにしてるよ？」

「まあ、機体に振り回されない程度には使いこなせるようにしておくよ。それじゃまた。」

こうして、グリフィンは影清の部屋から去り、影清はまたカタログに目を通していた。

「……専用機、明後日か。どんな機体なんだろ……。」

43：専用つてだけで特別感ある

「来たね山田君、そして影清君。ようこそ、倉持技研へ！歓迎するよ！」

「は、はい。出迎えありがとうございます、篝火さん。」

「お疲れ様です、ヒカルノさん。今日はよろしくお願いします。」

倉持技研にて、影清と山田先生を迎えるヒカルノ。影清が直接倉持技研を訪れたのは他ならぬ、専用機の試験運用を行うためである。一週間程前に山田先生経由で連絡されており、その山田先生は付き添いとして影清と共にいる。

「此方こそだ！あと、影清君。緊張するのはわかるが、私のことはヒカルノと呼びたまえ。」

「は、はい。」

「さて、問題の専用機だが、すでに調整は済ませている。あとはキミが乗って一次移行を終えるだけだ。さ、付いてきたまえ・・・と言いたいところだが、少し休みを取ってからにするかい？」

「私はともかく、影清君は大丈夫ですか？」

「大丈夫です。いつでも行けますよ。」

「よし、なら向かうとしよう。こっちだ。」

ヒカルノに付いていく影清と山田先生。暫く進むと、ヒカルノはあの部屋の前で立ち止まった。

「さて、着いたよ。この扉に先にキミの専用機がある。さ、入るといい。」

「は、はい。じゃあ遠慮なく……。」

専用機のある部屋へと入る影清。その部屋の中央には、確かにISSが鎮座していた。

その機体の主な特徴は、灰色をベースとしたカラーリング。従来のISSよりもかなりストレートな装甲。そして、背部のウイングスラストターは四枚二対で上下に別れ、上よりも下のウイングスラストターの方が大きい。さらに特徴的なのは、装甲の至るところに凹みがあり、その凹み一個一個に小さなブースターのようなものが取り付けられているところだろう。

「ふっふっふ、どうだい？中々良い仕上がりにだろうか？そのISSの名は『かいろう灰楼』！キミのデータを元に一から製作した、真正銘キミのためだけのISSだ！特筆すべき点はどこどころに取り付けられている小型スラストター。正式名称、装甲同化式超小型姿勢制御補助スラストター『しんきろう蜃気楼』。これこそが『灰楼』の特殊武装だ！故に、このISSは第三世代に属することになるが、特殊武装の用途的に他の第三世代機に比べれば見劣りするかもしれない。まあ、そのところはキミ次第とも言えるだろう。しつかり使いこなしてくれよ？」

「は、はい……。あ、あの、結構スラツとってますね。」

「お、目の付け所が良いじゃないか。もちろん理由はあるとも、一つは重量だね。知っての通り、ISSは重くてね。あんなに楽々と動かせるのはPICやパワーアシスト等の恩恵があるからだ。その分、機体の重量があればあるほどISS側に負担が掛かってしまうからね。よって、『蜃気楼』の完成度をより良くするためにも、装甲の厚さは切り捨

てることにした。そして、もう一つは金欠だね。」

「え？き、金欠、ですか？」

「そう、金欠。一応、政府から製作費の援助はあるけど、そんなに無駄遣いできるような額じゃないからね。まあ、その分趣向を凝らしてるから、機体や武装の性能については心配しなくていいぞ、山田君。さて影清君、そろそろ始めようか。」

「は、はい。」

さて、これから影清等が行う作業について説明させて頂こう。専用機としてISを完成させるには様々な行程が必要となる。

まずは”ISコアの初期化”。前にも説明したが、ISコアには学習機能があり、学習することでより操縦者にあつた調整を自動的に行うのだが、いざ違う操縦者が”そのISコアをそのまま使用した機体”を専用機とするとなった時、そのISコアに蓄積された情報は他人のものであるため邪魔となってしまう。従って、専用機として完全に調整するためには、ISコアを初期化する必要があるのだ。まあ、この工程は影清等が来る前にヒカルノ等倉持技研が既に終わらせているのだが。

次に『初期化』^{フィッティング}。ISコアの初期化とは違い、この『初期化』は操縦者の情報を入力することを指す。そして、『初期化』によって入力された情報を元に機能を整理する『最適化』^{パーソナライズ}が行われ、この工程から30分前後でISは『一次移行』^{ファーストソフト}を果たす。この工程をすべて終わらせることで初めて専用機として完全なものとなる。ちなみに、『初期化』・『最適化』・『一次移行』を一括して『形態移行』^{フォームシフト}と呼ぶこともある。

「よし、一次移行は完了したようだね！何か異常はないかい？」

「い、いえ、寧ろめちやくちや良いですよ！打鉄と違ってこう、スムーズに動くというか……。と、とにかく、異常はないです！」

「そうかそうか、ならこのまま試運転といこう！試験場へは、この部屋から直接行けるから少し待っててくれ、今そこのドア開けるから。」

「はい！」

そう言つて、ヒカルノは端末を操作して試験場へのドアを開けた。そして、ドアが開き切ると、影清は灰楼を動かして試験場へと向かつて行った。

44：組み合わせは重要

IS・灰楼を纏った影清は、ヒカルノの指示で試験場中央にて待機していた。

『待たせたね、早速始めようか！さ、まずは自由に飛んでみるといい。』

「了解です！」

フワッ

(す、凄い！打鉄とは比べものにならないほど安定して飛べる！これなら、ちよつと速度出して飛んでも・・・！)

ヒュン、ヒュン

灰楼の性能を直に感じた影清は、試しに高速飛行を始めた。

特殊武装である『蜃気楼』は、イメージインターフェイスと接続することで無意識レベルでの稼働ができ、元々影清の姿勢制御能力が高いのも相まって飛行時のバランスは非常に良い。そのため、高速飛行に抵抗のある影清でも安心して加速することができるのだ。

『す、すごいですね！あんなに滑らかに飛べるなんて・・・！』

『まあ、そういう方向性で作ったからね。彼のデータを参考にしているんだ。機体との親和性も抜群だと思うよ？そこのところどうだい、影清君？』

「は、はい！ホントに動きやすいです！ある程度バランス取ってくださいし、急に方向変えようとしても全く硬直なく動けますし！」

『そうかそうか。なら、そろそろ武装テストに移ろうか。武装は拡張領域に入ってるから、適当に出してみたまえ。』

「はい！……ん？」

(あ、あれ？ 朧矢、なんか2本ない？ でもちよつと形状違うし……、とりあえず出してみるか。)

灰楼の拡張領域には以前臨海学校で試した武装が収納されていたが、その武装の中に『朧矢』と酷似した蛇腹剣が混ざっていた。気になった影清は、その蛇腹剣を拡張領域から取り出した。

『おつと、よりによつてそれか！ まあ、いいだろう。それは『朧・二の矢』。キミの意見を参考に制作したもう一つの朧矢だ。刀身を長くしたり、射出時の反動もある程度抑えたりはしたが、その分重くなっている。そこは朧矢と上手く使い分けてくれ。じゃ、的を出すから色々試してみたまえ。』

「わ、わかりました！」

朧・二の矢を構えた影清は、空中に浮かんでいる的に振り下ろしや突きを繰り出し、遠くの的には刀身を射出することで対応した。

ちなみに、朧・二の矢も朧矢もイメージインターフェイスを利用することで、影清の意思一つで分割・接続できるようになっている。

「よつとー！」

ジャラアツ！ パリン！

『ふむ、ここまでにしようか。どうだい二の矢は？ 我ながら良い改良っぷりだと思ってるんだが。』

「中々良いですねコレ！確かにちよつと重いけど、リーチもあつて射出時の反動も殆どないので、かなり使いやすいです！」

『ほおう、中々嬉しいこと言つてくれるね！ただ、そうだね．．．ちよつと隼矢出してくれるかい？』

「？は、はい。」

影清は隼・二の矢をしまい、新たに隼矢を取り出した。

『よし、じゃあ早速例のスイッチ押ししてみようか！』

「えっ。」

『まあまあ、百聞は一見にしかずと言うだろう？それが終わったら、もう次に移るからさ。』

「わ、わかりました．．．よし。」

グツ バシユツ！

隼矢のスイッチが押され、刀身が勢いよく伸びる。そして、その反動により影清は体勢を崩す．．．ことはなかった。

影清が身構えていたというのもあるが、それを抜きにしても反動が全くなかつたなんてことはありえないだろう。

「？あ、アレ．．．？」

『ふっふっふ、どうだい？前に試した時とは大違いだろう？これも『蜃気楼』の特権の一つだ！簡潔に言わせてもらうが、『蜃気楼』は小型ス

ラスターによって体制を補助する役割以外にも、応用で武装や攻撃によって生じるあらゆる反動を大きく削減できる！が、敵からの攻撃で軽減できるのはあくまで反動のみだ。シールドエネルギーは普通に減るから、そこは注意してくれ。』

「りよ、了解です……。」

『じゃあ、朧矢は仕舞ってくれてもいいよ。前に取った分に加えて、朧・二の矢のデータもあるから充分といえば充分だからね。さ、次の夢月で最後だ。それが終われば自由に動かして良いから、あとちよつと頑張っつてね♪』

「は、はい！」

さて、夢月の武装テストはカットさせて頂こう。朧矢みたいに反動負荷のテストしただけだからね。

そんなわけで、全ての武装テストを終えた影清は、2時間までなら自由に操縦することが許可され、灰楼に搭載された武装や、『蜃気楼』を利用することでどこまで動くことができるかなど、色々試していた。

そうそう、この後山田先生と模擬戦したが、あとちよつとのところで負けた。なお、山田先生が使用したISは打鉄である。

45：強みを押し付けるのは戦いの基本

倉持技研にて専用機を受け取り、試験運用も終えてIS学園へ戻った影清。そしてその翌日、影清はアリーナにてグリフィンと待ち合わせしていた。

「あ、トオル！おはよう！でも、ちよつと遅くない？」

「お、おはようございます・・・、寝坊しました、すみません。」

「素直で宜しい。・・・なんて♪予定より10分程早めに呼んでだし、別に気にしてないよ。」

「え？あ、そうなの？いやでも、遅れたのに代わりはないし・・・。」

「私がいいって言うてるんだからいいの！あ、そうそう、一応観客もいるから。」

「え？それってどういう「オーツス、カゲキヨ。調子どうだ？」

グリフィンと話していると、そこにダリルがやってきた。そして、その後ろにはベルベットと虚の姿もあった。

「あれ、ダリルさん？・・・と、ベルベットさんに虚さんも・・・おはよう。」

「おはようございます、道さん。」

「おはよう・・・。今日は、色々見させてもらうわ。」

「は、はい・・・。えーっと、グリフィンさん。もしかして今日、連戦

「？」

「流石に連戦はしないよ。道もバテるだろうし、ダリルも今日は見てるだけって言ってるしね。」

「ま、そういうことだ。やるならベストコンディションでやった方がいいからな！つーわけで、明日戦ろうぜ？」

「・・・えつと、ベルベットさんの聞いてからでいい？」

「私はここ一週間以内ならどこでもいいわ。どうせISの訓練してるだろうし。」

「わかった。じゃあ、ダリルさんとやった後にまた連絡するよ。」

「じゃ、明日はオレと、つてことで。そういやオマエ、専用機の待機形態どこに付けてんだ？」

「え？あー、つと、コレだけど・・・。」

そうやって、影清は首の辺りを指差した。

「あん？マフラーか？」

「あ、いや、マフラーに付いてるヤツ。このバッジみたいなの。」

影清の専用機・灰楼の待機形態は、赤と灰色の正方形二つが重なったような形状のバッジで、影清のマフラーにその針を通してある。ちなみに、灰色の正方形が上で赤色の正方形がその下となっている。

「・・・あー、それか。なるほどな。でもなんでマフラーに付けてんだ

「？」

「いや、自分で付けたというか、解除したらずでに付いてたって感じなんだけど……。まあでも、良い感じにマフラー留めてくれて、型崩れしにくくなってるから結構助かってる。」

「道さん、ISに乗ってる時もマフラー巻いていますからね。ちょうど良いと思いますよ。」

「ホントは外した方が良いんだろうけど、コレないと落ち着かないからさ。今のところ、邪魔とは思ってないよ。あ、グリフィンさん！そろそろじゃない？」

「そうだね。じゃ、準備しますか。」

「なら、オレも行くとするか。どうするかゲキヨ、別に手の内見られたくねえなら見ないでやってもいいんだぜ？」

「……いや、別にいいよ。こつちもダリルさんの手の内色々知ってるし。」

「ハッ、そうかよ。じゃあ、また後でな。」

「……よし、行くか。虚さん、ベルベットさん、また後で。」

「はい、いってらっしゃいませ。」

「ええ、……頑張つて。」

こうして、各自ピットや観客席に向かい、その数分後、アリーナにはテンカラット・ダイヤモンドを纏ったグリフィンが影清を待っている。

た。さらに数分後、ピットから灰楼を纏った影清が出てきた。

「・・・お任せ。ゴメン、ちよつと準備手間取った。」

「別にいいよ。これから慣れて行けばいいし。じゃ、始めよつか。・・・
といつても、カウント数えてくれる人いないんだよね。まあ、私の不備でもあるし、先手はトオルに譲るよ。それがカウント代わりつてこ
とで。」

「・・・あんまり望ましくないけど、別にまだ対等にやって勝てるとは思ってないし、そうさせてもらおうよ。」

グリフィンの提案を飲み、影清は幽牢を取り出し距離を詰める――

――と同時に夢月も取り出し、スイッチを押して盾を射出した。

「っ!？」

ギンツッ!

「っ、よっ!」

グンツッ

不意打ちで放たれたその盾は、咄嗟に反応したグリフィンによって回避されそうになるも、脚部アーマーにヒットした。影清は、右手に持っていた幽牢を仕舞って夢月のワイヤーを掴み、まだ勢いが残っているにも関わらず、強引に盾を引き寄せた。そして、盾をブン回しな

がら、再度グリフィンに接近し始めた。

ブオン、ブオン！

「うっ、くっ・・・セエヤアッ！」

グオン！ ガアアン！

「うおっ！」

「もらったー！」

グオツ！

盾による攻撃を躲しつつ、ダイヤモンドによる右アッパーで盾を弾き飛ばしたグリフィン。そして、盾が弾かれたことにより、影清は両腕を弾かれた方向へ持っていかれ、体勢が崩れてしまった。その隙を突いて、グリフィンはもう片方のダイヤモンドでストレートを繰り出すも――。

クンツ

「なっ!?」

その攻撃を見切った影清は、両腕が明後日の方向を向いてグリフィンに背を向けた状態から、足を浮かせて逆さの体勢になった。そして、グリフィンがストレートを放った隙に、逆さのまま後退して夢月を仕舞い、朧矢を取り出してから身体を横に半回転して姿勢を整えた。

（よし、動きは問題ない・・・けど、このままだと軽く逆転される・・・

！)

先に仕掛けられたとはいえ、先程の攻防で代表候補生相手に一方的にシールドエネルギーを削れたことは大きい。しかし、それが最後まで続くかと言われれば否である。灰楼のコンセプト上、蜃気楼による機動力の補助で攻防一体の戦闘が可能だが、弱点が二つある。

一つは武装の数。灰楼には計4つの武装があるが、その武装4つで拡張領域の空気が殆どなくなってしまっている。ここで話は変わるが、蜃気楼とは、灰楼の装甲の至るところに設置された小型スラスターのことであり、総数は50を超える。これを一気に制御するにはそれ相応のシステムが必要である。つまり、灰楼の拡張領域の殆どは、蜃気楼に割り振られているのだ。そんなわけで、武装の種類が乏しく、それぞれの尖ったところで戦っていくしかないのだ。

もう一つは防御性能の低さ。ここでの防御性能は攻撃を避ける、防ぐといったことではなく、攻めに於いての耐久性を指す。灰楼は高い機動力を持ちつつも、装甲は厚くなく、攻撃をまともに防ぐ手段といたら夢月ぐらいしかない。そのため、相手に向かって突撃してもその過程でやられてしまう可能性もある。こう考えると、今まで影清が接近できていたのは、打鉄の2対の大楯の存在が大きいことがわかる。

結果、灰楼は攻防両方優れたISでありながら、攻めに転じるのがかなり難しくなってしまうているのだ。初心者が運用するのであれば明らかな設計ミスといっても過言ではないかもしれない。

そんなわけで、攻めの手が止まってしまった影清に、グリフィンは自分から近づいて攻撃を始めた。

「ふっー！」

ヒュッ

「っ、ええいっ！」

ブンツッ!

「ほっー!」

ガシツッ!

「なあっ!?!」

突進からの蹴りを繰り出したグリフィンに対し、影清は横に移動しながら蛇腹剣を振り下ろすも、グリフィンはこれを両手で掴むことで防いだ。更に――。

「くっ、このっ!」

ググツ、ジジジジツ

「そんなことやっても放さないよっ、と!」

ガシツッ!

「!!や、やべっ!」

影清は、蛇腹剣を強引に引き抜こうとすることでグリフィンのシールドエネルギーを削りつつ、手を放させようとするも、グリフィンが手を放すことはなく、逆にダイヤモンドクルルによって身体すらも抑え込まれてしまった。

「じゃ、そういうことっ!」

ガアン!ガガギンツッ!ガンツッ!

「うっ!!?ぐっ!!?うっ!!?」

身動きの取れない影清に対し、両脚による連撃を浴びせるグリフィン。しかし、影清もこのまま黙ってやられているわけにはいかなかった。

「ぐうっ!・・・ラアツ!!」

ガンツ!

「っ!?!もう一本・・・!」

「ツ、フツ!」

ブオツ!ガチツ

グリフィンのラツシュを喰らいながら、自然に隼・二の矢から手を離し、即座に隼矢を取り出した影清は、それをテンカラット・ダイヤモンドの左脚部に突き刺した。そして、空いた左手で拳を作り、それを隼矢のスイッチに叩き込んだ。すると、ゼロ距離で隼矢の刃が伸び、脚部装甲をズタズタに引き裂いていった。

ズギヤアアガガガツツ!!!

「のわっ!!?」

「行けるっ!」

あまりの衝撃に体勢を崩しながら距離を離れたグリフィン。それを好機とばかりに影清は距離を詰めてトドメを繰り出そうとするも

」。

ガアン！ビュオツ、ゴシヤアツ！

「グワツ!？」

「……ふうー、あ、危なかったー。」

グリフィンに向かって突撃をかました影清は、突如飛来した球体の物質に反応できず、そのままシールドエネルギー削り切られてしまった。よって、この模擬戦の勝者はグリフィンとなった。

「……あー、クツソツ！あとちよつとだと思っただけどなあーっ！」

「ははは、ホントだよ。もうあと一、二発分つてところだったんだから。でも、ここまでやられるとは正直思ってたよ。」

「まあ、確かにグリフィンさん相手にそこまでやれたなら上々、かな？あの、さっきのヤツなんだけど……。」

「ああ、アレ？アレはね……うん、見た方が早いか、ホラ。」

「？」

先程の物体について説明を求めた影清に対し、グリフィンは影清の方に手を差し出した。すると――。

パキツ、ガキ、カキツ

「えっ!?!ちよつ、なにそれ?!？」

「フフン、どう？すごいでしょ!?臨海学校の時に、色々調整してもらったんだ♪」

グリフィンの手の周囲がキラキラと輝いたと思ったら、その輝きが掌に収束し、球状の形を為していった。この現象を引き起こしたのは、他でもないテンカラット・ダイヤモンドの特殊武装・ダイヤモンドダストである。前までは、ダイヤモンドの指の修復にしか使えない程の出力しかなかったが、臨海学校の実習の際にブラジル側がそのシステムを改善、ボールを形作れるまで自由に使えるようになった。しかし、強化されたとはいえ、燃費の消耗はあまり改善されておらず、サッカーボールぐらいの球を複数作り出そうとしても、10個程しか生成することができない。ただ、前よりは汎用性が上がっているため、かなり凶悪なことに変わりはない。ちなみに、この球体がものすごい勢いで影清に飛んできたのは、グリフィンがそれを蹴り飛ばしたからである。

「いや、すごくないソレ? いぎってなれば剣とか作れそうだし・・・。」

「あー、そこまではムリかな。このぐらいの大きさでもそれなりにエネルギー喰うしね。・・・とりあえず、ピットに戻ろうか。またあとでね!」

「わかった。じゃ。」

ピットに向かって飛んでいった影清とグリフィン。この後、ダリルやベルベット、虚も交えて反省会を行った。なお、灰楼の整備に四苦八苦して虚の手を借りることになるのはまた別のお話し。

46：何事も適度に

あれから、ダリルやベルベット等と模擬戦したり宿題したりで、夏休みは残り一週間を切っていた。そんな中、影清はどうしているかというところ。

ギユンツ、ギユヒユツ、フォン！

「っ！よっ、ほっ……一旦、やめるか。」

アリーナにて、縦横無尽に飛び回るIS。もちろん、そのISの正体は灰楼、影清の専用機である。まだアリーナの予約は混んでおらず、人も少ない中、影清は朝からずっとISを動かしていた。ちなみに、現在昼前である。

(・・・動きにキレがなくなってきた。ならそういう場面を想定してやってみるかな？でも、まだ色んな軌道開拓できそうだし・・・いや、まだ続けてみるか。)

ISによる飛行を中断した影清だが、満足に休憩しないまま特訓を再開した。先程よりも明らかに動きが悪く、実力の半分も引き出せてないようだったが、それでもやめる気配はなかった。そして、しばらくすると――。

(・・・あ、アレ？視界が、白く――)

次に影清が見たものは、保健室の天井であった。

「・・・起きたかしら。」

「べ、ベルベットさん・・・？」

「寝てなさい、今先生呼ぶから。」

ベルベットは、影清の寝ているベッドの脇の椅子から立ち上がって保険の先生を呼び、その先生は影清に対し軽いメデイカルチェックを行ったあと、保険室で長時間の休養をするよう言い渡した。他に用事があるのか、作業を終えた先生は保険室から立ち去っていった。残ったのは、横になっている影清とベルベットだけである。

「……貴方、気を失うまでずっとISに乗ってたの？」

「い、いや、そうなんだよ、ちよつと限界までやってみよーってなつてさ、アハハ……。」

「笑いごとじゃない。」

普段より数段低い声で返すベルベット。その目は、とても冷ややかなものであった。

「あ……ゴメン。」

「謝罪は要求してない。ただ、どんな理由があれ倒れるまで続けるなんて正気の沙汰ではないわ。私が見つけていなかったら、もつと危ない状況になっていたのをちゃんと理解なさい。」

「……わかった、確かにオーバーワーク気味だったよ。今度から自重する。」

「今後こういうことにならないように。こういう無茶を二度も許すほど、私は甘くないから。」

そう言い残し、ベルベットは保険室を去っていった。それから数分後、廊下から走ってくる音が聞こえ、保険室のドアが勢いよく開けられた。

「ハア、ハア、トオル！大丈夫？」

「グリフィンさん！まあ、ちよつとは休めたし、問題ないかなって。」

「ベルベットからも聞いたけど、IS動かしてて倒れたんだって？危険信号とかなかった？」

「あつた、と思うけど……。」

ISには操縦者のバイタル管理をする機能もあり、これによって危険な状態に陥っていることを知らせてくれるのだ。

「もしかして、それもわからないぐらい体調悪かったの？そういう時は無茶せず休みなよ。」

「……うん、今度からそうするよ。」

「よし。何か欲しいものある？代わりに買ってくるけど。」

「特にないな、水ならここにあるし。」

「そっか、じゃあゆつくり休んで、お大事に！」

グリフィンが去り、再び独りになった影清。布団を腹の辺りまでかけ直し、一旦寝ようとする。

(……ホントは、危険信号あつたし気づいてたけどね。)

くおまけく

Dieジエスト

「テメツ、待ちやがれこのっ！いい加減諦めやがれ!!」

「イイイイヤアアアツ!!ステゴロならオマエの方が有利じゃん!武器拾わせてえええええ!」

「えっ、ちよっ、そんなことある?なんか、臙矢が愉快的な氷のオブジェになっつて「隙あり。」

ドグシヤアアア

幕間：人知れず

立場上、彼のことはよく知っていた。突如現れたＩＳを動かせる男性。元々ＩＳ学園に入学する予定であった私は、彼と同じクラスに配属されることに。そんな私が彼と初めて会話したのは、ＩＳ学園の寮、その廊下でした。

「あの、影清さん、ですよね？」

「え？あ、はい。・・・えっと。」

「初めまして、布仏 虚です。少し、お話しでもしませんか？」

恐らく自分の部屋に向かうところであった彼は、どこか暗い雰囲気を出していた。それもそうだ、クラス代表を決めるために模擬戦をするとはいえ、彼は今までＩＳに触れてこなかった。もし相手が他の一般生徒だったとしても容易くやられてしまうだろう。だから私は彼に指導を持ちかけた。そして、それを聞いた彼の雰囲気は少し明るくなった気がした。

それからというものの、日取りを合わせて勉強会を開き、彼の知識の間違ったところ、足りないところを補っていった。少しばかり、対人戦の心得も教えた。人に教える経験が無いわけではなかったけど、上手く教えることができていくか不安だった。でも、嬉々として勉強する彼の姿は輝しくて、その不安も誤魔化されていった。そして、模擬戦が始まり、先手を取ったダリルさんから猛攻を受ける彼。打鉄の楯によってなんとか耐えているようですが、このままでは負けてしまう。そう思った矢先、彼は予想もしない行動でダリルさんのＩＳに傷をつけた。その後、即座に反撃を喰らって敗北を喫しましたが、あの一撃は彼の努力が無駄じゃないことを証明したと私は思います。帰りに彼を見つけた私は、からかいながらも労いの言葉をかけましたが、疲れているだろうと思つてすぐに切り上げることとしました。も

ちろん反省会は後日に行いました。

ダリルさんとの模擬戦をきっかけに、彼の周りには人が少しずつ集まるようになっていきました。日に日に多忙になっていく彼ですが、それでも私との交流が途絶えることはありませんでした。ダリルさんが彼と関わる際に私も付き添っていることがあるからか、たまたま彼が私と接する機会が多いだけなのか。ただ、私から彼に近づいていくこともありませんでした。私には、この曖昧な関係性がどういったものか上手く説明することはできませんが、少なくとも悪いものではないし、今すぐ崩れさるものでもないと言えます。だからこそ、こんな関係がいつまでも続いたらなと思っています。だけどー。

『ふむふむ、なるほど。虚ちゃんも隅に置けないわね。まさかそんなおもしろい・良い感じのことになってるなんてね♪』

「面白いかどうかは別として、確かに良い付き合いをさせてもらってます。それより、報告したいことが一つ。」

『・・・何かしら?』

「つい先日、道さんの部屋から盗聴器が。」

『へえ・・・、幾つ?』

「机の一つ、ベッドの一つ、シャワー室の一つ、そして照明裏の一つ。計四つが確認できました。他に探しましたが、見つけられたのはこれだけです。回収はしておりませんが、設置されている場所は記録してあります。」

『そう、ご苦労様。今度人を寄越すわ。夏休み中なら人も少ないだろうし、学園長も協力してくれるでしょう。・・・それと、わかっているわね。』

「はい、仕掛けたのは学園の関係者、それも生徒や教師の可能性が。」

『そうね、IS学園のセキュリティなら外部からの介入はしにくいでしょうし、まして男性操縦者の部屋になんてね。もしかすると案外身近にいるかも・・・なーんて♪虚ちゃんは今まで通りやることやって学園生楽しんでくれればいいから、犯人探しは私達に任せなさい。』

「し、しかし『休むことも仕事よ。当主命令。』

「・・・わかりました、お嬢様。」

『よろしい。じゃあ、また今度ね。一旦帰国するから、その時にお茶でもしましょう。』

プツツ ツー、ツー

「・・・・・・・・ふう。」

いつまでも続くと思つてた日常。それは、ちよつとの出来事で崩れ去つて二度と戻らないものになるかもしれない。だからこそ、私は”戻りたい”と思わなくていいように、そんな未来にならないように行動しなければならぬ。ただ、その未来に”いつも”から何も失われることがないように願うのは、ワガママでしょうか？

学園祭編

47：もう全部アイツ一人でいいんじゃないかな？

放課後、一組の教室にて、影清とダリルは机を挟んで向かい合っていた。

「—えっと、ホントに大丈夫？僕、マナー的に確認できないんだけど・・・。」

「問題ねえよ。間違ってたらオレも責任取ってやる。」

「そ、そう？じゃあ採寸はこれで良いとして、道具類は・・・。」

「上級生が使ってたヤツがあるんだと。大半はそこから調達しよっぜ。」

「あ、はい・・・。」

夏休みが明けてから数日後、影清等一組は学園祭へ向けての準備を進めていた。現在、ダリルが纏めてきた資料を元に当日使用する衣装や道具等の申請内容を確認しているのだが―。

（僕、殆ど何もしてないんですけど・・・。いや女子の採寸は流石にマズイけどさ。もっとう道具とか内容とかやれることあったよなあ・・・。）

「ま、ざっとこんなもんか。何か意見あるか、クラス代表？」

「いや、ないけどさあ・・・。なんか、ダリルさんに全部やらせちゃったみたいで申し訳ないなって・・・。」

「なんだ、そんなことかよ。気にすんなっての。そもそも、オレが提案したヤツだしな。じゃ、後は頼むぜ。」

影清に資料を預けたダリルは教室から去って行った。一方、影清は教室から職員室へと直行し、山田先生に出し物について纏めた資料を提出した。

「わあ、良くできてますね！間取りもちゃんと考えられていますし、何より人の分け方が上手です！影清君が考えたんですか？」

「あ、いえ、ダリルさんです。自分から言い出しただけあって、結構詳しくかったんですよ。というかソレ、殆どダリルさんが作ったものなんですけどね……。」

「そ、そうなんですか。凄いですね、ダリルさん……。ええつと、とりあえずコレで申請の方は大丈夫です。他に足りないものがあつたら、また追加で申請できますからね。」

「はい！……にしても、以外でしたね。山田先生なら、学生にはまだ早い！的なこと言うと思つたんですけど……。」

「べ、別にそこまで厳しくありませんよ？去年だってやってましたし、一種の社会勉強でもありますから。それに、現金を元手にするわけでもないの、ただの娯楽として楽しめますからね！」

「そ、そうですか……。じゃあ、そろそろ帰ります。お忙しいとご失礼しました。」

「いえいえ、また何かあればいつでも来てくださいね！なにしろ担任ですから！」

職員室を後にし、寮へ向かう影清。帰路につく彼の視線は、手に持った資料に向けられていた。

「・・・よし、頑張つて成功させるか―

―カジノ。」

48：なんかしらのゲームで異常に強いと逆に引かれる

「―それじゃ、人にぶつからないよう気をつけて運ぶように。学園祭頑張つてね。」

「はいーありがとうございます、フランシイ先生！」

職員室にて、上級生担当の教員であるエドワース・フランシイから学園祭で使う備品を譲り受けた影清は、一組の教室へと戻っていった。

「戻りました。．．．って、何してんの？」

「おう、カゲキヨ。今、アレだよ、場所決め。」

「いや、僕の目にはトランプで遊んでるようにしか見えないんだけど．．．。」

備品を持って戻った影清が見たのは、一組の面々かトランプを広げてゲームをしている光景だった。

「その通りだよ。どうせやるなら強いヤツがやった方が良さだろ？あとでオマエも混ぜてやるから拗ねんなよ。」

「いや、別に拗ねてないけども．．．。とりあえず、終わったなら先に備品の方手伝つてよ。」

「おう、すぐ行く。」

そういうと、ダリルは手に持ったカードを床に置き、影清についていった。

「え、ちよつ、ダリル！途中で抜け……って、ろ、ロイヤルストレートフラッシュ!!?」

「ウソ!?あ、ホントだ!」

「こりゃポーカーはダリルで決まりだね。もう10連勝ぐらいしてるし。」

(……やばコイツ。)

「んで?さっさと見せろよ。」

「あ、ハイ。」

ダリルの戦績に戦慄を覚えながらも、影清は袋から備品を次々と取り出し机に並べた。

「どれどれ、チップにサイコロにルーレットに……ウサミミ?なんでこんなもの入ってんだ。」

「知らない……。まあ、良いんじゃない?バニーガールとかカジノいそうだし。」

「いやいねえからな。……いねえよな?」

会話しながら備品を確認する二人。とりあえず欲しいものは全て揃っていたようだったので、ダリルは影清を連れて別のゲームを始めた。結果だけいうと、影清の担当はブラックジャックになった。それ

以外の戦績はまあ、うん……、ご想像にお任せします。

「よーし、今日はこんなもんだな。そろそろ解散しても良いんじゃないかねえか?」

「そうだね、まだ結構余裕あるし、このペースなら衣装届く頃に終わりそうだしね。じゃあ、今日はここまで!お疲れ様!」

「おつかれ。」「また明日ねー!」「もう一回、もう一回だけ!続き部屋で良いから!」「寝るまで続きそうだから却下。」

「……さて、じゃあ僕も帰りますk「いや、まだ仕事あるぜ。何の為にゲームしてたと思つてやがる。」

「……すぐ終わる?」

「別にシフトまで決めるわけじゃねえし、すぐ終わるだろ。さっさと座れ。」

寮に向かおうとするところをダリルに引き止められ、ゲームごとの人数振り分けを考えることになった影清。幸い誰がどこをやるかはある程度決まっていたので、単純に名前を書き入れるだけの作業であつた。

「そーいやカゲキヨ、一つ気になつてたんだけどよ。」

「なに?」

「オマエ、彼女いたりすんのか?」

「いないけど。」

「即答かよ！じゃあアレだ、好きなヤツの一人や二人ぐらいいるだろう？」

「それもない。ていうか、生まれてこの方そういう経験ないかな。」

「なんだよ、つまんねえな。・・・なら虚はどうだ！グリフィンやベルベットでもいいぜ？」

「いや、だからそういうのはないって。別に嫌いってわけじゃないけどさ。・・・はいコレ、問題無い？」

「・・・ま、こんなもんか。カゲキヨ、オマエこの後アリーナ行くだろう？付き合うぜ。」

「わかった、とりあえず荷物置いてからで。場所、第一ね。」

作業を終えた影清は寮へ荷物を置きに行き、アリーナにてダリルとISの特訓に向かった。その後は特に何事もなく一日が終わっていった。

49：ルールとマナーを守って楽しくデュエ（ry

学園祭当日、すでに学園内は外部の人間で賑わっており、それは影清等一年の教室も例外ではなかった。

「・・・虚さん、ちよつといい?」

「はい、なんででしょう?」

「ポーカーのとき、ヤバくない?客吸われてる気するんだけど・・・」

・・・確かに一組の教室も賑わってはいた。ただ、ダリルが担当するポーカーに人が集まっているため、必然的にそれ以外の場所には人が来ていないのだ。

「そ、そうですね・・・。確かに、アレなら人集まりますね・・・」

「え、何?なんでそんな顔引きつってるの??」

視線を逸らし、顔を引きつらせている虚。影清は気づいてないが、只今ポーカーはイカサマ合戦と化している。最初はある客がほんの出来心で仕掛けたのだが、それに対しダリルもイカサマで対応し始めたのだ。あまりの応酬にもう回りも咎めようとしてないし寧ろ盛り上がってしまったため、どんどんギヤラリーが集まって収集つかなくなっている。何やってんだか。

「えーっと、どうする?もう二人でブラックジャックでもし「すまない、取り込み中だろうか?」

あまりのヒマさに影清は虚に二人でブラックジャックするか誘ったのだが、そこに白髪の人物が尋ねてきた。

「!!あつ、すいませんお客様。こちらブラックジャックとなります。ただ、他にお客様がいらつしやらないので一對一となつてしましますが、どうなされますか？」

「いや、構わない。ルールを説明してくれるだろうか？」

いきなりだが、今回使用されるブラックジャックのルールやゲームの流れを説明させて頂こう。

1, 最初にディーラーの宣言でチップを賭ける。
2, ベットが完了したら、ディーラーはプレイヤーにカード2枚を表向きで配り、ディーラーは最初に引いたカード1枚を裏向きにしてもう一枚のカードを表向きにする。

3, プレイヤーは手札が21以上になるまでカードを追加することができる。21を超えたら失格。なお、手札2枚の時点で賭けるチップを倍にしたり、勝負を降りることができ、チップを倍にする場合はカードを1枚しか追加できず、降りる場合は賭けたチップの半分を失わなければいけない。

4, プレイヤーがカードの追加を終えたら、ディーラーは裏向きにしたカードを公開し、カードの合計が17以上になるように引き続けなければならぬ。

5, ディーラーがカードの追加を終えた時、ディーラー以上21以下のカードを持つプレイヤーが勝利。ディーラー以下21超えのプレイヤーは敗北となる。なお、ディーラーが21以上の場合は21を超えなかったプレイヤー全てが勝利となる。

他にも基本的なルールでJ・Q・Kは10扱い、Aは1と11を兼任する擬似ワイルドカードというものがあるが、これ以上は割愛させてもらおう。

席についた白髪の女性にルールを説明し終えた影清は、チップを賭けたのを確認してカードを配った。

「ふむ……。失礼、チップを倍にしてもよろしいだろうか。」

「構いませんが、その場合カードの追加は1枚だけとなります。それでもよろしいでしょうか?」

「ああ、構わない。これ以上は引かないからね。」

自信たつぷりに宣言する白髪の女性。それもそのハズ、手元のカードはQと8と、かなり良い。

「……。では、裏向きのカードを公開させて頂きます。」

ペラッ

（……。Aはいいんだよ。問題はもう一枚が5ってことなんだよなあ……。）

影清が裏向きにしていたカードはA、つまり5が表向きになっている状態だった。この場合、Aを1として扱うと6、11として扱うと16なので、影清はどうあっても1枚引かなければならない。更にいうと、白髪の女性のカードはQと8、つまり18なので、17に引つ掛からないように影清が勝つには3か4、もしくはそれにプラスして10・J・Q・Kを引く必要がある。今述べたのは考えうる限り確率の高い方法だが、他にも5と9を引き、それに対応して4と9を引いても勝てる。勿論後者の方がリスクが高く、場合によっては即失格となる。

しかし、勝ちの目が無くなるよりマシンではあった。影清は新しくカードを引き、それを確認することなく表向きにカードを置いた。

（……。って、Aかよお!? てことはこれで17、いや7か。どーするこ

れ・・・。)

影清が引いたのはAのカード。つまり、影清は二つのAを1として扱わなければ敗北となってしまう。そのため、影清はどちらのAも1に換算しなければならぬ。

ちなみに、内心パニックっている影清だが、表情に出ることはなかった。ただその代わり、手の仕草にその心情が反映されていた。これには白髪の女性も苦笑していた。

そんなわけで再びカードを引いた影清。果たして結果は――？

「・・・えー、5とA二枚とJで僕のスコアは17。ということで、僕の負けですね。」

あっさり負けた。

「ふふ、僕の勝ちだね。もう一戦お願いしてもいいだろうか？」

「良いですよ。ディーラー代わりましょうか？」

「いや、そのまま結構。あの男性操縦者と一対一になれる機会なんてそうそうないだろうからね。」

「・・・では、賭けるチップを。」

「ああ、すまない。触れてはいけない話題だったかな？」

「いえ、この場ではそういう話は受けつけてないだけなので、お気になさらず。」

一応影清は世界に一人しかいない男性IS操縦者であるため、様々な人間が外部からでも足を運べる学園祭を利用し、コンタクトを取ろ

うとしてくるのだが、影清はそれらを上手く捌いていた。何人かしつこい客もいたが、それには虚が助け舟を出して追いついていった。

「いや、そういうわけにもいかないな。知らずとはいえ礼を欠いたことに変わりはないからね。．．．ふむ、ではこちらの身分を明かすでしょう!」

「あ、いや、そこまでしなくても別に．．．」

「そうか、ならこちらのケジメということで名乗らせてもらおう。

—オランダ代表候補生、ロランツィーネ・ローランデイフィルネイだ。呼びにくいならロランでも構わないよ。」

50：言葉選びは慎重に

その後、ロランとのブラックジャックを終えるとちょうど交代時間となったため、影清は制服に着替えて他クラスの出し物は散策し始めた。

「—というわけでここが最初。」

「へえー、そうだったの。あ、コレ道具ね。」

影清が訪れたのは4組、グリフィン等のクラスであり、仲が良いと
のことでグリフィンが接客に当たった。グリフィン等の出し物はス
トラップやキーホルダーなどのチャーム作りで、そのために必要な道
具をグリフィンが持ってきた。

「ありがとう。にしても、チャームかあ……。グリフィンさん、作っ
たことあったりする？」

「もちろん！よく子供達に作ってたから、結構得意なんだよね♪」

「なるほどね……。あんまり得意じゃないし、なんか歪なものできそ
うだな……。」

「大丈夫大丈夫。何のために私がい付いてると思ってるの？ちゃんと
レクチャーしてあげるから、ガンバレ！」

グリフィンの指導により、チャーム作りを進める影清。苦勞するこ
と15分、漸く作業が終わったようだ。

「よっし、完成！」

「おつかれ、ところでそれなに？花？」

「簡素過ぎる気もするけど、一応チューリップ。昔、母さんが初めて贈ってくれた花でさ。ああ、配色とか花びらの枚数もその時貰った色と本数にしたんだけど……。」

影清が作ったのは花卉4枚のチューリップ。少し歪ではあるが、そう見えないこともない。花卉ごとに色が違い、それぞれ白・ピンク・オレンジ、そして黄色となっている。

「そっか、母さん、かあ……。」

「グリフィンさん？」

「ううん、なんでもない。じゃあ、私次のお客さんの接待しなくちやいけないから。」

「ああ、わかった。手伝いありがとう。頑張って！」

チューリップのチャームをポケットにしまい、4組の教室を後にした影清。そして、そのまま3組へと向かっていった。

「うわあ、すごいなコレ。こことかどうなってるんだ？」

「来たのね、トオル。」

「あ、ベルベットさん。いや、まあ、知り合いのいるクラスってのもあるけど、美術作品って聞いたら一目見ようかと。」

4組の出し物は美術作品の展示、生徒の作ったものが飾られていた。絵や像など様々なものがあり、影清はそれらを細かいところまで

鑑賞していた。

「ホントにどれも良くできてるよ。このウサギの彫刻も中々カワイイし。・・・あつ、そうだ。ベルベットさんの作品ってどこにあるの？」

「・・・・・・・・秘密よ。」

「そっか、まあ、いいけど。・・・って、ん？あの子は・・・。」

他に気になる作品を探していると、見覚えのある人影が目に入った。その人物もこちらに気がついたようで、こちらに近づいてきた。

「ああ、誰かと思えばカゲキヨじゃないか！キミもこの素晴らしい芸術作品の数々を見に来たのかな？」

「あ、まあ、そうだけど・・・。」

「・・・・・・・・まさかとは思うけど、貴女、オランダ代表候補生の？」

「おっと、これは失礼。先にこちらに挨拶をすべきだった。非礼を許してくれ。オランダ代表候補生、ロランツィーネ・ローランディフィルネイ、ロランで構わない。以後お見知りおきを、ギリシャ代表候補生、ベルベット・ヘル。」

「えっと、知り合い・・・じゃないよね？」

「ええ、お互いデータの上でしか知らないはずよ。ここまで仰々しい喋り方をする人物だとは思わなかったけど。」

「その通り。IS学園にいる以上その美しい顔を拝むことになるとは思っていたが、男性操縦者も一緒とはね。同じ学年にアメリカやブラ

ジルの専用機持ちもいると考えると、中々壮観だね。」

「・・・確かに。1年だけでも専用機持ち4人もいるよね・・・。まあ、僕の場合他3人に比べれば胸張って言えるようなことじゃないけどね。」

「なら相応の結果を出せばいい話だろう？折角実力を伸ばすのに適した環境にいるんだ。遅くとも3年に上がる頃には立派なIS操縦者になれるさ。」

「・・・そうだね。焦らず頑張ってみるよ。」

「水を差すようで悪いけど、これ以上長くなるなら移動をお願いしたいのだけど。客は貴方達だけじゃないのよ。」

「ああ、すまない。少し熱くなってしまったようだ。まあ、どちらにせよ話は今ので終わりにしようと考えていたし、ナイスタイミングではあるかな？」

「注意された時点でアウトだと思っけどね・・・。じゃあ、そろそろ行くよ。ベルベットさんも頑張って。」

こうして3組を後にした影清とロラン。この後互いに別れを告げ、それぞれ別の場所へと向かって行った。二、三箇所回って1組に戻った影清は、学園祭が終わるまで業務をこなし続けた。

「・・・よし、終わったあー！」

「おう、お疲れさん。」

ピトッ

「うおひやあつ!？」

椅子に座ったまま伸びをしている影清の首に、冷えた缶ジュースが押しつけられた。下手人はもちろんダリルだ。

「ぷっ、ククツ。やっぱいい反応するよなオマエ。」

「いやホントにビックリしたからね!? 転げ落ちなかったのが不思議なぐらい!」

「まあ、そんなに怒んなよ。ホラ、オレの奢りだ。」

「・・・ありがとう。」

「おう! ま、この後打ち上げあるし、缶ジュース一本ぐらいどうつてことないだろうけどな。」

「そんなことないよ。普通に嬉しいって。」

「ハッ、そうかよ。・・・で、どうだ感想は? クラス代表さんよ。」

「いやー、大変だったよ。接客もそうだけど、勧誘だとかそういうのも多かったし、虚さんにはホントに助けられた。まあ、楽になったこともあるけど(ボソツ)」

「ん? 最後なんて言った?」

「い、いや、なんでもない!」

(ヤツベ口に出てた・・・! 楽になったことなんて、

—コイツの格好がやっと胸見えないものになったってことだけなの……!」

今更だが、ダリルの衣装は制服含め胸元が見えるものばかりだ。巨乳なのも相まって、影清は他の女性と比べてより視線に気をつけてダリルと関わるようにしているのだ。

これ以上問い詰められるわけにもいかないため、影清はなんとか興味を散らそうとした。

「そ、そうだ!ダリルさんこそ大変じゃなかった?ほら、ポーカー大盛況だったし!」

「あー、そうだな。アレは流石に疲れた。ま、その分ふんどくつてやったけどな!で、さっきの話だけ「ごめんやること思い出した!!」

ダッ!

「あつ、ちよつ、待て!」

策が失敗したことにより逃走を選んだ影清。ダリルも追おうとしたが、影清が勢いよく立ち上がったことで倒れた椅子により阻まれてしまった。この日はなんとか逃げ切れたが、ここから数日間、この話題を振られるたびに逃げ出すことになったのはまた別のお話。

キャノンボール・ファスト編

51：失敗は成功の元

学園祭から数日後、第一アリーナではISの訓練を行う生徒で賑わっていたが、その多くが武装の扱いではなく、飛行訓練を行なっていた。影清もそんな生徒の一人であり―。

「やべっ、失敗っ!!」

ギユウオオツ！ ビタツ！

「あ、あぶね〜、またぶつかるかと思った……。」

「いや普通なら全部激突してるからね？そんなことができるのトオルぐらいだって……。」

現在、影清は瞬間加速の練習をしていたのだが、スラスタ―に溜めるエネルギー量の調整がうまくいかず、不発や暴発が多発していた。しかし、暴発はすれども蜃気楼によるサポートと影清自身の姿勢制御能力の高さも相まって、どれだけ勢いがあってもどこかにぶつかる前に停止していた。ちなみに瞬間加速が成功したとしてもムリに軌道を変えようとすれば大ケガするし、それを更に危険度の高い暴発で完全停止を試みれば再起不能は避けられない。

……のだが、影清はケガ一つしてない。それに対し、グリフィンは少し呆れていた。

「まあ、こんなことばかり上手くなってもしょうがないよね。……いつぞ暴発しまくって攪乱するとか？」

「ソレ、やったら怒るよっ。」

「あ、スイマセン。」

割とバカなことを言い出した影清に、グリフィンはガチトーンで応えた。これには影清も蛇に睨まれた蛙のように萎縮した。

「はあ、そんな急造で修得しても、いざって時に使えないと思うよ。今回は諦めた方が良くないんじゃない？」

「・・・わかった、そうするよ。ってなると、やっぱり武器の扱いかな？あんまり妨害するのもアレだと思ったけど。」

「いやー、そこは気にしなくて良いんじゃないかな？別にルール破ってるわけでもないんだし。」

「それもそうか。でもそろそろ時間も迫ってきたし、軽くやっておくかな。」

そう言いつつ 臙矢と夢月を取り出す影清。結局のところ、取り回しを確認するだけで終わり、アリーナを後にした。その後、ISスーツから制服に着替えた影清はアリーナの出口にてグリフィンと落ち合い、共に寮へと向かって行った。

「そういえばさ、ISをスポーツって言い張るぐらいなら、最初からレースとかにした方が良かったと思うんだけど、やっぱりそこんどこ難しいかな？」

「多分無理だったと思う。白騎士事件のインパクトがあまりにも大き過ぎたし、その影響もあって兵器として見られているからね。まあ、世間的にそういう認識は避けたいハズだから、色々工夫はしてると思うよっ。」

「なるほど、じゃあ僕達が今度参加するキャノンボール・ファストもその一環ってことになるかな？」

「まあ、そうなるね。」

やっと出てきたので、ここでキャノンボール・ファストについて説明させてもらおう。察しの良い読者もいるだろうが、キャノンボール・ファストとはISを使ったレース競技のことである。ただ、普通のレースとは違って妨害行為が許されているため、ある意味白熱したレースとなる。

今回はIS学園の行事として行われるが、使用する会場はIS学園外にあるアリーナであり、約2万人が観戦可能なほど巨大なものである。

「じゃあ、部屋ごっちゃだから。またね。」

「うん、また明日！」

寮に着き、グリフィンと別れた影清は、特に何事もなく過ぎ、一日を終えた。

52：白熱する試合×テンション高い実況Ⅱベスト マツチ!

キャノンボール・ファスト当日、IS学園から市外の特設アリーナへと移動した影清等専用機持ちは、ISスーツに着替えてレースの様子を見守っていた。

「うわ、やっぱ3年にもなると瞬間加速の精度高いな。今のところ全員ミスってない。」

「だろうな。今参加してんのは先輩の中でも指折りの実力者が多いんだろうよ、それもキャノンボール・ファストのな。その証拠に後ろのヤツの方が武装の扱いは上手いぜ。」

「そうね、今出場してる人の中でもまともにやって勝てるのは半分、といったところかしら。だけど、勝利条件そのものが違うもの。差がついても何の不思議もないわ。私達にとっても良い教材になるわね。」

「ま、私達の場合、専用機の性能も関わってくるけどね。その分駆け引きも必要になってくるし、結構良い勝負になるんじゃない?」

影清含む専用機持ち4人はモニターを見ながら談笑してるものの、緊張感は張り詰めたままであった。それぞれは、今見てるレースが終われば、次は自分達の番なのだから。

「おっと、もう最終ラップか。時間はあるが、準備するに越したことはねえな。」

「アレ? ダリルもう行くんだ。私は最後まで見てくけど。」

「まあな、ベルベットにカゲキヨ、オマエらはどうする?」

「私もグリフィンと一緒に。機体のチェックも殆ど終わらせていることだし。」

「僕も大丈夫かな?朝一で倉持技研の人に整備してもらったし・・・。」

「なんだオレ一人か、連れねえなあ。ま、だからどうってこともないけどな!じゃ、また後でな。」

そういつてダリルは一足先にこの場を去っていった。残った影清等もレースを見届け、最後の調整をしにピットへ向かって行った。

「武装よし、スラスターよし、蜃気楼もオールグリーン。あ、あとコレか。急に追加してくるもんだから忘れるところだった・・・。一応全部問題なしと。」

『出場する選手の皆様は、準備ができ次第スタートラインにお集まりください。』

「・・・よし、行くか!」

スラスターを噴かしてピットからアリーナへと飛び立つ影清。スタートラインにはすでにダリルの姿があり、影清の後からグリフィン、ベルベットと続いて出場する選手がここに揃った。それから暫くして、テンションの高いアナウンスが流れ始めた。

『さあ、IS学園主催のキャノンボール・ファストも残すところ半分となった!折り返し地点を務めるのは期待の新人、一年の専用機持ち達だー!!』

ワアアアア!!

『まずは第一コーナー、ダリル・ケイシー!!専用機はヘル・ハウンド!銃弾の雨と近接戦闘で盤面を掻き乱すこと間違いなし!』

お次に第二コーナー、グリフィン・レッドラム!!専用機、ダイヤモンド・ダスト!その強大な手とダイヤの如き硬質物体は崩せるものなのか!

第三コーナーはベルベット・ヘル!!専用機、ヘル・アンド・ヘヴン!脚部のポッドから放たれるミサイルと氷結能力が生み出すは正に地獄絵図!

そして第四コーナー、影清 道!!専用機は灰楼!このメンバーの中で唯一代表候補生ではなく、女性ですらない!世界にただ一人の男性操縦者だ!全身に取り付けられたスラストで妨害の嵐をどう乗り越えるか!

・・・長らくお待ちせしました。一年生専用機持ちの部、まもなく開始となります!!』

アナウンスの言葉を皮切りに、上空に浮かぶシグナルに明かりが灯った。それと同時にいつでも飛び出せるよう構える影清達。ちなみに、武装は初手を悟らせないため展開していない。シグナルが進んで行き、一番下の色違いに差し掛かった。

ピーーーー!

ギユオオオン!ギユオ、ギユオオン

(こいつ、幽牢っ!)

ジャコツ! ガコン! ジャキツ!

スタートと同時に幽牢を取り出す影清。それと同時にダリル、グリ

フインは銃を構え、ベルベットはミサイルポッドを開いた。他3人より出遅れた影清は、幽牢を前に構えようとするも、ダリルが反転して影清に銃弾の雨を浴びせた。

バババババツ！

「ぐっ…このっ！」

バシユウ！ボオン！！

『おーっと、開幕からもの凄い弾幕戦だー！だが道選手、ダリル選手の弾幕のせいか地面に向かって撃ったぞー！?』

幽牢に搭載された特殊弾をがむしゃらに撃とうとした影清だが、ダリルの放った銃弾によって砲身をうまく上げれず、地面に向かって放つことになってしまった。

モクモクモクモクモク

『おっとお、いきなり物凄い煙があ!?!これは道選手の仕業かあ!?!』

影清が幽牢に装填したのは煙幕弾。着弾するなり大量の煙を散布するものだが、特別ISによる探知を妨害するようなものはない。あくまで姿を紛わらすためのものである。これにより幸か不幸か、影清の次の動きは捉えられにくくなった。これ以上影清に構っても仕方ないため、ダリルはベルベットが上空に放っていたミサイルを避けつつ、グリフインとベルベットが互いに牽制し合っている中に割り込んだ。

バババババツ！

「!くっ・・・。」

「!うお、つと。なんだ、もう来たんだ。」

「まあな。あのヤロウ、自分の放った弾に翻弄されてるみたいだな。」

「そう、なら貴女はコレで遊ぶといいわ。」

ガガコン!

「余所見は、ダメだよっ!」

パキガキガキ、ガアン!

ミサイルポッドを全開放し、ダリルを中心にグリフィンを巻き込む形で照準をつけるベルベット。しかし、それをおめおめとやらせるほど甘くはなく、グリフィンがダイヤによるサツカーボールを生成し、それをベルベットに向けて放つことで妨害した。が、ベルベットは避けると同時にミサイルをばら撒き、痛み分けという形になった。

「くっ・・・!」

バツ　ボボボン!

「うおおっ!」

「くっ、外したか・・・!」

『凄まじい攻防戦だ!流石は代表候補生、一步も譲らな〜い!』

激しい銃撃戦の末、距離が離れた3人。現在トップはベルベット、そしてダリルとグリフィンが追従する形になっている。いち早く体勢を立て直したダリルは、近くにいたグリフィンを引き離そうと銃を構えるも、横から襲い来る蛇腹剣により妨害され、直撃は避けたもののカスリはした。

ジャララア!

「!?チツ!」

ギンツ!

「ああクツソ! いったと思ったのに!」

「つたく、ヤなタイミングで来るなオイ! カゲキヨオ!」

先程の蛇腹剣はもちろん影清の放ったものであり、煙から脱出したあと、流れ弾を避けながら隴・二の矢を展開、分割し、思い切り振りかぶってその刀身をダリルにぶつけたのだ。その後、隴・二の矢をしまつて新たに夢月を取り出した影清は、射出装置から伸ばされるワイヤーを掴み、攻撃と防御どちらも実行できるよう身構えていた。

『おーつと、ここで道選手が追いついた! ここからまた荒れに荒れるかー!?!』

後方で睨み合う影清、ダリル、グリフィン。先頭にて、いつ追いつかれてもいのように弾幕を準備するベルベット。気づけば1ラップ目も終わる頃、果たしてレースの行方は……!

53：意識を複数に向けるのは難しい

空を切る、火花が散る、爆炎が襲い来る。参加者たった4人のキヤノンボール・ファストだが、先のレースとはまた違った盛り上がりを見せていた。

ボゴオン！ズドオン！

「ぐっ・・・！」

「よお、また逆戻りだな。」

「言ってる場合じゃないと思うけどね！2周目入ってからずっとコレだし。」

影清、ダリル、グリフィンは激しい競り合いを繰り広げつつも、他2人の隙を見出して前に躍り出るが、トップを走るベルベットの弾幕により上手く近づけないというある一定の構図が出来上がっていた。

「だからといって協力しようにも、そんな素直じゃないしね。ねえダリル？」

「ハハハ、そりやお互い様だ、ろっ！」

ババババツ！

『三つ巴の激しいデッドヒート！が、しかし！その健闘も虚しく悉くベルベットに阻まれてしまっている！もうすぐ3周目、このままベルベット選手の一人勝ちとなってしまうのかー!?』

スタートラインが見え、他3人の動向を注意しつつギアを上げて突

き放そうとするベルベット。それと同時に後方でも動きがあった。

「・・・チツ、あんまやりたくなかったが、このまま好きにさせるのも癪に触るな。」

『なんだ？ダリル選手、後ろに下がって・・・あ、アレは、ライフル銃だ！まさかとは思うが、ベルベット選手を狙撃するつもりかー!?!』

ジャコンツ！

影清とグリフィンが盾とナツクルで攻防戦を行ってる間に、ダリルは後ろに下がり、スナイパーライフルを展開した。その標的は勿論ベルベットだ。

「さあて、避けてみな。お得意の障壁を使ってもいいぜ？役に立つかは知らねえけどなっ！」

バシユンツ！ガアアン！

「!?なっ・・・！」

「まだまだいくぜ。」

バシユンツ！バシユンツ！

「くうっ！」

パキパキパキ

バキイイツ、ガシャーン！

『おーっと、ダリル選手の狙撃がベルベット選手に命中！氷の壁すら砕かれるとなると、かなり厳しそうだ！それにしても、全く速度を落とさずに狙撃を成功させるとは！恐るべしダリル・ケイシー！』

ダリルの狙撃の対応に追われたことで、弾幕の用意が難しくなり、スピードも落とさざるを得なくなったベルベット。それを見たダリルは瞬間加速をして一気に追いつこうと前方を確認するも、戦況はすでに変化していた。

ギギ、ギギギギ

「んぐぐぐぐぐつ！あーもう、硬すぎだつてこれえ！」

「お、オイオイ、何してんだ？」

ダリルが見たのは、ダイヤモンドの穴に通されたワイヤーを引きちぎろうと必死になっていたグリフィンの姿であった。ダリルが狙撃を試みようとしたあと、影清はグリフィンのナツクルを避けながら射出装置から手を離し、攻撃に使用しなかったナツクルの方にそれを通したのだ。そのままもう片方のナツクルの穴に通して巻きつけるというのを複雑な手順で行ったことにより、そうすぐに解けないようになっていた。力技で外そうにもワイヤーの強度が思いのほか高かったので、割と早く諦めた。

ちなみに、それを行った影清はベルベットに追いつこうとしていた。

ポオン！

「！・・・くっ！」

ジャキ！ババババババババ！

ベルベツトが体勢を直す前に、影清は幽牢から特殊弾を放ったが、それがベルベツトに当たるとはなかった。それを確認するなり幽牢をしまつて接近を始めた影清に対し、体勢を立て直したベルベツトはミサイルを展開せず2丁のサブマシンガンによる銃撃を開始した。それを影清は臙・二の矢を展開して、その腹で銃弾を受けることにより対処した。

『さあ、遂にベルベツト選手に追いついた道選手！ミサイル程の火力はないものの、盾を失った影清選手にはサブマシンガンの弾幕でも相当キツイようだー！』

ギギギギギンツ！

「うっ、くっ……！」

(あと、あと少しだ！あと少しで……！)

ガゴン！

「これでど……？」

モクモクモクモク

防戦一方の影清にミサイルを撃ち込もうとポッドを開いたベルベツトだが、周囲に煙が充満していることに気づく。これは先程影清が放った特殊弾によるものであり、その位置はレース序盤に着弾した場所とほぼ同じであった。

(今だ!!)

ピッ

バシユー、バサツ！

「なっ、コレは！」

影清が隴・二の矢の腹を支えていた手にはスイッチが握られており、それを押すと同時に煙の中から網が飛んできてベルベットを捕らえた。この網は幽牢の特殊弾に使われるものと同じものであり、力技ではそうそう破られないようになっていた。

ここで一つ解説を入れよう。まず、レース序盤に影清はダリルの妨害によつて真下に煙幕弾を撃つてしまつたが、影清は元より下方向に撃つつもりであつた。この行動は後方から姿を隠して奇襲する、という目的ではなく、トラップを仕掛けるためのものであつた。このトラップは今朝倉持技研に來た影清にヒカルノが渡して來たものであり、その性能は幽牢に装填できる特殊弾一発を詰めて、対応するスイッチを押すことでそれを発射するといったものだ。ちなみに低性能ながらステルス機能も備わっている。これを設置するのを悟られにくくするために煙幕を使う必要がある、見事ベルベットに命中させることができたのだ。

それと、ベルベットに命中した要因としてベルベットが最初から今までトップを取っていたということもある。トップである限り他からの妨害は避けられず、その対応に追われ続けたベルベットは序盤に仕込まれたトラップに気づくことなく自分の戦法を押し通してしまい、この結果を招いたのだ。

『な、なんと！煙幕から網が出てきてベルベット選手をひつ捕らえたー!!道選手、まさかここまで計算済みだったというのかー!!』

（あ、すいませんアナウンスさん。半分まぐれです！ダリルのスナイパーライフルとか完全に予想外だったんで！ともかく、面白いぐらい

上手くいったのは確かだ！このままゴールまで―。）

ボオオオオオオツ！チリチリチリ

「!?・・・はっ?」

『お、おっとお!?! ベルベット選手の機体から火が出て網を燃やし尽くしただとお!!?! 一体これはどういうことか―!?!』

「ヘル・アンド・ヘヴンの能力は簡単に言えば分子制御。これによって空気を冷却して氷を作り出しているのだけど、今使ったのはその逆。空気の燃焼で炎を発生させた。ただそれだけのことよ。」

「ま、マジか、それは盲点だった・・・。」

「もうエネルギーもミサイルも残り少ないけど、どのみちすぐ終わるわね。さっきの分、たっぷり返してあげるわ。」

そういつてベルベットは半回転しながら、後方から迫って来ていたダリルとグリフィンにマイクロミサイルを、もう半回転して前方の影清にミサイルを放ち、そのまま前に進みながらハルバードを振りかぶる。

ボボボツ！バシユウウウ！

「うおっ!?!」

「うわっ、ととど。」

「く、うっ、うおおっ!」

「フンッ！」

ブオツ！

「っだああ！」

グンッ！ブオンッ！

「ハアアアッ！」

ギユオオオオオン！

「あつ、ヤベツ！」

『ここでベルベット選手の瞬間加速！一気にトップの座を奪い返したー！』

ミサイルの次に襲い来るハルバードを避けた影清だったが、ベルベットに背中を、頭を地面に向けた体勢になってしまったため、反撃しようにもできず、ベルベットに瞬間加速を使う隙を与えてしまった。それを追おうとするも、影清の上部に影が迫りー。

「おおりやあああああつ!!」

ゴオオツ！ドガシヤアア!!

「ごあつ!？」

ヒュン、ドガツ、ガツ！

『グリフィン選手の協力な一撃が道選手にヒート！だが道選手、

どうってことないと言わんばかりに体勢を立て直している！』

後ろから猛スピードで迫って来たグリフィンは、ダイヤモンドクルによるスレッジハンマーを影清の背中に叩き込み、それをモロに喰らった影清はもの凄い勢いで地面に墜突した。幸い、蜃気楼により衝撃を緩和したため、次に地面に着く時に上手く足を合わせ、すぐに飛ぶことに成功した。しかし、ここまでされてはもう手遅れであった。

『ベルベット選手がゴール!!続いてグリフィン選手もゴールインだー!』

すでに最後のストレートに差し掛かっていた。トップスピードは出していないものの、影清もゴールにー。

ギョーンツ!!

『おーっと!ダリル選手、瞬間加速でギリギリ道選手を追い越しゴールイン!一年専用機持ちの部、これにて終了だー!』

(ーああクソ、あとちよつとだったんだけどなあ・・・)

最後の最後でダリルの瞬間加速によりビリとなった影清。この後、ダリルや虚なども合流したが、悔しさを見せることなく、キャノンボール・ファスト全てのレースが終了するまで一緒に観戦した。

修学旅行編

54：普段の行いはちゃんとしよう

キャノンボール・ファストからしばらく後、IS学園の生徒等は勉強に励んでいた。ちなみに、IS学園はIS関連の設備や特殊なカリキュラムがあること以外は普通の高校とあまり変わらない。そんなわけで、こういうイベントもあつたりする。

「皆さん、すいません！今日持ち物検査の日でした！」

「「ええ〜〜。」」

「ごめんなさい、先生忘れてました・・・。」

学生時代に経験した人もいるであろう、持ち物検査。実はIS学園でも行われてたりする。

それと余談だが、山田先生は1組に在籍しているある^{影清とタリル}2名の存在で他クラスの担任教師より仕事量が多かつたりする。そのおかげで休日までにまで仕事があつたりなかつたり・・・。

「そ、それじゃあ、名前順で先生のところに来てくださいね。」

渋々とカバンを持って山田先生の元へ向かう生徒達。ちなみに主人公（一応）である影清の番は割とすぐ来る。力行だし。

「はい、どうぞ。」

「ごめんなさい影清君、中身チェックさせていただきますね。」

（まあ、そんな見られたくないもん入ってるわけじゃないし、大丈夫で

しよ。)

「・・・はい、特にありませんね！もう戻って大丈夫ですよ。それじゃあ次はー。」

持ち物検査を終え、カバンを持って席に戻る影清。ちなみにダリルと虚はー。

「え、えーつと、ケイシーさん？お菓子ならちよつとぐらいなら持って来ていいと言いましたが、袋で堂々と持って来るのは・・・。」

「すみません山田センセ。今度つから見つからないよう隠しときますわ。」

「そ、そういう問題じゃありません！もう、次から気をつけてくださいー！」

「・・・はい、大丈夫ですね！布仏さん、ありがとうございます。」

「いえいえ、こちらこそ。業務お疲れ様です。」

「あ、ありがとうございます・・・。この時期はホントに忙しくてー。」

・・・と、まあ、見事なまでに模範的な問題児と優等生な感じであった。・・・山田先生、ホントにお疲れ様です・・・。

時間が進んで放課後、一組の生徒等は部活があるものを除き、教室に残っていた。影清も自身の机にて資料を広げており、そこにダリルがやってきた。

「よお、カゲキヨ。昨日からなんか変わったか？」

「ん？ああ、まあそれなりに。一応有名どころ幾つかは行くつもりだけど……。」

「ほう、まあ前よりはマシじゃねえの？食いものばつか選んでた時はビックリしたぜ。」

「いや、アレで完全に決まりってわけでもないし、だったら行きたいところ全部入れとこうって思っただけだし。」

「だとしてもアレはねえよ。つたく、そこ行くならこことかどうだ？時間無くても見るだけならできるだろ。」

「え？あ、そこか。確かに場所的にも悪くないし……。うん、じゃあこれも追加で！ありがとう、ダリルさん。」

「おう。……ところでオマエ、京都とか行ったことあんのか？」

「いや別に？そういうダリルさんは？」

「あるわけねえだろ。生まれも育ちもアメリカだぞ？」

「そ、それもそうか……。というか、なんでそんなこと？」

「いや、有名な観光地だって言うし、日本人なら誰でも行ったことあるんじゃないかと思っただが。そうか行ったことねえのか……。」

「小学生ならともかく、殆どの中学生は修学旅行で行ったことあるんだろうけど、僕の行ってた中学は沖縄だったしなあ……。八ツ橋とかめちやくちや気になってたけどまだ食ったことないんだよ

なあ……。」

「おい、また思考回路食いもの一色になりかけてるぞ。」

ここまででもうわかったかと思うが、現在影清は修学旅行のコース決めをしていた。先ほど行われた持ち物検査も、修学旅行先についての資料と一緒に校則違反となるようなものを持って来ていないかのチェックだったりする。

数十分後、ある程度コースを決めた影清は、資料をカバンの中に仕舞い、席を立った。

「よし、じゃあまたアリーナで。今日もよろしく。」

「おう、今日もヒーヒー言わせてやるよ。」

「……お手柔らかに。」

ダリルと一旦別れ、寮の自室へ荷物を置きに行く影清。

悪意との激突まであと少し。

55：単独行動は程々に

「さあ、カゲキヨ。どっちを選ぶ?」

「……………」

「オレとしてはコツチをオススメするぜ? ああいや、オレを信用できないって言うなら「いや、もういい。決まったから。」

そう言うのと、影清はダリルに向けて手をのばし—。

「だあ”あ”あ!”クツソこつちがジョーカーかよ! 裏の裏読んで損した…………!」

「ククツ、オマエさつきから全部裏目に出てんじゃねえか。オラ、とつとつシャツフルしろよ。」

修学旅行当日、京都行きの新幹線、その車内では影清とダリルによるババの抜かせ合いが勃発していた。ちなみに虚も参加しているが、既にあがっていた。

それと、先程のやりとりはダリルが手札の一枚ジョーカーを突き出したのを影清が深読みしてソレを引くというものであった。

「…………よし、じゃあコレで—!」

「よつと。」

「あ、ちよつ、そつちは! ってか決断はつやあ!? これで3連敗かあ…………。」

ババの抜かせ合い、というのは訂正しよう。ダリルの一方的な押し付けと篡奪が行われていた。

「ま、こんなとこだな。どうする？まだやるか？」

「・・・じゃあ、そろそろ別のヤツで・・・。あ、虚さん、他のにしてもいいかな？」

「いえ、構いませんよ。」

「ありがとう、じゃあ今度は大富豪で！」

「よし、受けて立つぜ。」

こうしてトランプで遊んでいる内に京都に到着した影清等。そのまま旅館へ向かい、送られてきた荷物を自室へと運んでからは自由行動となった。

「あ、トオル！おーい！」

「？ああ、グリフィンさん。って、その格好・・・。」

「えへへ♪どうかな？店の人にやってもらっただけど・・・。」

目的地へと向かう影清に、着物を着たグリフィンが声を掛けた。ちなみに着物の色は紫で、紫陽花の模様を基調としている。

「うん、すごく似合ってると思うよ。なんかこう、いつもとは違う雰囲気出てて。」

「そう？それならよかった！じゃあ、トオルのお墨付きってことでみんなに自慢しようかな？」

「いや、それは勘弁……。」

「フフ、冗談だって。そうだ！影清も着物着てみたら？」

「いや、遠慮しておくかな。ウチで何回も着たことあるし……。」

「え？そうなの!?もしかして、トオルの家って結構凄かったり？」

「まあ、家のデカさで言ったらそこそこ大きいと思うよ？まあ、着物着るって言っても僕は正月ぐらいかな？父さんは年柄年中着てるけど……。」

「へえー、そうなんだ……！ねえトオル、機会あつたら見に行ってもいいかな？すつごく気になる！」

「良いとは思うけど、今は父さんも母さんも居ないからね……。いつになるかはわからないよ？」

「あ、そっか……。うん、大丈夫！いつでも待ってるから、絶対見せてよ！それじゃ私、みんなのところ戻るから、また後でね！」

そう言つて満足気に去っていったグリフィン。少し時が進んで――。

「……？ベルベットさん、何してんの？」

「っ!!……トオルね。貴方こそこんなところで何を？」

「いやまあ、何かお願いでもしておこうかな、って。ところでベルベッ

トさん、お守りポッケから見えてるけど。」

「なっ!？」

慌ててしまったためか、ベルベットのポケットからは『友情』の文字が入ったお守りがはみ出していた。

「友情？なんか意外だな……。ベルベットさんならISとか学業祈願のお守りにすると思っただけど……。」

「貴方、私を何だと思っているの？……別に、コレはその……。」

「……いや、言いづらいことならムリして言わなくてもいいよ。見なかったことにするから。」

「……そう。そうしてくれるなら助かるわ。」

「まあでも、見ちゃったことに変わりないし、僕のも見せるよ。これでイーブンってことで。」

ポケットからお守りを取り出し、ベルベットに見せた影清。そこに書かれていたのは――。

「れ、恋愛……。!?あ、貴方、そういう願望あつたのね……。」

「?まあ、今まで色んなお守り買ったけど、よく考えたら恋愛系のヤツがないー、って思ってたんだけど……。別に彼女欲しいとかは今はないかな。」

「……随分軽い理由なのね。」

「いやまあ、我ながらそう思うけどね……。じゃあ僕、奥の方行つてくるから。またね。」

ベルベットと別れ、神社の奥側に向かった影清。またまた時が進み

「あれ？道さんそこで何を……？」

「あ、虚さん……！ちよつとスマホ落つことしちゃつて……。よしっ！取れた！って、イタア！」

「と、道さん!？」

勢いよく腕を戻したせいか、皮膚が削れてしまい、小さくはないすり傷が出来てしまっていた。

「だ、大丈夫ですか!?今応急処置しますので……！」

「ごめん虚さん。助かるよ……。」

すぐさま道具を取り出し処置を始める虚。その手際は素晴らしく、あつという間に処置が完了した。

「……はい、これで終わりです。それにしても、どうしてあんなところろに……?？」

「いやあ、ここら辺の写真撮ろうとしたらなんかすつぽ抜けちゃつて……。その時一緒にいた金髪の外人さんが手伝おうかとは言つてきたけど、遠慮しちゃつて……。」

「……そうですか。それは災難でしたね……。一応このままにして

おいても大丈夫ですが、あとで先生方にも見てもらってくださいね。」

「わかった、ありがとう虚さん。」

ここで虚とは別の場所へ行き、ケガをしつつも観光を続けた影清。また少し時間が経って、日が暮れる頃となった。

「まだ時間あるな……。明日でもいいけど近いし、どうせなら見に行くか。」

旅館に戻る時間が迫って来てはいるが、影清は最後にその場所へと向かって行った。

「おお……。！なんか人気ない気もするけど、中々良い場所だなあ……。ここならあと少しぐらいいてもー。」

チュチュン！

その音は自然的に発せられるものではなく、また、ISを使っている中で聞き慣れた音であった。銃弾が撃ち込まれた音。それがこの場所に響いた。

56：シュウゲキ

チュチュン！

「!!？」

バツ！

銃弾が足元に着弾すると同時にその場から飛び退きつつ、灰楼を展開した影清。すぐさま周囲を探ろうとするも、その前に声が響いた。

『おつせえなあ、なんだその展開速度は。さっきの分も含めて3回は殺せるじゃねえか。』

「!?だ、誰だ！」

声が発せられた方向を向きながらそう叫んだ影清。するとそこには、量産型ISであるラファール・リヴァイヴがいた。しかし、通常のラファールとは違い、カラーリングが暗く、顔がバイザーによって隠されていたりなど形状も変わっていた。その上、声もボイスチェンジャーを使っているのかかなり低いものになっており、操縦者についての情報がかなり隠蔽されている。

影清に銃を向けながら、ラファールの操縦者は影清に言葉を返した。

『残念ながら教えてやれねえなあ。どうせ死ぬんだからよっ！』

パパパパパッ！

「くっ！」

ギョーンツ！

ラファールの放った銃は、聞いたことがある中でもかなり軽い音であったが、威力が低いわけではなく、サイレンサーが付いていた。突然放たれた銃弾を、影清は斜め後ろに飛ぶことで躲したが―。

『それはさつき見たぜ。』

「なっ・・・！」

『オラアツ！』

ヒュツ、ガツ！

「ぐうっ・・・!!」

影清が飛んだのは最初に銃を放たれた時と同じ方向であり、それを讀んだラファールの操縦者は一気に距離を詰め、右脚による回し蹴りを喰らわせた。影清はそれを腕でガードしようとするが、勢いに負けて吹っ飛ばされてしまう。しかし、蜃気楼のアシストと持ち前の姿勢制御能力により、すぐさま体制を立て直した影清は、拡張領域から臙矢を取り出し、次の一手に備えた。

『ハッ、切り替えは中々早えじゃねえか。ならドンドン行くぜえ！』

ギョーンツ!!

「っ！クツソオ・・・！」

ブオンツ！

影清に苛烈な攻撃を仕掛け始めたラファールの操縦者。その攻撃を、影清は灰楼の機動力を活かして捌き切っていた。ある時は左右を抜け、ある時は頭上を超え、またある時は身体を逸らしつつそのままに飛び上がるなどして。

これらの行動で意表を突けたものは何度かあった。だが、ラファールの操縦者は影清が攻撃に転ずるまでの間にはすでに影清を補足しており、攻撃を仕掛けても軽く避けられ、その隙を狩られかけてしまう。その手に持った隴矢は、もはや間合いを測るためのものさしと化してしまっていた。防戦一方となった影清ではあるものの、まだ手痛い攻撃は喰らってはいなかった。しかし―。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ・・・ッ！」

(ま、不味い・・・、息、が・・・。)

ラファールの連撃を避け続けることにより、身体に疲労が溜まる。初めての生死を賭けた戦いによる恐怖感から、息が乱れ始める。それにより、相手の動きの対処でいっぱいだった思考が纏まりにくくなり、速度もみるみる落ちていた。影清が抗うには、明らかに経験不足で、相手が格上過ぎた。咄嗟に取り出した夢月も簡単に弾き飛ばされてしまい、唯一の防御手段すら失ったとあれば、もうラファールからの攻撃には対処しきれない。一方的な蹂躪が幕を挙げた。

『オラよ!』

ドゴンツ!

「かは・・・っ！」

『もういっちょよ!』

バゴツ！

「ぶっ……！」

『オラくたばれえ!!』

バキツ!!

「ゴツ……。」

ヒュー、ガツ、ガシャン

『オイオイ、もう終わりか？ 終わりでもいいのか？ さっさと逃げねえと死んじまうぞく？ ヒヤハハ!』

あまりのダメージに飛ぶことすらままならず、地面に着いてしまった影清。シールドバリアーで緩和されているとはいえ、ラファールからの猛攻は影清を衰弱させるには充分過ぎるものだった。しかし、弱りつつも、影清はラファールからは目を逸らさず、臙矢を握り直していた。

（ま、だ……まだ……。終わって、たまるか……。ここで、終わったら……。）

『まだ元気ありそうだな。ならまだ付き合ってもらおうぜ。』

ラファールがゆつくりと近づいてくる。まだ恐怖が残っており、呼吸が薄くなりながらも影清は剣を構え、次の一手を見据えた。逃げるという選択肢は、今の影清では取ることはできない。この状況が続けば、確実に影清は負ける。そんな中、影清は小さな影ができているのを見た。その影は、段々大きくなっていき――。

ガッツシヤアアアアンツ!!!

『うおおっ!?!』

「っ……!?!」

「トオル!大丈夫!?!」

「な……、なんとか……。助かったよ……。グリフィンさん……。」

影清とラファールの操縦者の間に、巨大なダイヤモンドの塊が降り落ち、地面に激突した衝撃で飛び散った。厳密にはダイヤモンドのものではないが、それを作り出したのはグリフィンのテンカラット・ダイヤモンドだ。偶然戦闘音が聞こえ、急いで駆けつけたグリフィンは、影清とラファールを引き離すために巨大な塊を生成、ダイヤモンドでそれを抱え持ち、さながらバスケのダンクシュートのようにそれを叩きつけたのだ。本来は直撃させるつもりであったが、ラファールの操縦者はギリギリで反応し、後ろに下がられてしまった。しかし、距離は開いたため、グリフィンは影清を庇うようにラファールの前に陣取った。

「……トオル、動けはする?」

「大、丈夫……。まだ、やれる……。」

「やらなくていいから、そこで休んで。……どこの愉快犯かは知らないけど、ここまでやったんだ。タダじゃ済まさない。」

『おお、コワ。仲間のピンチに現れたヒーロー気取りか?ああ済まねえ、ちよつと違うな。仲間以下の足手纏いってどこだソイツは!』

いやー、ワリイな。そのザコと同格扱いしちゃって!』

「別に何言ってもいいけど、最後に喋るのがそれでいいの? まあ、もう喋らせる気なんてないけ、どっ!!」

ギユオン!!

『ハッ、アイツよりは楽しませてくれよお!!』

ドンツ!ズガアン!

手負いの影清を差し置き、グリフィンとラファールの操縦者による攻防戦が始まった。格闘術の技量ではラファールの操縦者に軍配が上がるが、機体性能と武装の差でグリフィンが優位に立ち回っていた。ダイヤナツクルと足技を駆使して戦うグリフィンの動きを、的確な判断を下すことで対応するラファールの操縦者だが、シールドエネルギーは減る一方だった。ただ、動きに慣れてきたのか、攻撃を躲しながらもグリフィンに攻撃が当たるようになっていった。

「ぐっ、こんのおおっ!!」

『動きは悪くねえがスキがあるんだよ!』

ヒュッ、ガンツ!

「くうっ……!」

(不味い……、押され始めてる……。なんとか、しないと……。息が、苦しい? 怖くて、動けない? 身体が、痛い……。それが、どう、したっ!!)

ガシツ!!

傍観していた影清の手に力が籠り、隼矢の持ち手が強く握り締められた。

『オラオラ、どうしたどうしたア!!』

ビュツ、ボツ!

「ぐっ、ヂイッ!」

バツ、ヂツ!

『コイツでどう・・・なっ!』

ギャオツツ!!!ガアアアアン!!

『グアツ・・・!?』

グリフィンの隙を突いて強力な一撃を叩き込もうとしたラファールの操縦者に、瞬間加速を使った影清の一撃が襲いかかった。影清の突き出した隼矢は、見事にラファールの胸装甲に喰い込んでおり、すでに隼矢のスイッチには影清の指が置かれていた。

カチツ

ギイギャガガガキヤアツツ!!!

『ガア a a # \$ % & アアツ!』

「なっ、・・・と、トオル!?休んでてって言ったのに・・・!」

「いや、ゴメ……、助けなきやと思っ……、ウツ!?」

ガシヤアーン!

「トオル!?」

ゼロ距離での刀身射出。その威力はISの装甲を単純なパワーのみでズタズタにするものではあるが、その反動は蜃気楼のサポートがあつたとしても打ち消し切れない程であつた。先程の攻防で盾を無くし、腕を使ったガードが多くなつたことで影清の腕は殆ど限界であり、その状態でゼロ距離射出を行つたとあれば、タダでは済まない。激痛に耐え切れず、地面に倒れ込んでしまつた影清をグリフィンは起こそうとするが、すでにラファールの操縦者は立ち直つていた。

「あー、クソ。テメエのおかげでボーチェンブツ壊れちまつたじやなえか。しかもクソ痛かつたぜ、オイ。まだ足りねえってんならとことんぶちのめしてやらあ!!!」

「っ！トオル！」

「気に、しないで……っ！なんなら囮にでも、ガツ!?」

「オラ行くぞガキどもお!!」

ババババツ!

「!?!」

「ああん!?なんだ!」

「そこまでしてもらおうか。」

「ダリル！」

「え？あ、ダリル・・・？」

影清とグリフィンに襲いかかろうとするラファールの進行方向に銃弾が降り注いだ。そして、ラファールが動けない間に、影清とグリフィンの前にダリルが降り立った。

「よう、オマエら。無事、じゃねえな。特にカゲキヨ。」

「ま、まあね・・・って、イ”ツ・・・!!」

「思ったよりヒデエ有り様だなオイ。ま、あとは任せとけ。・・・オイ、オマエ。手負いとは言え、こつちにはまだ戦えるヤツが二人、援軍もあと少しで来る。対してオマエは胸の装甲ブツ壊されてる。その有り様じゃあ、シールドエネルギーはそう多くねえだろ。どうだ？ここらが引き時だと思うが？」

「・・・チツ、まあそうなるか。そのハイエナ野郎の言う通り今回はここまでにしてやる。命拾いしたな。」

ヒュン！

「あつ、逃げ・・・。ダリル、追わなくていいの、ア”ツ！」

「いや、これでいい。これ以上被害出すわけにもいかねえしな。」

そう言ったダリルは、去っていくラファールの姿が見えなくなるまで銃を向け続けた。完全に逃げたのを確認したダリルは、ISを

解除し、影清とグリフィンの元へ近づいてきた。

「いやー、災難だったな。無事でよかったぜ。」

「ああ、二人ともありがとう。来てくれなかったら多分……。あつ、イデデ……。！」

「トオル、大丈夫？しっかり！」

「両腕持ってくれたか。ムチャしやがって。」

「そうでもしないと、ジリ貧のままだと思ったから……。あ、ちよつと手貸してくれる？腕使えないから起き上がれない……。」

「おう、いいぜ。」

「あ、言っとくけど腕はやめてよ？背中か胸ぐら掴んで起き上がらせよっ。」

「イ”イ”イ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ー！？」

57：普段あるものがないと不便

謎のラファールの襲撃後、寮に戻った影清は教師陣から事情聴取と治療を受けた。診断結果によれば、腕の骨にヒビが入っているらしく、両腕をギプスで固定することになった。ちなみに左腕の方がより酷かったため、左腕が首掛けで固定され、右腕はギプスのみでフリーとなっている。そんなわけで、両手が不自由となった影清は――。

「ホラ、口開けろ。」

「・・・あー。」

パク

ダリルにご飯を食べさせられていた。所謂あーんというヤツである。

「ソグング・・・、ゴクツ。・・・うう、やっぱ嫌になってきた、色々・・・。」

「さっさと割り切れ。そんな腕じゃ何もできねえだろ。それに、こうやって食わせるの初めてじゃねえだろ?」

「いや確かに臨海学校の時にたこ焼き食べさせられたけど、アレはダリルの悪意100%じゃん。わけが違うよ・・・。」

「まあ、そう言うなよ。別にオレもイヤってわけじゃねえんだ。アソコ薦めたの、オレだしな。」

「・・・そう言われると対応困るな。ハア、わかった。じゃあ、遠慮なく食べさせてもらう。」

「おう！．．．ところでカゲキヨ。オマエ風呂いつ入る？」

「え？あー、まあ、入れる時間になったらすぐ行くつも．．．。えっと、あの一、まさかとは思うけど．．．。」

「そんなんじや体洗えねえだろ。手伝ってや「却下ア!!」

「なんだよ、食わせるのは遠慮しねえつつたクセに。」

「いやソレとコレとは話が別ウ！あ、山田先生！ヘルプ、ヘルプッ！」

こうして山田先生に助けを求めた結果――。

「どうしてこうなった．．．。」

「おうウツホ、そろそろ変わるぜ。」

「はい、ありがとうございます。ダリルさん。」

男湯にて、影清は虚に頭を洗ってもらっており、ダリルは虚が影清の頭を洗い終えるまで湯に浸かっていた。何故こうなったかと言うと、影清に助けを求められた山田先生は、男女が一緒に風呂に入る風紀的な問題とそのままでは体を洗えないという衛生的な問題で葛藤するも、そこに通りがかった虚が二人ならお互い注意し合えるから大丈夫、と意見したため、影清と一緒にダリルと虚の二人が男湯に同伴することとなった。ちなみに旅館の男性従業員は皆不在であった。ご都合主義バリバリである。

ダリルと交代した虚は湯に浸かり、ダリルは影清の背中を洗い始めた。

「よし、洗うぞー。」

「・・・はい。・・・って、ちよつ、そこ、くすぐりたい!やめつ、ア
”イ” ツデデ!?う、腕動くからホントに勘弁・・・!」

「ハハツ、悪かった悪かった。マジメにやってやるよ。」

ゴシゴシ

「どうだ、どつか痒いところあるか?」

「いや、特に今のところは。・・・にしても、ホントに悪いなあ。ここ
まで付き合ってもらって・・・。」

「まーだ言ってるのかオマエ?オレもウツホもイヤだったらここまで
しねえっての。そら、流すぞ。」

「ああ、うん・・・。ありがとう、二人とも。この恩は返す。」

「お礼言うんだったらウツホにも直接言っつけ。ああ、そうだー。」

—前、どうするよ?—

「えっ?あつ・・・。。。。。。ご遠慮、申し上げたいのですが・・・。」

「いやー、ここまでやってやらねえわけにもいかねえしな。・・・よし、
やるか。」

「いや待って!?!ホントに待って!流石にそこまでやらなくていいから

「あ、虚さん！ちよつ、助け……。」

「え、えつと……、流石に洗わないわけにもいきませんよね……。だ、ダリルさん、手伝います！」

「いやなんでそつちに付くの!?!そ、そうだ、妥協案！何か妥協案を……！」

この後しつかり前側（影清の提案により上半身だけ）洗った。他は影清が脚にシャンプーを漬けて苦戦しながらも洗った。もちろん洗い切れないところもあったが。

そんなわけで修学旅行の夜は色々大変な影清であった。

58：分担作業は大事

ボガアン！ボンツ！

「ふっ！・・・そこっ！」

ギユンツ！

「・・・甘いわ。」

ヂヂ、ボオオオツ！

「アツツア!?アチチチ・・・。あ、ヤベ、もうシールドエネルギーないや。模擬戦ありがとう、ベルベットさん。」

「別にいいわよ。特に予定もなかったことだし。」

修学旅行から約二週間。腕の治療を終えた影清はベルベットに模擬戦を申し込むも、弾幕を避けて突っ込んだ先に第三代武装『ヘヴン』により生み出された炎を喰らってしまい、敗北を喫した。ちなみに腕の治りが早いのは、ISの浸透により医療技術が発達していたからである。

「ところでトオル、一つ気になったことがあるのだけど・・・。」

「何？」

「貴方、なんで剣しか使わなかったのかしら？」

「あ、それは・・・。」

ベルベットの言った通り、今回の模擬戦に於いて影清は隼矢以外の武装を使用していなかったのだ（なお蜃気楼は別である）。そのため、ベルベットに碌にダメージを与えられず、ベルベット側からすれば明らかに手を抜かれたと思われる。その問いに対し影清が答える・・・前にベルベットが言葉を発した。

「前の襲撃事件かしら?」

「そう、だけど。あの時は剣一本しかまともに扱えなかったから、少しでも経験積もうと思つて・・・。でもベルベットさんに不快感与えたのには変わらないよね、ごめん。」

「・・・なるほどね、貴方が今までISに打ち込んでこれた理由がわかつたわ。自衛、つてところかしら?」

「・・・まあ、そうなるかな。下手に逃げたら他に被害行くし、だったら僕が強くなってどうにかできたらつて思つてただけど、まだまだだったよ。」

「・・・グリフィンにも言つたけど、一人で何でも抱え込もうとするのは良くないわよ。」

「え、えつ?グリフィンさん、どうしたの?」

「修学旅行の後、トレーニングの量を増やしてたのよ。徐々に増やしてたからそこは心配してなかったのだけど、あの顔は見てられなくてね。」

「そっか、グリフィンさんも・・・。」

「あの時駆けつけたのがグリフィンとダリルで良かったわね。状況か

ら見ても、私じゃすぐにやられてたと思うし。」

「そ、そんなことないって！ベルベットさんだって代表候補生なんだし……。」

「……そのことだけどね。」

—私、本当は代表候補生じゃないのよ。」

「……えっ?」

「ギリシャにいた頃は私も代表候補生目指してたのだけど、結局他の子が任命されて、私は予備生止まり。そんな時、貴方がISを動かしたってニュースが流れてきて、私はIS学園に通うように依頼されたの。代表候補生への昇進に専用機の受理と引き換えにね。」

「そ、そうだったんだ……。」

「失望したかしら?釣り合わない立場にいる人間ってことに。」

「そ、そんなことないって！あ、いや、代表候補生の立場だとかそういうのわからないけど、少なくともベルベットさんは胸張って代表候補生名乗って良いと思う。というか、ホントに相応しくないなら別の人が代表候補生選ばれてたと思うし……そもそも、僕が原因なんだよね、ゴメン。」

「……いえ、謝らなくていいわ。本人に聞かせるような話題じゃなかったもの。こちらこそごめんなさい。」

「いやいや、そんな謝らなくても……。あ、そうだ！もうそろそろ夕飯時だし、食堂行かない？そろそろ次に予約した人の番だし。」

「……そうね。この話題はもうおしまいに行きましょう。……トオル、念のため言っておくけど、またムリなトレーニングはしないように。」

「……わかってる。」

「ならいいのだけど……。それじゃ、一足先に戻ってるわ。」

アリーナからピットへと向かったベルベット。それを見届けた影清も、予備エネルギーを補填し、ピットへ飛んでいった。

（それにしても、一人で抱え込もうとするな、ねえ……）

——一人でしかやれないんだからしょうがないじゃないか。）

幕間：ある冬の話

「おーい、道！メシ行こうぜ、メシ！」

「ん、わかった。・・・で、どこ行くの？」

影清 道、中学3年。書道家の父と花売りの母を持つ彼は、何の変哲もない平和な日常を謳歌していた。そんな彼は、友人に誘われて外食に行くところであった。

「ほら、アレだよアレ。五反田食堂、だっけ？味も価格も学生に優しいって評判でさ！・・・店主が気難しいことに目を瞑ればな。」

「へー・・・。」

「いや、リアクションうつすいな！今時そんな店主、漫画の中でしか見ねえだろ？」

「・・・漫画の中、ねえ。だったらアレの方がよっぽど漫画チックだと思うけど。」

そう言いつつ、道が指を差したのは、テレビ（品物）に映るISの姿であった。

「あ？あー、ISか。確かにそうだな！あんなものをたった一人の手で作られたつても相まって、より漫画っぽいよな！」

「でしょ？・・・まあ、こう言ってるのも、この女尊男卑風潮になった現実からの逃避なんだけども。」

「そうだよなあ、そこさえなけりや大っぴらにISサイコー！って

叫べるんだけどな。」

「・・・もしかしてだけど、IS、好きなの？」

「そりやそうだろ！あんなアニメでしか見れないような動きを現実にやってくれてるんだから！この前のモンドグロツソだってすごかったぜ？」

「あー、あの世界最初の大規模IS大会ね。僕も見たけど、確かにすごかったよね。」

「だよなだよな!?!でもやっぱ一番スゴかったのは織斑 千冬だな！剣一つで優勝まで登り詰めるとか、マジで世界最強！俺もうファンになっちまったよ！」

「わ、わかったわかった。・・・あ、オイ。お前の言ってたヤツ、アレじゃないか？」

「あー、そうそう！アレだよ！あそこが五反田食堂！ほら早く行こうぜ！」

「別にゆっくり行ってもいいだろ。そんな混んでなさそうだし。」

友人に急かさされながらも、五反田食堂に入っていた道。お互いに名物だという野菜炒めを頼み、多少のアクシデントがありながらも完食して帰路についた。

「いやー、ビックリしたな！まさかお玉投げしてくるとは思わなかった！」

「いやホントにビックリしたよ・・・でも料理は美味かったから、そ

ここで全部カバーしてるんだろな。」

「潰れてないのが何よりの証拠だしな！……にしても、俺達もそろそろ卒業かあ……。俺、ウチの家系的に医者目指すんだけどさ、お前はどうするんだ？確かまだ志望校すら決めてないんだよな？」

「あー、それならもう決まってる。藍越行くことにした。」

「おー……って、ん？藍越って確か、進学先多種多様って聞いたんだが……。結局なりたいもん見つからなかったか。」

「まあね。母さんとはもかく、父さんの仕事継ぐ気にはなれなかったから……。まあ、これからボチボチ探してくよ。」

「……そっか、見つかるといいな。じゃあ俺こっちだから！またな！」

「うん、また。お互い受験頑張ろう。」

これは、ある冬の話。彼が高校に進学する前の話である。

転換期《加速と激化の前兆》

59：臨機応変って大事だけどムズイよね

「―それじゃ前置きはここまでにして。メリー、クリスマスス!!」

『イエーロー!!!』

食堂の一角にて、一組の一組による一組のとある女子が司会を務めるクリスマスパーティーが行われていた。ちなみにクリスマスとは言っているが、クリスマスもイブもすでに食堂を借りる予約が入ってしまったため、その数日前に食堂を借りた。

そんなわけで一足早くクリスマスパーティーを行っている一年一組であった。

「よお、楽しんでるか?カゲキヨ。」

「まあ、そこそこってとこかな?・・・アグツ。」

「おお、良い噛みつきぶりじゃねえか。オレにもよこせよ。」

「ん。」

ダリルに声をかけられ、返事をした後にフライドチキンに齧り付く影清。そんな影清に釣られ、ダリルは影清が差し出した皿からフライドチキンを取り、勢いよく噛み千切る。

「おおー、良い食べっぷりじゃん!二人ともそのままこっち見てー!」

「ん?」

「お？」

パシヤツ！

二人してフライドチキンに齧り付いていると、そこにカメラを持った女子生徒がやってきて写真を撮った。

「はい、ありがとね二人とも！じゃあ次は、つとー。」

「・・・えっと、確かあの子、新聞部だっけ？まさかとは思うけど貼られ出したりは・・・。」

「いやいや、ねえだろ。・・・あとで賄賂でも掴ましとくか。」

こうして暫くは料理を口にしたり、談笑している時間が過ぎていった。まあ、この後レクリエーションやらあったが、割愛しても良いだろう、・・・影清のためにも。

「・・・ヒドイ目にあつた。あんなことやるって聞いてないんだけど・・・。」

「お疲れ様です、道さん・・・。あ、このケーキ美味しいですね。道さんも如何ですか？」

災難を乗り越え、ケーキに有り付いた影清。虚も影清の隣でケーキを頬張っていた。

「あー、じゃああとでそれも取ってくるかな。・・・そういや虚さん、整備科行くんだって？」

「そうですよ。元々その進路にしよう決めていたので。」

「そっかぁ……。普通にIS動かすのも上手かったけど、整備の方は学年で1、2を争うとかだったもんね。実際、僕も何度か手伝わってもらったことあったし。」

「手伝う、といっても殆ど外装だけでしたけどね。道さんの専用機、中々特殊な構造をしているので……。」

「まあ、おかげで整備に掛かる時間比較的短いから良いんだけどね。その代わり大破した時がより面倒だ、って言ってたけど。」

「なるほど……。道さんは確か、操縦科でしたよね?」

「まあね。理由はまあ、色々あるけど。せっかく専用機あるし、ISでの動き開拓するならそこが一番だしね。」

「そう、ですか……。」

「どうしたの、虚さん?」

「い、いえ、何でもありませんよ!……あつ、外、雪降ってますね。」

「あ、ホントだ。」

窓の外では、こんこんと雪が降り始めていた。ホワイトクリスマス、と言うには日にズレがあるが、彼、彼女等には些細なものだろう。こうして、彼、彼女等のクリスマスは明けていった。

60：有名人と会うと高確率でパニクる

冬休み。主に大晦日と正月の期間に入る長期休みは、残り半分を切っていた。生徒等も家族とその日を過ごすために実家帰りしてる中、影清はというと―。

「用務員さん、ホントになんでこんな荷物ばつか運んでんだろ？いや、手伝ってるとはいえ詮索するのもあまり良くないよな……。」

いつか登場した用務員さんを覚えているだろうか？このI・S学園にいる影清以外の男性でもある。そんな用務員さんに偶々呼び止められ、荷物運びを依頼された影清は、現在両手で抱える程の荷物を持って目的地に向かっていた。

「結構重いなコレ……。ちよつと休憩、つと。」

ドサツ

丁寧に荷物を床に下ろし、壁に寄つ掛かつて休憩を始めた影清。

「ふー……。そういやここら辺来るの初めてだよなあ。まあ、卒業までに学校内全部回れるとは思わないけ「お前が影清 道か。」

「？あつ、はい。そうですけ……。っ!？」

廊下の角を少し進んだところから影清に声を掛けた人物。容姿は黒いスーツに腰まで伸びた黒髪を首辺りで纏めていて、目の色は黒く鋭いものであった。そして、I・Sに関わるものであれば誰もが知っている人物である。

「あ、あのーもも、もしかして、織斑、千冬さん、ですか!!？」

「少し落ち着け。そうだ、私が織斑 千冬だ。」

織斑 千冬。かつて行われたISの世界大会「モンド・グロッソ」を他者を寄せ付けぬ強さで優勝を搔つ攫つた、文字通り世界最強のIS操縦者である。現在は日本代表の座を退き選手としては活動していないが、それでも今の彼女に勝てる者は片手で数えられる程、いや存在しないかもしれない。

そんな彼女と出会った影清は、有名人と急に遭遇した時みたいに緊張やら興奮やらしてパニックになった。まあ、今日の前にいるのも超がつく有名人なわけだが。

「あ、す、すいません！ちよつとビックリしちゃつて……。その、どうしてIS学園に？」

「……まだ一般生徒には公開していないが、来年からここで教鞭を取ることになった。今回はその下見と言ったところだ。」

「きよ、教鞭!? え、あの、それって、IS専門の……?」

「いや、やることは他の教師とそう変わりはない。それでも人に物を教える経験はあるのでな。」

「そ、そうですか……。」

「……ところで、そこにあるものはなんだ?」

「え? ああ、これですか。実は、用務員さんに運ぶの頼まれちゃつて。」

「? 用務員、というのは?」

「あ、僕以外でこのIS学園にいる男性の方がいるんですけど、多分すぐわかると思いますよ。」

「・・・なるほど、そういうことか。」

「じゃあ僕、荷物運ばないと行けないので・・・。」

「ああ、呼び止めて済まなかったな。その用務員さんにはよろしく言っておいてくれ。」

こうして、世界最強のIS操縦者と世界にたった一人の男性操縦者のファーストコンタクトが終わった。ちなみにこの後用務員さんに対してよろしく伝える時に、織斑 千冬の名を出す否かでめっちゃくちゃ迷った。

61：ドツキリは何重にも仕掛けるものじゃない

冬休みからしばらく後の休日。朝からトレーニングに励む影清に訪ねてきた人物がいた。

「おはようございます、道さん。突然ですみませんが、一つご用件に付き合ってほしいのですが……。」

「ああ、おはよう虚さん。用事って、何が……。ってアレ？その子は？」

影清に訪ねてきたのは虚一人ではなく、その隣にも青い髪と紅い目を持つ私服の女性がいた。影清はその人物について虚に尋ねるも、それより先に自己紹介を始めた。

「初めまして、影清 道さん。更識きんしき 楯無たてなしと申します。来年からIS学園に通うにあたって、幼馴染の虚さんに案内していただいとてころなんです。」

「えっ!?あの、おじよ、ムグツ?!」

何かを言おうとした虚の口を塞ぐ楯無。その光景を影清はあまり気にせず、挨拶を返した。

「へえー、虚さんの知り合いか。こちらこそ初めまして。虚さんには色々助けられています。ところで、虚さん何か用事あるって言ってたけど……。」

「あ、それはどちらかと言えば私の用件ですね。ただIS学園見学するだけじゃなくて、噂の男性操縦者に模擬戦を申し込みたいと思いまして。」

「ああ、模擬戦ね。それなら別に……って、え？今、模擬戦って言った？」

「そうです。できればお受けして頂きたいのですが……。」

「い、いや、別にいいんだけど、色々ツツコミどころがね……。まあ、まずはアリーナと訓練機の貸し出し手続きしなきゃだけど……。」

「プハツ、そ、それに関しましては、こちらで事前に手続きしておきました。私からもお願いしたいです。」

「……まあ、そこまで用意できてるならやろうか。」

「ありがとうございます、道さん♪では、早速行きましょう！」

こうして第一アリーナに向かった影清、虚、楯無等三人。一年間通い続けただけあってすぐに用意できた影清は、アリーナ内にて楯無が来るのを待っていた。

(……お、来た。って、あんな機体学園にあったっけ?)

ピットから出てくる楯無の姿をいち早く捉えた影清だったが、楯無が纏っているISは学園に配備されてある打鉄やラファールとは全く違う機体であった。

「お待ちせしました、道さん。」

「大丈夫、だけど……。そのISは？」

『グストロイ・トゥマン・モスクヴェ
「モスクワの深い霧」、私の専用機です。こう見えて実力はあります

から♪」

「へえー……。」

(……モスクワって、ロシアの首都だよな？いやでも、どう見ても日系だし……。)

『それでは、開始の合図は私が行わせていただきます。お二人共、準備はよろしいでしょうか?』

「こっちはいつでも大丈夫だけど、そっちは?」

「私も大丈夫ですよ。それでは宣言お願いしますね、虚さん?」

『……ハア、それでは両者構えて……開始!』

虚の声が響くと同時に、影清は隼矢と夢月を取り出して相手の出方を伺った。対して楯無は、アサルトライフルを取り出して影清に銃弾を浴びせた。

ガガガガガッ!

「おっとーなるほど、手堅いな……。」

楯無の放った銃弾を、影清は盾で防ぐことなくその場から移動することでお対処した。また、牽制とはいえアサルトライフルを使用したことから楯無の戦闘スタイルを予測し始めてもいた。

初撃を避けられるもアサルトライフルによる銃撃を続ける楯無。それに対して影清が取った行動は――。

「フッ!」

ガアン、チュイン、コオン

「！」

アリーナ内を旋回することで銃弾を避けていた影清は、起動を変えて軽く弧を描くように楯無に接近し始めた。突っ込んでくる影清に対し楯無はアサルトライフルを浴びせるも、影清は夢月を前に出してその銃弾の大半を防いでいた。そのまま楯無との距離が縮まり――。

「いよっ、とー！」

グンツ！バアン！！

正面方向から襲い来るアサルトライフルの弾幕を、影清は身を捻りながら避け、それと同時に夢月の射出スイッチを押して楯無に攻撃した。

「おっと、危ない危ない。」

「・・・マジか。」

しかし、楯無はそれを余裕を持って避け、その涼しげ顔を見た影清は楯無への警戒度を引き上げた。そして、次に動いたのは楯無であった。

「それじゃ、今度は私から攻めさせてもらいますね♪」

スチャッ

(来るか・・・って、アレもしかして・・・！)

「ハアツ！」

「うおっ!？」

剣を取り出した楯無は、影清に向かって剣による連撃を仕掛けた。影清はこれを後退することで対処するも、楯無が深く踏み込んで横薙ぎを繰り出してきたところでさらに後ろに跳んだ。すると――。

ジャラアツ！

(!!やっぱり、剣、伸び・・・っ！)

ギインツ!!

「・・・へえ、今の良く防ぎましたね。」

「そりゃ、僕も同じ武器使ってるからね。まさかとは思ったけども・・・。」

影清が跳んだ距離からすれば普通の剣なら届きはしない。だが、楯無の扱っていた剣はただの剣にあらず。奇しくも、影清がよく使用する武器と同じ蛇腹剣であった。

そんな意表をつく形で放たれた蛇腹剣の一撃を、影清は自身の持つ蛇腹剣を分割させて切り結んだことで防いだのだ。

「それじゃ、ミラーマッチと行きますか、ね！」

ヒュンツ！

「!」のっ・・・!」

グオツ！

ギインツ！ガツ！ジジツ！

蛇腹剣による斬り合いが始まった。しかし、この展開は楯無が有利である。ISの技量、というのもあるが、影清が使用する蛇腹剣『臙矢』は刃渡りが片方のみで分厚く、どちらかと言えば押し斬るタイプのものである。対して、楯無の扱う蛇腹剣『ラスティー・ネイル』は細く、敵を一方的に切り裂くことを得意とする。したがって、剣戟を続ければ続けるほど、小回りの効きやすい蛇腹剣を扱う楯無の方が先を行くこととなる。

(マズイ、このままじゃ普通に負ける……！いや、手が無い事もないけど上手く行くかどうか……。)

「セエヤアツ！」

ヒュオツ！

「今だっ！」

バアン！ヂツ！

「！なるほど……。」

「ハアアツ！」

ギユン！

楯無の蛇腹剣を臙矢で受けると見せかけて、夢月を射出してぶつけ

ることで防いだ影清。あまりの衝撃に軌道が乱れたところに、影清は急接近して間合いに入った。そのまま分割していない朧矢を振り上げ、楯無に切り掛かった。

(もらった!!・・・って、なっ!!?)

ビタアツ!!

楯無に当たるまで後数センチといったところで影清はその動きを止めた。そして、その隙は勝負を決めるのに十分過ぎた。

「ハッ！」

ドゴンツッ!

「グッ!？」

ジャキツ

「では、これで。」

ガガガガガガガガガッ!

『そこまで!灰楼、シールドエネルギーゼロです!』

蹴りで突き放してからのアサルトライフルによる銃撃で、影清のI Sのシールドエネルギーはゼロとなった。

(く、クソツ、最後、当たる位置ズラして・・・!)

攻撃を中断するという決定的な隙。それを生んだのは、楯無の機転

であった。影清が振り上げた隼矢は、モスクワの深い霧の腕装甲に食い込むハズであったが、楯無は腕装甲から二の腕に当たるよう身体を動かして剣の軌道に合わせたのだ。結果、人体への攻撃を忌避している影清は蜃気楼を総動員してでも攻撃を止めざるをえなかった。

「ふう、中々良い戦いでした。お付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました、道さん。」

「ああ、こちらこそ。・・・ところでさ、僕が人体攻撃できないってこと、結構噂になってたりする?」

「全体で見ればそこまで広がってないと思いますよ。私は独自の情報網があるので。」

「そういうことか・・・いやー、アレやられたら流石に勝てないな。今度は反応できないぐらいの速さで攻撃する、が目標に入りそうだ。」

『二人ともお疲れ様でした。あとで紅茶でも淹れましょうか?』

「ありがとうございます、虚さん。ご馳走になるよ。」

「ありがとうございます虚ちゃん。楽しみにしてるわ。」

「・・・虚、ちゃん?あの、さん付けしなくてもいいの?」

「あつ。」

『・・・あの、影清さん。大変申し上げ難いのですが、先程からお嬢様は悪ふざけなさっていたのですよ・・・。』

「???お、お嬢、様?えつ、ちよつと、何言ってるのかサツパリだ

なあ……。」

「もう、虚ちゃんのいじわる。どうせなら卒業まで誤魔化そうと思っ
てたのに。」

『ダメです。ちゃんと説明してあげてください。』

「わかったわよ……。コホン、改めて初めまして、道さん。更識家当
主、ロシア代表の更識 楯無です。布仏 虚は私直属の使用人です。」

「……ごめん。情報量が、多い……。」

ガクッ

『と、道さーん!』

あまりの連続カミングアウトにキャパオーバーして倒れた影清。
アリーナに響く虚の声。なお、この惨状を生み出した張本人は、いい
笑顔を浮かべていた。

62：アラシ

「うん、大丈夫だ。どこにも異常は無いみたいだ。」

「ほ、本当ですか!?!それならよかった……。」

ホツ、と胸を撫で下ろす影清。現在彼は倉持技研にて灰楼の調子を見てもらっていた。ただし、いつもと違って影清からの申し出により行われたものであったが。

「ああ、突然のことだからビックリしたけど、正直拍子抜けと言っている程だったね。……となると、キミの見たことそのままを事実として信じるほかないだろう。単刀直入に聞くよー。」

「キミは本当に篠ノ之 束と接触したんだね?」

時は先日の夕方まで戻る。当時影清は整備室にて専用機のメンテナンスを行っていた。なお、その時他の生徒はおらず、影清と灰楼のみがその部屋にいた。

「よし、あとはシステムの確認だけか。蜃気楼の調子も悪くなさそうだし、倉持の人から言われない限りは行かなくてもいいー。」

シユーン

「?」

突如として整備室のドアが開き、誰が来たのか視線を向けた影清。しかし、そこには誰にもおらず、不審に思った影清はそのドアに近づ

いていった。

(誰も、いない？故障かな？いや、誰かのイタズラって線もあるけど、流石にダリルはこんなことしないだろうし……。まあ、いいか。)

特に気にすることではないと思いを切り上げ、作業に戻ろうとした影清。しかし、その先では灰楼にプラグを差し込んで空中ディスプレイを操作している謎の人物がいた。

「なっ!？」

(い、いつの間に!?!ってか、何してるんだ？なんか、ディスプレイ操作してるみたいだけど、とにかく止めた方が……。!)

「ふうん、気まぐれで見てやったけど、やっぱりアイツじゃここまでか。こんなものしかできないクセにこの束さんに張り合おうとか意味不明だなく。」

(……。え、あの、もしかしてもう終わっちゃった?)

なんとかして止めようと意気込んだ影清ではあったが、時すでに遅しであった。灰楼を弄っていた人物は空中ディスプレイを消し、影清のいる方向に向かってきた。

「っ……。!」

「ん、何かな？凡人如きが束さんに文句でもあるの？」

「……。と、とりあえず一つは。アンタ、僕の専用機に何を……。?」

「あー、アレ？アレが専用機？あの低性能のガラクタが？あんなモノ

が専用機だなんて可哀想だね。まあ凡人にはお似合いだろうけど。」

「あ、あの、質問に答えてほしいんですけど……。」

「はあ？なんで凡人なんかの質問に答える必要があるの？てか誰が喋っていいって言ったの？」

「……。」

（今更だけど、この人、相当ヤバイヤツだ……！というか、まず格好からしてアレだもんな。なんでいい歳してそうなのにウサ耳付けてんだよ……。）

もはや会話にすら発展していないこの状況。下手な動きをすればマズイことになるかと察した影清であったが、その緊張はすぐに解かれることとなる。

「ちーちゃんがここで教師やるって言ってたから来たけど、やっぱ理解できないなあ。凡人が幾ら頑張ったところでちーちゃんの様になるわけないのに。」

スタスタスタ、シューーン

「……えっ？ちよつ、あのー……。」

（か、帰りやがったああああ!?!しかもめっちゃ自然に！まるで嵐だな……。）

一方的に話ながら影清の目の前から去り、整備室を後にした謎の人物。残された影清は、この展開にひどく困惑した。

(・・・ていうか、あの人。東、って言ってなかったか？まさかとは思うけど・・・。いやそれよりも。)

「明日にでも見てもらった方がいいよね、コレ・・・。」

そう呟く影清の目先には、何事もなく佇む灰楼の姿があった。そして翌日、ヒカルノにできる限り事情を説明した影清は、灰楼のメンテナンスを依頼したのであった。

「なるほどね。道君、今キミの言った情報だけでも断定できる。そいつは篠ノ之 東だ。」

「ですよね・・・。」

「私の作品にクレームつけるのは相変わらずだが、まあキミが無事だっただけ良しとしよう。・・・ともかく、重要なのはキミも灰楼も無事。IS学園側にも被害は・・・。あるっちゃあるかな？幾らあの天災が相手とはいえ侵入も逃走も察知しきれなかったからね。道君、この事は他言無用としよう。学園側には私から説明しておく。」

「わ、わかりました。」

「よし！ではこれでお開きとしようか！忘れ物はしないようにね。」

「はい！ヒカルノさん、お忙しい中ありがとうございます！」

こうして倉持技研を後にした影清。外に出れば桜の花びらが散っていた。新学期までもうすぐである。

閑話：天災の動向

「お気に召しました？ 東博士。」

「うん、どれも美味しいね！ その睡眠薬入りスープ以外は！」

素人目でもわかるほど高級な雰囲気醸し出すレストラン。その一席には、露出の激しい赤いドレスを来た金髪の女性とその対面に天災・篠ノ之 束がいた。

だがそこで行われていたのは腹を満たすというより、探る行為であつた。

「・・・それで、我々にISを提供する話。考えていただけたでしょうか？」

「えー、イヤだよ。めんどくさいじゃん。」

相手の要求を一蹴して再び料理に手を付ける束。もちろんスープは避けていた。

「では、これではどうですか？」

パチンツッ！

ジャコツ

金髪の女性が指を鳴らすと、束の後頭部に銃が突きつけられた。しかし、当の束は表情を崩すこともなく、すぐに行動を開始した。

カチャ、シユツッ！

「!」

スツ

「ほい。」

グンツ!ガシヤーン!

「なっ!」

銃を向けられてるにも関わらず、手元にあったナイフとフォークを金髪の女性に投げつけ、テーブルをひっくり返した束。その行動に銃を突きつけていた人物も動揺し―。

ガツ!

「っ!」

ヒュ、ドガツ!

「ガツ!」

ゴツ、ガツ、ドツ!ガラツシヤアアアン!!

後ろにいる相手を視認することなく後ろ蹴りで銃を弾き、そのまま体制を崩すように連撃を加え、最後にワインの並ぶショーケースに向かって蹴り飛ばした。

「いやー、束さんってば肉体も細胞レベルでオーバースペックだからね!私に生身で挑めるの、ちーちゃんぐらいだよ。」

「クツ……。」

規格外の強さを持って軽く制圧してみせた束。だが次の瞬間――。

ズガアン！

「……。」

ジャコン

壁を突き破って現れたのは2機のラファール・リヴァイヴ。それぞれ銃器を構え、束に照準を合わせていた。

「へー、まだそんな機体に乗ってるんだー。」

ガガガガガッ！

「よっ、ほっ。」

ピトツ

束の言葉を皮切りに発砲した二人。だがそれらは全て避けられ、一人のラファールの持つ銃に束の手が触れた。すると――。

パシユン

「!?……っ！」

ブンツッ！ガガガガッ！

「……。」

サツ、トン、ピトツ

束がラファールの持つ銃に触れると、なんと銃があとかたもなく消えてしまった。動揺しつつも素手での迎撃・銃での援護を始める二人。しかしその悉くが当たらず、ラファールの装甲を順に消されてしまった。そして最後に顔を覆うバイザーを二人同時に消されてしまった。

「あ、おお?」

「……。」

「あつははははは!!へえー、そういうことかなあ?ねえ!この子達の専用機なら作ってもいいよ?だからさあ、私のところにおいてよ?ねえねえ、もらつていいよね?」

ラファールに乗っていた二人の素顔を見るなり、この二人の専用機を作ると宣言した束。それと引き換えに束自身の手元に置きたいとも言いつつ。

「そ、それは困りますが……。」

「え、なんだよケチだなー。まあいいや。ねえねえ、どんな専用機が欲しい?遠距離型?近距離型?特殊武装はどんなのがいい?束さんの手に掛かればどんなリクエストでも叶うからね!」

こうして天災お手製の専用機を得ることができた二人。果たして、その矛先はどこへ向かうのか。

この後、自身のラボ『名前はまだ無い』に戻った束は――。

「ぎーて、くーちゃんの料理も食べたことだし、一仕事やっちゃいますか！まあ、コアはもう決めてあるから、あとはリクエスト通りに創るだけなんだけどね！」

早速専用機の製作に取り掛かる束。作業は着々と進んでいたが、あの工程に入った時、こんな考えがよぎった。

（そういえばあのガラクタ使ってるヤツ、凡人にしてはおかしいヤツだったなあ。まあだからと言って凡人レベルなのに変わりはないけど。）

ふと思いついたとはいえ、1秒にも満たない程の時間であった。だが天災が思考を割く程度には意味があった・・・のかもしれない。

波乱の新入生編

63：変わる環境

「よし、行くか。」

ガチャ

二年生寮のある一室。そこには、朝の準備を済ませ教室へと向かう男の姿があった。この男の名は影清かげきよ道とある。世界でただ一人ISを動かせる男性である。

そんな彼がこのIS学園に入学してから丸一年。彼の生活環境は一年生寮のリフォームされた物置きから、他生徒と同じ番号札の付いた二年生寮の部屋へと移っていた。制服のリボン（影清の場合はネクタイであるが）も、一年生から二年生用のものとなっている。

「えーつと……。ああ、あつたあつた！二年一組で間違いなし、と。」

寮から出て数分後に教室へと着いた影清は、多少緊張しながらもそのドアをくぐった。

「おー！よお影清！遅かったじゃねえか。」

影清が教室に入るなり声を掛けた女子生徒、ダリル・ケイシー。専用機『ヘル・ハウンド』を有すアメリカ代表候補生である。

「おはようダリルさん。ちよつと昨日眠れなくつて。あ、グリフィンさんにベルベットさんも、おはよう。」

「ええ、おはよう。」

「おはよう道！今日から同じクラスだね！よろしく！」

ダリルに挨拶を返しつつ、その近くにいた女子生徒二人に話しかけた影清。それに対して簡素に返したのがベルベット・ヘル。ギリシャの代表候補補生で専用機『ヘル・アンド・ヘヴン』を所持している。逆に快活な挨拶をしたのがグリフィン・レッドラム。専用機『テンカラット・ダイヤモンド』を操るブラジル代表候補生だ。

「うん、よろしく。・・・グリフィンさんやベルベットさんと同じクラスってのもそうだけど、虚さんが別クラスっていうの違和感あるなあ。」

のほとけうつほ
布仏虚

一年生の時に影清とダリルのクラスメイトであり、それなりに交流していた人物である。彼女は影清やダリルとは違って整備科に進んだので同じクラスには配属されなかったのである。まあ、操縦科と整備科の志望比率には偏りがあったため、同じクラスになる可能性もなくはなかったのだが。

「あー、そうだな。ま、会えねえわけじゃねえんだし。ヒマがあればこつちから行ってやろうぜ。・・・おっと、そろそろ時間だな。さつさと荷物置いとけ。」

「あ、そうだった！まだ席すら把握してないのに！えーつと・・・。」

ダリルに言われて急いで自分の席を確認する影清。ギリギリではあったものの、なんとか担任の先生が来る前には席につく。

そして数分後、教室に入ってきた人物を見て教室内がザワつき始めた。

「え、まってまって！もしかして！」「もしかしても何も無いって。絶対対そうじゃん！」「私、受験頑張ってよかった・・・！」

(え、何？何かあった・・・って、マジで？)

「さて、先日発表されたが改めて紹介させてもらおう。二年一組担任、おりむらちふゆ織斑千冬だ。今年からIS学園の教師として諸君を指導することになる。このクラスにいる者はみな操縦科に進学した。つまり、それなりの知識と覚悟があると判断して厳しくいかせてもらう。山田先生。」

「は、はい！副担任の山田真耶やまだまやです。基本的に織斑先生のサポートになります。一年間よろしくお願いしますね！」

世界最強のIS操縦者である織斑千冬。そんな彼女は、今年からIS学園に勤務することになり、二年一組の担任を務めていた。

そしてその補佐をするため副担任となった山田真耶。昨年は影清、ダリル、虚のクラスの担任を務めていた。ちなみに織斑千冬とは学生時代の先輩後輩の関係である。

(うーわマジかー、まさかウチの担任がああ織斑千冬さんになるなんて思わないじゃん。こうなるとサインとか絶対もらえないよな？あの時せがんでおきやよかった・・・)

「—ではここまでで何か質問のある者は？」

「は、はい—」

織斑先生がそう言うと、一人の女子生徒が我先にと手を挙げた。

「先に言っておくが、プライベートな質問であれば即刻切り上げるぞ？」

「え、えーっと、プライベートに入るかギリギリのラインだとは思いますが、織斑先生がIS学園に来た理由って……？」

「……ふむ、まあそれぐらいならいいだろう。簡単に言うなら学園長のコネだな。ちょうどひと段落着いた時期なのもあって了承した。たったこれだけのつまらない理由だ。とはいえ、妥協する気は毛頭無いのでそこは安心していい。質問は以上か？」

「あ、は、はい！ありがとうございます！」

「よし、では少し早い休み時間とする。各自次の授業の準備をするように。」

その言葉を最後に織斑先生と山田先生の教師二人は教室を後にした。

「……ふーっ。」

チヨンチヨン

「？」

「とつとつと行くぞ。」

「うん待って。まず要件言おうか？」

息を吐く影清の肩を座りながら指で突いたダリル。実はダリルの席、影清の真後ろだったりする。

「さっき言ったろ？虚のそこだよ。」

「ああ、そういうこと。じゃ、行きますか。」

「ちよーつと待った！私も行く！ベルベットも来るよね？」

「・・・ごめんなさい、別の機会にしておくわ。他に行くところがあるの。」

「そっか、ならしやうがない・・・。」

こうして影清、ダリル、グリフィンは虚のいる二組へと向かっていった。

3人が虚に会いに行っている一方、ベルベットはというと――。

「・・・久しぶりね。まさか貴女がIS学園ここに来るとは思わなかったわ。」

「え、ええ、確かにそう約束したけど・・・。一石二鳥？一体何の事・・・？」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！・・・ハア、あの子、何するつもりなのかしら・・・。」

走り去る人影を見つめながらため息を吐くベルベット。ちなみに影清達の方は、虚が教室にいなかったため無駄足になったとか。

64：再会、そして視線

影清達が虚に会いに二組へと向かっている頃、当の虚本人は階段の踊り場にいた。

「ま、私からはこんなところね。他のクラスにも二人程専用機持ちがいるけど、そこは追々関わることにするわ。」

「了解しました。・・・それで、例の件は？」

虚と情報交換している人物の名は更識さらしきたてなし楯無。今年からIS学園に入学してきたロシア代表のIS操縦者である。ちなみに実家の立場上、虚の上司に当たる人物でもある。

楯無からの報告を聞いた虚は、楯無にあることの進捗について尋ねた。それに対して、楯無は手に持った扇子を広げながら答えた。ちなみに広げた扇子には「順調」の文字が描かれていた。

「バッチリよ♪ただ役職が役職だから、すぐについてわけにはいかないけどね。・・・さて、そろそろお開きにしましょうか。」

「では私はこれで。失礼します。」

「ええ、また放課後に。」

授業時間が迫っていたため、踊り場を後にした二人。そして放課後、影清達はというと――

「つ、疲れた〜。」

「初日から随分としごかれたな。特に影清、生きてるかー？」

「二応……。あの、織斑先生の要求レベル、高くない？そりや専用機持ちではあるけど、代表候補生じゃないし……。」

「そうは言っても、道結構喰らいつけてたじゃん。一年間頑張った成果は出てるって！」

「ありがとうグリフィンさん。……ところで今日やったレベルって、代表候補生からしたらどんなもんなの？」

「……一般生徒からすればかなりのハードルだけど、代表候補生ならあのくらい難なくクリアできるわ。」

「そっかあ……。よし、アリーナ行くか。」

「あれ、今日取れてるの？」

「……ヤベ、取れてなかった。」

「先言つとくが、オレも今日は取れてないぜ。そもそもやる気ねえからな。」

「私も今日は……。」

「私は今日部活あるからね……。新生迎えないといけないし。」

「あー、それもそうか……。じゃあ今日はもう自主トレと勉強にしておくか。じゃ、お先。」

荷物を持って一足先に教室から出た影清。そのまま階段を下って行く――。

「おっ！やあ道、久しぶりだね！覚えてるかい？」

「？・・・あっ！ロランさん!?来てたのか・・・！」

階段にて影清と鉢合わせた人物はロランツイーネ・ローランデイ
ファイルネイ。オランダの代表候補生である。影清とは昨年行われた
学園祭にて顔を合わせている。そんな彼女はIS学園の制服に身を
包んでいた。

「ふふ、まあね。美しい女性が各国から集まる、というのもあるが、キ
ミにも興味があつてね。もちろん、IS操縦者としてだけど。」

「そ、そっか・・・。まあとりあえず、入学おめでとう。これからよろ
しく。」

「ああ、こちらこそ・・・。そうだ、一応先輩なのだし、道さん、ある
いは道先輩と呼んだ方が良いかな？」

「いや、呼び捨てでいいよ。そこまでこだわってないし。」

「そうか、ならそうさせてもらおう。ところで、これから何をしに行く
んだ？」

「自主トレと勉強かな。ISも動かしたかったけど今日アリーナ取れ
てなかったからね・・・。」

「なるほど・・・。そうだ！今度ISで訓練する時、私も同伴してい
だろうか？キミがISを動かしているところはあまり見れてないの
でね。」

「ああ、別にいいよ？ただダリル・・・他の人も混ざる可能性あるけ

ど……。」

「構わないとも！では、楽しみにしてるよ。」

こうして影清との訓練を取り付けたロラン。その後、また寮に向かい始めた影清であったが、物陰から見られていることには気づかず終いであった。

65：果たし状

新入生との交流や織斑先生のハードな授業についていく日々を過ごしていた影清であった。が、新学期が始まってから一週間が経過した頃、いつも通り教室に着いた影清は自分の席に座ろうとするも――。

「？あれ、昨日忘れ物したか、な……。」

「あ、道おはよう！って、どうしたの？机の中なんて見て。」

「……。」

スツ

無言のままグリフィンに机に入っていた物を見せる影清。それはどこからどう見ても手紙としか見えないようなものであった。

「手紙？……あつ、もしかしてラブレターだったりする!?やったじやん道♪」

「……と、とりあえず封開けてみるよ。えーつと……。」

手紙の中身を確認する影清。するとそこには、「果たし状」と書かれた紙が封入されていた。

「……はい？」

「え、何これ？……果たし状？」

「何があったの？」

まさかの内容に啞然とする影清とグリフィンに、たった今登校してきたベルベットが話しかけた。

「あの、こんなものが僕の机に入ってたんだけど……。」

「……それ、ちよつと見せてくれないかしら？」

「別にいいけど……、はい。」

こうして果たし状を渡されたベルベットは、その内容、いや文字を見てため息をついた。

「ハア……、あの子の仕業ね。」

「え？あの、ベルベットさん、心当たりあるの？」

「まあ、そうなるのだけど……。ごめんなさい道。この模擬戦、黙って受けてあげてくれないかしら？相手については保証するから。」

「……まあ、そこまで言うなら。そういえば日付とかもここに書いて……って、今日!?流石にせっかち過ぎないか……?」

「……これでも、あの子なりに待ったのだと思うわ。」

「そ、そう……?あ、でもグリフィンさんどうする?今日一緒に訓練するって約束だけど。」

「流石にやめかな。そのギリシャの代表候補生の子も見てみたいし。ま、頑張っってね!」

「うん、ありがとう。また埋め合わせするよ。じゃあ放課後に第一ア

リーナで、と。」

こうして謎の挑戦状を受けた影清。幸い授業数が少ない日だったので余裕を持って準備することができたのだが……。

「……ギャラリー、多くない？ほぼ満員だよね？」

「ああ、それ虚から聞いたんだけど、一年の新聞部の子が模擬戦の噂聞きつけて広めたんだって。」

「そういうことか……。いや緊張するなあ……。」

「今更でしょ？ほら、そろそろ時間だし、準備して来たら？」

「そうだね。じゃ、行ってくるー！」

グリフィンと別れ、ピットに向かった影清。その一方で、グリフィンは予め取っていた観客席に向かい、他に待ち合わせしていた人物の到着を待っていた。

「お、グリフィンじゃねえか。もう来てたのか。」

「そういうダリルこそ、ちよつと遅いんじゃない？」

「まあな、ちよつとヤボ用があったもんでよ。ところで、ベルベットのヤツは？」

「ギリシャ代表候補生の子に会いにいってるんだって。IS学園に来てからあまり話できてなかったみたいだし。」

「ほう……。おっと、虚も来たみたいだぜ。おーい！」

「こんにちはダリルさん、グリフィンさん。早速で申し訳ないのですが、あとでお嬢様も来るのでご了承頂ければ……。」

「お嬢様って、確か虚の幼馴染だっけ？全然いいよ！前から会ってみたいと思ってたし！」

「オレも構わないぜ。で、そいつは今どこにいるんだ？」

「それがですねー。」

グリフィン達が観客席で雑談している頃、影清はピットにて調整を行っていた。

「さて、システムの確認よし、と。あとは武装だけ……!？」

「だーれだ♪」

突如として視界を塞がれた影清。一瞬バチバチに警戒するも、次に聞こえてきた声で警戒を解い……。いや、なおさら固まった。

「さ、更識、様でよろしかったでしょうか……?？」

「楯無、でいいですよ。あと様付けもいりませんから。」

「あ、すいません。あの、虚さんの主人って言うぐらいなので、失礼がないようにと……。」

「敬語も結構です。同じIS学園に通う生徒なんですから、そういう立場は気にしなくてもいいですよ、道先輩?？」

「じゃあ、お言葉に甘えて。．．あと、いつまで目隠ししてるつもりで?」

「．．．だーれだ?」

「えっ．．．。えっと、楯無、さん?」

「まあ、よしとしましょうか。」

やっと影清の顔から手を退けた楯無。こうして視界がクリアになった影清は後ろを向き、楯無の姿を視認した。

「あの、一応試合前なんだけどね。いや別に話しかけるな、とまでは行かないけど。」

「ええ、わかってます。でも、なんだかんだ挨拶に行けなかったものですから。」

「．．．そういえば、入学してからはまだ会ってなかったっけ?」

「実はそうなんですよ。ここ一週間は忙しく忙しくて、よよよ．．．。」

扇子を広げて口元を隠しながら泣き真似をする楯無。扇子には「多忙」の文字が記されていた。

(えっ、何あの扇子!? 予め仕込んでたのかな．．．?)

「さて、そろそろ行くとしますか。虚ちゃんも待たせてることだし。」

「そっか、じゃあまた。」

「ええ、模擬戦楽しみにしてますよ?」

楯無がピットから去ると、影清は自身のIS・灰楼かいろろうを展開し、最終チエックを行った。

「蛇腹剣『朧矢』おぼろや、『朧』おぼろ・『二の矢』よし。対物バックラー『夢月』むげつよし。特殊弾専用バズーカ『幽牢』ゆうろう並びに特殊弾発射トラップ『妖戯』ようぎ、ネット弾装填済み。ラスト、第三代兵装『蜃気楼』しんきろうオールグリーン。小型スラスター計55機の統率問題無し。・・・さて、相手がわからないままってのは初めてだな。ま、やれるとこまでやってみるか。」

確認を終えた影清は、スラスターを吹かしてピットからアリーナ内へと躍り出た。

66：灰と血

「お、来た来た。」

一足先に待機していた影清であったが、そう待つこともなく対戦相手がアリーナ内に姿を現した。

「えっと、初対面だよな？試合前だけど、軽く自己紹介でも「必要なイッス。馴れ合うつもりなんて毛頭ないッスから。」

「あ、そう・・・。」

(敵意剥き出し!?え、会ったの今日が初めてだよな?)

まさかの塩対応に困惑する影清。こんなやりとりをしている内にアナウンスが響き渡る。

『それでは模擬戦開始のカウントダウンを始めます。』

(おっと、もうか……。って、アレ？あの I S、ベルベットさんの機体となんか似てるような……。)

『3、2、1。模擬戦開始!』

カウントダウンが終わると同時に動き出す二人。影清はバズーカを構えつつ相手の出方を伺おうとしたが、相手のギリシヤ代表候補生は開始と同時にライフルを撃ち込んできた。

ガン！ガンッ！

「危っ!?いきなりか……。なら!」

バズーカを仕舞い、新たに蛇腹剣・隴矢と盾・夢月を取り出した影清は、複雑な軌道を描きながら接近を試みた。ギリシヤの候補生もその軌道に対応してライフルを放つが――。

ガン！ギインツ！

「なっ、止まらないツスカ!？」

「生憎、盾越しならほぼ無影響なんでね！」

ブン！

さて、この際IS用ということは置いて解説するが、ライフル弾は通常の銃器よりも一点突破に特化している。よって、直撃した際の衝撃も相当なものとなる。それが近距離であれば尚更だ。だが影清の操るISは55機の小型スラスターによって姿勢制御、及び反動抑制に優れており、ライフル弾程度なら盾で受ければ反動込みでもノーダメージに抑え込めるのである。

こうしてギリシヤ候補生の銃撃を防ぎきって間合いに入った影清は剣を振るうも、間一髪で避けられてしまった。

「っ！」

サツ

「まだまだだ！」

グオツ！・・・ピタツ

避けた先にもう一度剣を振り追撃・・・と見せかけて盾の持ち手に

あるスイッチを押し、バックラー部分を射出した。

バアンツ!!

「は!?!」

ドゴン!

「ぐう!・・・やるツスね。」

「初見殺しだけどね。まだ行くぞ!」

攻勢を維持するべく攻め立てる影清。対するギリシヤ代表候補生もライフルからダガーへと武装を持ち替え、近距離戦に付き合った。その様子を見ていた観客席組は――。

「道さんすごいですね・・・!一年生とはいえ代表候補生相手にあそこまで!」

「ほーう、やるじゃねえか影清。IS漬け1年は伊達じゃねえな。」

「そりゃあ私達と何度もやってるぐらいだからね!多少の無茶もあったけど・・・。でもこれなら道、勝てるんじゃない?」

「どうかしらね。」

「あ、ベルベット!どこ行ってたの?」

「試合前にあの子のところにね。昔から突っ走るような子だから、様子見程度に。」

「へえー、やっぱり仲いいんだね！」

「……まあ、それほどでも……。」

「あー、ベルベット。さつきのは一体どうゆうことだ？」

「……この際隠す必要もないわね。あの子のIS、私の専用機と同様に氷を扱うISなの。」

「氷、ですか？今のところ、使用してはいないようですが……。」

「いえ、もう使ってるわ。」

「え？ちよつとそれ、どういう……。もしかして！」

「なるほど、さつきとケリつけないと痛い目見るってことか。楽しませてくれるじゃねえか、ギリシャ代表候補生フォルテ・サファイア。」

ベルベットの言葉からある事実に気づき始める面々。一方模擬戦は影清の攻勢がまだ続いていたが、徐々にギリシャ候補生・フォルテが反撃を加え始めていた。

「ふっー！」

シュツ

「うお、つとー！」

ガアン！

（なんだ？さつきから妙だ。動きが鈍い、っていうより小型スラス

ターの反応が遅い!?!いや、蜃気楼自体は正常に働いてる。ならこれは・・・?)

「隙あり、ツスよ!!」

「!」

ヒュツ、ドゴオオツ!

「ガツ!!」

動きの鈍った影清に後ろ回し蹴りを喰らわせるフォルテ。それを影清は受け流そうとするが、動きが狂ったことでもともにそれをもらってしまう。

「ガフツ、ゲフツ・・・っ!ここまでくれば流石にわかる・・・。氷か、それも広範囲の。」

蹴られた勢いを利用して後退した影清。その刹那、視界に凍った地面が映ったことでフォルテのISの特性を察した。

「気づくのが遅いツスね。アンタのISの特性上もっと早くバレると思ったんすけど。コレがウチのIS『コールド・ブラッド』の第三代兵装ツス。」

フォルテの専用機「コールド・ブラッド」。その第三世代は氷を扱うというもので、同じギリシャ代表候補生であるベルベットのIS「ヘル・アンド・ヘヴン」も炎の他に氷を扱うことができるが、それとは別物。ヘル・アンド・ヘヴンとは違い、コールド・ブラッドの氷結能力は即効性で劣るが、範囲であればヘル・アンド・ヘヴンを凌駕する。フォルテがその能力を発動させたのは影清にライフルを軽く防が

れてから。つまり、接近戦に持ち込まれる前には氷結を開始しており、逃げられるように自身も接近戦に応じたというわけだ。こうして灰楼の小型スラスト何十機かの機能が低下したことで、攻撃を受ける際の衝撃が普段より増し、ムリに動かすことで逆に姿勢制御の妨げになったおかげで隙が生まれてしまったのである。

「こうなればもうさつきみたいに反動気にせず突っ込む真似はできないハズツス。ベルベットの分も一方的にやってやるツスよ。」

「・・・あー、そうか、そういうこと。でも黙ってやられるのはちよつと、ね・・・。むしろ勝たせてもらう。」

蛇腹剣と盾を構え直し、フォルテを見据える影清。対するフォルテはライフルを取り出し、影清に照準を合わせる。氷と冷気が覆う中、勝利を掴むのは果たして？

67：けじめ

フォルテによって半分以上が氷に覆われたアリーナ。そんな中、冷気によって出力低下した小型スラスターによる事故を防ぐため、蜃気楼による助力をカットして挑む影清であったが―。

ガン！ギンツ！

「うっ・・・！流石に補助無しだとキツいな・・・。」

フォルテの放ったライフル弾を受けて顔をしかめる影清。序盤では小型スラスターによる反動抑制があつたためライフルの銃撃をものもしなかつたが、現在頼みの小型スラスターは実質使用不可なため、通常の機体と同じくらいの衝撃を受けている。簡潔に言うと、先程より遥かに接近することが難しくなっているのである。

「どうしたツスか？さつきみたいに近いて来てもいいんす、よっ！」

ガンツ！

「！ちいつ・・・！」

（これぐらいの距離なら避けられなくてもいいけど、それじゃギリ貧だ・・・。よし、イチかバチかだ！）

この状況を打開するため、影清は盾を構えつつ接近を試みることにした。だがそんなことを許すわけもなく、フォルテはライフルで追い返そうとする。が―。

「オラツ！」

ブンツ！

「なっ!?で、でもまだ距離は・・・！」

(いや、この距離でいいんだなコレが！)

フォルテがライフルを構えた瞬間に盾を投げつけた影清。しかし、フォルテとの距離は少ししか縮まっておらず、このまま剣を振ったところで届きはしない。だが影清の持つ蛇腹剣には、盾と同じく射出機能がある。刀身が長い分その射程範囲も広く、今の間合いでも十分届くほどである。投擲された盾によって怯んだフォルテに影清は剣先を向け、射出するためのスイッチを押す。

ギチツ、バガアンツツ!!

「なあっ!?」

「!隙ありツス!!」

ガン！チュンツ！

「うっ・・・マジか、そこまで凍ってたのかよ・・・！」

間合い、タイミング、狙い、それらに狂いはなかった。一つ見落としていたとすれば蛇腹剣の状態。先程の接近戦からずっと使用されていて、コールド・ブラッドの氷結能力をモロに喰らい続けた刀身の繋ぎ目は僅かとはいえ凍りついており、射出の妨害となってしまうのだ。したがって、影清の放った隼矢の刃はバラバラの方向に向かってしまい、フォルテに到達するどころか大きすぎる隙を生み出してしまった。

更に言うと、反動抑制のための蜃気楼も機能していないため、益々

マズイ状況ではあったが、突然のアクシデントであったためフォルテの対応が遅れた結果、ライフル一発という安い結果となった。いや安くはないが。

ライフルを喰らった後、悪態をつきながら後退して蛇腹剣の刃を戻す影清。仕切り直しとなったその時、フォルテが口を開く。

「まだやるツスか？正直もうアンタに負けるビジョンなんて見えな
いツス。降参してもいいツスよ？」

「流石に降参はないかな。まだやれるし。」

「フンツ、ベルベットの人生めちやくちやにした分際でよく吠えるツ
スね。アンタさえいなけりや、ベルベツトは……！」

「……そのことなんだけどき。殆どはベルベツトさんから聞いている。
それでもさ……。」

「それでも、何スか？」

「それでもベルベツトさんは誰が悪いとか憎いとか
は言ってなかったよ。むしろ自分が力不足だって。」

「……話の論点ズレてるんスけど。」

「まあ、僕が言いたいのは、ベルベツトさんは境遇については気にして
ないってこと。だから僕を責めることはしなかったけど、僕は僕のせ
いじゃないなんてことは思わない。現にこうして怒ってくれてる人
がいるしね。ならー。」

一旦言葉を切ると、投げた盾の代わりにバズーカを左手に出し、右
手に持った剣を逆手持ちに変え、それを隠すように構えた。

「この模擬戦からは逃げない、逃げちゃいけない。意図してなかった、不慮の事故だった、で済ませていいものじゃなさそうだからね。」

「そうツスか。なら思う存分叩き潰してやるツスよ!!」

パキ、パキキツ!

フォルテの激情に呼応するように氷結速度が上がる。だが、それがどうしたと言わんばかりに影清はバズーカを盾に突っ込む。

「このっ!とつとと終われツス!!」

ガン、ガンツ!チュン、チイン!

「っ!まだまだあ!!」

ライフル弾によって原型を歪められたバズーカを捨てた影清。しかし、すでに剣の間合いには入っており、ライフルでは対応しづらい距離となったが・・・。

ギユン!

「ほら、お望みの接近戦ツスよ!」

ヒュオツ!

影清がある程度まで接近すると、即座にスピードを上げて懐に潜り込むフォルテ。その手にはすでにダガーが握られており、そのまま斜めに切り上げようとする。

スツ

「なっ……。」

「残念だけど、読めた。」

チャキツ

フォルテがダガーを扱うことから、接近すれば向こうも近づいて得意の間合いに持ち込むであろうと思った影清は、フォルテが別の動作をしたタイミングで後方に飛んだ。こうしてフォルテの振るったダガーは空を切り、影清の持つ剣の切先がフォルテに向けられた。

(ま、まず……いや、この距離ならギリギリ届かないツス！それに、さつきみたいに暴発するに決まってー。)

ギユンツ！ガアアアアンツ！！

「!?ぐうつ……！」

(な、なんで届くツスカ……。仮に距離を縮めたとしても、凍って暴発するハズツスのに！)

確かに先程よりも氷結速度が上がってる関係上、影清の持つ剣はまた凍ってしまうだろう。だが、今の別の剣であれば？万全な状態の隼矢であっても届かない距離に刃が届く剣であればどうだろう。影清がバズーカや身体全体を使って剣を隠したのは、攻撃方法を悟られることを防ぐためだけではない。

刀身を見誤らせるためである。

灰楼の拡張領域には隼矢によく似た蛇腹剣が搭載されている。その銘は隼・二の矢。隼矢より重量が増した代わりに、刀身が長く、射

出時の反動を可能な限り抑制したものである。刀身が違うとはいえ、カラーリングは隼矢と全く同じであり、最高射程も異なるため慣れた相手に刺さる武装とも言えよう。

さて、もうわかったとは思いますが、今影清が使っているのは隼矢ではなく隼・二の矢である。最初に隠した時は隼矢であったが、バズーカを捨て、フォルテが懐に潜るのを悟って後退すると時に隼矢から隼・二の矢へと持ち替えていたのだ。こうして焦り、油断、慢心のあるフォルテに隼・二の矢の刃が届き、コールド・ブラッドの左翼に見事直撃した。とはいえ、まだコールド・ブラッドのシールドエネルギーは尽きてない。

「でも、これで打ち止めじゃないッスか？勝負アリッスー。」

ギョルル、ギャギャアツ！

「のわあっ!?な、何がっ……!」

「長さにはまだ余裕があったからね。返しの刃ってやつ。」

ギョルル、ガチンツ！

遠距離からの射出により伸び切った隼・二の矢。本来であればこれで終わりであろう。だが、忘れてはならないことが一つ。この隼・二の矢には、隼矢同様射出機能があり、逆にその伸びた刃を一気に戻す手段がある。刀身がすでに伸びている際にスイッチを押すと、刀身を繋ぐワイヤーが一気に巻き上げられる。更に分割した刃は、爪、あるいは牙のような形状となっているため、今回のようにギロチンみtainな攻撃も可能である。明らかに用途外であるため刃こぼれはヒドイが。

……さて、今用途外と言ったが、これは一度も検証されたことがないという認識で間違いない。では何故このような結果に繋がった

のか。それはー。

(ううおおおお!?なんかミスったのがそれっぽいヤツになったー!? ホントは朧矢に変えてすぐ追い討ちしようとしたのに……!え、大丈夫?刃こぼれしてな……してるわあ……。ヒカルノさん、なんて言うかな……。)

単純に影清^{コイツ}のミスである。本来は朧・二の矢から朧矢に持ち替え、即座にスイッチを押して間髪入れずに刀身射出攻撃を繰り出そうとしたが、最初の朧・二の矢を収納する時点で失敗。そこから右手に朧矢を出そうとしたが、すでに朧・二の矢が握られていたのでキャンセル。そして、朧矢ではなく朧・二の矢のスイッチが押されて刃に通されたワイヤーが巻き上がり、コールド・ブラッドの両脚装甲を傷つけることとなった。まさに偶然の産物である。

そんなことはつゆ知らず、想定外の攻撃で姿勢を崩したフォルテは、その場に留まることで精一杯であったが、体制を立て直すと同時にダガーを取り出して防御の構えを取った。だがすでに手遅れで、守る場所も違った。

ザギヤツ!

「あの、胸の辺りで防御固めるのはいいんだけど、僕の場合そこ攻撃しないからね?」

『コールド・ブラッド、シールドエネルギーゼロ。勝者、影清道。』

最後の一撃は、右脚装甲に向けての斬撃であった。

68：約束

「すごい！道勝っちゃった!!あんな手隠してたなんて聞いてないよ、もー。」

「・・・悪いけど、先に失礼するわ。」

「どこに行くの？って言うのはヤボだよね。いってらっしゃい。」

「ええ・・・、ありがとう。」

観客席からある場所へ向かったベルベット。一方そのすぐ隣の席では――。

「マジかアイツ、ここまで強くなってるとはな・・・。ま、オレほどではねえけどな。」

「ええ、最後までどちらが勝つかわからないほどの白熱っぷりでしたね。これには私も脱帽です。」

「！お、お嬢様、いつからそこに・・・。」

「・・・ほう、オマエが更識楯無か。」

ダリルの後ろから話しかけてきた楯無。試合前に影清の戻すを訪れたとはいえ、ベルベットとほぼ同じタイミングで合流できたはずだが・・・。

「初めまして、ダリル先輩。試合始まってから急いでここに来たのですが、あまりにも見応えのある試合でしたので、話しかけるのも忘れてすぐ後ろで観戦してました♪」

「へえー、キミが虚の幼馴染の？初めまして、私グリフィン・レッドラム！気軽にグリフィン、でいいよ♪よろしくー！」

「では、グリフィン先輩、と呼ばせていただきますね。こちらこそよろしくお願ひします♪」

「うん、よろしくーあ、一つ聞きたいことあるんだけど、あの噂ってー。」

こうして談笑が始まった中、アリーナ内のある通路では――。

「・・・探したわよ、フォルテ。」

「・・・ベルベットツスカ。今はそつとしといてほしいツス・・・。」

模擬戦を終えたフォルテはIS学園の制服に着替えたあと、気力を無くしたのか通路の端で頭を埋めて座り込んでいた。ベルベットはそんなフォルテの元へ行き、膝を曲げてできるだけ視線を合わせた。

「そういうわけにもいかないわ。今だけじゃなくて、ここに来てからの貴女、放っておけなかったもの。・・・もっと早く、こうやって話せばよかったのだけどね。」

フォルテに優しく語りかけるベルベット。するとフォルテは、ぽつりぽつりと話し始めた。

「・・・ベルベット。ウチ・・・、アイツのこと、どうしても許せなかったツス・・・。」

「ええ。」

「ベルベットは、すごいッス……。代表候補生に選ばれてなくても、
実力は本物ッス……。」

「……ええ。」

「でもアイツが、アイツなんかがISを動かしたから、ベルベットは代
表候補生にされて……。それが、それが今までのベルベットを否定
されたみたいで、ウチ、ウチ……！」

制服を掴んでいた手に力が入り、少しずつ身体が震え始めたフォル
テ。その様子を見て、ベルベットはフォルテの手に自らの手を重ね
る。

「大丈夫よ、フォルテ。私はそうは思っていない。むしろ、貴女との約束
があったからこの一年間頑張れたのよ。」

「え……?」

「私がIS学園に行く時に言ってくれたでしょ?『一年後、どっちがよ
り強くなれたか勝負するッス!』って。」

「お、覚えてて、くれたんスか……?」

「あたりまえよ。親友の約束だもの、反故にはしないわ。」

「べ、ベルベット……!ウチ、ウチは……っ。」

ようやく顔を上げ、ベルベットの方を向いたフォルテ。その顔は赤
く染まっており、目から涙が零れ落ちていた。

「お疲れ様、フォルテ。・・・ありがとう。」

フォルテを抱き寄せ、労いの言葉をかけるベルベット。制服がフォルテの涙で汚れるも、そんなことは全く気にせず胸を貸し続けた。しばらくして落ち着いたフォルテは、立ち上がってベルベットに向き合った。

「・・・ベルベット、その、迷惑かけてゴメンツス。」

「別にいいわよ。迷惑かかるのは今に始まったことではないのだし。」

「うっ・・・、今それを言われるのは堪えるツス・・・。」

「フッフツ・・・。さて、いつまでもここに居るわけにはいかないでしょう？行きましようか。」

「・・・そうツスね。」

こうして二人はアリーナを後にしようとするが、その道中で――

「あつ。」

「ん？」

「ゲツ。」

先程模擬戦でやり合ったばかりの影清とばったり会うベルベットとフォルテ。特にフォルテは影清を見つけるなり顔を歪ませるといふ嫌悪つぷりを見せた。

「ベルベットさんと、さっきの子か。まだ残ってたんだ。」

「・・・そういうアンタこそ、何してるツスカ。」

「さっきの試合のせいかピットめちやくちや冷えててさ。何かあったかいもの欲しくて自販機探してた。それで今帰るところ。あと・・・。」

「？なんスカ。」

（キミ、今日までの5日間ぐらい僕のこと尾行してなかったっけ!? 気づいてて放っておいた僕も僕だけどさあ!?)

ベルベットもいるため口には出さなかったが、フォルテは模擬戦に勝つためのデータ収集の一環で影清の学校生活すらもりサーチしていたのである。それと、実際に尾行されていたのは7日程。3日経った頃にやっと違和感を感じ、フォルテの姿を確認できたのである。

と、尾行関係の話題に入りかけてしまったため、なんとか誤魔化そうと別の話題を出そうとするが―。

「その・・・、模擬戦やってた時とは想像つかないほど・・・うん。」

「よーし、もう言わなくてもわかるツス。小さくて悪かったツスね!!」

地雷を避けた先で地雷を踏む影清。明言はしてなかったが、影清がこちらを見つつ言葉を濁したのですぐに何に対して言及しようとしたのか察したフォルテは声を張り上げる。

そう、フォルテ・サファイアはとても高校生とは思えないほどの身長しかないのである。その低さは小学生と言われても信じられるほど。もちろんそれはフォルテにとってコンプレックスであり、多少誤魔化そうとしたところで鋭く指摘する。

「い、いやその、まあ、そんなところですよ・・・。」

「はああ!?!ちよつとばかり背が高いからつて調子乗んなツス!大体男
なんだからそつちの方がデカくてとうぜ「落ち着きなさい。」

ビシッ

「あう!?!」

ヒートアップし始めたフォルテの頭にチョップがお見舞いされた。
軽くではあるが、フォルテが怯むには十分な威力ではあった。

「・・・えつと、なんかゴメンね?これ、コンポタだけどいる?」

「いらねえツス!ホントに腹立つヤロウツスね・・・!」

「フォルテ。」

「・・・わかったツス。影清道、次やる時はこうはいかないツスよ。精々
首洗っておくことツスね。」

「よし、受けて立つ。まあ、次やったら普通に僕負けそうだけどね・・・。
じゃあ、この辺で。またね、ベルベットさん、と・・・。」

「・・・フォルテ・サファイアツス。」

「サファイアさんか。また今度ね。」

そう言つて影清はアリーナを後にした。

「やれやれ、ホントに厄介なヤツツス・・・つて、ベルベット、何笑つ
てるツスか!」

「いえ、貴女が男性相手にあそこまで絡むの初めて見たから。・・・案外相性良いのかもしれないわね。」

「何言ってるツスカベルベット!? あんなヤツとは絶対馬合わねえツスよ! ウチの男性嫌い知ってるツスよね!」

「フフ、そうだったわね。じゃ、行きましようか。模擬戦の予定も合わせないといけないことだし。」

「!そ、そうツスね! 本国で鍛えに鍛えた成果見せてやるツス!」

「そうね、楽しみにしてるわ。」

ベルベットとフォルテ、その友情は一年という時を隔ててもなお色あせることのないものであった。後日、しっかりと約束は果たされたが、それはまたの機会に。

「あー、腕痛っ。」

69：不幸中の幸い

「……ふうー、まだ軽い部類でよかった。」

ベルベット達と別れた後、寮ではなく保健室へと向かった影清。保健室を出た影清の右腕には包帯が巻かれており、それを見つめながら調子を確認していた。

「流石に補助無しで無理に耐えるのはヤバかったか。でもああしないと勝てないしなあ……。」

フォルテとの模擬戦終盤で行った隼矢、隼・二の矢による射出攻撃。隼・二の矢はそれ自身に反動軽減機能が備わっているため、あまりリスクはない。だが、その前に隼矢が氷によって暴発を起こしていたので普段よりも腕へのダメージが大きく、その状態で隼・二の矢を連続使用したためIS本来の保護機能でもカバーしきれないほど腕に負担がかかってしまったのだ。もし影清が最初の思惑通り隼・二の矢による射出攻撃をした後、すぐさま隼矢に持ち替えもう一度射出を行っていたならば骨にヒビが入る程度には負傷しただろう。

「ほう、最後の振りが鈍過ぎると思えばそういうことか。」

「！あつ、織斑先生。」

「怪我の調子はどうだ？」

「ああ、数日もすれば動かせると思いますけど……。まあ私生活には影響ないかと。」

「そうか、なら今日の模擬戦についてのレポートは明後日までに提出することだ。期限は守れよ？」

「わ、わかりました。」

「・・・ああそれと話は変わるが、今生徒会が機能していないのは知っているな?」

「ええ、まあ。前の生徒会長もう卒業しちゃいましたし、ちよつと大変なことになってるとは聞いてますが・・・。」

この学園に於ける生徒会、もつと言えば生徒会長だが、この学園は就任方法が特殊なため現在生徒会長不在なのである。したがって、現在IS学園は生徒会不在の半混乱状態となっており、教師陣がその仕事を出来るだけカバーしている状態だ。

「そんなところだ。まあ率直に言くと、生徒会長に興味はないかということだ。」

「・・・申し訳ないですけど、僕はやるつもりもないです。その立場に就ける程大した人間じゃないので・・・。」

「そうか、では話は以上だ。休みは充分に取っておけ。」

影清を追い越して先に寮へと向かう織斑先生。ちなみに織斑先生の部屋は二年寮にあつたりする。騒ぎ起こしたら即座に飛んでくる可能性大である。

(・・・今更だけど、織斑先生、結構教師してるよなあ・・・。かなりスパルタだけど。)

なんて事を思いつつ、影清も寮へと足を進めた。ちなみに腕の包帯は巧妙に隠したためその日は騒ぎにならなかったとか。

プロフィール（63）※1／4更新

二年生

影清道かげきよとちろ

概要：一組に席を置く世界でただ一人の男性操縦者。実は転生者だったりする。原作知識を有しているが、その記憶にはある基準があるとか（本人には気づきようがない）。

ISの戦闘では武器の射程距離を活かした中距離戦を得意とするが、真に恐ろしいのは自身の姿勢制御能力と機体の性能を最大限に利用したカウンター戦法。半端な攻撃では手痛い反撃を貰うこと間違いなしである。なお範囲攻撃への耐性は低いため、銃火器乱射するだけでも割と削れる。

専用機：灰楼かいろう

概要：倉持技研にて開発されたIS。影清の長所を活かすための機体なので、原作には存在しえないオリISである。

武装

隼矢おぼろや：片刃の蛇腹剣。鰐に設置されたスイッチを押すことで刃を高速で射出したり、戻したりすることができる。

隼おぼろ・二の矢：隼矢の改良品。主な違いは刀身が長く、射出時の反動も低い代わりに重量があるということぐらいである。

夢月むげつ：対物理攻撃用バックラー。長方形の射出装置にそれと同じ形の凹みがある盾がセットになったものである。盾の持ち手上側にスイッチがあり、それを押すことで隼矢同様の射出攻撃を繰り出すことができるが、他にもワイヤーを掴んで盾を振り回すような攻撃方法も可能。

幽牢ゆうろう：特殊弾対応バズーカ。実弾ではなくネットや煙玉などを発射する。影清本人が人体への攻撃を嫌っているため、このような武器になっっている。

妖戯ようぎ：特殊弾発射トラップ。低性能のステルス機能が備わった設置砲台。床だけでなく、壁などにも設置可能。幽牢に装填できるタイプ

の弾であれば基本的に全て対応している。発射タイミングは付属のリモコン一つで決められる。

蜃気楼しんきろう：灰楼に搭載された第三世代兵装。全身に搭載された計55機の小型スラスター・・・ではなく、それらを統括するシステムの名称。原作で例えるなら打鉄うちがね式しきの山嵐とマルチロツクオンシステムのような区分け。スラスターの出力は弱めだが一機一機の噴射方向が幅広いため、全て稼働していてもムダになる箇所が少ない。

燃費も最高級に良く、汎用性の高いモノではあるが致命的な弱点が存在する。蜃気楼のシステムはあくまで（凡人レベルでは）操作不可能な55機のスラスターを同時に稼働させることを前提として作られており、一機でも稼働不可な箇所が存在すればたちまち狂ってしまう。その分強度は折り紙付きなのだが、単純な破壊ではなく氷漬けにされるなどの妨害でも大きな影響が出るため、システムの改修が行われ始めた。

ダリル・ケイシー

概要：金髪赤目のアメリカ代表候補生。男勝りな口調で、めんどくさがりな態度とは裏腹に何事も高水準でこなす仕事人である。

代表候補生に抜擢されるだけあってISの扱いも上手いが、格闘術や銃の扱い、二刀流など素の戦闘技能も高く同世代でもトップクラスの実力を誇る。

専用機：ヘル・ハウンドver. 2.0

概要：元々第二世代機であったが、後付けで第三世代兵装を搭載されバージョンアップしたヘル・ハウンド。武装は2丁の拳銃と二振り
の刀剣、スナイパーライフルなどそれまで通りであるが、肩部と同化
していた銃の代わりに犬の頭のような砲塔がつけられている。そこ
から超威力の火球を生成・発射するが、良くも悪くも燃費が悪いため

エネルギーの枯渇や発射口のオーバーヒートなど問題が多く見られる。

グリフィン・レッドラム

概要：蒼い目と髪が特徴のブラジル代表候補生。面倒見の良い姉気質であり、高いコミュニケーション能力を持つ。

武器の扱いはそこそこだが、運動能力が極めて高く、武術だけでなくスポーツの動きも戦闘に取り入れている。

専用機：テンカラット・ダイヤモンド

概要：アンロックユニットである巨大な手『ダイヤ・ナツクル』と分厚い脚部装甲がウリの第三世代IS。ダイヤモンド並みの硬度を誇る物質を精製でき、それで作られたボールを攻撃に用いたり、壁を作って防御することもできる。燃費は作り出す物の質量に応じて異なり、サツカーボールほどならそこまでだが先述の壁やダイヤ・ナツクル並みの大きさの玉となると約半分程持つていかれる。ちなみに後方上部に浮かぶ一対のアンロックユニットには銃が隠されている。

ベルベット・ヘル

概要：赤い髪と黄緑色の目を持つギリシャ代表候補生。フォルテ関係のアレコレでアキブレよりも性格は柔らかくなっている。ただクールなのは変わらず、出るところはしっかり出るタイプでもある。

戦闘面では主に戦術に秀でており、多様な飛び道具を使った制圧を

得意とする。近接武器の練度はパワーで誤魔化している。

専用機：ヘル・アンド・ヘヴン

概要：半身のカラーリングが赤と青で分かれているIS。三種のミサイルが搭載されたポッドが左右に一つずつあり、第三代兵装によつて炎や氷を発生させることもできる。他にも2丁のマシンガンやハルバードが搭載されており、総火力は最高級と言っても過言ではない。

ただ機体のコンセプト上近距離戦は苦手であり、自爆紛いのゼロ距離ミサイルや振りの大きいハルバードでの対処を余儀なくされる。炎や氷の精製も燃費は良い方ではないためポテンシャルはあるが扱いが難しい。

生徒会長争奪戦編

70：仕込み

ザワザワザワザワ

「・・・？なんだ朝から。」

フォルテとの模擬戦から数日後、いつものように登校していた影清であったが、ふと掲示板の前に人だかりができてることに気づいた。影清も何があるのかとその掲示板に近寄る。

「ええつと、何々・・・？」

「？あつ、もしかしてカゲキヨ先輩!？」

「えつ、ウソ!」「張本人キター!」「どうしよう、サインとかしてくれるかな?」

後ろの方にいた女子生徒が影清に気づくと、連鎖的に他の女子生徒も影清の方を向いた。

「えつ、ああ、そうだけど・・・。なんでこんなに集まっているの?」

「えつと、昨日の模擬戦についての新聞なんですけど・・・。とりあえず見てみますか?」

「へえー、昨日のか。気になるな・・・。あ、ゴメン、ちよつと通るよ。」

もっと近くで見ようと掲示板に近づく影清。そして、掲示板の前に集まっていた女子生徒は打ち合わせをしていたかのように引き、影清

のために道を空けた。その光景に少々驚きながらも件の新聞に目を通した影清は――。

「…………あの、間違つてはないんだけど、だいぶ誇張されてない？」

内容全て載せるわけにはいかないが、見出しの一文だけでも十分なのでそれだけ公開するでしょう。

『影清道、圧倒的不利状況から大勝利!!生徒会長有力候補か!』

「?どこか間違つてるところでも…………。」

「とりあえず一っだけ指摘するとしたら、生徒会長関係のところかな。別に生徒会長になるつもりないし、第一ここの生徒会長の基準って…………。」

この学園に於ける生徒会長とは一般的に言われるモノだけでなく、IS学園内最強のIS操縦者に与えられる席である。方法自体は生徒会長を負かす。それだけのシンプルなことで生徒会長に就任できるが、前生徒会長がその座に就いたまま卒業してしまったため、その方法が取れなくなってしまったのである。

一応生徒会が請け負う仕事の大半は教師が片付けてはいるものの、何故かこの学園では普通の教師より生徒会長の方が権限を持っているので、手出しできない仕事溜まっているという。そんな現状を知ってか、実力はあるのに生徒会長に成りたがらない生徒がいたり、今がチャンスと言わんばかりに例年よりも多くの生徒が生徒会長の座を狙っていたりする。

「ええー、でも昨日の影清先輩すごかったよねー。」「そうそう、ギリシヤの代表候補生相手に勝っちゃうんだもん。学園内はともかく、二

年だけならワンチャントップじゃ・・・。」

（・・・あ、そっか。この子達まだダリルやベルベット達が模擬戦やってるとこ見たことないのか。そりゃ注目浴びるよな・・・。）

「えっと、流石に学ね「おおー、集まってるねえ！これは遅くまで残った甲斐がある！」

影清の言葉を遮ってメガネをかけた生徒がこの場にやって来た。

「お、噂の男性操縦者様！ごめーん、ちよつと通して！」

「・・・まさかとは思うけど、この記事キミの？」

「ご名答！新聞部期待の星、まゆずみかわるこ 黛薫子とは私のことです！あ、これ名刺です。」

「あ、ああ、どうも・・・じゃなくて！色々身に覚えなこと書かれてるんだけど!？」

「少しばかりインパクトに欠けてたので、すこくしだけ盛りました♪」

「盛りましたって・・・。生徒会長関連のことか、やるつもりないんだけど。」

「あれ？影清先輩、もしかして知らなかったりします？当事者なのに？」

「え、待って。僕の知らないところで何か起きちゃってたりする？」

「これですよ、これ。昨日配られたんですけど、もしかして一年だけ

だったりします?」

ピラ

黛はバッグの中から一枚の紙を取り出し、影清に手渡す。

「……………は?」

「先生、これどういうことですか?」

その後、黛に例のプリントをコピーした紙を貰い、昼休みに職員室へと訪れた影清。対面にいるのは、彼のクラスの担任・織斑千冬だ。

「どうもなにも、書いてある通りだ。クラス対抗戦の前に生徒会長を決めるため、急遽行うことになった。」

「いやそりや生徒会長不在のまま進むのは良くないとは思いますが、なんで僕まで巻き込まれて……………」

「先日聞いたハズだが? 『生徒会長に興味はないか?』と。」

「そりや興味ないに決まつ……………そういうことかあ……………」

「残念ながら下りることはできんぞ。決定事項だ。まあなに、経験は多く積める方がいいだろう。頑張れよ男子。」

「…………ハア、わかりました。あ、最後に一ついいですか?」

「なんだ、言ってみろ。」

「これ、他の人は……。」

「安心しろ、全部知っている。さて、話はここまでだ。お前も遅れるなよ。」

「えっ……？あ、ヤベ、もうこんな時間か！失礼します！」

　　急ぎ職員室を後にする影清。だがあまりにも急いでせいで机にプリントを忘れてしまった。それを手に取った織斑先生は、あまり聴き取れないような小声でこう言った。

「さて、どこまでやれるか試させてもらおうぞ。」

71：打ち合わせ

「お、来たか。遅かったな。」

「いやー、ゴメン。山田先生の手伝いしてた。・・・思ったより揃ってるね。」

放課後の屋上、昼休みにここで食事を摂る生徒はいるが、今の時間帯で訪れる者はほぼいない。そんなところに影清以外に4人の生徒の姿が。ちなみにメンバーは今影清に声をかけたダリルに、グリフィン、ベルベット、そしてフォルテである。

「これで道が来たから、あと一人だね。まだ時間あるし、ジュースでも飲む?」

「お、ありがとグリフィンさん。」

「そうだ影清、ローテーションはオマエと一年をオレら二年で挟もうと思うんだが、異論はねえか?」

「ああ、僕はいいけど、他は大丈夫?」

「・・・問題ないわ。」

「アンタに心配される道理はないツスよ。」

「・・・だつてさ。」

「なら、あとは最後の子だけ・・・」すいません、遅くなりました。」

噂をすれば、その代表候補生の一年が屋上にやってきた。

「全然大丈夫だよ。ちゃんと集合時間前に来れて……って、キミ確か昨日掲示板のところ……。」

今来た女子生徒は、先日影清が新聞を見に来た時、影清の存在に一番早く気づいた生徒である。

「その節はどうも。サラ・ウエルキンです。イギリスの代表候補生を務めてます。」

「じゃ、軽く自己紹介したら本題入ろうぜ。座れよ。」

「はい。」

こうしてサラを加え、顔合わせを済ませた6人は明後日のことについて話し始めた。司会進行はグリフィンである。

「ーじゃあ確認するけど、ここにいる人は全員専用機持ちで生徒会長への就任に興味がない、と。」

「そうね。生徒会の現状は知ってるけど、それを踏まえてもなろうとは思えないわね。」

「で、それとは逆に生徒会長に立候補する生徒が多いからそれを僕達6人で相手取ることになりましたよと。……最高で10戦近くやるとかかなりハードだな。」

「その分休憩たっぷりとれんだからいいじゃねえか。6人もいるんだからよ。」

「あの、順番はもう決まっていたりしますか?」

「一年と二年で交互に挟むってことぐらいかな。あ、道は一年枠ね。それじゃあ順番決めていこうか！一番手行きたい人いる？」

「ならオレが行くぜ。出鼻挫かせてやるよ。」

「じゃあ先鋒ダリルで。てなると次は……。」

「……サファイアさんとサラさん、どうする？行かないなら僕やるけど。」

「ならウチ行くツス。あ、グリフィンセンパイ、最後に順番の見直しとか調整ってするツスか？」

「もちろんやるよ。機体の相性もあるからね。じゃあ二番手はフォルテちゃんってことで！次、ベルベットか私だけど、どっち行く？」

「……グリフィン、頼めるかしら？」

「オツケー、じゃあ私が三番手ってことで！それじゃあ、あと道かサラちゃんだけだね！」

「カゲキヨ先輩、どうされます？私はどこでも大丈夫ですけど……。」

「……よし、じゃあ四番手行かせてもらうよ。で、僕の次がベルベツトさんでその次がサラさんになるのか。」

「うん、じゃあ一応順番は決まったね。ノートにまとめたから、順番変えたかったらどんどん言っちゃって。」

こうして、ダリル↓フォルテ↓グリフィン↓影清↓ベルベット↓サ

ラの順でローテーションが組まれた。その図が描かれたものをグリフィンがノートに写し、他のメンバーに見せたが……。

「……おいサラ。オマエの専用機、確か遠距離型だよな。」

「あ、はい。ライフル主体のものですが……。」

「だよな、オレもベルベットも弾幕主体だから3人固まっちゃうな……。おい影清、オマエサラと変われ。」

「別にいいけど、ベルベットさんとグリフィンさん変えるのは？」

「フォルテとベルベットを隣にするのはもったいねえ。こんなかならず制圧力ツートップだからよ。」

「……少しいかしら？私とグリフィンの順番を変えて、サラとフォルテの順番を変えるのどうかしら。これなら今言った問題点は解消できると思うのだけど。」

「おお、さすがベルベツトツス！サラもそれでいいツスカ？」

「大丈夫。では、それをお願いします。」

「なるほど、確かにそれが一番いいな。グリフィン、順番変更したぜ。」

「大丈夫、もう書いたから。これでいいでしょ？」

そういつて見せたノートに記された順番は、ダリル↓サラ↓ベルベット↓影清↓グリフィン↓フォルテ、に変えられていた。

「うん、大丈夫かな。あ、グリフィンさん、あとで写メ送ってくれる？」

「もちろん！ちゃんと全員にね。それじゃあ今日はこれで解散！お疲れ様！」

「おう、じゃあまた明後日な。」

「よし、ベルベット！今日はアリーナ取れてるツス！一緒に行くツスよ！」

「ええ。それじゃ、あとは頼んだわ。」

「うん、いつてらっしゃい！じゃあ私、織斑先生のところ行ってくるから。」

「あ、グリフィンさん、僕持ってこうか？どうせこの後ヒマだし、すぐ終わるでしょ。」

「それなら私が持っていきます。先輩方ばかりにやらせるのも気が引けるので。」

「うくん、だったら3人で行こうか！お喋りしながらね♪」

こうして明後日への準備が整った。

72：開催

『遂にこの日がやってきた！生徒会長不在の状況、空いた席を狙う者達を6人の門番が迎え撃つ！その闘いの名は「ヴァレット・オブ・ヴァレル」ツ!!』

ワアアアア！

「・・・オイ、誰だあんな名前付けた奴。」

「さあ？とりあえず、愉快犯がいるってことは確かじゃないかな。」

控え室でそんな会話をするダリルとグリフィン。他の4人も微妙な表情をしてその放送を聞いていた。

『ルールは簡単！一戦毎に変わる6人の専用機持ち相手に二連勝すること！そして、それを突破した猛者達のみでトーナメントが生まれ、そのトーナメントを制したものが生徒会長となる!!』

だが、と区切る司会の生徒。その次の瞬間、モニターに6つの銃弾が映し出される。

『そんな簡単に通れると思えば大間違い！この学園でも有数の実力者が挑戦者の前に立ちはだかる！さて、挑戦者の行く道に風穴を空ける6つの弾丸、即ち対戦相手を紹介しよう！』

司会者がそう言うと同時に、モニターに映っている6つの銃弾の内一つが画面に大きく映る。

『一発目、ダリル・ケイシー！4つの銃口から繰り出される弾幕とインファイトで戦う正統派！シンプル故に強い彼女に正面から打ち勝て

る者はいるのだろうか!?!』

と、ダリルの紹介が終わると、その大きく映っていた銃弾が背景のバレルにセットされた。ちなみに銃弾の底にはダリルの顔が描かれており、他の銃弾の底にもそれぞれの顔がある。司会者の紹介が続く。

『二発目、サラ・ウエルキン！イギリスの最新鋭機を引っさげてきた謎に多い期待の新星！一体どのような戦術を見せてくれるのか!』

『三発目、ベルベット・ヘル！炎と氷に加え、三種のミサイルポッドから繰り出される弾幕はもはや対処不可能！ボーツとしてると致命的な傷を負うぞ?』

『四発目、影清道！変幻自在の軌道から繰り出される攻撃は予測不可！この動きを見切れなければ勝ち目は無い!』

『五発目、グリフィン・レッドラム！その巨大な拳と脚技を使った立ち回りは攻防一体！正にダイヤモンドのような硬さだ！崩せるものなら崩してみやがれ!』

『六発目、フォルテ・サファイア！銀世界が作られてしまえばこちらのもの！やられる前にやってしまえ!...以上、紹介終わり！次はトナメント進出が決まった時に会おう！健闘を祈るぞー!!』

「.....演出、すごく凝ってたツスね。」

「ええ、そうね.....」

「よし、じゃ行ってくるわ。初っ端から気合い入れされてもらうぜ。」

(・・・最初の人、ガンバレ！主にメンタル面で・・・!!)

〜数分後〜

「よお、勝ってきたぜ。どうだ、良い景気づけになったろ？」

「相手からすれば恐怖そのものだけどね!?何あれ、銃撃ちながら近づいたと思ったら片方剣に替えて銃と剣での近距離戦って・・・。あつ、あと、なんか機体違う気がしたけど・・・。」

「お、よく気づいたな！冬休みの時にリニューアルしてな。その名もヘル・ハウンドver2.0。シンプルでいいだろ？」

「まあ、悪くはないんじゃないや」「ダリルセンパイ！さっきの試合めっちゃカッコよかったツス！」

「お、嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。オマエのもしっかり見といてやるから、頑張れよ。」

「は、はいツス！」

「影清、オマエもコイツに負担かけないようちゃんとやれよ？」

「あ、大丈夫ツス。カゲキョセンパイには期待してないんで。」

「うくん、この扱いの差。・・・あつ、サラさんの試合始まるみたい。」

モニターに目を向けると、すでに試合開始の準備に入ってるサラの姿があった。

「今日はよろしくお願いしますね。」

「こちらこそよろしく。同じ学年だよね？負けないよ。」

『それではカウントを始めます。』

カウントが進むと同時に長大なライフルを取り出すサラ。その銃口はカウントが0になると同時に相手に向けられ、一条の光を生み出した。

『ドガアアン!!』

「ウツソあれレーザー!?てか威力強っ!?何割ぐらい削れてんだろ……。」

「ギャーギャーうるさいツスよ！音拾えないじゃないツスか！」

「なるほどねえ、一発重視のスナイパーライフルか。それも実弾より速いレーザー。これはエゲツない一品だな。」

こうして3人がサラの持つライフル『スターブレイカー』の分析をしている間にも、試合展開はどんどん進んでおりー。

「よしーここまで近づけばもうライフルは使えなー。」

チュン！ボンツ！

「うわあああ!？」

近距離戦に持ち込めてほんの少し気が緩んだのか、後ろからの砲撃に完全に体制を崩されてしまった女子生徒。砲撃が飛んできたのはサラとは真逆の方向であり、その先では一機の浮遊物が銃口を向け

ていた。

「後ろに警戒しなかったアナタの負けです。」

ジャキ、チュン!

『ラファール、シールドエネルギーゼロ。勝者、サラ・ウエルキン。』

アナウンスが響き渡り、涼しい顔でピットへと戻っていくサラ。一方控え室では……。

「と、とんでもない火力カッスね……。アレそんなにポンポン当てられるものなんスか……?」

「いやムズイに決まってるだろ。あれだけの威力なら反動で照準ブレまくりだろ。単純にアイツの射撃センスが……。って、どうした影清?」

「……ぎる……。」

「は?」

「カッコよすぎるだろアレ!!?え、アレが噂に聞いたBT兵器!?うわあくもうちよい見たかった……!!」

サラの使っていたISの武装の一つに目を奪われた影清は、男心くすぐられたのか人目を気にせず興奮していた。

「オイオイ、アレのどこがそんなにいいんだ?」

「いやだって、ピット一つで手数増えるんだよ?それを絡めたラッ

シユとか最高にカッコいいじゃん！」

「わかったわかった、一旦落ち着け。・・・そんなに気になるなら本人のどこ行ってこいよ。」

「確かに・・・！じゃあ行ってきます！」

ダリルの提案通りサラの元へと向かった影清。一方残された二人はというと。

「・・・ダリルセンパイ。」

「なんだ？」

「フツ―にキモかったツスね。」

「・・・そういうヤツだよ、アイツは。」

73：その花、劇物につき

試合後、控え室へと向かうサラ。その道中、壁に寄りかかるとそのまま座り込み―。

「……………ハアアア〜。」

(よ、よかった、上手くいって。BT兵器まだ扱い慣れないからどうなることかと…。その点だけは、セシリアを見習わないとね。)

「あ、サラさん！こんなところにいたのか！」

「ひっ!?は、はい！なんででしょうか!?!」

影清が突然現れたことで、安堵し切っていたサラは驚きながらも即立ち上がった。

「ああ、ゴメン。驚かせたかな？」

「い、いえ、カゲキヨ先輩が気にすることではないので…。何か用事でも?」

「その、サラさんの専用機のことなんだけど、アレ確かBT兵器だよね?すごく気になってさ。」

「は、はあ…。確かに第三世代兵装ではありますが、そんなに関心あるんですか?」

「まあ、カッコよかったってだけの理由だけだね…。ねえ、アレどうやって動かしてるの?」

「主にイメージインターフェースによるものですね。両手で別々の作業をするようなものなので扱いは難しいですけど……。」

「おお、それは大変そう……。そんな代物使えるなんて、すごいなサラさんは。」

「い、いえ、私なんてそんな……。実は私、BT適正そんなに高くないで、この専用機も……。あ、『サイレント・ゼファイルス』って言うんですけど、まだ調整中の試作機でして……。」

「え、試作機？全然そうは見えなかったけど……。まあ、大きな事故とか起きないならそれでよし。ごめんね、話付き合わせちゃって。」

「いえ、お気遣いなく。確か次がカゲキヨ先輩の番でしたよね？頑張ってください。」

「ありがとうございます。じゃ、準備して来ますか。」

サラと別れ、少し早めにピットへと向かう影清。ただその頃にはもう次の試合の準備が終わりかけていたので、軽い確認だけしてアリーナ内へと飛び出た。

「さく、僕の相手、は……。」

「おお、トオルじゃないか！なるほど、コレはやりがいがありそうだ。」

（まさかの貧乏クジ引いたあああ!?!）

予定時間より早く出たはずだが、それよりも早くアリーナにいたのは専用機『オーランディ・ブルーム』を纏ったロランであった。

「・・・あー、どうも。今日はよろしく。」

「ああ、よろしく頼むよ。ところで、どこか不満気じゃないか？私が相手では物足りない？」

「物足りないっていうか、やりづらいつていうか・・・。とにかく、今見えてる手札だけでもイヤなカードだなんて。」

「なるほど、なら安心したまえ。前に訓練で見たものはほんの一部に過ぎないからね。」

『それでは試合開始のカウントダウンを始めます。』

「おっと、ではトオル。あとは闘いで語るとしよう。」

「・・・お手柔らかに。」

(さて、弾取り替えますか。)

ロランから背を向けた影清は、隼矢を取り出して調子確かめるように・・・見せかけて死角になるように妖戯を出し、装填されていた弾を取り替えた。こうして自然を装いながら作業をしていると、もうカウントが数え終わる頃であり、ロランの方を向いて姿を捉える。

カウントがゼロになると、ロランは手に持っていたライフル『スパーシー・プランター』による狙撃を開始した。

バチチ、ギューン！

「う、おっ・・・！やっぱり慣れないな、ビーム系。」

「ならこれはどうだい？」

ガコッ

「へっ?」

ビイイイイ!!

ロランのISのアンロックユニットが前に出ると同時に発光する。それを見た影清は即座に前進してから横に勢いよく飛び、紙一重でアンロックユニットから発射されたレーザーを避けた。

「っ!!・・・び、びっくりした。なんつーもん搭載してんだ・・・。」

「その割にはまだ余裕ありそうだね? コレを見せたのは初めてだと思うけど。」

「まあ、似たようなもの見てきてるから、ね!」

ボンッ!

「!へえ、目眩しかー!」

ゴオッ!!ガアアン!

事前に幽楼に搭載された煙幕弾を撃つ影清。ロランはそれを見て次なる一手を予測するが、そんな暇を与えず影清は瞬間加速で煙幕を突っ切り、ロランに臙・二の矢を振り下ろした。

ヂヂッ、ヂヂヂ

「マジか、正面突破とはいえ防ぐのか・・・。」

「まあ、このぐらいは……ぐっ、少しばかり押しが強くないかい？」

速さ、重さ、その二つが乗った強力かつ素早い一撃を防いだロラン。それを防いだのはレーザーライフル……。から分離されたレイピアである。ただ剣の質量からも考えて瞬間加速の一撃を止めるには心許なくはあるが、灰楼の機体コンセプト的に加速の爆発力はあまりなく、ロランが完全に受けに回っていたことから鏝迫り合いの状況となつたわけである。

だが、渾身の一撃を止められたからと言って油断してはならない。むしろ耐えてしまったことで最悪の状況となつた。簡潔に述べるなら、IS・灰楼はどちらかと言えばパワー型ということである。

「そりゃあ、灰楼コイツのおかげでこういう力比べは負け無しなんでね……!!」

ギ、ギギギギギギ

「う、くっ……!」

ザスッ

本来の機体出力+何十機もの小型スラスタの補助によりどんどん押し込まれ、遂には片膝を地面に付けてしまうロラン。しかし、そんなロランの表情には苦しきだけでなく笑みが浮かんでおり――。

ヒュヒュッ!

「!?うおっ……!」

バツ!

ロランの専用機の背部に垂れていた四本の触手が一齐に動いて影清に襲いかかる。完全に押し込みの姿勢に入っていた影清であったが、そこは蜃気楼のサポートもあって即回避行動へと移れた。しかし、流石に距離が近すぎたのか四本の触手の内一本が灰楼の腕アーマーへと突き刺さった。

ヒュツ、ザシユ!

「っ!」

(あ、危ない・・・危うくスラスター部分に突き刺さるところだった。我ながら良くそんな判断できたな・・・。まあとにかく、さっさとコイツ引きちぎって・・・!?)

咄嗟に腕を回転させることでスラスターとの間に上手く刺さった触手。流石に付き合ってもいいことはないため、さっさと抜こうと試みた影清であったが・・・。

「う、おっ・・・!?!」

(な、き、機体の調子がおかしい!?!なんで・・・っ!?!、この触手、なんか侵食してるんですけど!!?)

先程突き刺さった触手は、ゆっくり流れも灰楼のアーマーに侵食し、その機体性能を狂わす、あるいは下げていた。当然その周辺にあるスラスターもいかれており、蜃気楼がエラーを起こすという事態にもなったため、影清はその手に持っていた隴・二の矢を使って、無理矢理にでも引き離れた。強度はそれなりにあったため断つことはできなかつたが。

「ふふ、驚いたかい？これがワタシのISの第三世代兵装『ヴァイン・アームズ』さ。これに囚われたら最後、どんな装甲すらも溶かし尽くす代物だが……。キミのISには効果的みたいだね？」

「全くだよ。ここまでやられたら直すの相当苦労するつてのに……。まあ、今ゴタゴタ言っても仕方ないか。」

ガシッ

蜃気楼からの補助を完全にカットし、右手に持つ武装を隼・二の矢から夢月へと持ち替え、左手に妖戯を取り出した。

「へえ？中々面白い組み合わせだね。」

「今回限りだけだね、多分。攻めさせてもらいますかな、つとー！」

ギョーン！

「なんのー！」

ビィィィィー！

機動力のみに頼った特攻を仕掛ける影清。それをロランはアンロックユニットから放たれるレーザーで迎撃する。多少掠りはすれど、攻めの姿勢を崩さなかった影清は盾を分離させ、盾の取手と同時にそのワイヤーを持ってロランに向かって振り下ろす。

グオッ！

「おっと、まさかここまで無茶してくるとはね。なら今度はこちらの番だ！」

チャキツ

レイピアを構えて影清との距離を詰めるロラン。それと同時に触手『ヴァイン・アームズ』四本が同時に襲い来る。それを見た影清は左半身を向けながら後ろに下がる。そしてその肩アーマーには、なんと妖戯が取り付けられており―。

バサツ！

「なっ……！でもこれぐらいなら―。」

ボンツ！

「!?」

影清の肩アーマーに設置されたトラップ砲からはネット弾。これにより動き辛くはなったものの、点の攻撃を重視したレイピアや触手には効果が薄いかもしれない。そんな時、後ろ側から発射されたのは……。

「こ、これは一体……?」

「トリモチってヤツだよ。封殺とは行かなくても、ここまでやれば抵抗手段も限られるでしょ。いやー、盾の裏にまで気を使われてたら、勝機無かったかもね。」

ザギヤツ！ズガツ！

先程飛ばした盾の裏側、そこには左肩に取り付けられてたのと同じトラップ砲・妖戯が設置されていた。実は試合前には閃光弾が装填さ

れていたのだが、カウントダウンに入ったところでギリギリ取り替えていたのである。

こうしてまんまと策にはめたわけであるが、二機のアンロックユニットにまでは被害が及んでいなかったため、すかさず臙矢で破壊する。人体への攻撃は躊躇するが、無機物相手なら容赦ない影清であった。

「さて、まだやる？ぶっちやけ残りのシールドエネルギーそんな多くないし、蜃気楼だってお釈迦にされてる。そこから抜け出せれば、勝ったも同然だとは思うけど……。」

「いや、降参するよ。まだ見せてない手もあるけど、この状況じゃ役に立たないだろう。キミの勝ちだ、トオル。」

『降参を受理しました。勝者、影清道。』

「ところで、日本ではああいう状況になったら『くっ、殺せ』というらしいが、そちらの方がよかったですか？」

「やめて、マジでやめて。」

74：停止、なれど継続

ロランとの試合後、アリーナ内の整備室にて―。

「……………ダメですね、やはり私たちでは手出しが……………」

虚ら整備班が見ているのは、IS・灰楼に搭載されている第三世代兵装『蜃気楼』。明言はしていなかったのでハッキリ言わせてもらおうと、蜃気楼Ⅱ55機の小型スラスター、ではない。蜃気楼とは、その55機の小型スラスターを一気に稼働させるためのシステムの名称だ。

「すみません道さん。私が及ばぬばかりに……………」

「いやいや、いいって。むしろそれ以外は完璧に仕上がってるし…にしてても、コレ自体そうそうイカれるようなものじゃないんだけどなあ……………」

55機ものスラスターを統括する以上そのシステムは繊細かつ融通が効かず、常に55機分の命令を下し続ける。そのため、蜃気楼は一機でもスラスターが欠ければ他スラスターの制御に影響が出てしまうため真化を失う。

とはいえ、その弱点を補うために灰楼の装甲は薄くかつ頑丈に重ねられており、小型ながらもちよつとやそつとじゃ傷一つ付かない程の強度を誇る。逆に言えば、一度破壊されれば修復は困難ということだが、そこはIS学園内でも選りすぐりの整備班。傷一つなく、新品同様に修復して見せた。

―だが、今回破壊されたのは装甲だけではない。

「私も驚きましたよ。まさか装甲だけではなくシステムにすら害が及んでいたとは……………」

ロランの専用IS『オーランディ・ブルーム』に取り付けられた第三世代兵装『ガルディ・アームズ』。その先端が触れれば、どんなに強固な装甲でも溶かされるといふ代物だが、場所によってはIS自体の機能に多大な影響を及ぼす。

灰楼の蜃気楼はあちこちに搭載された55機のスラスタと密接にリンクしているため、どこであろうとスラスタ部分にガルディ・アームズが直撃さえしてしまえばシステムに異常をきたす。つまり、オーランディ・ブルームは灰楼の最大の天敵とも言える。現にこうして壊れることがありえないモノをいとも簡単にやられてしまったのだから。

「・・・まあ、蜃気楼無しでもやれることにはやれるけど、武装は見直さないとな。」

「それ以前の問題ですよ。こんなに複雑なシステムに異常があるとなれば、基本動作にすら影響が及ぶかもしれません。それが機体全体に作用するものであれば尚更です。残念ですが、今回は棄権して他の方々に―。」

「話は聞かせてもらった。」

「！お、織斑先生、いらしてたのですか・・・。」

いつの間にか姿を現した織斑先生。そこまで大きな声はないものの、整備室内は静かに騒々しくなった。

「織斑先生、何か御用でも・・・？」

「ああ、こういう時のために打鉄を一機抑えておいてな。ソイツに乗って続けて出てもらう。」

「ホントですか!?!ありがとうございます!虚さんも、それでいいよね?」

「・・・そうですね。何か問題があるわけでもありませんし・・・。引き続き頑張ってくださいね、道さん。」

「決まりだな。武装も幾つか引き継ぐだろう、早く済ませておけ。」

必要事項だけを述べ、整備室を去る織斑先生。整備室内ではまだちよつと騒ぎが続いている。

(・・・ここで抜けられては、意味がないからな。)

ドゴオンツ!!

「・・・ふう、中々強いじゃん!立候補しただけはあるね!」

「そ、そんなことないです。最後までペース崩さなかったので・・・ありがとうございました。」

ダイヤナツクルによって地面に叩きつけられた女子生徒は、その身を起こしながら礼をする。

影清が打鉄の調整を始めた頃にはグリフィンの試合はすでに終わっていた。そのグリフィンもピットに戻り、次の出番までにISを整備しに向かう。その道中――。

「あ、グリフィン先輩!お疲れツス!」

「ん？ああ、フォルテちゃん！そういえば次だったよね。頑張つて！」

「はいッス！ダリル先輩にも負担かけないよう全力でやるッス!!」

「ふふつ、やる気充分だね！そうだ、一つ気になったことあるんだけどさ。」

「何ッスか？」

「いやー、二年の専用機持ちの中で道だけすっごい邪険にするから、何か理由あるのかなーって。」

「ありありッスよ！ベルベットが気にしてないって言ってもどれだけ迷惑かけたか・・・それに、ウチが普通に気に入らないってのもあるッス。」

「あはは、ベルベット関連のことは予想できたけど、個人的に気に入らないこともあるんだ・・・。」

「・・・まあ、ウチが男嫌いってのもあるスけど、あの飄々とした優男面は生理的に受け付けないッスよ。・・・グリフィン先輩はどう思ってるんスか？」

「私？うくん・・・ちよつと、いやかなりやんちやな印象あるかな。」

「やんちやッスか？」

「ほら、試合の時とか結構賭け要素の多い特攻とかするし。それ以外にも幾つかあるけど、うん・・・とにかく危なっかしいマネはするかな。」

「・・・言われてみればそうツスね。ウチとの試合で腕ケガしたって聞いたツスし・・・たかが模擬戦で本気になり過ぎツスよ。」

「そこなんだよねえ・・・。ま、そういうところあるからしつかり面倒見ないと行けない困ったさんってとこかな？」

「そ、そうツスカ・・・。」

「そうそう、私そういう感じの子とは結構関わりあるしね。じゃあ、私もう行くから。引き止めてゴメンね？」

「いやいや、返事求めたのはウチツスから。行ってくるツス！」

意気揚々とピットに向かったフォルテ。自身のISを纏い、アリーナ内に降り立った彼女は対戦相手を見据える。

「さく、手加減しないツスよー！」

「あら、フォルテちゃんじゃない♪初の手合わせだけど、私も手加減しないわよ？」

(チエンジツス!!!!!!)

こうしてギリシャ代表候補生とロシア代表との戦いが幕を開けたとか。ちなみにこの試合の後、完膚なきまでにやられたフォルテを他のメンバーで慰める光景があった。

75：交わる強者

「あく、やっと終わった。ただ今戻りま・・・え、何この空気?」

灰楼から打鉄への武装換装を終え、控え室へと戻ってきた影清の目に入ったのは落ち込むフォルテとそれを宥めるベルベット、グリフィン、サラの姿であった。

「あ、道。整備終わったんだ。」

「あー、それなんだけど、ちよつと問題起きちゃって打鉄使うことになつてさ。・・・で、サファイアさんどうしたの?その、何か凡ミスでもやらかした・・・?」

「・・・見た方が早いわ。」

そう言つてベルベットがモニターの方を示すと、そこではもう次の試合の準備が整つており―。

「ダリルさんと・・・た、楯無さん!」

「よお、さつきは中々の試合だったぜ。まさか1分も経たずにフォルテをやっちまうなんてよ。」

「いえいえ、アレは上手く噛み合っただけですよ。長期戦は危険、と感じたので♪」

双方笑みを浮かべながら語っている……というのは見かけだけで、実際は静かに互いの実力を見定めていた。

「ほおう……ならオレはどうだ？速攻でケリつけにくるか？」

「ふふ、ご冗談を。その肩にあるものは見かけ倒しでは無さそうですし、じっくりとやらせていただきますよ。」

そんな腹探りも途中で終わり、カウントが始まる。どちらも相手に意図を悟られまいとする中、先に仕掛けたのは――。

ヒュンツ！

「おっと、中々はや……っ！」

ガコツ

楯無による蛇腹剣の牽制を避け、手に持った銃の照準を合わせたダリルであったが、それより先にガトリングの砲門が向けられており、銃弾の雨が襲いかかる。

キュルル、ガガガガガガガガッツ！！！！

「ううお!?ぐっ、ヤロオ、なんてもんを……！」

「まだまだ小手調べですよ！」

素早く飛んで避け続けるダリルであったが、あまりの弾幕と誘導精度に防戦一方となってしまうている。そんなダリルが次に取った行動とは……。

「チツ、まさかこんな早く披露するハメになるとはなっ!!」

コオオオ・・・、ボツ!!

「っ!!くっ。」

サツ、ボガアアアアン!

ヘル・ハウンドの両肩アーマーの銃口・・・いや、以前とは違う犬の頭を彷彿とさせる砲台から火球が発射される。警戒していたのもあってほんの少しだけ余裕を持って回避した楯無であるが、ガトリングによる銃撃は止まってしまった。お返しとばかりにダリルが2丁の銃、そして先程の火球を放って攻め立て始める。

ガガガガアン!

ボボツ!!

「ふっ、ハアッ!」

火と銃弾による弾幕。初見でなくともその苛烈さにやられかねない程のそれを全て避けてみせ、更には新しく取り出したライフルを持って反撃してみせた。

チュンツ!

「・・・ハッ、こりや期待以上だ!流石だぜロシア代表ツ!!」

ボツ!ボガアアアン!

「!・・・そうきましたか。」

楯無に向かうと思われた火球はその一歩手前に落ち、大煙幕を作り上げた。それによりダリルの次の行動に幾つか当たりをつけた楯無は、そのどれにも対応するため拡張領域から即座に武器を取り出せるよう準備する。

—そして、煙幕が晴れる前にダリルが正面から、それも猛スピードで接近する。その手には一対の剣が握られており、それぞれ斜めに振り押された。

「ほっ。」

ギイイインツ!!!

「おっ!?!」

「セイツ!!」

ガツ、ドシユツ!

まるでその攻撃が来るのをわかっていたかのように槍を取り出して、その長さを活かし二つの剣を押し留めた楯無。更にそのまま体制を崩すように剣を流し、間髪入れずに胴に槍を突き刺した。

煙幕もあって、側から見てる分にはこの早技を見切れたものはいないだろう。流石は国家を代表するIS操縦者といったところだろう。だからこそ、それに反応したダリルの異常さが際立つ。

「・・・へえ、今のを防ぎますか。」

「いや、そうでもないぜ。ちゃんと装甲にキズが入る程度には深かった。」

装甲の傷と切り裂かれた銃を見せながら語るダリル。剣を弾かれ

たあの一瞬、即座に剣と銃とを入れ替え、それを握らずに弾くことで装甲と槍の間に滑りこませた。

通常、拡張領域から武装を取り出すにはそれをイメージする必要がある。と言っても、それが正確でないならいつまでも武装を出現させることはできない。ましてその手に持ったものを入れ替えるなど、イメージの取捨が追いつきはしない。

—しかし、不可能ではない。そのイメージの取捨を完全に遂行すれば良いのだから。現にダリルは銃と剣という形や用途の違うものを刹那の間に取り替えて見せた。IS業界では、この技能を『高速切替』ラビッド・スイッチと言う。

「そんなこと言って、ダメージの方は浅いでしょう?」

「へッ、バレたか。ま、さっきの分合わせりや十分だろう。」

壊れた銃を仕舞い、お互い見合った状態になる。楯無の槍がギリギリ届かない間合い、しかし易々と銃を撃てる距離でもなし。そんな状況でダリルが動きを見せた。

「やーめた。」

「はい?」

「負けでいいっての。これだけやりや十分だよ。第一、国家代表様だぜ? IS学園最強って言っても文句あるヤツいねえだろ。万が一いたとしても蹴散らせるだろうしな。」

『・・・き、棄権を受理しました。勝者、更織楯無。』

まさかの展開にザワつく観客席。控え室で試合の様子を見てた影清たちも固まる始末である。アリーナ内ではすでにダリルはピット

に飛び去り、楯無が残されていた。

(ま、目的は達成できたからよしとしましょう。)

「よお、戻ったぜ。」

「お、お疲れ様。……あの、ダリルさん。八百長してるなら早めに言った方が……。」

「はあ？まさか、わざと勝ち譲ったとも思ってたのか？……まあ、コレ見ろ。」

ヒョイ

「おおっと、とと!?えー……は？」

ダリルから投げ渡された端末に目を通す影清。そこにはヘル・ハウンドの試合後の状況が描かれており、その時の状態が――。

「け、肩部損傷レベル：中に、エネルギー枯渇寸前……！そんなに燃費悪かったのかアレ……。」

「まあな。一応第三世代になったヘル・ハウンド、さしずめ『ヘル・ハウンドver. 2.0』ってところだが、今のところ特殊兵装くつつけただけなわけだな。色々問題あるんだよ。」

肩部アーマーの銃口が変わって取り付けられた犬頭の砲台。そこ

から放たれる火球の威力は直撃さえすればシールドエネルギーをゴツソリ持つていく程凶悪なものであるが、それを生み出すために必要なエネルギー量や耐久度の要求値は高く、現在のヘル・ハウンドでは持て余してしまうほど。つまり、棄権を持ち出した時点でダリルの勝ち目は殆ど潰えてしまっていたのだ。

「へえー、なるほどねえ……。」

「あ、ここだけの話、機密事項な。口裏合わせろよ。」

「……なんて？」

「つまり、変な報告されたくなけりや黙って従え、ってことだ。……なんてな！そこまでキツイもんじゃなえし、言いふらしたっていいぜ？」

「いや、黙つとくよ。どこがどう機密だとかは知らないけど、知られないに越したことはないでしょ。」

「……そうかよ、じゃ、説明頼んだぜ。」

「ちよっ、せめて一緒に考え……丸投げしたよアイツ。……頑張つて誤魔化すか。」

と、たまたまダリルと廊下であった影清は、整備室へと向かったダリルの代わりに他四人に事情（嘘）を説明した。当然、多少疑われはしたが納得はしてもらった（信じたとは言っていない）。

・・・ちなみにだが、まだ数ループぐらいいる時点で言うのもなんだが・・・。結果的に二連勝できたのは楯無のみであり、トーナメント制で行うと言われた第二予選は無かったものとなった。これには最初にノリノリであるーる説明していた司会の子も涙目。